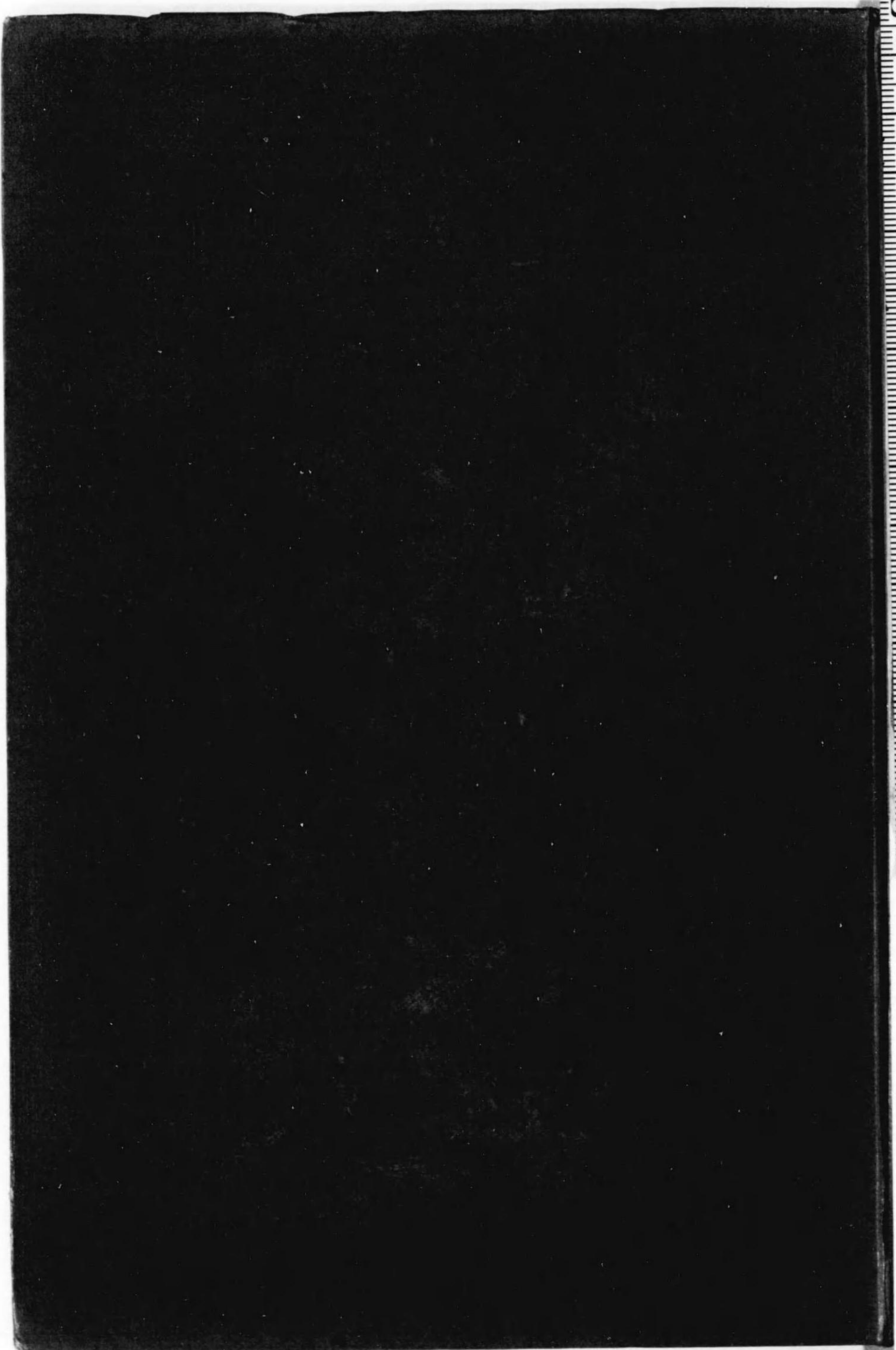
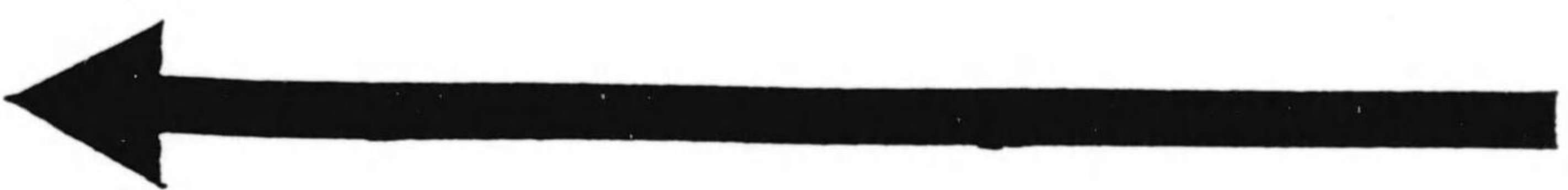


始



特231
363



東京高等師範學校教授
能勢朝次編

醇正國語

教授參考書

株式會社
文學社
刊行



緒言

本書は「醇正國語」教授の参考に供するため、編述したものであります。編者の立場から、教授の進行を想定し、参考となる事柄は廣く網羅するやうに心がけました。併し様々な資料の雜纂になることを避け、組織的に叙述すると共に本質的な部分に特に力を入れました。各教材の研究を、「**解題**」・「**解釋**」・「**備考**」の三部に分ち、「**解題**」に於ては豫備的研究を、「**解釋**」に於ては本質的研究を、「**備考**」に於ては補足的研究を行ひました。

二

第一部「**解題**」は次のやうに組織されてゐます。

- (1) 作者
- (2) 出典
- (3) 主眼及び採擇の趣旨

(1)に於ては作者に就いてなるべく詳細に記述し、單に履歴を掲げるのみでなく、教材の文學史的取扱の場合を考慮し、その作風にもふれておきました。履歴不明の點につき直接作者の教示を仰いで掲載したのも少くありません。(2)に於ては各教材の出典をなるべく詳細に記し、その典據を明らかにすると共に、原典を髣髴たらしめるやうに致しました。(3)に於ては各教材の主眼を簡單に述べてその陶冶的價値を明らかにすると共に、教材排列の用意に就いて述べました。

三

第二部「解釋」は次のやうに組織されてゐます。

- (1) 語釋
- (2) 文の構成
- (3) 文意
- (4) 鑑賞批評

解釋は教材の本質的研究でありまして、編者はこゝに最も力を注ぐやうに致しました。近時我が國に於ても國語教育や國文學の基礎學として解釋學が研究されてゐます。これは主としてドイツ解釋學の流を汲むもののやうに思はれますが、デイルタイ以後俄かに勃興したこの學問は、解釋の普遍妥當

性への關心から生まれたもので、元來理論的な特性を有するものであります。従つてその理論的體系をそのまま解釋の實踐に適用しようとする場合には、様々な困難の存在するのを免れません。翻つて思ふに、幾多の優れた古典を有する東洋には東洋独自の實踐的な解釋學が成立して居ります。本書の編述に當つては特にこの點に反省を加へました。「韋編三絶」「讀書百遍義自見」などといふ古聖賢の言行は別としましても、東洋の實踐的解釋學の根本的性格は、「解釋」乃至「理會」といふ術語の中に端的に示されてゐます。これは元來、支那古典學の發生と共に古典解釋の事象に反省が加へられた時、類推の結果工藝の術語が援用されたものであります。即ち「解釋」は牛角を分析して盃(觚・觥・觥・觥等)を作る作用であり、「理會」は璞を分析綜合して種々の飾玉(玦・珉・珩・珮・琚・瑀・瑞等)を作る作用であります。その中、「解」は牛角を分析する作用を示し、「釋」は字書に「捨也」とありまして、分析された牛角の中不純不用な部分を捨てること即ち否定することを意味してゐます。又「理」は璞を分析研磨する作用を示し、會は字書に「合也」とありまして、分析研磨された玉を綜合することを意味してゐます。この分析及び否定(又は綜合)といふ二つの作用を経て解釋が成立し、理會が成立するとなすのが、東洋人の解釋學的思想であります。

これはもと支那に發生し、後日本にも移入せられた解釋學であります。日本人は又本來独自の解釋學的思想をもつて居ります。日本の解釋の第一段の作用は「わけがわかる」といふやうな言ひ方の

中に示されてゐます。即ち「分けられる」と「分け」が「分り」、「分けられぬもの」は「分け」が「分らぬ」とするのであります。初め單純であつた言語は、相互に複合せられることによつて語彙の數を益し、次第に複雑な思想の表現に堪へられるやうになります。従つて複合せられた言語の具體的な意味は、その言語を個々の成分に「分け」、各成分の意味を明らかにすることによつてのみ把握せられるのであります。日本語の「わけ」といふ言葉はこの間の消息を簡明的確に示して居ります。併し言語の單なる分析は訓詁註釋の域を脱しません。日本人の解釋學はこの「分ける」といふ境地を越えて更に「あきらめる」といふ點に到達してゐます。「あきらめる」といふことは「明瞭にすること」であり、同時に又「斷念し否定すること」であります。明らかにすることは斷念し否定することであり、斷念し否定することによつて始めて事物の真相が明瞭になるのであります。即ちこの「あきらめ」といふ語は、分析された結果について検討を加へ、不純なものを否定し、純粹にして本質的なものだけを把握するといふ日本人本來の認識法を示すものでありまして、短歌や俳句といふやうな文藝はかかる態度の最も典型的な表現であります。

本書に於ては以上のやうな東洋的解釋學に反省を加へつゝ教材の本質的研究を試みました。即ち「語釋」及び「文の構成」は「解」であり、「理」であり「わけ」であります。それに對して「文意」及び「鑑賞批評」は「釋」であり「會」であり、「あきらめ」であります。從來の國語教育はこの「わけ」

と「あきらめ」との二つの極端の間に動搖を續け、一方に偏向しては他方を閑却してその弱點を暴露して來ました。當來の國語教育は綿密にして正確な「わけ」の上に、鋭い「あきらめ」を加へるといふ方向に發展せられなければなりません。それは又國語教育によつて陶冶せらるべき日本人の理想的な生活態度でもあらうと思ひます。

四

第三の「備考」は次のやうに組織されてゐます。

(1) 指導研究

(2) 參考

「指導研究」に於ては實際指導の方法に關し編者の立場から一つの試案を提出しました。併し指導そのものは元來指導者独自の人格的背景をもつて始めてその生命ある機能を發揮するものであります。教材の十分な研究の上に自然にして妥當な指導案を各自に工夫することが絶対に必要であると思はれます。従つて本書に於ても全く一つの試案を描いて見たに過ぎません。(2)「參考」としては教材研究上乃至指導上參考となるべき各種の資料を輯録いたしました。即ち或は教材と原文との比較をなし、或は補充教材を附録し或は又挿繪について説明いたしました。

本書は概ね以上の組織と方法とによつて編述いたしました。が、何分短時日の間に完成する必要がありましたので、或は思はぬ所に不備な點がありはせぬかと懸念に堪へません。幸に各位の御叱正を仰ぐと共に益々研鑽をつみ、本書をして完璧たらしめたいと念じてゐる次第であります。

昭和十四年一月

著者識

醇正國語 教授參考書 卷九

目次

一 日本文學研究の意義	藤村作	一
二 大和時代の文學	編者	三
三 倭建命	(古事記)	三
四 祝詞・宣命		四
五 萬葉集抄	人麿—赤人—憶良—蟲麿—家持—志貴皇子—高市黑人—大伴旅人	七
六 平安時代の文學	編者	八
七 かぐや姫	(竹取物語)	一〇
八 都鳥	(伊勢物語)	一三
九 須磨の秋	紫式部	一四
一〇 香爐峯の雪	清少納言	一五
一一 道長の幼時	(大鏡)	一七

目次

一

目次

三 鎌倉室町時代の文學……………編	者……………一六五
三 新古今集抄……………貞經—俊成—定家—家隆—寂蓮……………編	……………二〇七
四 日野の閑居……………鴨	長明……………二二七
五 大原御幸……………(平家物語)……………編	……………二七二
六 一事貫行……………吉田兼好……………編	……………二六六
七 中世の藝道精神……………編	……………三三三

一 日本文學研究の意義

藤村作

一 解題

1 作者

藤村作 フヂムラツクル。明治八年五月生。明治三十四年東京帝國大學文科大學國文科卒業。爾來第七高等學校造士館教授、廣島高等師範學校教授、東京帝國大學國文學部助教授歷任。大正八年十二月文學博士の學位を受け、同十一年東京帝大文學部教授となる。昭和十一年三月停年により退官。現在東京東洋大學教授。江戸文學研究を以て専門となす。上方文學と江戸文學「國文學史總説」「近世國文學序説」等の著がある。

2 出典

日本文學講座(新潮社發行)第一卷「日本文學研究の新意義」より採擇。

3 主眼及び採擇の趣旨

我々國民が國文學研究をなす事は、本質的に見て如何に重大なる意義を有するか、殊に我が國の歴史的事情と、世界大戰後の風潮とに鑑みて、如何なる新意義の存するものであるかを確認せしめ、以て以下順次國文學史的排列による具體的作品の學習をして、自覺あり意義あるものたらしめ、延いては國語、國文に對する愛護尊重の念を啓培せんとするに在る。然らば本課の卷頭に位する所以は多語を要せずして明白となるであらう。

二 解 釋

1 語 釋

【我々日本國民に取つて……反省と自覺の機會を與へられてゐる】

一語一語には殊更に難解な語句もなく、所謂文字面だけの意味は平明である。然し眞に其の文意を了解せしめる爲には、教授者の適切な説明を必要とするのである。さて文中の「内的生活」とは、勿論心の生活、精神生活の謂である。而して「生命」とは心身の成育活動の原動力を指すのであるが、此處では特に精神的なものを意味してゐると考へられる。そこで國文學が我々國民に取つて、生命の糧であり、力である」とか、或は「我々の内的生活に糧を供してくれ」とか言ふ事は、恰も生理的肉體的身體が、飲食物を糧とし、力として成長發展を遂げる如く、我々の精神生活は國文學に親しみ、之を知る事によつて、始めて内的生命の力を得、糧を得て、生成向上をなし一層豊かなる生活をなし得ると云ふのである。二千年來の國文學に示されてゐる種々な國民精神に觸れる事によつて、又眞に心から之を味はふ事によつて、我々國民の心は育まれもし、成長もし豊かにもなつて向上發展すると言ふ意である。次に「反省と自覺との機會

ひられてゐる。

【單語・文章のもつ意味はとにかく……】

實際は最も簡單なるべき單語の所謂固有意義をへも、些かの遺漏もなく理解し得るものではない。例へば「ものあはれ」「さび」等の語は其の好例である。更に「古池や蛙飛びこむ水の音」と、其の英譯とを比較して見れば、一層その間の消息が了得されると思ふ。

【系統を異にした特別な組織をもつてゐる國語】

世界の語族を大別すると、學者によつて説を異にするが次の如くなる。

- A. Indo-European family (Indo-Germanic f.)
 - 1. Indo-Iranian branch (Sanskrit, 印度語, ペルシヤ語等)
 - 2. Armenian brach (アルメニヤ語)
 - 3. Greek branch (ギリシヤ語)
 - 4. Albanian branch (アルバニヤ語)
 - 5. Italic branch (伊太利語, フランス語, スペイン語, ポルトガル語, ルーマニヤ語等)

1 日本文學研究の意義

を與へられる」とは如何なる意味であらうか。上古以來の國文學の中には、我々の祖先以來の精神生活が、如實に表現せられてゐる。故に之を知る事、之に親しむ事は即ち國民として二千年來の精神生活の委相を回顧する事であり、即ち反省する事に外ならない。而して其の結果國民精神の尊さ、偉大さを知る事は、即ち國民的自覺を得る所以であつて、茲に我々は「常に日本國民たる生命を新たにしてい行く事が出来る」のである。

【民族と國民】 民族とは人種的・種族的觀點よりの謂であり、國民とは勿論國家的見地よりの言である。

【享く】 ウク 天より享ける意。即ち生來既に存してゐる意。

【無機的】 有機的に對する語。即ち各構成要素間に、何等の內面的必然的關聯を有せざる偶然的なる状態。

【有機的】 1、生物的（無機的無生物的に對す）2、各構成要素間に內面的必然的關聯統合を有する状態。

【民族性・民族精神】 民族の特有なる性質、民族一般に見られる精神上心理上の共通的特色をさす。二者大差なし。

【擴充】 クワウジユウが正しいが、普通クワクジユウと用

此等を總稱して Romance language と云ふ)

- 6. Celtic branch
- 7. Germanic branch (Teutonic) (英語, 和蘭語, 獨逸語, スエーデン, ノルウェー, デンマーク, アイヌランド等)
- 8. Baltic-Slavic branch
- B. Semitic family
 - 1. Assyrian
 - 2. Babylonian
 - 3. Phoenician
 - 4. Hebrew
 - 5. Arabic
- C. Hamitic family (埃及語) (BとCとを合して Hamito-Semiticともいふ)
- D. Ural-Altaic family (フィンランド語, ハンガリヤ語, トルコ語, モーコ語, ツンダース語, 純滿洲人語)
- E. 印度支那語族 (支那語, (現在の滿洲國語) チベット語, シヤン語, ベルマ語)

其の他 Austronesian family (Malay-Polynesian family)

Hyperborean language

(アイン, キリヤータ, カマチャツカ語等)

さて然らば國語は右の何語族に屬するかと言ふに、正しくは未定と言ふべきである。但し現在迄に於ける想定としては、ウラルアルタイ語族に屬するものであらうとされてゐるが、それには種々な異論がある。よしその臆説の通りであるとしても、西洋諸國の英・獨及び佛・伊等が何れも family を同じくし、更に branch 迄を等しうするのは同日の論ではない。以上は系統についてであるが、さて國語が其の組織上、如何なる特色を有するかについては、安藤正次氏が次の様に述べられてゐる。

「國語の本質的特性として擧ぐべきものは何であるかといふに、その著しい點だけについていへば、第一に、國語は言語學上附着語といはれる性質を有つてゐること、即ち、語法上の關係が助動詞や助詞や接頭語接尾語などによつて示されること、第二に、國語は多音節語であること、即ち支那語などは概して一語一音節であるが、國語は一語が數音節から成立つてゐるものが多いこと。第三に國語の音節は開音節であること、即ち音節が母音に終つてゐること。第四に、國語の語詞排列の順序換言すれば考へ方の順序が主語客語述語といふ次第になつてゐることなどが數へられる」(「古代國語の

研究、言葉と文字にあらはれた我が國民性)

生徒は漢文・英語を知つてゐる筈であるから、生徒自身の問題として、比較對照せしめたならば、興味深い事と思ふ。

【酣醉】カンスキ 大いにゑふ意。

【ゆくりなくも】思ひがけなく、不意に。「も」は感動の意の助詞。「ゆくりなし」は形容詞で、「不意なり」「卒爾なり」の意。「ゆくりなく」はその副詞形である事は勿論であるが、同意の副詞に、「ゆくりかに」と言ふのがある。

【天籟】テンライ 「籟」は三孔有る一種の笛を言ふ。大を笙、中を簫、小を箏と言ふ。故に天籟とは自然の音響、風などを稱する語。此處は何處からともなく唱導されるに至つた事を天籟に譬へたのである。

【耳朶】ジダ 耳たぶ。耳廓。

【萬葉ぶりの和歌を提唱し實行した】江戸時代の歌壇に於て、細川幽齋を中心とする傳統的歌人に對し、革新の第一聲は江戸の戸田茂睡によつて唱導された。その後、春滿・在滿・契沖・宗武等によつて、愈々其の機運は醸成され、殊に後二者は或は萬葉の研究に従事し、或は萬葉調を尙んだ人々である。然し未だ眞に萬葉調の和歌を自らよくする所に迄は到達しえなかつたのである。かゝる時、眞淵翁のみは自ら創作以て其の唱導する萬葉調を具

體的に提示したのである。門人村田春海撰の、「賀茂翁家集」に、すべては収録されてゐる。殊に萬葉集特有の歌體たる長歌は、他の追隨を許さざる手腕を示してゐる。(「研究書としては「萬葉考」・「冠辭考」はその方面の代表作)

【古事記傳の著述にその生涯の大部分を捧げたのである】宣長は、明和元年(二四二四)三十五歳の時より、三十五ヶ年を費して、寛政十年(二四五八)六十九歳の時、漸く古事記傳を大成したのである。(四十四卷、外た目錄附卷四冊)

【荷田春滿や賀茂眞淵が二百年前に唱へ出して本居宣長や平田篤胤に繼承されて……】

此等の四人は所謂國學の四大人である。篤胤が宣長歿後の門人である外、何れも順次に師弟の關係になつてゐる。さて所謂國學者の主張は奈邊にあつたかと言ふに、抑々國學とは和學の代名詞ではなく、勿論單なる古典研究の謂ではない。其の目的とする所は、即ち言語文字文學を通じて、古代文化を知ると同時に、更に敬神愛國的精神から、國體の精華を發揮し、國民的精神を鼓吹しようとするにあつた。即ち古典研究は決して最後の目的ではなく、それを手段として排外自尊の目的を達成せんとするにあつたのである。四大人の中、前三者迄は、研究的研

學的なる態度に止つてゐたが、篤胤に至ると、宗教的となり、實行的となり、古道の信仰を呼號し、國民の自覺を喚起すべく狂奔したのである。彼の政治家的、社會改革家的風格は、次の和歌に於て其の面目躍如たるものがある。

月花をわれもあはれと見てはあれど
哀れと詭ふ暇なかりけり。

【江戸時代の復古主義者には……固陋な偏見に囚はれた弊があつた】

例へば、眞淵の「語意考」を見るに、其の總論中に、日本・支那及び印度の言語音聲上に於ける優劣論がある。即ち老子の性の説である幼を最善、老は之に次ぎ、壯は最悪とする考に基き、我が日本は日出づる國であり、即ち幼に當る。従つて言語音聲は純粹正雅であるが、支那は日の放る國故、壯にあたる。故にその音聲は不正鄙俚であるとしてゐる。又我が上古に文字なきとき、その理由は上代の國民は正直であり、少しも偽を言はなかつたからであるが、支那人は其の言に信なく、故に口先だけの約束では不安のため、文字に書取つて、後日の證左としたのであるとしてゐる。又宣長は更にその師眞淵の説を繼承し、更に強調してゐる。其の著「漢字三音考」を見るに、我が國の言語音聲は純粹正雅であるが、印度支

那に於けるものは混濁不正であるとし、即ち我が國の言語音聲は五十の直音から成立し、しかも何等不足も剩餘もない。これは天地間の正音を全部集めてゐる故である。然るに支那等には、濁音・半濁音・拗音・促音・撥音等の如き不正な音を存してゐる。是等は何れも鳥獸萬物の聲であつて、人の口にすべきものではない。しかもそれ等の

不正混濁な音は我が國には一も存在しない。是を以ても、我が國の萬國に秀れてゐる所以が了得されるとしてゐる。
【因襲】 イシツフ 從來よりのならはし、しきたり。
【いびつ】 (一)長く圓き形、楕圓。(二)轉じて圓き形の歪みたるもの。こゝは勿論後者。

2 文の構成

第一節 日本國民と國文學研究

- 1 日本國民と國文學、日本國民の使命。(始より二頁一一行迄)
- 2 國文學は日本國民にとつて絶對のものである。故に作家や研究者に對して敬意を捧げたい。(二頁二二行より四頁四行迄)

3 文學の特殊性、特に國文學研究の獨自性。(四頁五行より五頁一〇行迄)

第二節 日本國民の自國文化に對する自覺の歴史的變遷

- 1 江戸時代以前に於ける日本國民と拜外的思想。(五頁二二行より六頁一一行迄)
- 2 復古精神の唱導(江戸時代)と其の代表者。(六頁二二行より八頁三行迄)
- 3 幕末開國後の外國文化崇拜。(八頁四行より九頁四行迄)

第三節 世界大戰後に於ける新精神の勃興と國文學研究

- 1 世界大戰後に於ける東洋研究。(九頁五行より一〇頁三行迄)
- 2 古典復興、國文學研究精神の勃興。(一〇頁四行より一二頁二行迄)

3 前記新精神は即ち復古精神なる事。(一二頁三行より一三頁二行迄)

4 復古精神の理想と國文學研究。(一三頁三行より一四頁三行迄)

5 國文學研究者の今後の責務。(一四頁四行より終迄)

3 文意

日本國民として國文學研究の意義を、先づ一般的に論じ、次に我が國に於ける歴史的事情と、且つ又世界大戰後の世界的風潮とより見て、特に重大なる新意義の存する事を明確にせんとするのが本文の主眼である。以下順序を追うて其の要旨を摘記して見よう。

國文學は日本國民にとつての精神的血液である。我々の内的生命の力であり、糧であるものは實に二千年來の國文學である。我々は之を知り之に親しむ事によつて、始めて國民的自覺と反省との機會を與へられるのである。かく考へ來れば國文學研究の如何に重大なる意義を有してゐるかは多言を要しない所である。即ち眞に國民として生きる爲めには是非國文學研究の必要があるのである。

吾々が個人として將又國民として眞に生きるとは、日本國民として生きることであるが、一面より見れば、即ち我が國特有の民族性・民族精神を通して世界文化の進展擴充に參與することにほかならない。而して文學は其の本質上からの必然的結果としても勿論、特に我が國文學は其の特殊の事情よりして、我々國民を措いて之を眞に研究し得るものはないのである。即ち眞に世界文化の向上進展に參與する上より見るも、亦國文學を知り、之に親しむる必要を認めなければならぬ。

然るに我が二千年來の歴史を回顧するに、其の對象の差こそあれ、常に拜外の迷妄を繼續して來たのである。僅に江戸時代に於ける國學者間に復古精神の唱導を見たのであるが、それとても偏狹にして十全なものとは考へられない。

幸、世界大戰を契機として、國民は二千年來の迷夢より覺醒しようとして來た。物質文化を中核的生命とする西洋文明に對し、冷徹なる批判からして、其の弱點の認識が行はれ、遂に東洋文明、日本文化が世界的注視の的とならうとしてゐるのである。

かくて國文學の研究は新なる意義を有する事となつた。即ち人間本然の精神、さては日本國民の眞の相を國民精神を、日本精神を探究すべく、古典への憧憬日本文學への研究が日に日に隆盛に赴いて來たのである。

然し國文學に於ける未開拓の分野を開拓し、且つ廣く民衆に對する理解を深める事は、今後に於ける大きな課題であらねばならぬ。此處に日本文學研究の將來性が考へられるのである。以上は本文の要旨であり、主眼であり、眼目である。

4 鑑賞批評

段落の主意、或は所謂節意・文意を考察して見ることによつて、直ちに了得されるのであるが、本文は決して簡明達意な敘述であるとは謂ひ難い。稍々重複の嫌もあり、冗漫ならんとする傾が見える。もとゞ講座の一篇であつて見れば、深く責める方が却つて無理であらう。然し論者の言はんと欲する所は、全體的に見て明白であるから、其處に意を留めてひたすら其の内容を想を生かすべく努むべきであらう。

三 備 考

1 指導研究

本課は平易なる口語文であつて、一應の讀解は實に平易である。然し眞に其の文意を理解せしめる事は必ずしも容易でない。而も本課の期する所は、實に其の内容に在り、論旨に在るのであるから、能ふ限りの準備を整へ、或は例を示し、或は趣旨の敷演に努め、以て國文學研究の眞義を了得せしめ、國文學愛好の熱意を喚起したいものである。

尙ほ本課の指導事項としては、表現上に於ける形式的方面が比較的平易であつて、しかも其の論旨を的確に把握すべき此の種の文の一例として、段落の主意を探り、更にそれをまとめての節意を想定し、更に高次のな文意を決定する練習を試みては如何かと思ふ。

2 参 考

省略された部分。五頁十行の次に左の如く續いてゐる。

「チャンバレン氏に古事記の英譯があり、フロレンツ博士に萬葉集の研究があり、アストン氏に日本文學史の著述があり、最近では又ウエレー氏によつて源氏物語の英譯第一巻が出版された。又ハンブルヒ大學にはフロレンツ博士の日本文學の講座があり、巴里の大學ではエリセエフ君が日本文學を講じてをり、ペトログラアドに倫敦に日本文學に關する講義があると聞く。しかしながら、これらの著譯は未だ我が日本文學の研究として十分なものでなく、諸氏の講義も唯一局部に限られてゐる。日本文學はまだ世界に知られてゐることの極めて淺く且つ狭いものである。今日世界に強を稱へてゐる國民、文化を誇つてゐる國民から見れば、我が國語は彼等の國語と系統上組織上違つたものであり、又國土の位置からすれば遠く隔離し、國際關係からいへば約一世紀以前までは殆ど全く没交渉であり、文化の上では、今日こそ彼に倣つたものが甚だ多くて密接であるが、以前に於ては全く特殊な展開をなし來つたものであるから、彼等が我が文學を知らないのも無理ならぬことである。併しながら、我が國民自身がこれを蔑視し、これを等閑に附し、これを知らざるを恥としない態度は甚だその意を得難いものである。是に就いて我々は大いに國民の反省を促したいと思ふ。」

又十四頁三行の文に左の如く續く。

「斯様にして復古精神の勃興は少壯有爲なる青年學徒を多數國文學界に誘うた。今や全國官私の大學にして國文學科を有する所は空前の盛況を見せてゐる。専門學校の國語漢文科や文部省の中等教員檢定試験の國語科は押すな押すな雑沓である。新進學徒の新研究、新考察に成れる論文は著書に雑誌に陸續として現れかけた。從來唯入口の扉のみ開かれてあつた國文學の殿堂も、今や新進學者

の手に由つてその奥なる扉も開かれて曙光を世に示さんとしてゐる。古事記神話の國民精神が新たに見出され、萬葉の新價值が認められ、源氏物語の新意義が闡明され、兼好の思想、芭蕉の生活、近松西鶴の價值が新たに發見されて行きつゝあるのは明らかたる事實である。斯くして、國文學者の新業績は國民の間に國民精神の理解を深め國民性の自覺を固めて行きつゝあるのである。斯う見るのは獨り我々専門學者の愚見目ばかりではあるまい。」

さて本課採用の部分の次には左の如き要旨が述べられてゐる。

「徳川時代の國文學研究家は大いに努力した。その本文研究語句の註釋等には偉大の功績を残してゐる。然し時代は時代を追ひ、學問は次から次へと進んで行くから、我等に残された事業は少くない。今それ等について述べよう。

本文批評 は古典研究に於て必ず通過すべき關門である。前代の諸學者も之をなした。然し我々は本文批評の意義を、單に異本を集めて流布本を校訂する事を以て、正しい全部的なものとは考へてゐないし、更に社寺貴族等の秘庫も漸次學者の爲に開かれる等の内外的利便からして、この方面に多くの事業が殘されてゐると云へる。

但し該事業の性質上、非常なる努力と月日とを要する。故に學者一個人の業とするより、國家事業とすべきである。併しながら、これが今急に行はるべきものとも思はれないのは、學者の世に先だつて唱道せざる怠慢の罪か、はた爲政者の短見の罪か、また國民の冷淡の罪か、遺憾千萬である。

註釋 古人の最も努めたのは註釋作業である。今日古事記を讀むといふ人々も、古事記本文よりは、むしろ古事記傳を讀んでゐるといふ方が適當な位、我々は古人研究家の恩恵によつて古典をよみうるのである。然し反面には、宇津保蜻蛉の如く、僅に一二に止り、或は和泉式部日記・狭衣物語・とりかへばや物語の如く、擧ぐべき註釋書のないものもあり、あつても容易に得られないものもある。殊に室町・江戸時代のは、ないのが普通である。故に此の方面にも亦殘された多くの事業を認むるのである。

次に古人は本作業の概念が決定してゐなかつた爲め、多くは語、せめては句迄の意義の穿さくにと止つてゐ、且註釋の爲の註釋の如き感があつて、必要以上に煩瑣に亘つてゐる缺點をもつてゐる。語の解釋に於ても、外國語の知識に乏しく、且つ言聲の學的知識を缺いてゐたため、噴飯の説すらある。

本業を分解すると、種々な方面がある。文形成の語句上には、單語・文法・修辭・律格等があり、又文の方面には、物・事實・思想・感情・氣分等の各方面がある。しかして我々の今日求めてゐる註釋は、内容と表現の形式(文)とその要素(語句)とを別物として取扱はない、新しい註釋でありたい。

古典を現代語譯でよむことは異しいことである。この點よりするも、本作業の一日も早く世にあらはれ、國文學が民衆にしましめる様にしたい。

鑑賞 文學は感すべきものである。國文學評論史を辿ると、鑑賞を無視してはゐないが、其の印象を表現する用語に、抽象的な弊がある。例へば「巧みなり」とか、「うるはし」とか。然るに現代は精神科學の發達から、古人の企て及ばぬ印象の説明が出来る筈である。

評論 古人の業績は此の方面が最も貧弱である。江戸時代等の評論は偏頗な時代思想に誤られてゐる。然るに吾々は批評の概念を西洋の學者によつて、よりよく教へられ、且つ批評の基礎學の知識を得るにも便利である。

國文學から其の國の文化を知りうると同時に、國文學研究には、それを生み出した時代の文化を豫め知る事が肝要である。個々の文學作品から、時代精神、時代の生活を考へるも、先づ時代精神時代生活を考へておいて、文學個々の作品に入るのも共に排斥すべきでない。結局は國民精神、國民性の探究、國文學の本質の考察に達するであらう。文化史的研究、生活史的考察が、國文學研究の上に成功の暁は、我が國民生活はその進路に一大光明を揚せられる事とならう。我々は過去の爲に過去を究める愚を敢へてせんとするものではない。我々の國文學を研究するのは、現代の新文化新生活の創造の必要の爲になすのである。我々の研究は、これをなし得て、始めて其の意義を十分に發揮し得るものである。」

尙同氏の「國語教育論」(岩波講座、「日本文學」中)を併讀される様希望する。

二 大和時代の文學

一 解題

1 作者 編者自作の文である。

2 主眼及び採擇の趣旨

第一課に於て、日本文學研究の重大なる意義を確認せしめ、愈々具體的な作品を學習する順序であるが、生徒は文學史特に上古の文學等に就ては、其の知識は甚だ貧弱と言はなければならぬ。そこで、先づ大和時代の文學に就て概略的な解説を試み、初歩入門的な啓蒙をなさんとするのが本課である。故に最も素朴的な態度を以て、作品と作者とに就ての大觀を得させようとするのが本課の眼目であつて、何處迄も次々に配列されたる古事記・祝詞・宣命、或は萬葉集等の味讀を助成させようとする所に主眼が存するのである。従つて其等の具體的作品を讀解するに當つては、本課との連絡を種々考慮し、以て本課の使命を十分に活用されたいと思ふ。

二 解釋

1 語釋

【皇都が主として大和に在つた時代】

神武天皇以下平安奠都に至る迄の中、大和以外の皇都は

僅に次の數代に過ぎない。

一三代 成務天皇 近江滋賀高穴穗宮
一四代 仲哀天皇 角鹿笥飯宮

穴門豐浦宮 筑前香椎宮
一六代 仁德天皇 攝津難波高津宮

一八代 反正天皇 河内丹比柴籬宮

三六代 孝德天皇 攝津難波長柄豐崎宮

三八代 天智天皇 近江滋賀大津宮

三九代 弘文天皇 同前

【漢字が傳へられたのは應神天皇の御代であるから】
「十五年秋八月……百濟王阿直岐を遣して良馬二匹を貢する。……阿直岐亦能く經典を讀めり。即ち太子菟道稚郎子師としたまふ。是に天皇阿直岐に問ひて曰く、如し汝に勝れる博士亦有りやと。對へて曰く王仁といふ者有り、是れ秀れたり。……仍りて王仁を徵さしむ。其の阿直岐は阿直岐史の始祖なり。十六年春二月王仁來けり。則ち太子菟道稚郎子師とし諸の典籍を王仁に習ひ通り達りたまはずといふこと莫し。故れ所謂王仁は是れ書首等の始祖なり。」(應神紀)

「百濟國主照古王牡馬一疋牝馬一疋を阿知吉師に付て貢上りき。(此の阿知吉師は)……又百濟國に「若し賢人

二 大和時代の文學

有らば貢上れ」と科せ賜ふ。故命を受けて貢上れる人名は和邇吉師。即ち論語十卷千字文一卷併せて十一卷

を是の人に付けて貢進りき。(此の和邇吉師は文首等の祖) (應神紀)

以上は正史に見える漢字傳來である。よつて其の通説をこゝには掲げたのである。然し日本民族が、太古大陸

と交通してゐた事は、彼の史籍や我が神話に見える所でもあり、又考古學的にも證明せられてゐる。故に筑紫や

出雲には夙に傳來してゐた事は想像されるし、且つ又史家の説明する通りであつて、其の二三を擧ぐれば、

七代 孝靈天皇時代? 信友の説
七代 孝靈天皇前 栗田寛氏

七代 孝靈天皇時代=傳來 黒川真頼博士

九代 開化天皇時代後本邦人使用 峰岸米造氏
十一代 垂仁天皇時代(遅くも) 右の如くである。

尙書紀の十六代仁德天皇の條(四十一年)に、朝廷で百濟の記事を録せしめられ、且つ十七代履仲天皇紀四年八月の條を見ると、諸國に史官を置かれた事が想察される。是等は歸化人の司つたところとしても、漢字の傳來は、應神天皇以前なる事は疑がない。

【我が國語を自由にうつすやうになつたのは、推古天皇の御代以後であらう】

現存する最古の文獻は推古朝に成つたものである。而して其の中に日本人の手になつたと思はれる文章が遺存してゐる。今年代順にあげれば次の通りである。

- 1、伊豫道後碑（釋日本紀所引—最古の金石文）
（推古 四年）
 - 2、十七條憲法
（同 十二年）
 - 3、法隆寺金堂藥師佛光背銘（同 十五年）
 - 4、勝鬘・維摩・法華義疏（同十七—二十三年）
- 殊に推古紀二十八年に、聖德太子は蘇我馬子と共に、天皇記・國記・臣・連・伴造・國造・百八十部並に公民等の本紀を編纂された事が見えてゐる。

【神話】と【傳説】

神話學の權威松村武雄博士の説によると、次の如くである。即ち神話とは、

「なるたけ廣汎な融通の利く定義を擧げておくならば神といふものを中心として自然現象、人文現象を説明若くは叙述した民族的な説話」であり、傳説は「歴史的人物、若くは歴史的人物と信ぜられてゐる人物を中心とし、且つ年代と方所とに支配された民族的な説話」であつて、その説明しようとする對象は太陽とか世界とかいふやうな超地方的なものでなく、飽くまで地方的に局限されてゐる、且つ時代は嚴密な意味で

は當つてゐないが、とにかくこれこれの時代と局限されてゐるのが特色である」としてゐる。（東京高師附小、教育研究、四二八號、「説話學講話」より）

【帝紀】 古事記傳に於て宣長は、「下の文に帝皇日繼とあると同じく御代々々の天津日嗣を記し奉れる書なり」とし、天武紀に「帝紀」とあり、推古紀・皇極紀には「天皇紀」とあるが、國史と言はざる所古稱なるべきを論じてゐる。但し山田孝雄博士は「古事記序文講義」に於て、帝皇日繼を基礎にしたものであるが、決して一部の成書の稱ではなく、その内容をさす言葉であつて、内容を年代の順にならべ、歴史の幹になるもの、根本になるものとしたものを言ふと論じてゐる。

【本辭】 記傳に於ては「下文に失代の舊辭とあるのと同じ。……川島皇子修撰のところ上古今ノ諸事とあるは正しくこれなり。然るに今舊事と言はずして本辭舊辭といへる辭の字に眼をつけて天皇の此の事おもほしめし立し、大御意はもはら古語に在ることをさとるべし」と言つてゐる。さて兩者について考へるに、先づ古事記の所謂序文を見ると、古事記修撰の材料となつたものに、二種類あつた事が察せられる。それは常に對をなして述べられてゐる。即ち

(1) 諸家の賈る所の
帝紀 及び
本辭

(2) 帝紀 を撰録し
舊辭 を討覈し

(3) 帝皇の日繼 及び
先代の舊辭 を誦み習はしむ

(4) 舊辭 の誤り忤へるを惜み
先代の舊辭 の謬り錯れるを正さんとて

(5) 勅語の舊辭

右によれば(4)は前後し、(5)は一方のみの述べ方に稍と不統一を見え出すのであるが、然し(4)は文の變化と見られ、(5)については舊辭が一層大部であり難解のため、特に之を擧げたものとすれば、一應の解決がつくのである。故に帝紀・先紀・帝皇の日繼と、本辭・舊辭・先代の舊辭とは夫々一群をなす同様な事項に對する異名であると思はれる。而して前者は帝皇の日繼の語によつて想察される通り、皇室の御系譜皇位繼承の次等等を記したものの（或はそれに關する口傳）の謂であり、後者は皇室を始め奉り諸氏族が先祖以來傳承した一切の諸傳説を指すものであらう。

【我が建國創業の由來を明かにし……歡慮に發したものであつて】

古事記の序文に、天武天皇の詔として、次の如く見えてゐる。

「朕聞く諸家の賈る所の帝紀及び本辭既に正實に違ひ多く虚偽を加ふと。今の時に當りて其の失を改めずば幾ばくの年を経ずして其の旨滅びむとす。斯乃ち邦家の經緯王化の鴻基なり。故帝紀を撰録し舊辭を討覈し偽を削り實を定めて後葉に流へむと欲す」

而して邦家の經緯、王化の鴻基の重大なる意義については、山田博士が上掲の書（一三六一—一四〇頁）に於て、非常に強調してゐられるが、誠に卓見と言ふべく、一讀を御奨めする。

【誦み習はしめられたが】 此の誦習の解釋如何は、古事記撰述の由來について説の分れる所となる。即ちもし暗誦の意ならば、天皇の親しく授けられた古傳説を、阿禮が忠實に暗誦した事になる。又誦讀習熟の義（誦習の語は岡田正之博士の説に、史記の儒林傳に見える由）とすれば、難解な古記録の文字の訓方を、親授された通り誦み習つた事になる。即ち天武天皇時代、上述の舊辭が成文として存したか否かに問題は發展する。然し種々の理由から、私は後者に解すべきと思ふ。但し本文の述べ方は説が異なる様に見える事に注意されたい。

【和銅四年】 【翌年に至つて】

序文に「和銅四年九月十八日を以て臣安万侶に詔して稗田ノ阿禮が誦む所の勅語の舊辭を撰録して以て献上せよとのたまへり」とある。又上表文の日附は「和銅五年正月二十八日」である。

【天ツ神の詔命による】 記に「是に天神諸の命以ちて伊邪那岐命、伊邪那美命二柱の神に『是の漂へる國を修理り固め成せ』と詔ちて天の沼矛を賜ひて言依し賜ひき」とある。

【諸冊二尊】 ダクサクニソン 書紀に伊弉諾尊伊弉冉尊とあるによる。記には伊邪那岐神妹伊邪那美神とあるので、岐美二神とも稱せられる。記紀共に神世七代の最後の神としむる。

【國土生成の大業】 所謂國生みの神話、並びに神生みの神話をさす。かくて所謂大八洲國、並びに山野草木、河海湖沼風火金土、總べてを司どる神々が皆二尊によつて生成されたのである。

【三貴子の御出現】 記によれば左の御目より天照大神、右の御目より月讀命、次に鼻より建速須佐之男命が成りまされる時に、伊邪那岐命はいたぐおよろこびになられ、「吾は御子生み生みて、生みの終に三桂の貴の御子を得たり」と仰せられた。

【風土記】 元明天皇和銅六年五月「制畿内七道諸國、郡郷

著好字、其郡内所生、銀銅彩色、草木禽獸魚蟲等物、具録色目、及土地沃墾、山川原野、名號所由、又古老相傳舊聞異事、載史籍言上」と言ふ詔が下されたので、諸國から撰進したもの。その詔によつても、地理書である事は明白である。しかして完本で傳つてゐるのは出雲のだけであつて、播磨・常陸・肥前・豊後のも残存するが、播磨のは巻首を缺き、他は皆抄本である。栗田寛博士の「古風土記逸文」に逸文が網羅されてゐる。

【遊離説話】 説話は神話の性質を失つた短い物語であつて、神や英雄などに結び付けられて語り傳へられてゐる。それが風土記等になると、地名・俚諺・慣習等の起りを説明する爲に、前後の統一した連絡を保つことなく、その部分々に遊離して語られてゐる。その點、記紀の上巻等が一つの渾然たる神話をなすのと、大いに趣を異にしてゐるのである。

【現在する祝詞】 神國なる我が國には神代より祝詞が存したであらう。然し現存する最古の祝詞は、平安期の延喜式第八卷、祝詞の部に録せられてゐるものである。收載されたもの廿七篇、その中祝詞は廿六篇、最後の一篇は出雲國造神賀詞である。尙ほ外に臺記別記（臺記は藤原頼長一保元元年一八一六歿の日記）に載せられた一篇がある。

【延喜式】 我が國に於ける、儀式典禮の書の編纂は、すでに天武天皇頃よりあつたらしい（書紀）が、嵯峨天皇の御代の弘仁式（四十卷）、清和天皇の御代の貞觀式（二十卷）を併せて一部の書と成し、重複を削除し、不便を改め、不足を補つたのが延喜式五十卷である。延喜五年（一五八七）藤原忠平の撰。「式」とは律令格に對する施行細則の如き意。

【天岩戸の神話に祝詞を奏した】 記に「……この種々の物は布刀玉の命、太御幣と取り持たして、天の兒屋根命太祝詞言禱き白して……」とある。即ち神饌物は齋部氏が供へ、中臣氏が太祝詞（太は美稱）を奏した事がわかる。

【祝詞の成立年代】 眞淵は「祝詞考」に於て、文體用語より考察して、出雲國造神賀詞は舒明、大祓は天智天武の御代、遷却崇神・大殿祭は持統文武の朝になつたとしてゐるが、かくの如く精細に一々斷言する事は不可能である。宣長は大祓詞後釋に於て、「かくありて全く今式にのれる如く定まりたるは、大寶令（文武、大寶元年一三六一成る一筆者註）ころならんか。はたそれよりや、前つかた天智天武の御世のほどなどより、定まれるもありやしけむ。それはたしかにはいひがたし」と述べてゐるが、先づ従ふべき説である。

【大祓】 オホバラへ 百官男女が不知不識の間に、過ち犯

した種々の罪穢を祓ふ爲に、毎年六月十二日の晦日に、朱雀門で行はれたもの。

【祈年祭】 トシゴヒノマツリ 毎年二月四日、神祇官國司の廳で、穀物の豐熟を神祇に祈請する祭祀。本文は本巻第四課參照。年とは其の字義「穀熟也」として、本義「みのる」意。古語に稻或は廣く穀物を「とし」と言つた。尙ほ記に大年神（穀物の神）が見えてゐる事等參照。

【大殿祭】 オホトノホガヒ 延喜式に「凡祭祀祝詞者、大殿・御門等祭、齋部氏祝詞、以外諸祭中臣氏祝詞」とある如く、齋部氏の祝詞。即ち祝賀の呪文を奏して宮殿の安泰を祝福するので、神今食・新嘗祭・大嘗祭の前に恒例として行はれ、又臨時に皇居の遷移齋王の卜定などにも行はれた。

【御代の長久・國家皇室の繁榮等の祈願を中心となすもの】 大殿祭・御門祭・鎮火祭・大祓・出雲國造神賀詞・中臣壽詞等。

【農事祈願のもの】 祈年祭月次祭（六月・十二月）廣瀬大忌祭・龍田風神祭、さては豐年感謝に大嘗祭がある。

【言靈信仰】 ロトダマシシカウ 言葉に或る不可思議な靈力があつて、人間の吉凶禍福を左右するものであるとの古代信仰。一例を示せば、記上卷天孫降臨に先立つて、葦原の中國に遣はされた第二の使、天若日子の段に、高木

の神が「若し天若日子命を誤へず悪ぶる神を射たりし矢の來つるならば天若日子に中らざれ。若し邪き心しあらば天若且子この矢にまがれ」と仰せられて、矢の穴より衝き返し下された所が、天若日子の朝床に寝た高胸坂に中つて、死んだ事が見えてゐる。まがれは禍有れの略である。その他萬葉集に、我が國は言靈の幸ふ國、或は助くる國と歌はれてゐる。

【續日本紀】日本書紀の後につく國史。六國史の第二。四十卷ある。延暦十六年二月成る。菅原眞道等の撰。文武天皇より延暦十年に至る八十五年間を知りうる唯一の歴史。就中六十餘章の宣命の收載は、本書の最も貴重なる内容をなす。

【記紀に收められてゐる二百餘首の歌謡】佐々木信綱博士「日本歌選」(明治四十二年刊)によると、記百十六、紀百三十九。其の分類。

二句	記	紀
三句一片歌	二	二
四句	一一	八
五句(短歌)	二	三
六句(旋頭歌)	四六	七一
六句(變體)	二	二
	三	三

八句(變體) 二

七句以上(長歌) 四八

四九

但し人によつては記百十五、紀百三十八とする者もある。然して同歌類歌が約五十首。記には仁賢天皇以下には歌なく、紀には天智天皇迄歌が見える。

【仁德天皇の御代から淳仁天皇の御代】

第二卷仁德天皇皇后磐姫の御歌から第二十卷淳仁天皇天平寶字三年元且の歌まで四百五十年に亘る。但しその中持統天皇以後の作が多く、藤原奈良七十年程の作品が大多数を占めてゐる。

【長歌】チャウカ 和歌の一體。五音・七音と續けて最後は七・七と結ぶもの。句数は定まつてゐない。古くナガウタとも稱す。短歌に對す。例は本卷四一頁参照。

【旋頭歌】セドウカ 和歌の一體。一名變本歌。五・七・七の句を二つ合せたるもの。即ち頭の形を旋覆す意よりの名かと言ふ。

白珠は 人に知らえず 知らずともよし 知らずともよし 吾し知れば 知らずともよし

【その表記法】

集中の用字法は大略次の如くである。

一、字音によるもの

イ、漢語・佛語

力士 俄鬼

キ、字音によりて國語をあらはせるもの。

世武登(せむと)

南(なむ) など

一字一音又は數音のもの

二、文字の訓によるもの

イ、漢字の意義に従つて訓讀せるもの。

(1) 船乘(フナ)

白玉(シラ) 所謂正訓

(2) 寒(フユ)

暖(ハル) 所謂借音

ロ、漢字の訓を借して國語をあらはせるもの。

乞菜(な)

淳鹿(春日)

一字一音乃至數音の所謂借訓

ハ、戲書したるもの—所謂戲訓

大王(てし) 助動詞—大王は王

義之(てし) 同(理)

山上復有山(い、出)

の字形から

尙古くは春登上人の「萬葉用字格」、近くは岩波講座日本文學の中に、森本治吉氏の研究あり。

2 文の構成

段落は明確

第一節 大和時代の範圍とその文學の二種について。

第二節 神話歴史傳説—文學類型上 記・紀・風土記—作品上。

第三節 祝詞と宣命について。

二 大和時代の文學

【心ゆくばかりに】「心ゆく」は(一)氣が晴れる。心に満足する。(二)氣味よく思ふ。「ばかり」は程度、「に」が添つて副詞となり、全體にては、間然する所のないほどに。小氣味がよい位迄に。

【慟哭】ドウコク 痛嘆して號泣する事。哭は大聲の意。論語先進「顔淵死、子哭之慟」朱註、慟哀過也。

【肺腑を衝く】ハイフをツク 肺腑は、(一)肺臟 (二)心の奥底等の意。故に肺臟を衝きさす位強い衝激を感じさせる事。

【人生派歌人】 赤人の如き自然歌人に對する語。人生に關する問題を詠する歌人。

【浦島子】ウラシマのコ 「子」は若者といふべきほどの意。

【感傷的氣分】カンシヤウテキキブン センチメンタリツクな氣分。物に感じ易い、僅かの刺激に對しても心を傷めやすい心から醸し出された氣分。

第四節 記紀の歌謡と萬葉集について。

3 文意

大和時代の文學の概説。

三 備考

1 指導研究

主眼及び採擇の趣旨に述べて置いた通り、本課の使命は大和時代の文學について其の概念を得しめんとするに在る。生徒には殆ど未知の世界である記・紀・萬葉、祝詞・宣命に入る準備に外ならない。故に高遠な文學批評や煩瑣な説明は努めて避けなければならぬ。大和時代の範圍なり、代表作なり、其の文學の種類なり、或は代表的作家なりについての概念を得させる程度で満足すべきである。殊に具體的な作品を次々に學習する際、再び本課の説明に立ち戻つて、其の理解を深め或は本課の説明に當つては出来るだけの具體的な例示をもつて、特に本卷に採用の部分と連絡を圖つて進めたい。

2 参考

上代文學に關する研究書の主なるものを掲げておかう。

上代文學の研究	武田祐吉
神と神を祭る者との文學	同 氏
古事記日本書紀の新研究	津田左右吉
上代日本文學の研究	久松潜一
上代文學研究	倉野憲司

三 倭建命

一 解題

1 古事記

我が國最古の古典。三卷よりなる。天地開闢より三十三代推古天皇迄の記述。その中天御中主神より日子波限建鷦草葺不合命迄が上卷、神武天皇より應神天皇迄が中卷、仁徳天皇より推古天皇迄が下卷である。さてその成立の次第を見るに（此の事は古事記の所謂序文、實は上表文に明記されてゐる）諸家の齟したる帝紀と本辭と時代を下るにつれて正實に違ひ、多く虚偽を加ふるに至つたので、天武天皇いたく御慨歎遊ばされ、みことのりして稗田阿禮に誦習せしめられたが完成には到らなかつた。その御聖旨を受けられた元明天皇は、和銅四年九月十八日大臣安萬侶に詔して阿禮の誦める所のもを撰録して献上する事を命じ給うた。かくて翌年正月二十八日に献上されたのが即ち古事記である。上・中・下卷夫々の特質はあるが、一言にして盡くすならば我が皇室の連綿たる御系統を明らかにすることを以て大根幹となし、併せて肇國の宏遠なるを始め、皇威の宣揚、國力の伸張擴大の次第を物語らんとするにある。即ち強固なる政治的意識の下に撰録されたものである。その事は古事記の所謂序文にも「邦家の經緯、王化の鴻基」として取り行はせられんとした御自覺の程が見えてゐる。以上は編述の大方針である。而して其の價値は以上の趣旨の達成せられてゐる以外に、或はそこに我が上古の民族精神を具現して居り、或は我が上代の古言古語を傳ふる等、正に古典中の古典、我が國典籍中の至寶である。文體は準漢文とも謂ふべきもの。當時安萬侶の苦心の程は次の文に明らかである。

然上古之時。言意並朴。敷文構句。於字即難。已因訓述者。詞不逮心。全以音連者。事趣更長。是以今或一句之中。交用音訓。或一事之内全以訓錄。……以上すべて記の序文に據る。

2 出典

古事記中卷、景行天皇の條より倭建命に關する大部分の記述を抄出したものである。(省略の部分に就いては參考の部参照)

3 主眼及び採擇の趣旨

本卷の卷頭に於て、日本文學就古典研究の重大なる意義を確認し、更に前課に於ては大和時傳の文學の概略を明白にした生徒は、自ら進んで古典の具體的作品を究明したき念願を有してゐる筈である。其の心構に乗じて以下時代を追つて進んでゆくのであるが、先づ其の先鞭として古事記が採擇されたのである。記・紀・萬葉・祝詞・宣命とは我が古典の同意語の如く考へられてゐる事を思へば至極當然な次第である。古事記は特に上卷に於て其の特質を有するとは云へ、本教材は其の内容が大牛生徒には既有的のものであり、且つ年少の御英雄、倭建命の御治蹟は正に年齢的に見て英雄に對して多大の共鳴を感すべき彼等の時代に最も適切なるものである。それにもまして本教材の構成が幾多の劇的要素を有し、東奔西走破邪の劍を振ひ給ふ命の英雄的行爲は、所々に人間味豊富なる幾多の敘述を俟つて一層の光彩を添へ文藝的效果を示してゐる點に注意されなければならぬ。そこに本教材の主眼があり採擇の趣旨が存するのである。

二 解 釋

1 語 釋

【倭建命】 ヤマトタケルノミコト 景行天皇の皇子。

記……「小碓命。亦名倭男具那命具那二字以レ音。」

紀……「其の大碓皇子、小碓尊一日同胞にして雙ツゴに生れま

せり。天皇異びて則ち碓に詰つびたまひき。故れ因りて其の二王を號けて大碓、小碓と曰ふ。是の小碓尊は亦の名日本童男(童男、此れをヲグナと言ふ)亦日本武尊と曰ふ。幼くして雄略之氣有り。壯に及びて容貌魁偉身の長一丈、力能く鼎を扛かげたまふ。」

命名の由來は本文の通り、タケルは勿論勇猛の義。

【大帶日子淤斯呂和氣天皇】 第十二代景行天皇。垂仁天皇第三皇子。御母は氷羽州比賣命(記)。後出倭比賣命の同母兄。景行天皇とは所謂漢風の御諡號(天平勝寶三年十一月淡海御船神武帝以下ヲ撰ビ奉リシヲ始メトス。)である。皇紀七三一年御即位、同七九〇年崩御。

【繼向の日代宮】 奈良縣磯城郡繼向村、穴師の邊。御陵も同郡柳本村に在る。

【ましまして】 原文は「坐」。意義は「居る」の敬意、即ちお出遊ばされての意。

【治しめしき】 語義は字面に明白なる如く、御統治遊ばされたと言ふ意。さて「治す」(シラすとも)と「めす」とに就いて一言すれば、其の語構成上は次の通りである。知らず (即ちラ行四段知るの未然形+四段活用敬意の助動詞「上代にのみ有り」の終止形) 知らず (母音變化)。

めす→見す (mesu→misu…母音變化)(即ち上一活の

見るの未然形に右記と同様なる助動詞の結合)

故に知らずは御知りになる、めすは御覽になる意であるが、上古に於ける用語例は却つて知らずは皇祖皇宗の御統治を(其の他の人が所有する事は宇志波利流葦原中國「記上卷」の如くウシハタ「領有」と言つて區別した)めすは恰も讀み給ふに於ける給ふの如く、原義を離れて單に尊敬の助動詞の役目を果してゐるのが普通である。現在使用される「某をお召しになる」「おめしもの」「めしあがる」は何れも此の原義よりの轉用。尙ほ前記の「すを語構成の一部分としてゐるものには御取らし、弓、御佩し(太刀)御衣し等がある。抑、此のすは上代專用のもので、平安以後は唯熟語の中の一成分として融合したものであるが今に残つてゐるのである。それに代るものとしては平安以後は下二活のすが行はれてゐる。さて本文もめすは單に敬意の助動詞。

【小碓命】 小は大碓命の大に對するもので、其處に長幼兄弟の意を含めた神名命名上の常套手段。尙ほ碓及び男具那に就いては上記書紀の引用文参照。

【こゝに】 原文「於是」。記傳に曰く「今、俗言に曾許傳といふ勢の處に用る辭なり」と。以下多數の用例皆之に準ずる。

【建く荒きみこゝろを惶みまして】原文には本文採用以上に詳細なる景行天皇の御系譜があり、其の最後の部分、即ち此の文の直前に次の如き記述がある。「天皇小碓の命に詔りたまひしく、『何とかも汝の兄朝夕の大御食にまゐりたまはざる。専汝ねぎ教へ覺せ』と詔りたまひき。かく詔りたまひて後、五日といふまでに、猶まゐり出たまはざりき。かれ天皇小碓の命に問ひたまひしく、『何とかも汝の兄久しくまゐり出たまはざる。若しいまだ誨へずありや』と問ひたまひしかば、『既にねぎつ』とまをたまひき。『如何さまにかねぎつる』と詔りたまひしかば、白したまひしく、『朝署に廁に入りたりし時、待ち捕へて搦み批きて、其の枝を引き闕きて、薦に裏みて投げ棄てつ』とまをたまひき。よつて『建く荒きみこゝろ』の具體的内容を知るべきである。さて『惶む』は四活の古語で『畏シト思フ』、『恐レ多シト考ヘル』の意。但しここは更に其の御子の勇猛なる荒き御氣性を畏敬しそれに信賴遊ばされた意とみるべきであらう。『ます』は坐にて『ゐる』の敬語なれど、ここは助動詞的敬語。

【詔りたまはく……とのり給ひて】「詔りたまはく」は詔り給ふの所謂カ行延言。勿論仰せになられるのにはの意。唯原文には「詔之……故取其人等而遣」とある。故に下部の「のり給ひ」は追加されたものである。抑、詔・

日本武尊

まつろはぬ熊襲たけるのたけきをも

うち平げしいさを雄々しも

また佐久良東雄に

やきほるぼさん天の火もがも

の和歌がある。

【禮なき人ども】原文「无禮人等」。無禮なる、不都合な人等。「みや」を活用してみやまふ(敬)と言ふ。

【故】「かくあれば」→「かゝれば」の意。即ち此の如くであるから、かくあるが故に。但し記には「故」を單なる發語の辭として「さて」等に當る意に用ひた所が多い。(以下に其の用例多し)

【とれ】「とる」は原文「取」である。但し本文は殺、討ちとるの意なるを以て文字を改めた。殺の意の用例は千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべき男とぞ思ふ(萬葉、卷六)等がある。

【御髮、御額に結はせり】崇峻紀二年五月、「是の時、既戸皇子、東髮於額にして『古俗、年少兒年十五六の間は東髮於額す、十七八の間は、分ちて角子と爲す、今も亦然り』軍の後に隨ひたまふ。」とある。故に「額に結はせり」

白・曰にて始りたる文を、同語を以て結ぶべきか否かに就いては議論がある。記傳の訓法は重ねて讀むを原則としてゐる。田中校訂本(頼庸博士)は直譯訓による。然し重ねて結ぶのは萬葉集等にも見えて、古文の一格である事は疑がない。且つ其の一見冗漫の如く見える所に、却つて文章法の原始的姿態を存し、古文特有の莊重なる味はひを發揮してゐると見るべきである。

【熊曾建】書紀に「熊襲」とある。上代九州地方に住した蠻族。熊人と襲人との併稱。今に肥後に球磨郡、大隅に噺歌郡がある。景行紀十二年……「朕聞く、襲國に厚鹿文、連鹿文といふ者有り。是の兩人は熊襲の渠帥なり、衆類甚だ多し。是を熊襲八十渠帥と謂ふ。其の鋒當る可からず。又同二十七年の條に「秋八月熊襲亦反きて邊境を侵すこと止まず。冬十月丁酉朝己酉日本武尊を遣して熊襲を撃たしめたまふ。時に年十六……時に熊襲に魁帥者あり、名は取石鹿文、亦川上渠帥と曰ふ。」とある。これ等によれば、熊曾建とは必ずしも或個人の名ではなく、强悍なる性質を種族名に併せ呼んだものであらう。但し二人とは察するに紀の上文を指すのであらうか。

【まつろはず】原文「不伏」。「奉る」まつらふ(又は「まつろふ」ともかく)と所謂延言となり、平服・歸順・奉仕の意、ここはその否定。明治大帝の御製に

とは髮の結び方を述べて其の未だ少年に在す事を現したものと解せられる。紀の先に引用した文に「年十六」とあるのともよく符合する。唯記のより具象的な表現を見るべきである。今も「未だ肩上げも下さぬ小娘」とか「髮はお下げ姿の少女」等と使用するのを併せ考ふべきであらう。さて「結はせり」は傍線の如き構成で「せ」は上述の「す」の已然形。故にお結ひになつて居られたの意。

【こゝに】原文「爾」。語意は上記「於是」と同じ。

【姨】ミヲバ。ミは勿論敬意の接頭語。但し原文にはミに相當する文字はない。そこで原則上かくの如く敬意を示す語を添加すべきか否か、もし添加するとすれば如何なるものになすべきかは問題であるが、それに就いては判然たる學説を見出し難い。唯古訓古事記等に從つてゐるだけである。但し其の用例から察するに、先づ神々に關聯したものは添加して訓讀するのを普通としてゐる。

【倭比賣命】垂仁



「次倭比賣命 拜祭伊勢大神宮也。」……記(景行)

「天照大神を豊招入姫命より離ちまつりて倭姫命に託けたまふ。爰に倭姫命大神を鎮坐させむ處を求めて、菟田

の後幡に詣る。更還りて近江國に入り、東のかた美濃國を廻りて伊勢國に到りたまふ。時に天照大神倭姫命に誨へて曰く、是の神風の伊勢國は、則ち常世の浪の重浪歸する國なり。傍國の可憐國なり。是の國に居らむと欲ふ。故れ大神の教のまにまに其の祠を伊勢國に立てたまふ。因りて齋宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります處なり。(垂仁紀、二五年三月)

【御衣・御裳】 先づ上代では腰より下に禪(穿裳)袴、股二つになつたものを著け、上半身には膝までの衣(筒袖・左衽)をつける。女子は更に禪の表面を布を以て巻く、それが裳である。謂はば上の禪である。さて嫉の御衣・御裳を賜はつた事は後に(童女の姿になりて、女人の中に交り立つ)伏線であると共に、伊勢の皇大神宮に御加護を祈願されて御出發なされた事をも暗に示してゐるのではなからうか。

【劍】 タチ 斷つの名詞形。兩斷するもの、切斷するもの意。

【故】 ここは例の發語的用法、さて、そこで。

【軍】 軍人の略、軍兵、軍士、軍卒。

【三重に圍み】 「三重」は必ずしも絶對的の數値三を示すものでなく「幾重も」の意であらう。「かくみ」は「かこ

み」に同じ、單に母音の變化あるのみ。
【室】 ムロ 種々なる意あるも、ここは古代家の内にて、別に奥の方にありて籠りかなる屋の稱。土にて塗り籠めて寢所とするもの。

【新室樂】 新しき室の落成祝宴、「うちたげ」は掌を拍上の略。酒宴、宴會。「うちあげ」掌を打ち樂みて酒飲む意。それが名詞「うちあげ」となり、意轉じて酒盛そのものをさす。竹取物語に「此の程三日うちあげ遊ぶ」とある。

【言ひとよみて】 原文に「言動」とある。「とよむ」は自動四活と他動下二活とある。ここは前者。

轟き響く、鳴り渡る、さわぐ、どよめく意。記に速須佐之男命の昇天を述べて「山川悉に動み、國土皆震りき」とあり、又同書八千矛神の歌に「眞野つ鳥雉は登與牟(響む)」とある。

【食物】 食す品物。「食す」に二義あり。(一)飲む、食ふ、着る等の敬語。(二)身に受け入れ有つ。めす(食國)天皇の知しめす國)の如きはこれ。即ち治む、統ぶの敬語的用法。

【設け備へたりき】 豫め準備を整へて居つた。「まく」下二活の古語、豫め用意する意。今延べて「まうく」と言ふ。「童女の髪のごと梳り垂れ」童女の髪のごと垂髪とし、の意。上古未婚の女は垂髪を例とした。「ごと」は「ごとし」

の語幹、原文「如」、普通上古文に於ては「ゴト」と訓ず。
【服して】 ケして 御著用なされて。「著す」の意で「す」は例の敬意の助動詞。

【既に】 すつかり、全く、完全に、まぎれもなくの意。

【室内】 ムロヌチ むろのうちの約言、muronuchi→muronuchi。即ち母音の脱落。殿内は「とぬち」と言ふ。

【見めでて】 見愛でて、見て歎賞して。一目見るより其の姿の美麗さに心をひかれすつかり感歎する意。「愛づ」他動、下二)は愛す、いつくしむ、感賞する意。同様なる語構成例には少しく先の方に「見畏みて」と言ふ語が有る。尙ほ原文は「見感」。

【己が中に坐せて】 熊曾建兄弟二人の中に坐せしめて。

【たけなはなる時】 酬なる時、まつ盛りの折。

【熊曾が衣の衿】 兄の熊曾が衣の襟を取つて。「くびし」は頸の意より轉じて頸に當る衣の部分即ち「エリ」をも言ふ。ここは勿論後者。故に俗言「胸ぐらをとつて」に當る。

【階の本】 ハシのモト 階段の下。「はし」は階段の古語。刻階・段階等の語にて知らる。原文に「椅」の字を用ひてゐるが、椅の原義は全く別で、我が國の特訓として「ハシ」と言ふに過ぎない。

【まをしつらく】 申す事には。まをしつらくと分れる。まをしつらの所謂カ行延言。語る↓語らくの使用法に同じ。

【暫し】 シマシ しばし(暫)の古言、「しまらく」とも言ふ。

抑々バ行・マ行は何れも唇音にして、發音部位同じきため相通するのである。兩行の差は前者が發裂音、後者が鼻音であるに過ぎない。「しばし」と「しまし」。「さびし」と「さみし」。「けぶり」と「けむり」。「かந்தちべ」と「かந்தちめ(上達部)」「めんぼく」と「めんもく」(面目)の如し。

【許しておし伏せたまふ】 願を許して、其の請を容れて、暫くの間うつ俯しに押し伏せたままにしてお出になられた。

【誰にますぞ】 どなたでいらつしやいますか。此の「ます」は「居る」の敬語。次の「玉にます」も亦同じ。

【大八島國】 オホヤシマグニ 日本をさすこと勿論であるが、古事記上卷によれば、岐美二神の生まれた、淡道之穗之狭別嶋。伊豫之二名嶋(四國)。隱岐之三子嶋。筑紫嶋(九州)。伊岐嶋(壹岐)。津嶋(對馬)。佐度嶋。大倭豐秋津嶋(本州)を説明した後に「故因」此八嶋先所生。謂大八嶋國」と結んである。

【御名………ます】 何れも御自身に對して敬語を使用されてゐるが、これは例の尊貴の方は御自身にも敬語を用ひられる上代の特別な用法の一例。(國語と國文學第七十

三號所載湯澤幸吉郎「自己に敬語を用いた古代歌謠等について」参照)

【おれ】「おのれ」の約であらうか。卑めて對稱に用ひられたもの。原文「意禮」。

【まことにしかまさん】誠に仰せにられる其の通りで御座いませう。

【大倭】オホヤマト 倭の美稱。

【建き男はいましけり】勇猛なお方がお出になられたことだ。「けり」は原文「祁理」とある。心から其の勇猛さに感歎した氣持。「います」と「ゐます」とよく區別させるべきと思ふ。ゐますは居ると對話の助動詞ますとの接続、故に話の相手に對して言葉を優しく表現したに過ぎず、居る其の人自身に對する敬意はない。一方いますは一語で四活、しかも「居る」の敬語故、居る其の人に敬意を示したものの。原文は「坐」である。

【倭建御子とたへまをすべし】大倭に於ける第一の勇猛なる御子の意なる、倭建御子と褒め稱へ申しませう。

【熟瓜】ホヅチ 蒂落の瓜、善く熟して自然と蒂より絶え落ちたるもの、かくの如き瓜は軟いから、容易に造作なく斬り裂く鬚に用ひたのである。

【振りさきて】「振る」は太刀を打ち振ふ。

【山の神、河の神】山や河の要害の地を占めてゐてまつる

はぬ神々をさす。

【穴戸の神】頭註の通り。長門の語義も「穴が戸」の略言と言はれてゐる。然し「長穴戸」の約言と見る方が一層自然ではあるまいか。とまれ穴戸は穴門で穴の如き關門をなしてゐる所の稱である。「新講」にはここを解して吉備の穴戸神をさすものと斷じてゐる。その根據は景行紀二十七年に、「既にして海路より倭に還りて吉備に到りて以て穴海を渡りたまふ。其の處に惡神有り。則ち殺しつ。」とあるによつたものである。

【ことむけやはして】「ことむく」他動、下二「従はせる、服従させる意。背いてゐる者を此方へ向かせる、即ち歸順させる事となる。記の上卷に「言趣」とある。「やはす」(他動、四)やはらげる。平和ならしめる。なごやかならしめる意。記の上卷に、「言趣和」とある。この原文、「言向和而參上」。萬葉集二〇、家持の長歌に、「ちはやぶる神をことむけまつるはぬ人をもやはし」とある。

【頻きて】シきて 重ねて、引續いて。

【十まり二道】トヲまりフタミチ とをあまりふたみち(十餘り二道)の略言。古き數へ方は十以上をかくの如くとなへた。

二十以上は例へば、「しはすの二十日あまり一日の日の戌の時」土佐日記」といふ風によんだのである。

【荒ぶる神】アラぶるカミ「荒ぶ」(上二活)、荒れ立つ神。上代人は善神と荒神(惡神暴神)とに兩分して考へてゐた。

【吉備の臣等が祖】吉備の臣の祖先。「オヤ」は(一)父母に限らず祖先にまでも及ぼして稱へる。遠祖、皇祖。(二)母を指す場合がある、萬葉に多い。母系中心社會組織の名殘。ここは前者の意。尙ほ紀(景行四十年)には吉備武彦とあり、且つ大伴武日連を共にさせられた事が見えてゐる。

【柎の八尋矛】ヒヒラギのヤヒロホコ 柎の木で作つた長い矛。

【柎】疼木の義と言ふ。葉に刺あり、觸るれば疼けばと言ふ。木犀科の常緑樹、暖地の山中に多い。人家にも籬とす。高さ約三米に達す。葉は「ねすみもち」より小、厚くして光り、邊に大刻ありて、尖、皆硬刺なり。櫛、算盤玉等をつくる。節分に鯛の頭と共にこれを門戸に挿して厲鬼を防ぐ、刺あるによる。

【八尋】正確な數値八ではなく、むしろ彌尋で幾尋もある長いと云ふ意。

古事記新講に、「播摩國風土記逸文の爾保都比賣命の託宣の中にも(比比良木八尋梓根底不附國)の語がある。上代には木鉾も用ひられたであらうが、この木鉾は、か

の節分に柎の枝に鯛の頭を刺して、門に刺し邪氣を祓つたのと同じ思想で、上古の宗教心に基づいて斯く傳へたものであらう。門に柎を刺す事は土佐日記にも見えてゐる。(承平五年正月元旦筆者註)。「ヒヒラギはヒヒラグ(疼と關係がある」とある。

【命】ミコト 御言、ミコトノリ、勅命の意。

【神のみかど】ここは大神宮を申す。原文「拜三神朝庭。」(御門とて帝を申し奉る如く、大神宮を間接にお指し申したものと考へられる。)

【拜む】ヲログむ「をがむ」に同じ。をれかむ(折れ屈む)をれがむ(自動、四)をろがむ。

【草那藝の劍】クサナギのタチ 草薙劍、三種神器の一。古事記に於ては、天叢雲劍の語は、八俣大蛇退治の所にも亦此の日本武尊の所にも見えない。紀に於ては上卷素戔嗚尊の所の草薙劍の註に見え、又景行紀四〇年の所にも見えてゐる。故に果して書紀の傳へる如くであれば古事記の方は後に改められた名を更にそれ以前に迄遡つて呼稱した事になる。

【御囊を賜ひて……】上古の旅に袋は必ず携行されたものであらうから(記、大國主命の段参照)ここに囊を賜はつた事は自然である。即ち長い旅程を前途に控へた甥御子に對しての御心遣ひである。(そして此の場合には御遠征

であるが故に、劍と共に賜うたのである。但し火急の事ある場合に其の口を解けと仰せられた所に、決して普通の品物が入つてゐるのではない事を想はしめる。それがやがて「御囊の口を解きあけて見たまへば、その裏に火打ぞ有りける」といふ力強い感歎的表現と相照應する所を見るべきである。

【なも】「なむ」に同じ。係の助詞。故に「ける」と連體形結。

【相武の國】サガムのクニ 古くはサガムとよんだ。國名等はよび方及び文字の上に少からざる變化がある。无邪志(武藏)、伊自牟(出雲)―古事記、上卷―等も其の一例。

【國の造】クニのミヤツコ 上代に一國を統治してゐた地方官。但しここは特に任ぜられたものでなく、その土地の主權を握つてゐた種族の長をさす。

ミヤツコは「御家つ子」「御奴」で御臣の意であり、即ち地方に在つて藩屏たるの謂である。國造とは姓で即ち今の爵の如きものに相當する。臣・連が朝臣に賜はる姓であるに反し、尙ほ地方官に賜はるものには君・直・稻置・村主等がある。

【野】ヌ 焼津の野をさす。後世の「の」に當る所に「怒」の文字が使用されてゐるので、例へば次の後の歌「相模の小野」は原文「佐賀牟能哀怒適」である―「野中」も

が後方へ廻る心組であるから我は機先を制して自ら後方の草を焼いて後方の敵を逐けるのである(守都)との説を共に實情に適合しないとして、今でも北海道では折々山火事があるので、風下に適當な距離を置いて木を切り草をなぎ、細い野火止の線を作つて、風上の方の側に、火をつける事を實行してゐる。初は火勢が弱いから、細い道を越えて風下へ火が移る心配もないが、だんだん盛になる頃には、野火止が廣くなつてゐるから、もはや風下は安全地帯となる。單に野火止だけで向火を付ける事を知らぬと、折角の野火止も往々にして無効になる。昔は森林原野も多く時々此の様な場合に出會ふので、人々をよく其の道理を理解して居たのであらう(喜多博士)。又「聞く所によれば迎火なるものは現今アメリカに於ける印度種族などが實行する所で、アメリカの大平原にて野火がその附近に迫るを見れば、彼等は其の立てる所に更に火を放ち却つて此方から野を焼き擴げ、以て其の危難を免かるゝ事を得るのであると。さればこの傳説は蝦夷人等が野火に遭遇した場合に實行した事が、日本武尊に附會せるものであるまいか(黒板博士)の二説は最も實際に適合するものかどうかはと述べてある。アイヌ人より出でたものかどうかはと述べて、當時の野戦の片鱗が尊の傳説にあらはれてゐるものと見られる。

「ヌの中に」と訓む。

【ちはやぶる神】暴威を逞しうする神。チハヤブルはイチハヤブル(稜威速振)の頭音の略されたものと言はれる。或は「最速ぶる」とも言ふ。何れにしても威力ある神(轉じて社・人)の枕詞である。

【見そなはしに】御覽になる爲に。「みそなはず」は見るの敬語。

【欺かえぬ】欺かれたの意。欺かえぬと分れる。「え」はえ・え・ゆ・ゆる・ゆれと、ヤ行下二段活用 of 助動詞、上代にのみ行はれたもの。今も熟語の中にその名残を止めてゐる。例へば所謂「あらゆるの如き。平安以後の「る」に當る。ここは勿論その連用形。

【火打】ヒウチ 火打石と火打金とを打合せて火を打ち出す道具。當時の旅に於て最も緊要なるものの一は火であつたであらう。それを囊中に見出した歡喜を思ふべきである。それが特に此の場合には後述の如く敵を滅する資料ともなつたのである。(景行紀四十年十月、「以燈出火之、向燒而得免」)

【向火】ムカヒビ 焼けて来る火に對して此方からも火をかけること。

「新講」に焼けて来る火に對し此方からも火を放つ時は彼方の火力は弱る(記傳)とか、敵が火を放つたのは我

【焼津】ヤイツ 位置は頭註の通りである。先に相武の國とあつてここに現在の駿河國の地名が出てゐるので一寸地理的錯誤かとも思はれる。然し本文三〇頁最初の頭註によつて一應の説明もつくし、尙ほ喜多博士は、もと相模に焼津があり、尊の野火の故事を傳へてゐたが、駿河にも同地名がある所から、そこに同じ話を傳へ、後には相模の方が忘れられて駿河だけが残つたものかと言ふ。一考すべき説である。と言ふのはこれは後出の多くの例の通り、地名附會説話的の味を多分に持つてゐるからである。偶然同一地名なる爲に、他の傳説も附會された所も多々ある事であらう。尙ほ焼津には日本武尊を祀る延喜式焼津神社がある。

序に日本武尊の故事に基づく古祠を見ると、駿河國には益頭郡焼津神社(今の志太郡焼津村入江明神是なり)有度郡草薙神社(今は安倍郡たり、廬原(今廬原と書く)郡久佐奈岐神社(今の庵原村大字草谷の東、草薙明神是なり)及び相模國に愛甲郡小野神社(今小野の閑香明神是なるべしと言ふ)がある。

【それより入りいでまして】相模の國より更にお進みになられて。「いでます」はここは「出る」の敬語。その他「行幸遊ばさる」意がある。

いでまして還ります日なしときく

今日のみゆきにあふぞかなしき(乃木大將)

【走水の海】 ハシリミツのウミ 相模と對岸安房との間の浦賀海峡。

紀に馳水とある。東京灣の潮流急なる所なるを以て得た名であらう。

【わたりの神】 わたし、(わたし場)を主宰してゐる神。上代人は山川湖海すべて其處を掌る神がお出になると考へてゐた。故に浪立つ事はその渡の神の仕業と思惟するのである。

【たゆたひて】 ゆらくゆれて。紀に「王船漂蕩」とある。たゆたふ(四活)は別に精神上のタメラフ、何レトモ決セズの意もある。

【え進み渡りまさす】 進み渡りまし得ずの意。

【后】 キサキ 命を天皇に準じて其の妃も后としたものである。

【弟橋比賣命】 オトタチバナヒメノミコト 紀に「時に從ひまつる妾有り、弟橋媛と曰ふ。穗積忍山宿禰の女なり」とある。陣中に妻女を伴ふことは上代に珍しくない。「あれ」 われの意。上代自稱代名詞は「あ」「あれ」「わ」「われ」である。

【入りなむ】 入りませう。入りなむと分れ「な」は完了「ぬ」の未然形、所謂「なむ」は未來完了であるが、殆ど

よ。「は」、「も」共に詠歎の助辭。第五句にこめられた深き感動の情を思ふべきである。尙ほ古事記に於ける歌謡記載法を知る一参考のために原文を次に引用しておく。「佐泥佐斯。佐賀牟能哀怒邇。毛由流肥能。本那迦邇多知五。斗比斯岐美波母。」

【七日ありて】 七日過ぎて、七日を経て。

【海邊に依りたりき】 波で打ち寄せられ、打ち上げられたのである。

【御墓】 ミハカ 相模國中郡山西村に吾妻神社ありて橋比賣命の御陵であると傳へてゐる。尙ほ浦賀町走水に同比賣命を祀る走水神社がある。原文「御陵」とある、前出「后」の語と併せ考へる事が出来る。

【蝦夷】 エミシ アイヌをさす。但し語源は明らかでない。(大言海には「えみし」は「能不見」の義とし嫌はしくして見ることを欲せぬ意なるべしと云つてゐるが如何であらう。「えびす」も「えぞ」もその轉じたものと簡單に片附けてある。)尙ほエゾとの關係についても議論がある。(エビス―エミス―エミシの一詳は音聲學上から容易に説明が出来るが。)

金田一京助氏著國語音韻序文参照。

さて當時の蝦夷については紀に次の記載がある。「東夷の中、日高見國有り。其の國人男女並に椎結身を

「入らん」に同意。

【まけのまつりごと】 任命された務。原文「所遺之政」まく(下二)任、鄙の官に任じて往かしむ。

【まけ(名)任、任くる事、鄙の官に往かしむること。まつりごと】、こゝは君主の御政治そのものを申すのではなく、その任せられた一部分の任務をいふ。

【かへりごと】 使者が先方より答を受け、歸つて申すことば。復命すること。原文「覆奏」。

【菅疊・皮疊・繩疊】 菅、皮、絹にて編んだ敷物。何れも材料による名。「たゞみ」はすべて敷物の總稱。「繩」音「シ」ムツギ(紬)なり。「あしぎぬ」とも訓んだ。

【さねさし、の歌】 相模の小野の燃え盛る火中に在られながらも數ならぬ我が身をお心にかけ下され、無事であるかと辱くもお尋ね下さつた慈しみ深き我が背の君よ。(その優しい御心は永く忘れ得ません、あゝ慕はしい夫君よ)

【さねさし】 相模の枕詞。其の語意について諸説あるが確説と思はれるものはない。唯さねさしさがむと所謂頭韻(aliteration)をふみ音調の美を具へたるを見るべきである。

【小野】 焼津の項参照。

【問ひし君はも】、私を御心配下さつて、かの切迫した際にもなほ無事か否かをお問ひ下さつた君よ、おゝその君

文けて、人と爲り勇悍し。是を總べて蝦夷と曰ふ。(景行紀廿七年)

「東夷の中に、蝦夷是れ尤も強し。男女交居て父子別無し。冬は則ち穴に宿、夏は則ち樵に住む。毛を衣、血を飲みて、昆弟相疑ひ、山に登ること飛禽の如く、草を行ること走獸の如し。恩を承けては則ち忘れ、怨を見ては必ず報ゆ、是を以て箭を頭鬢に藏め、刀を衣の中に佩けり。或は黨類を聚めて邊界を犯し、或は農桑を伺ひ以て人民を略む。撃てば則ち草に隠れ、追へば則ち山に入る。故れ往古以來未だ王化に染はず。(景行紀四十年)

【粮】 カレヒ 乾飯の略言。旅に携帯するため飯を乾したものを。「皆人餉の上に涙落してほとびにけり(卷九、七〇頁―伊勢物語)

【きこしめす】 おあがりになる、食せられる。

【きこす】 聞かす(↓聞こす)でお聞きになる意が原義。「す」は例の敬意の助動詞。「めす」については先述。

【鹿】 カ 鹿の古語、古くは牡を「しか」と言ひ、牝を「めか」と言つた。今牡牝通じて「しか」と言ふ。ここに「白き鹿」と言ふのは坂の神の化りたるもので、即ち普通の鹿にあらざる事を暗に示すのである。

【咋のこり】 ミヲシのこり めしあがられた残り。「み」は敬意の接頭語、「をす」は「食す」めしあがられる)の連

用形。

「昨」音^{サク}シャク (一) 大なる聲。(二) 啖^{ウチ}ふ意。

【蒜】ヒル 野蒜(根蒜)の異名。山野に自生し食用となる。葉は平行脈ありて細長く長さ五〇糧位に達する。臭味はネギ、ニラ等に似てゐる。夏季白色の小花を附す。地下に鱗莖があり、其の形は殆ど「らつきよう」に似てゐる。

【その目に中りて云々】鹿の目に當つて殺されてしまつた。ここに蒜が出て来たのは當時旅にあつて野蒜を食する事が行はれたのではあるまいか。尙書紀に「以ニ一箇蒜^ニ彈^ニ白鹿^ニ則^ニ中^ニ眼^ニ而^ニ殺^レ之^トとある。蒜を目に當てて殺した事は少しく大仰に聞えるが、元來蒜は葱屬で臭味があつて目にしみる。(蒜の語源は「疼らく」と言ふ)その日常の經驗を反映してゐるものと思ふ。

【ねもごろに】ねんごろに(懇に)の古語。しみじみとの意。(nemogoroni→nengoroni)原文「三歎」。

【あづまはや】吾妻はやの義。あゝいと我が妻よ、の意。「は」「や」共に感動の助詞、御身代として入水された弟橋姫に對し深い追慕愛憐の情を表されたものである。

【あづま】は東、東國、東方國。但し「あづま」は彼端の義で、「あちらの果ての方、」即ち近畿より東國を指したものである。(時代により「あづま」の語の示す地域には廣

狹がある)それを倭建命の故事に基づくやうに述べてゐるのは、後出の例と同様、地名起源の説明説話である。

【その國より越えて】相模の國から足柄峠を越えて。

【酒折宮】サカヲリノミヤ 甲府市より東一軒の所に酒折八幡宮あり、それを宮跡とする。

【にひばり、の歌】「新治・筑波の地方を過ぎて既に幾夜寝たであらうか。御東征の途中、はるばると經て來られた道中をしみじみと回顧されて、しばし御追懐に耽けられたのである。

「にひばり」(一)常陸國に新治郡の新治郷があるので地名とする説と、(二)別に筑波(同國筑波郡筑波郷あり)の枕詞とする説とある。今は(一)に従つておく。何れにしても「新治」は「新墾」の意である。

「幾夜か寝つる」は「幾夜寝つるか」の意、「か」は疑問の助詞。上に置かれたため下を連體形で結んだ。幾日と言はず幾夜と詠まれた所に素朴的な味はひがあると思ふ。

今に子供は「お父さんいくつねたらお正月がくるの？」などと言ふ。

いくつねて春はくるやと父母に問ひし昔もありにしものを(佐久良東雄、十四歳の時の歌)

御垣守衛士の焼く火の夜は燃えて晝は消えつゝ物をこそ思へ(詞花、卷七、大中臣能宣朝臣)

【御歌をつぎて】命の御歌を受けて、それに答へて、續けて。

【かどなべて、の歌】「毎日毎日と日は重つて、既に夜は九夜日には十日を經ましたよ。」

【かど】は日日(三日、五日、或は曆(日讀み))「なべて」は並べて、重ねて。

「を」感動の助詞。もう十日も經つたので御座いますよ。さて此の唱和が連歌の始と稱せられてゐる。(但し實際は萬葉集の卷八、尼と家持との唱和を以てするのが適切)故に、連歌道を筑波の道と稱し其の集の名にも次の如きものがある。

菟玖波集(二條良基)——准勅撰
新撰菟玖波集(飯尾宗祇)

(大筑波集(山崎宗鑑))

【東の國の造にぞなし給ひける】書紀に「乘燭人の聰きことを美めたまひて敦く賞みたまふ」とある位が無難であらう。(國造にしたとは餘りに仰々しい)

【科野の國云々】シナヌのクニ 科野は信濃、即ち甲斐の國より信濃へ進まれ、更に惠那嶽の下(木曾路開通前の唯一の道)を経て美濃に出られ、更に進んで尾張に入ら

れた。ここに「尾張に還り來まして」とあるのは本文に省略された部分の次の記述に照應するものである。(二九頁十一行「故」と「東の國」との間に省略がある)

「故、尾張の國に到りまして、尾張國造の祖、美夜受比賣の家に入りまじき。乃婚さむと思ほしかどもまた還り上りたらむ時にこそ婚さめと思ほして、契り置きて、云云。」

尙ほ原文は「還り來まして」の次に「先に期りおかしし美夜受比賣の許に入りまじき。云々」と續いてゐるのであるが、その何れもが本文にはないために一寸解しにくいかと思ふ。

【美夜受比賣】ミヤズヒメ 古事記の方の記載は直前引用の通りであるが、紀には「尾張氏の女宮簀媛を娶りて」とある。

【劍を美夜受比賣の許に置きて】何故に置いて行かれたかは次の命の御詞によりて明白である。

【伊服岐】イブキ 今の伊吹山。紀に「膽吹山」とある。

【徒手】ムナデ から(空)手、素手、空拳。兵器を持たぬこと。

【直に】タダに ぢかに、直接に。即ち武器の力などを借りず兩手で直々にの意。

【白き猪逢へり】白い猪に逢つたの意。宣長は「雅語には

【爾とは言はざる例なり】として此の如く訓じたのである。此の白猪は山の神の化したるもの。

【猪】は「みのしし」の略である。元來上古に於てはすべて肉（しし）を賞美すべき獸は皆「しし」であつて、其中區別する時は或は「みのしし」「かのしし」（鹿）「かもしし」（麝鹿）と呼び、略しては「み」「か」等と言ふ。尙ほ紀には「山の神大蛇に化りて道に當れり」とある。

【言學】コトアゲ 特に口に出して言ひ立てること。廣言すること。紀に「揚言」「興言」の字を使つてゐる。さてここに言學されたために命はうち惑はされたのであるがそれは何故であらうか。萬葉集に（卷十三）

○） 葦原の 水穂の國は 神ながら 言學せぬ國（三二五）

の如く我が國は「神ながら言學せぬ」國である。即ち神意のまゝに隨從する所に我が國體の特質がある。然るに命は今揚言され神意にさからはれたのである。ここに神に對して言學すれば必ず災禍を蒙るもの、故に言學は忌むべきものなりと、神國なる我が國體の特質上より上代人には考へられてゐたと見るべきである。尙ほ「うち惑はしまつりき」の註に

此化_二白猪_一者。非_二其神之使者_一。當_二其神之正身_一。因_二言學_一見_レ惑也。

とある。但し萬葉集の 千萬の軍なりとも言學せずとりて來ぬべき男とぞ思ふ（卷六）

の如き用例に於ては、全く文字通り「かれこれ騒がずに」「言立てて騒ぐことなしに」の意である。故に此が「言學」の謂はば原義であらう。

【神の使者】 八幡宮の鳩、春日の鹿、山王社の猿、稻荷の狐、或は何神社の白蛇等を以て夫々その神の使者と考へる考へ方である。所謂動物崇拜の思想の表れである。ここに白き猪と言ひ、又その大きき牛の如くなりと言ふ所に、既に尋常の猪ならざるを匂はせてゐる。

【水雨】 ヒサメ 雹に同じ。ひさめ（大雨・甚雨）の方は音同じくして意は異なる。これは直雨の轉ならんと言ふ。

【うち惑はしまつりき】 正氣を失はしまつりしたの意。次の「寤めまじき」と照應。「失意けて醉へる如し」（紀）

【玉倉部の清水】 場所は頭註の通り。久米博士の説に、魂座部の義で命の御名代部として名づけられたものかと言ふ。果して然らば、その清水に於て命の御魂が其の座（物の存在する位置——鞍、倉、位）に戻られた意とならう。何れにしてもこれも例の地名説明説話で、其の地の清冽

なる清水は偶で休息するもの誰でもを自覺めさせる位の爽快さを有してゐる泉なのであらう。近江國坂田郡醒が井の地名が、既にその間の消息を語つてゐる様であり、而も其處にも居宿の清水の古跡を傳へてゐるとの事であるから、益々かく考へる事の妥當なるを感ずるのである。

【發たして】 御出發になられて。「し」は上述の通り。

【當藝野の上】 タギヌのウへ。「上」は、あたり、ほとりの意。「川の上」「野の上」「井の上」

【虚よりも】 ソラよりも 大空をも。「虚」は大空、虚空。「より」は「を」に當る。大空さへも高く飛んで行ける様に考へてゐたと言ふ意は、即ち元氣充滿渾身唯心の儘であつた事を述べられたもの。俗に素速く行つた事を「とんで行つた」などと言ふ。

【當藝斯】 タギシ 船尾の舵を言ふ。和名抄に舵をタイシと讀んである。音便である。尙ほ常陸風土記に「車所經_レ之道狭地深淺。取_二惡路之義_一。謂_二之當麻_一。俗曰多支多支斯。」

【つかして】 おつきになつて。「し」は例の敬語。

【やゝに】 ゆる／＼と、徐にそろ／＼と。「ヤウヤウ」（漸く）は「ヤヤ」（稍）の變化したるもの。故にやうやうやつと歩く程度の歩き方。

【尾津のさき】 ヲツのさき 延喜式尾津神社の所在地。今の多度村・古濱村は合せて尾津郷である。

【一つ松】 一本松。古濱村と戸津村との間に在る八劍宮は前記の尾津神社で、そこに劍掛松の跡といふのを傳へてゐると言ふ。

【先に御食せし時】 前に御東征の往路の際食し給うた時。古事記には別に記載はないが、「紀」に「昔に日本武尊東に向ましし歳、尾津濱に停まりて進食す。是の時一の劍を解きて松の下に置き、遂に忘れて去ましき。」とある。尙ほみをしせしと分れ、「せ」はサ變「す」の未然形。

【忘らしたりし】 お忘れになられてあつた。忘らしたりしと分れ、前の「し」は例の敬語、後のは勿論過去の「き」の連體形。

【尾張に、の歌】 尾張の國の方に眞正面（直）に向つてゐる尾津の崎の一本松よ。なつかしい松よ。よくも私が忘れた劍をそのまゝ今迄保つてゐてくれた。若しお前が人であるなら太刀も佩かせように、著物も著せてやらうに。なつかしい一本松よ。

「たゞに向へる」まともに向つてゐる意であるが、尾張にと言ふ所に宮辭媛を偲ばれる情も言外にふくまれてゐるのである。

「吾兄を」「を」は「よ」に同じ、我が兄よと親しく呼びかけられたのである。一つは嘗て往路に忘れられた劍を護つてゐた様にも思はれ、一つにはなつかしい尾張の

宮酢媛の方にまともに向つてゐるからである。但し此等は何れも言外の意で、此の御歌だけを獨立して味はふ時は、單に枝ぶりよき松を愛でられた純然たる敘景歌と見られるのである。紀には「あせを」の所が「あはれ」とあるので「あせを」を拍子の言葉と見る説もある。尙ほ紀には終の、「一つ松あせを」はない。

「人にありせば」もし人であるならば（事實人ではないのだが）「せ」は過去の「き」の未然形。「まし」は推量の助動詞と言ふけれども、詳しくは現實に反する假定の結びとして用ひられるのが原義である。

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせばさめさらましを。（古今、十二、小野小町）

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。（古今、一、在原業平）

「を」は感動の助詞。但し「その八重垣を」などの用法とは異なり太刀を佩かせたいんだがなあ（事實人ではなく松だからさうも出来なくて残念だ）の意で、今「さう前から分つてゐたのなら、話して呉ればよかつたものを、黙つてゐるものだから」などと用ひるのと同様である。

【野煩野】ノボヌ 廣野であるが、地勢が西北に向つて漸く高くなつてゐるので、登野の義であらうと言ふ。（守部稜威言別）

重くして歸國し兼ぬると思はれるが、大和の國へ歸つたなら、あの平群の山の熊檻の葉を手折つて挿頭にして楽しむがよいぞ、なあお前達。

「またけむ」全くあらむ、(matakuaran→matakarun→mataken) (よくあらむ→よからむ→よけん。あしくあらむ→あしからむ→あしけむの如きである。) 即ち達者な者。

【たゝみごも】疊薦の意、「へ」の枕詞、其の由来には兩説あるが何れも妥當とは思はれない。

「熊白禱」、葉の繁つた檜（熊）は大の義、熊蜂・熊笹・熊鷹、尙ほ「葉廣熊白禱」と言ふ語が古事記中巻にある。

「かし」は櫛が本字、櫛は國字、櫛（本義は柄）は我が特訓であり、櫛は廣く剛き木を言ふ。「白」は樹皮の色をよつたものであらう。何れにしても白禱は借字。

「うすにさせ」「うす」とは後世の挿頭である。古くより我が國人は植物を手折つてかざしにしたのである。

「天の眞析を豎として」（古事記、天鈿女命）
「もゝしきの大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮しつ」（新古今集、二、山部赤人）うすとしてさせの意。

「その子」、おいお前達よ。從者達よの意。

【はしけやし、の歌】あゝなつかしい、あれあの様に我が家の方から雲がもくもくと湧いて来るよ。「はしけやし」

【國思ばして】クニシヌばして 故山（ここは大和）を戀しく思召されて。「國」は故郷・ふるさとの意。今「此の休暇には國へ歸ります」とか「これは國から送つて来たものです」等と使用する意の「國」である。御病重らせらるゝにつれて一入望郷の念を増されたのである。

【大和は、の歌】我が故郷の大和は丁度國の中央の平地で、恰も青い垣根の如く周圍に重り合ふ山々に抱かれてゐる大和の國は、眞に愛すべきなつかしい國である。

「國のまほろば」、國（ここは廣く其の地方の意）の中央の平地、即ち盆地の如く中心が空虚になつて地勢の開けてゐる土地。「ま」は接頭語「ほろ」は洞である。「ば」に就いては「新講」に

紀に「まほろま」とあるので間の變化、従つて全體は「眞空虚間の義で四周青山に圍まれた大和平野を指して言ふのである。」とある。

「たたなづく（自、四）古語、たたまり、重る。たたなりつくこと。

「青垣山」は緑濃く青々とした樹木を有し、しかも垣根の如く周圍をとりまいてゐる山。

「大和しうるはし」の「し」は強めの助詞。「うるはし」は美しく、なつかしい。

【命の、の御歌】命の無事なお前達は（自分は無念にも）

「はしきよし」に同じ、（紀にはハシキヨシとある）愛しと思ふよ、いとほしきかなの意。はし、はしき、はしけ、皆その變化である。「うるはし」は「うら（心）愛し」である、事等参照。

「よ」は「より」である。佐草賀波用（狭井河よりの意）—古事記中巻、抑々上古に於ける、所謂出發を表はす助詞には「よ」、「より」、「ゆ」、「ゆり」があつた。書紀には「ワギヘノカタユ」とある。

「雲居」は雲におなじ。もと雲居は雲のある所、即ち空の意で轉じては雲そのものをも指す。ここは勿論轉義の方。

【片歌】カタウタ 歌體の一名。三句より成る歌を言ふ。（五、七、七）上古多く問答に用ひられた。旋頭歌を折半した形式でその片方の五七七の形であることから得た名であると言ふ。（古事記傳）

【にはかになりぬ】原文「甚急」とある。危篤に陥られた意。

【をとめの、の歌】尾張の嬢女、宮酢媛の床のあたりに置いて来たあの劔よ、あゝあの劔が忘れられない。

「をとめ」宮酢媛をさす。

劔の太刀、ツルギとタチの重複の感がある。されど、もとツルギは吊佩の約故タチに對する修飾語となり、この「ツルギの」は原義的用法となる。萬葉に、卷二十、

四四六七「つるぎたちいよとぐべし古へゆさやけくおひて來にし其の名ぞ」がある。何れにしても伊吹山に登られる時に預けられた草薙劍をさす。
【神あがりましたぬ】 薨去遊ばされた。

「神あがる」原文「崩」。「あがる」は「上る」、即ち此の大地より其の靈魂が昇天される意。神は神々の動作につける語。神謀る。神集ふ。神去る。

2 文の構成

第一節 二六頁一行—三頁

1 倭建命の御系譜

第二節 二六頁四行—二八頁二行

1 熊曾建征伐の詔と御出發 (二六頁四行—八行)

2 熊曾建誅殺の次第 (二六頁九行—二七頁一〇行)

3 御名倭建命の由來と御歸路 (二七頁一〇行—二八頁二行)

第三節 二九頁一行—三三頁一〇行

1 御東征の詔と御出發及び伊勢の神宮御參拜と倭比賣命 (二九頁一行—二九頁二行)

2 相武國燒津に於ける御災禍 (二九頁二行—三〇頁一〇行)

3 走水の海に於ける弟橘比賣の御入水 (三〇頁一〇行—三一頁一〇行)

4 御歸路足利坂本の神降伏 (三二頁一〇行—三二頁五行)

5 甲斐酒折宮に於ける御唱和 (三二頁六行—三二頁二行)

6 科野尾張を経て伊服岐山の神平定 (三三頁一行—三三頁一行)

7 伊服岐山よりの御歸路(當藝野杖衝坂)と尾津のさきに於ける御歌 (三三頁二行—三四頁一〇行)

第四節 三四頁一行—終 熊野野に於ける國思の御歌と御薨去

3 文意

景行天皇の御代、東夷西戎の鎮撫に於て赫々たる偉勳を建て給うた倭建命の功業を傳へんとするにある。しかも單に剛膽勇猛なる英雄としてではなく、一面に情味溢るゝばかりの年少英雄として物語らうとするにある。故に必ずしも合理的なる史實たらん事を期するものではなく、或は構想到劇的要素を利用し、或は敘述に文學的表現を用ひ、更に首尾一貫以て一篇の敘事詩たらん事を期してゐる。殊に悲劇的なる御最後は讀者をして益々命を痛惜せしめずには措かない所を見るべきである。

4 鑑賞批評

先づ本分は二分して考へることが出来る。一は即ち熊襲の誅殺であり、一は御東征に關する種々の傳説である。而して前者がより統一ある秀れたる敘述なる事は直ちに感じ得られると思ふ。抑々前後兩説話共に、構想到其の用意周到さを見得るのであるが、特に前半に於ては全く一場の劇として成功してゐると謂ふべきである。即ち小碓命が特に選ばれて強賊平定に派遣された理由は其の「建く荒きみころ」の爲であるが、其の省略の部分に先に引用した通り、先づ兄大碓命との對比によつてそれを示してゐる。

次に「その御髮御額に結はせり」とて暗に年齢を示すと共に、やがて「御髮を童女の髪のごと梳り垂れ」に應じ、更に「倭比賣の御衣御裳を賜は」つた事も、劍を御懐に納れて「御出發なされた事も共に後の「童女」姿になる伏線、樂師誅戮の前提である。更に「倭建御子」の御名の由來を語る部分は少しくその眞實を疑ひつゝも猶ほ比較的自然に受けとれると思ふ。即ち西の方に於ける最強者と思ひ上つて、熊曾建と稱してゐたのが、始めて井底の蛙なる事に目覺め、其の傲

慢なる名を奉つて心から平服する様がよく表現されてゐる様に思ふ。「汝が命は誰にますぞ」の言との照應をも心して見るべきである。

「熟苺のごと振りさきて殺したまひき」の比譬は此の記特有の具象的表現の一例として注意したい。御歸路は僅かに數語によつて要領よく端折られてゐる。そこに主客精粗の巧妙なる筆づかひを見るのである。

次に後半の御東征に關する傳説であるが、是は種々なる傳説を、殊に地名起原の附會説話を多く有してゐる爲に、稍、印象は散漫に流れ弛緩するを感ずる。但し後半全體を通じて強く心に響く事はさしもの英雄も武運拙くして或は欺かれ、或は渡航に苦しみ、或は坂の神山の神に惱まされ、漸次其の勇猛さを失はれゆく同情すべき姿と、その間に點綴された御歌の中に溢れてゐる切々たる感情とである。かくて命に對する同情を高め、其の悲痛なる御最後を一層愛惜せしめるには成功してゐると考へられる。以下順序を追うて少しく味はつて見たいと思ふ。

さて此の度の御出發に於ても倭比賣命より劍と囊とを賜はつてゐる。その劍は例の熱田神宮の縁起に關係し、その囊については語釋の條に先述した通りである。これも伏線的前提としての用意である事が注意される。たゞ何故に常に倭比賣命より物を賜はつてゐるのであらうか。此の場合には重き使命を帯びて東方に出征されるに當り、皇祖神たる伊勢の大神の御加護を祈願した所、偶々當時齋宮である媛上から物を賜はつたのであるとも考へられる。然らば前回はどうか考へるべきであらうか。私は熊襲征伐の當時も明記してはないが、既に倭比賣命は齋宮として伊勢にお出になられたのではあるまいかと思ふ。(語釋同姫の項参照)果して然らば、遠く西邊に出征されるに當つて、伊勢大廟を拜して武運の長久を祈願される事は當然の事であるし更に伊勢に仕へ奉る媛上から衣・裳を賜はる事も至極自然の事となると思ふのである。次に副使御鉦友耳建日子は後に何等の記述なく、本文の前後照應する特質に對して、甚しく不釣合の感を抱かせる。命を語らんとするに急なる爲とでも考ふべきものであらうか。

次に焼津以下の傳説は、命の御東征に附會して或は當時の野戰の狀況を物語り、或は上古の風習人身供御の片鱗を示し、或は嶮岨な坂や山に對しての上代人の考方を物語つた點が多分にある事を否めないと思ふ。とにかく、思想的に文化史的に考察する方が一層興味深く感ぜられる事は事實である。唯弟橋比賣命御入水の物語は世にも悲壯な物語であつて、七日ありて後に云々の敘述は深く讀者の哀悼をそゝるものがある。「さねさし」の御歌はその所を得ない様に考へられるが、愈々背の君命の爲に、一命を犠牲にされようとした刹那に、生前最も夫君の眞情に感激した當時を追懷してお詠みになられたとも考へられないでもない。とまれ第五句に溢れる強き切々の情を見るべきである。

次に酒折宮に於ける御唱和は、全く素朴的な表現の中に、遙に辿り來し幾多の山河を夜の陣屋にしみじみと追懷される御眞情が溢れてゐると思ふ。

さて最後に「大和は」以下三首の歌であるが、御病愈々篤く御再起の望も失はれるにつれて、望郷の念一入禁じ難く、ひたすら國思ひ給うた御胸中は、か程の勇猛な命であらせられただけに、全く御同情の他はないのである。命の「またけむ人は」の御歌は雄々しくも亦悲痛なる御詠ではないか。尙ほ書紀に於ては、此の三首が景行帝十七年の條に、筑紫に於て同帝御親征中「京都を憶びたまひて」歌はれたものとされ、且つ「ハッキヨシ、……ヤマトハ……イノチノマタケンヒトハ……」の順序に一聯の長歌として掲げてある。然しこれは古事記の所傳の通りにして始めて其の歌が生動して來る事は勿論である。但し三首順序を換へれば一聯の長歌となる所は興味深いと思ふ。

三 備 考

1 指導研究

本課に於て讀解の支障となるものは第一に時代的の差である。即ち古言・古語に満たされてゐる事であり、且つ文體も

亦特異な點である。然し幸ひ内容の大半は生徒が既に歴史等に於て承知してゐるし、尙ほ文は所謂敘事詩とも謂ふべき文體であるから、ここを手懸りとして先づ反覆して音讀に音讀を重ねしめ、以て特異の韻律に親しましめる事が肝要である。

然して一々の語句註解作業に於ては、先づ教師が國語史的準備を十分に於て、或は當時の横斷的用例を示して、其の理解を明確ならしめる事が緊要であるは勿論、更にそれにも増して大切な事は生徒に興味を感じしめ、單に何千年前の古言・古語所謂死語の語義註釋に努めてゐると云ふ、無味乾燥な心を捨てて、眞に生徒自身が現に使用してゐる、血の通つてゐる現代語の祖先を讀み明らかにするのだと云ふ感を抱かせる様に努める事なくてはならぬ。生徒の既に學習した所謂文法は中古語が規範とされてゐるが、それと上古の國語との間に如何なる相違が存し、或は今現に本課に出てゐる極めて一見特種な國語と思はれるものが、實は平安朝以後も熟語の中に其の古形を存し、或は僅少なる語形、又は語義上の變化を経ながらも、現在に至つてゐる事等を發見すれば、如何に生徒は親愛の情を湧起させるか想像に難くないのである。かくてとかく既に死語となつた我々とは極めて縁の薄い國語、従つて其の訓讀も亦極めて蠟を嚼む様な味氣ないものとなり勝な古典學習をして生氣あらしめる事が可能なものではなからうか。とまれ單に古代語として何千年もの時間的距離を有する國語として、現代と切り離れた孤立的な姿に於ける取扱は努めて避けるべきである。常に歴史的變化に留意し、縦の連絡を考慮しつゝ進行する事が望ましい。そこに國語の時の流れに沿つて生動する姿を理解せしめ、音聲學・言語學・國語學等の簡易な理法にも觸れしめる事も可能となり、國語そのものに對する一層深き理解を來し、且つ親愛の情をも涵養し得るであらう。

後半の敘述に於ては、命を中心とする人間的情感である。溢るゝばかりの人間味に對し共鳴共感を抱かしめる事が肝要である。かくて何千年と云ふ時間的距離を有する古代人も其の性情情感に於て何等生徒自身と變る事なきを悟り、やがては古代文學愛好へと進展する事も可能となるであらう。特に本課に於ては、年少よく東夷西戎の膺懲に輝ける偉勳を建て

給うた、鬼をもひしぐ勇猛なる命の、他の一面の性情に共鳴共感する事が、即ち本教材を眞に了得する事なのであるから、是非後半の目標はここに置かなければならぬのである。

全課を通じて展開する事件の中に見られる種々な事物或は敘述的説明、歌謠等、中には不可解不合理なものがないでもない。然し是等は何れも慎重なる取扱が必要である。かく敘述されてゐる所以を先づ十分に考へなければならぬ。其の記述からして、上代人の思想を風習を文化を想像して見る様な態度に出るべきである。かくの如く思想的文化的考察を進める事が古典に對して忠實なる所以であり、古文學を尊重する所以である。そこに又汲めども盡きぬ味はひが存するのである。とまれ生徒をして以上の様な眼を開かしめる事に意を用ふべきであると思ふ。

2 参考

御東征圖に就いて

御東征の順路については記・紀の間に異同があり繁簡の差がある。記に於ける記事は本文の通りで（教科書三一頁）走水の海以後は單に「それより入りいでまして悉に荒ぶる蝦夷どもをことむけ、また山河の荒ぶる神どもをやはして」後直ちに「還り上ります時」の記述となつてゐる。然るに紀の方は以下の通り詳細な順路が示されてゐる。

「馳水……爰に日本武尊則ち上總より轉りて陸奥國に入りたまふ。時に大なる鏡を玉の船に懸けて、海路より葦浦（銚子か一筆者註以下同じ）に廻り、横に玉浦（宮城縣名取郡）を渡りて蝦夷の境に至る。蝦夷の賊首、島津神、國津神等、竹水門（多賀、鹽釜浦）に屯みて距がんと欲す。……蝦夷既に平ぎ日高見國より還り、西南のかた常陸を経て甲斐國に至りて酒折宮に居ます、……是に於て日本武尊曰く、蝦夷の凶首成な其の幸に伏しぬ。唯信濃、越國頗る未だ化に従はず。則ち甲斐より北のかた武藏、上野を轉り歷て西のかた碓日坂に建ります……」（傍線は筆者）

とあつて、「吾孺はや」の詠は碓日坂（碓氷峠）に於けるものとなつてゐる。其の後吉備武彦を越國に遣はし、後に美濃にて相會す（尊

は信濃に入られ、白き鹿の説話と進んでゐるのである。

省略の部分に就いて

- 1、二六頁三行命の御系譜の次に、更に詳細なる系譜と三野國兄比賣弟比賣の説話、及び先に引用した(「建く荒き情」の條参照)大碓命と小碓命との物語が省略されてゐる。
- 2、二八頁最後の行の次に、原文には「雲建を誅殺し給うた記事がある。
- 3、二九頁一二行「故」と「東の國」との間には次の記述が原文にある。
「尾張の國に到りまして、尾張國造の祖美夜受比賣の家に入りまじき。乃婚さむと思ほししかども、また還り上りたらん時にこそ婚さめと思ほして契り置きて」
- 4、三三頁二行、尾張の國に還り先に契りおかれた美夜受比賣の許に入られ、月經についての御唱和がある。

さて御崩御後の記事の大意を見るに、先づ驛使が上せられると早速后達御子達が驚いてお下りになり、所謂能美野陵を作られ、且つ哀傷の御歌を残されてゐる。さて命の靈魂は八尋白智鳥となりて天翔けられ遂に河内の志幾に留まられ、所謂白鳥の御陵に葬られる事となるのである。

参考文献

○古本

古寫本中現存する最古の完本は「眞福寺本(三卷)」であつて、名古屋市眞福寺(大須觀音)に傳來してゐる。國寶で古典保存會複製本がある。北朝の應安四年五年僧賢瑜の寫したものであるが、文永三年(鎌倉初期)の轉寫本故約七百年前の面目を存するわけである。

○訓本

全部に訓を施した最古の刊本は「寛永本」三卷である。(寛永二十一年刊)

次に度會延佳の「鼈頭古事記」三卷、「貞享四年出版」—延佳本と云ふ。

次に最も廣く行はれるものは宣長の門人が師の訓を訂正刊行した「訂正古訓古事記」(三卷)(享和三年刊)である。

その他田中頼庸博士の校訂古事記(明治十四年刊)―(田中校訂本と云はる。)&及び三矢重松博士の「古事記に於ける特殊なる訓法の研究」(大正十四年)が注意すべきものである。

○註釋書

古事記傳 宣長三十五年の心血を濺いで漸く完結したもので今尙ほ註釋書の筆頭である事は云ふ迄もない。その主要なるもの普遍的なるものを挙げれば次の通りである。

古事記標註	七册	明治一	敷田年治
傳略	十二卷	明治一六	吉岡徳明
新講	一卷	大正一三	次田潤
概説	一卷	昭和四	田中義能
評釋	一卷	昭和五	中島悦次

その他古事記の解題としては安藤正次氏の「古事記解題」(世界聖典全集「古事記神代卷」所收)を注意すべく、津田左右吉氏の「古事記及日本書紀の新研究」は示唆に富む獨創的見解として参考するに足る。

尙ほ古語の語法等については次の如きものがある。

奈良朝 文法史	山田 孝雄
古代國語の研究	安藤 正次
國語史(上古篇)	佐伯 梅友

四 祝詞・宣命

祝詞

祈年祭祝詞

一 解題

1 作者

製作年代と共に作者は明らかではない。但だ延喜式第八卷の首の記述によれば、祈年祭の祝詞は中臣氏祝詞に屬するものである。

2 出典

延喜式第八卷 第一。

3 主眼及び採擇の趣旨

形式上に於ては、祭政一致なる我が國體の本質上、特異なる發達を示した神を祭る文學、所謂祝詞の何たるかをしらしめ、内容的には農本的國家なる我が國に於て、農作が如何に重大視され、隨つて其の豐作を祈請する祈年祭が、如何に莊嚴に取り扱はれたかを知らしめ、且つ上皇室に於かせられては、國家の安泰、生民の繁榮を如何に強く思召されたかを了得せしめ、更に併せては上代國民の思想性情意氣をも理解せしめるのが本課の趣旨である。

二 解釋

1 語釋

【祝詞】 ノリト 古くはノリトゴトと稱す。其の語源については宣長がノリトキゴトと言ふ説をなしてゐる。但し其の語義に關しては種々な異説が出されてゐる。例へば「祝詞新講」四頁、「祝詞の名義」の項参照。

【祈年祭】 本卷第二課、同項参照。

【集侍】 ウゴナはれる 貞觀儀式に「參集」讀曰三未爲宇とあるによれば、「集」はウゴナハル(終止形)であり、且つ其のもとにウゴナフであると考へられる。然して其のナフはウベナフ(諾一宜ナフ)、アキナフ(商一商(人)ナフ)等を参照するに語尾であつて、語義の中核はウゴである。さてウゴは袖中抄の説の如く、百千の人の正しく立ち並び、いと靜に群がりたるが、さすがに其頭の少しづつ動くさまをいへる詞にてウゴは動なり。」と解すべきであらう(森等の語參照)。故に集侍は九條家本の如く、一字一字を生かして「ウコナハリハベル」とよむか、或は「ウゴナハレル」と二字を合してよむべき事となる。(今は後者に由る)。然して其の意義は「齋庭に靜に多數參集せる云々」である。

【神主】 カムヌシ 神に奉仕する主者の義。禰宜・祝部の

上に立ち一切の神事を掌る者。上古は爲政者が神主となつた。上は天皇下は國造等。次に大化改新以來祭政分離し、地方に於ては國造は祭祀を司り、(即ち神主となる)國司・郡司は行政に與ることとなる。然し國造の自滅するにつれて、もとの如く行政官たる國司の兼掌となつた。その後中古になつて、始めて著名な神社に神主をおく事になり、遂に職名となる。

【祝部】 ハフリ 神主の下にありて祭祀を掌る者。祝とも記す。語原は(一)不祥・穢を放る。(二)牲を屠る。(三)羽振一起舞して神を樂しませる。(四)匍匐在など種々あるが不詳。

【諸】 モロモロ 集侍はれる神主祝部等をさす。

【聞し食せと宣る】 「聞し食せ」の語については第三課參照。「宣る」は言ひきかす。告ぐ意。しかして主語は中臣氏。この祝詞は形式は宣命であつて、神主や祝部に敕命を傳へ聞かせる形式になつてゐる。しかし、その内容は神主や祝部を相手としてゐるのでなくて、神祇に白す詞をば宣べてそれを神主・祝部に聞かせるのである。故に實際は、其の宣命の形式の部分を除いて始めて純然た

る祝詞の形になるのである。尙ほ左の如き割註がある事に注意。「神主祝部等共稱」即ち神主等は以上の祝詞が奏せられるとそれに答へて「おお（唯）」と稱するのである。而して文末が「稱辭竟奉久登白」の如き所謂奏上式のものでなく、本文の「諸聞食止宣」の如く宣命式の場合は常に「准此」意である。

【高天原】タカマのハラ 高き天上にある廣き所の意。即ち上代人の考からすれば、そこには神々がお住みになつてゐられたのである。

【神留り坐す】「ツマル」は文字の通り留る意。即ち國土に降臨された神に對する語。神は神々の動作につける敬意をふくむ接頭語。例へば「神去る」「神謀る」「神集ふ」等。

【皇陸】スメムツ「スメ」は統ぶる意。「ムツ」は陸じ、親しの意。故に天皇の親しき（皇祖神）と下へ續く形容の詞となる。

【神漏伎命神漏彌命】語義上は「ロ」が如何なる意であるか種々説があるが未定。「ギ」と「ミ」は言ふ迄もなく岐美二神に於けるが如く男女の意。次に男神・女神は然らば如何なる神を指すかと言ふに、これも亦説がわかれる。然し此處は高皇產靈神・神皇產靈神及び天照大神を始として、廣く高天原に坐す男女神をさすものと解したいと

の語原説あり。

【御年初め賜むとて】「年」は上述の通り特に稻をさす。故に稻作を始められようと言ふので。

【皇御孫命】「みま」はみまなご（御眞子）みまご（御孫）みま。誰方であられるかは頭註の通り、故に當帝の意となる。

【字豆の幣帛】「字豆」は記に「貴」、記に「珍」を讀んでゐる。貴重な珍奇なと言ふ美稱、（もとは名詞なれど本文の如き用法は形容詞的役割をなしてゐる）「みてぐら」は其の語原に就て敷説あれど定め難し。其の意は神に奉る物の總名である。天岩戸の段には布刀御幣として五百津眞賢木に鏡・玉・白和幣・青和幣を懸けた事が見える。其の後紙を神につける様な略式となる。今は紙を段々に切つたものを「みてぐら」「幣帛」と云ひ、紙を折つて竹に挟んだものを「幣束」「御幣」と言つてゐる。

【豊逆登】「豊」は美稱、「逆」は借用、「榮」、「盛」の意。故に朝日が花やかにさし登る曉に當つての意。

【稱辭竟へ奉らくと宣る】「稱辭竟へ奉る」は上述の如き意であるが、こゝは語原義的用法と見るべきである。「即ち朝日の豊逆登に」は副詞句故、文脈は字豆の幣帛から稱辭へ續く。故に幣帛についてあらゆる稱辭を盡し申すといふ事を宣る意である。

思ふ。尙問題は「命以ちて」である。これは「み言」即ち詔命に依つての意であるが、然らば上の「命」は尊稱である事は明白であるから、其の釣合上は下の方は「の命」を補はなければならぬ。それは多分語調の上から省かれたものであらう。

【天社國社】天つ神の社、國つ神の社の意。即ち天神地祇と言ふに同じ。天神とは天孫降臨以前高天原に現れ、しかも後に國土に天降りされました神、地祇とは始めから此の國土に坐した神である。さて延喜式によると祈年祭に頒幣に預る神社は全國の宮國幣社三千一百三十二座である。

【稱言竟へ奉る】「稱言」は稱讚稱美の辭。「竟へ」は「竟ふ」（下二段、他動）の變化。極め盡す、果す、遂ぐ意。「奉る」は敬意の助動詞的用法。故にあらゆる善言美辭を盡して神徳を稱讚し奉る意。然しこれは祝詞の慣用語であつて、こゝは全體として「祭り申す」意。

【皇神】「皇」は上述の通り。故に單に神の意で、こゝは天社國社の神々をさす事となる。

【白さく】普通「白す」の延言と説明されてゐるが、山田孝雄氏は場所・思想上の或る點を示す造語成分「く」が「白す」と云ふ動詞についたと見る。

【二月】キサラギ「衣更着」、「木・草・張月」、「萌搖月」等

【口語譯】「參集して並み居る神主祝部等御一同にお告げ申す。」

高天原に鎮り坐す諸々の男女神々達の御詔命によつて天社國社とお祭り申す神々の御前に申上げる事は、今年の二月に全國の農作をお始めなさるに際して、長くも天皇の尊き御幣帛を、朝日の花やかにさし登る曉に、種々稱言申してお供へ奉ると云ふ事をお告げ申す。

【御年の皇神】穀物を司る神の意であるが、宣長はある神社の祭神一人の意とした。然し下に「等」とあるので何神と言ふ事なしに、農業を營むに當つて關係ある神々全部をお指ししたと見たい。

【皇神等の依さし奉らむ】「皇神等」は神々の意。「依さし」は「依す」に「す」のついた敬語法、御委託なさる。故に神々達が天皇に對し奉つて御委託し申し上げた（稻）の意となる。

【奥津御年】おくて（晩）の穀物の意で、五穀の中で最後にみのる稻の事。

【手肱に水沫畫垂り】【向股に泥畫寄せ】對句をなしてゐる。共に並べ書して理解せしめるが便宜である。「手肱」は「テノヒヂ」即ち「肱」。「水沫」は「ミヅノアワ」で泡沫である。「畫き垂り」は接頭語かきと垂り（古く四段活用）、今の用法によればかき垂れ、

向股は兩股が向合つてゐるよりの稱。全體として農夫が水田に下り立つての勞役の様を敍べたもので、或は手を肱のあたりまで深く水の中に浸し、或は膝をも浸する泥土に兩股位迄も汚し」の意。

【取作らむ】 耕作致します所の（稻）の意。取は接頭語。さて文法上は「皇神等の依さし奉らむ奥津御年を」と「手肱に水沫晝垂り向股に泥晝寄せて取作らむ奥津御年を」とは同格にして、「寄さし奉らば」の客語である。

【八束穂の伊加志穂】 「八」は彌の意で、幾握りもの長穂。「伊加志」は「嚴穂」で大穂。故に「八束穂でありしかも嚴穂」即ち長大な房々とした立派な穂。

【寄さし奉らば】 「寄す」(古く他動四段)に「す」の合成。故にかくの如く皇神等が近かよらせなさるならば。上述の如き立派な穂がみゆる様にして下さいませうならば。

【初穂】 其の年にとれた最初の神に献る稻穂を言ふ。後には廣く神前に供へるもの。

【千類八百類】 千・八百は實際の數値でなく、多數の意である事は勿論である。類の字義はノギ、ホサキである。「かひ」は「かび」とも云ひ、「芽」及び多くは稻の穂に言ふ。

【臈の閉高知り】 【臈の腹滿て雙べ】 兩句は對になつてゐる。「臈」の「閉」は「臈の上」の略である。春日祭祝詞

【奥津藻菜・邊津藻菜】 奥と邊とは對す。沖と海邊である。藻菜は藻葉である。葉狀をなす海藻、ワカメ、アラメの類。これは海の陸よりの遠近によつて語を對さしめ、海草全般を意味する事となる。

【到るまでに】 「献り供へ」の如き語を補ふとよい。即ち野のもの云々、海のもの大小様々の魚、さては奥邊の藻菜に到るまで奉りの意、且つ尙ほと先に續く。

【御服】 「そ」は身に添ふ意かと言ふ。衣の敬語。こゝは御服の材料としては云々の意。

【明妙照妙和妙荒妙】 「妙」は借字。栲(楮の纖維で織つた帛の意が原義である。其の原料の緒は木綿と言ふ)は一般に織物の名。上代では麻・栲・纈等である。さて明・照は共に光澤に關してのべ、和と荒とは織地の種類に就ての語。四者合して種々の織物の意。尙ほ「に」の下に「到るまでに」を補ふべきである。

【御年の皇神】 此の段の初の方に複數になつてゐるのと比較すべきである。さて記によれば御年の神の系譜は次の通りである。

建速須佐之男命
大山津見神——神大市比賣
大年神
御年神
香用比賣
大年神、及び其の子御年神共に穀物特に稻の神である。

に「甕上高知り、甕復滿て並て」とあるによつて明白である。臈は「み甕」であつて、瓶の類。上古専ら酒を醸するに用ひしもの。高知り」は太知ると對にしてよく用ひられる語であつて、種々な意があるが、こゝは臈を高く太く造る意である。「臈の腹に滿て雙べ」はみかの中に、一杯に滿したものを數多く並べる意。

【汁にも類にも稱辭竟へ奉らむ】 「汁にも類にも」は上の御酒と稻穂とを重ねて稱した事は勿論であつて、汁の形に於ても類としても意。稱辭云云は單に奉獻致しませうの意。

【大野原】 畑を言ふ。野の大きな廣い場所の意。青海原に對す。

【甘菜辛菜】 「考」に菁菜・薺の類を甘菜。蘿蔔・野韭の類を辛菜と言ふとしてゐる。とにかく緒の廣物狭物に對して蔬菜全般を網羅し、且つ其の語自身が甘と辛と對をなして、一の修辭的效果を收めてゐる事に注意すべきである。

【緒の廣物緒の狭物】 「緒」を「ハタ」と言ふのは國語に於てハタハタするものは皆ハタである事に注意。旗・機・尙ほ「ヒレ」も領布と關係があるであらう。とにかく此の對をなす二語によつて、大小種々な魚類を總稱した事になる。(毛の荒物・毛の和物などの語参照)

【白き馬、白き猪、白き鶏】 御歳神を祭るに白猪・白馬・白鶏を以てする所以は古語拾遺末尾に傳説がある。さて此の部分は議論のある處である。

1、御年神は出雲神話に屬する神で、御年の皇神等とは別神、且つ「御年皇神の……備へ奉りて」は後日追加の部分である。

2、三種の白色動物を供進する起原は遠く印度支那の影響なる事。(詳細は祝詞新講八〇—八三頁)

【種々の色物】 如何なる意か異説があるが、こゝは御年の神に對して白馬以下のものと、種々の色物と見るべきと思ふ。

【口語譯】 「穀物を掌りなさいませう諸々の神々に申下げます事は、神々達が天皇に御委託し奉つてゐる稻、即ちあの農夫が水田に下り立つて、或は水に浸り、或は泥にまみれて勞作する稻を、長い大きな房々とした立派な稻穂にみおらして下さいませうならば、其の御返禮としては、秋の初穂をどつさり奉り、或は又御酒にも讓して、大きな高い太い甕に一杯に滿たして献りませう。又畑にあるものとしては、すべての蔬菜を、海のものとしては、大小種々な魚を、さては沖の藻や海邊の藻に至るまで奉り、神御衣としては、光澤のよい種々な布帛を献上しませう。特に御年神には、白馬・白猪・白鶏を始め、種

種な品物をとゝのへてお供へ申し、天皇の尊い幣帛として奉らせられると言ふ事を、一同にお告げ申します。」

【辭別きて】 特に改めての意、別くは古く四段活用。

【大前】 此の「大」も亦大御神に對する特別の敬意を示す。

【皇神】 こゝは天照大御神の意。

【見齋かす】 他動・四段活用。遙に見渡す、遠く見やる。みはらす。(日の神が天上から國土をの意)

【天壁立つ極、國の退立つ限】 二句對をなし、天地のはてはて迄の意。壁は垣の意。晴天に四方を見渡せば恰も青空が垣を立て廻らした如く見える所からの表現。下の立つは對をなす爲の添へ詞。「そく」は遠くはなれる意。退く、除く等の語參照。

【青雲の靄く極、白雲の墜居向伏す限】 青雲については青空と見るのが一般であるが、萬葉集新考には、青天に見える白雲(晴天のは青味を帯びたれば)と見てゐられるが、さうすればたなびくの語が自然に解せられる。

【墜居向伏す】は白雲が低く地の果てに向ひ伏してゐる様である。さて此の兩句は勿論對をなしてゐるが、更に考ふべき事は、青雲の句は上の天の壁立つに應じ、白雲は國の退立つと關聯してゐる事である。

【青海原は棹柁干さす】 棹柁干すとは休む意故、即ち休むことなく、絶間なくの意。

【舟の艫の至り留まる極】 和名抄によれば、艫和名開。艫

和語云度毛であるが、こゝはへさきの意に艫を用ひたのである。即ち舟の舳先が行き得る果(から貢物を遠く載せてくるのである)

【大海原に舟滿ち都都氣て】 大海全面に船がみち／＼、しかもそれが陸續と續いて。

【陸より往く道は】 (青海原は云々と對をなす)

今度は陸路によつて貢物を運ぶ様である。クガは土地の義の「ク」と、場所の意の「カ」の合成。

【荷の緒縛ひ堅めて】 貢物を入れた箱の緒を、遠路を控へてゐる爲に、しつかりと堅く結んで。

【磐根本根履み佐久彌て】 國語では「ね」は根本、「ほ」は上端。故に岩に例をとれば磐がね(又は磐根)及びいはほ(岩の秀一巖)となる。故に岩や地上に露出してゐる木の根をの意。次にふみさくむは難儀をしつつ進む、ふみわけの意。

【馬の爪の到り留まる限】 (船の艫云々と對をなす)馬蹄の到り得る陸路の限り。

【長路間無く立ち都都氣て】 (大海原以下と對をなす)

長い陸路、すきまもなく貢物を運ぶ馬が立ち並び、しかも續々と後から／＼續いて。

【狭き國は云々】 此の上に「又」を入れるとよい。狭い國

を廣くし、峻しい國を平らかにし、更に遠い國は……。」

【八十綱打掛けて引寄する事の如く】

遠い海外の國を多數の綱を打懸けて引き寄せ、如く「寄さしまつらば」とつゞく。三韓や支那の朝貢をのべたのである。出雲風土記國引の傳説によつてゐる事は勿論である。

【皇大御神の寄さし奉らば】

大御神が上述の如く四方の國を天皇に歸順(寄さす―お寄せになる)させなさるならば。

【荷前】 ノサキはニサキの轉、即ち諸國からの貢物の初物。

これを大神宮や諸陵へ奉つた。それが荷前の使である。もと神嘗祭に於てしたが、後に年末に奉る事となる。

【横山の如く】

山が横に伏してゐる如くたくさんつみ重ねて。

【残をば平らけく聞き看さむ】

大神宮や諸陵へ奉つた残を天皇がお上りになるであらう。平らけくは修飾の詞。

【手長の御代と】

手長は「足長」或は「た長」と見られるが前者をとる。「齋ひ奉り」に續く。

【堅磐に常磐に】 「カタイハ」に「トコイハ」にの約言。堅くして不變である岩の如く氷久に。(全體は副詞)

【齋ひ奉り】 忌み慎みて守護し奉り、(奉りは天皇への敬言)

【茂し御代に幸はへ奉る】

上の「手長の御代と(副詞ヲ含ム)齋ひ奉り」と對句。嚴し御代、盛大なる御代と幸あらしめ申す。(天皇に對して)

【皇吾睦神漏伎神漏彌命と】

皇睦の間に在る「吾」は「わが」の意で、親愛の情を示す。神漏伎云々は天照大神をさす。とは下「稱へ奉りて」と補ふべき所。

【字事物頸根衝き抜きて】

字は鶉、「じもの」については諸説あり。山田博士は日本文法論で、此の「じ」は状態を示して名詞を形容詞の資格に變ずる接尾語としてゐる。故に鶉の如く。頸は項參照。抜くは通す意であるが、こゝは衝くの強意の働があるであらう。さて、鶉が頸の根元迄水に深く衝き込む様に、頭を低く垂れて(神を敬す)意。

【口語譯】

特に改まつて伊勢の國に坐します天照大神の御前に申上げる事は、大御神が廣く遠くみ渡し給ふ天が下は、天のはるかにひろがる限り、大地の遠く續く限り、空は青雲のたなびく限り、地は白雲の低く垂れてゐる限り、海に

は舟が休むひまなく、漕ぎに漕いで行き得る限り、大海原一面に貢物の舟が充ち満ちて續き、陸には貢物の緒をしつかりと堅くしめて、岩根木の根をふみ分けて、馬の蹄の至り得るはてまでの遠方から、長い遠い路中す。まもなく貢物の馬を引き続ける様に、又狭い國は廣くし、峻しい國は平らかにし且つ遠い海外の國は多くの綱を打ちかけて引き寄せる様に、天が下全部を普く天皇に歸順させて下さいますならば、諸國からの貢物は其の初穂を

先づ大御神の御前に山の如くどつさりと積み供へて、其の残を天皇が平安に食し上がられるであります。そして天皇の御代を何事も足り満ちた御代として永久にゆるぎなくお護り申され、尊い盛代と榮えさせ申上げるから天皇の懐しい皇祖天照大神と稱へ申して、鶉が頸を深く根元まで水につき込む様に低く頭を垂れて、天皇がお供へ申す尊い幣帛を奉ると云ふ事を一同にお告げ申す。

2 文の構成

先づ祈年祭の祝詞の中本課採用の部分は其の一小部分である事に注意。

- 祈年祭祝詞
- 1、冒頭及び天社國社に申す詞
 - 2、御年の神に申す詞
 - 3、大御巫の祭る神に申す詞
 - 4、座摩の御巫の祭る神に申す詞
 - 5、御門
 - 6、生島
 - 7、辭別きて天照大神に申す詞
 - 8、御縣に坐す神に申す詞
 - 9、山口に
 - 10、水分に
 - 11、辭別きて神主祝部等に宣る詞

前半

第一節 (始より三六頁五行迄)

冒頭並びに天社國社に白す詞。

第二節 (三六頁六行より終迄)

御年の皇神等の前に白す詞。

後半

辭別きて伊勢に坐す天照大御神の大前に白す詞。

3 文意

今年の稻作を始めんとするに當り、早春二月、しかも朝日の豊逆登の時刻を期し、畏くも皇御孫命の宇豆の幣帛を奉獻して、農作の神であらせれる御年の皇神等に何卒八束穂の伊加志穂に豊らせ給へと祈り奉ると共に、更に特に辭を改めて皇祖神に對し奉り、國家の安泰隆昌を祈請する事が文の主眼である。

4 鑑賞批評

前半の冒頭に於ては、先づ思想上二つの注意すべき事が存在する。一つはあらゆる天神地祇の祭祀は、皆天神等の御詔命に基くものであると云ふ事である。即ち「高天原に神留り坐す皇陸神漏伎命・神漏彌命以ちて天社國社と稱辭竟へ奉る皇神等……」と述べられてゐるのがそれである。茲に祭祀の由來を明白にすると共に、其の尊嚴性をも示し、且つは聽者をして遠く神代に誘ひ、以て森嚴感を抱かしめる役割を果してゐるのである。次には農作は國家的の行事であつて、其の祭祀は畏くも天皇御自ら取り行はせられるものであると言ふ事を注意すべきである。我が國の古名を始め、種々の神話を併せ考へれば、太古より我が國は農本の國家である事が了得されるのである。即ち「今年二月に御年初め賜はむとして皇

御孫命の宇豆の幣帛を……稱辭竟へ奉らくと宣る。と言ふのが是である。

次に「朝日の豊逆登に」の語に注意したいと思ふ。時恰も早春二月初、しかも一日中の希望を藏する曉に當り、東天の旭光は恰も生々躍進を象徴するかの如き佳時に於てと言ふのは、此の祭祀の性質上、誠に適切なる時刻と言はなければならぬ。(大祓に於ける「今年の六月の晦の日の、夕日の降の大祓」の語参照) 辭句は簡にして、しかも其の意の深長なる、誠に見るに足ると思ふ。是と併稱さるべきは、次の「手肱に水沫垂り向股に泥畫寄せて」の表現である。二句互に對をなしてゐる事もさることながら、水田に下り立ち、泥土の中に營々勞作する様が、簡潔なる敘述の中に、實に巧に表されてゐると思ふ。

後半に於ける文に於て、先づ注意される事は、既に多くの諸家によつて指摘されてゐる通り、其の想の實に雄大無限なる點である。全く宇内を併呑したるが如き概があり、高大壯快の極地と謂ふべきであらう。大祓の祝詞と共に、上古の二大雄篇と併稱されるのも、亦故あるかなである。抱負の遠大なる、理想の高遠なる實に讚歎の外なく、我が上代國民の如何に生々發展の氣慨に燃え、進取躍動の意氣を抱いてゐたかを見るべきである。

前後兩篇を通じて、共に注意すべきは修辭的技巧である。最も著しい特徴は巧みなる對句の利用である。既に語釋の項に述べた通り、全篇殆んど對句を以てなると言ふも過言でない。かく列擧し、反覆し、對句を利用する事は、祝詞一般に見られる行文の特色であつて、そこに文をして雄大莊重ならしめ、且つ快美なる諧調を招來する因由が存するのである。而して上古人の能ふ限りの善言美辭を盡し、流暢なる文辭を求めた事は結局、祝詞其のものの本質に立脚しての結果に外ならない事を考ふべきである。即ち言靈によつて神意を和し、神々の冥加を祈請する所に祝詞の本質が存在するのであつ

て、宏言美辭、善言麗句の使用さるべきは、誠に當然なのである。換言すればそこに祝詞の生命があり本質が存するとも謂ひ得るのである。

三 備 考

1 指導研究

上代文學の一なる祝詞は、生徒との時間的距離が大である事は勿論であるが、更に注意すべきは、上代の所謂普通文ではなくて、特殊な使命を有する、神と共に、祭祀と共に發達した特殊な文學である事である。先づ之を明白にして學習させなければならぬ。故に本卷第二課(二十頁)に於ける祝詞の概説を中心として、適切なる補説をなし、更に祈年祭其のものについての概略的説明を経て本文に入るべきであらう。

古言古語に満ちた表現は、理解の障害ともならうが、全篇に流れる諧調の美を手がかりとして、音讀を反復せしめ、以て先づ其の文辭の流暢なるを感得せしめるがよいと思ふ。

辭句の解釋に當つては、よく其の表現の特質に鑑み、前後彼此の照應に注意せしめ、巧みなる措辭の技巧を、十分に理解せしめたいものである。

2 参考

祝詞・宣命の表記法は助辭を假名書きしてあつて、所謂宣命書と呼ばれ、後世の假名交り文の源流である故、今参考のために一部分の原文を次に示しておく。

集侍神主祝部等諸々聞食登宣。「神主祝部等共稱唯餘宣准此」高天原爾神留坐、皇睦神漏伎命・神漏彌命以、天社國社登稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、今年二月爾、御年初賜登爲而、皇御孫命能宇豆能幣帛乎、朝日能豊逆登爾、稱辭竟奉登宣。久宣。

次に、祝詞に關して述べられた左の藤岡博士の説は、此處に大なる關係を有してゐるから、参考のため引用する。

祝詞は普通文として取扱はるといへども、その用神意を悦ばすにあり、一種の諧音を有せしめて、壇前に朗讀せるものなれば、一に節調を主とす。この意味に於て和歌と距ること甚だ遠からず、たゞかれが備へたる如き律格を缺くのみ、即ちこれを散文詩と呼ぶ最も當れり。されば祝詞の長所は聲調の整へるにあり、聲調の美にして、思想の比較的に見るべきものなきは、上古文學を通じたる性質なりといへども、祝詞に於て殊に然りとす。その内容の長所を言へば、秋毫の包むなく、欺くなく、飾るなくして、天眞のまゝに感情の流露せることなるべし。されどさすがにこれも時代の産物なり、その神々に向ひて告ぐるにも、しかじかの供物を捧ぐるが故に、願はくは風雨時を違へざれ、年は豊かに、疫病の禍することなからんことをといへるなど、餘りに幼稚なりといはざるを得ず。行文また變化に乏しく、千篇一律の嫌なきにあらずといへども、譬喩の壯大にして氣魄の雄渾なるは、後世よくこれに及ぶものなし。祈年祭の詞に、

天の壁たつきはみ……………遠き國は八十綱うらかけて引きよすることごとく……………
といひ、また大祓の詞に、

科戸の風の天の八重雲を吹放つことの如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風・夕風の吹拂ふことの如く、大津邊に居る大船を舳とき放ち、櫓とき放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が下を燒鎌の敏鎌もて打拂ふことの如く……………

といへるが如き、以てその一斑を窺ふべし。これの例に見るも祝詞の最も古きものは、また大和筑紫以前海邊に棲居したりし時代の餘風を帯ぶるものなきにあらずといへども、多くの祝詞を綜合するに、最古の神話時代が漸く轉じて、農事の重視せられし時代に入りて製作せられしものなりと斷言するを憚らず。祈年祭の詞、風の神の祭の詞、または大嘗祭の詞を讀め、いかに當時の國民が耕耘の事に注意し、焦心して、年々の豊凶に全生命を託したりしかを發見せん。またいはゆる天つ罪として大祓の詞に擧げたる畔放ち・溝埋・種放・類蒔の類も、みなこれ農作に關する罪名にあらずや。海事より農事に移れる太古國民生活の變遷は、正に祝詞によりて反映せられたりといふべし。(國文學史講話)

次に現在の祈年祭に就いていささか述べよう。先づ其の沿革を見るに、もと祈年の幣物を諸社に奉る際、伊勢へは特に使を遣はされ、その他の神社へは祝等を召して之を受けしめられた。然るに年を追うて不參の者も多く、怠慢の者もあらはれ、幣物を賣りさばく者なども生じた。醍醐天皇の頃其の幣風既に現れ、應仁亂後全く廢絶した。明治大帝に及び明治二年再興せられ、神宮を始め全國の官國幣社に幣帛を奉獻される事となつた。更に大正二年十一月に至つて府縣社以下の神社に對しても祈年新嘗の兩大祭に奉幣される事となつた。祭日は明治七年以後は皇靈殿のを二月四日、賢所神殿のを同十七日に執行し、且つ伊勢への勅使も十七日となされた。さて本課の祈年祭祝詞は、神祇官に於ける祈年祭に、諸社の神主祝部どもを集めて讀み聞かせる宣命形式の祝詞である。宣命の形ではあるが神主祝部どもに聞かせる事を目的とするのではなく、其の日神祇官に於て祭る所の神祇に奏す詞を神職に聞かせるのである。これ各節の始に「皇神等の前に白さく」とあつて、其の末尾が「……と宣る」となつてゐる所以である。(「祝詞新講」五四頁参照)

古本及び註釋書

今其の主要なるもののみを次に擧げよう。

古本、

九條公爵家本 (平安末書寫)……………延喜式中。

(祝詞篇は大部分現存。大正十五年官幣大社稻荷神名帳と共に複製す。)

版本、

1、明曆本・享保本・雲州家本・神谷本。及び國史大系中の校訂本。(以上延喜式本)

2、祝詞篇のみのは

「祝詞正訓」

四 祝詞・宣命

平田篤胤の養子鐵胤、片假名の訓を施したるもの、最も廣く行はる。

註釋書

中臣被瑞穂抄	度會延佳 (但し大祓のみ)
延喜式祝詞解	賀茂眞淵
祝詞考	同氏
大祓詞後釋	本居宣長
出雲國造神壽後釋	同氏
祝詞講義	鈴木重胤
祝詞辨蒙	敷田年山
祝詞新講	次田潤

宣命

文武天皇元年の詔

一解題

1 出典

續日本紀(文武天皇の御即位から桓武天皇延暦十年までの編年體の歴史。四十卷延暦十六年成。民部大輔東宮學士菅原

眞道・石大臣皇太子傳藤原繼繩勅を奉じて撰す

2 主眼及び採擇の趣旨

文體形式上に於て祝詞を踏襲する宣命についての一斑を伺はしめ、以て我が國上古の固有の文の相を了得せしめると共に、内容上に於ては、皇位に即かせ給ふ天皇が、如何に畏敬の御心を以て天業を御受け繼ぎ遊ばされるものであるか、そこに天津日嗣に對する天皇の御信念の程を、延いては神聖無比なる國體皇位の特殊性を伺ひ奉る事が出来る。更に愈々上御一人として御統治遊ばれる國家及び國民に對して、如何にあれかしと御期待なし給うて御出であるか、更に進んでは百官を始め下萬民に對し、如何にすべしとお諭し遊ばされてゐるか。拜誦するだに畏き極みである。それ等の節々を感謝に満ちた心もて、十分拜讀させる事が本課の眼目である。

二解釋

1 語釋

【宣命】

國語によつて讀み下す様に記した詔勅を言ふ。勿論全部漢字を用ひてはゐるが、所謂宣命書によつて用言の語尾や助詞を小書し片寄せてある。現在宣命と呼ばれる最古のものは本課採用のものである。文武天皇以前にも詔勅はあるがみな漢文によつてゐるので、それは宣命とは言はない。さて宣命の實體は詔勅であるが、何故に宣命と呼ばれる様になつたか。一體宣命とは元來詔勅そのものの意ではなく、辭義通り「勅命をのべきかせる」意で、

四 祝詞・宣命

即ち公布の方法から轉じた名である。宣命の大夫(宣命使とも)が、臣下(時には神佛にも)にのべきかせられるものの意であつたが、後には漢文の詔勅と稱し、國語風によつたものを宣命と言ふ様になつたのである。さて現在はどうかと言ふに、勿論存在するが、但し宣命の名は明治になつて廢せられ、神に告げられるものは告文と稱し、贈位などの宣命書のは策命と稱せられてゐる。さて宣命の文の構成は二大別される。問題は當面の事件であるが、それを古來の國家として的一般原理に照し

て處理する様になつてゐる。故に國家の淵源をとき先例を示す部分と、それに照して現在の問題を如何にするかをお示しになつた部分とある。

A、一般原理——恒例——形式
B、當面の問題——臨時——實質

しかして、Aの部面に於て我が國固有の國民精神を察し後者を拜讀する事によつて、時代思潮並びにその變遷の跡が知られるのである。

【文武天皇元年の詔】

頭註の通り御即位の時の詔。文武天皇は天武天皇の御孫で、草壁皇太子の御子。御父早く薨ぜられて、のち持統天皇（天武天皇の皇后）の皇太子に立たれ、持統天皇の十一年八月位に即かれた。この年が即ち天武天皇の元年で、(年號を立てられなかつた)八月十七日に下されたのが此の宣命である。續日本紀卷一の始にあつて、宣命體の詔勅の中、今に傳はる最古のもの(續紀にはすべて六二章ある)

【現つ御神と】「現つ」は現在の意。世に明らかに現れまします神。天皇を稱へ申し奉る語。あきつ神。あらひと神。「と」は「として」の意。

【大八嶋國知しめす】第三課參照。

【天皇が】「が」は領格の「の」。天皇の。

【遠天皇祖の御世御世】

遠い昔の皇祖の御世からして……(中今の御代に至るまでに)の意。原文「御世」とのみあり。宣長は「御世御世と有べきところなり、されば御世一つ脱たるべし」と言つてゐる。

【中今】今を言ふ。然らば「中」とは果して如何なる意であらうか。宣長は「中といへるは、當時を盛りなる真中の世と、ほめたる心ばへ有て、おもしろき詞なり」と言つてゐる。然し此の「中」の意を非常に重視されたのは山田孝雄氏である。即ち同氏はそこに我が國體の中堅になる思想、國民性の中核になる思想をいひあらはしてゐると、極めて重大な意味に解してゐるのであるが、詳しくは「大日本國體概論」參照。今其の我が國體との特性と、如何に關聯してゐるかについてのみ約言すれば次の通りである。中今とは今が永遠の時の流の中央であると言ふ思想であるが、一方我が國體の尊嚴は天壤無窮、萬世一系の皇統に存する事は言ふ迄もないが、しかし此の中今とは萬世無窮と言ふ思想のかへ詞と見る事が出来ると言ふのである。即ち今が中であるとは、無限の過去と無限の未來とを其の中に含んだ語であるから、萬年前の人は當時を中と考へたと同様に、萬年後の人もその時を永遠の時の流れの中と考へるに違ない。故にそれは

【大命らまと】「ら」は語調を助けるもの。「ま」は「まま」と同じ。故に「大御言のままである」との意。

【集侍はれる】上述。

【皇子等】後世の親王の語に當る。當時は親王の語はなかつたやうである。

【王たち】上古は皇子を始め諸王を御子と稱し、王の字を用ひた。後に親王の稱が用ひられる様になり親王を「ミコ」と申し、諸王を「オホギミ」と申す例となる。親王の語は天武紀に始めて見える。大寶令に於て親王と王との制が定められ、皇兄弟姉妹及び王子皇女を親王といひ、王はそれ以外の皇胤五世迄。内親王の語は持統紀五年に、女王の稱は文武紀三年に始めて見えてゐる。

【臣】オミ。姓の名。上古特に親しく宮中に仕へし名族。其の主長に大臣の名あり。

【公民】人民を天皇の治め給ふにつきて言ふ語。「大御寶」とも「大御田子等」の轉とも言ふ。衆庶、百姓。

【食さへ】「食す」の語につきては第三課參照。「食さふ」の命令形。

【高天原に】原本には乎とある。宣長の説により改める。

【事始めて】天津日嗣の事を指す。即ち天津日嗣の事は、高天原に坐す神の始め給ふ、悠久な由來のある尊嚴なものである事を示す。

全く萬世に亘つて無窮と言ふ事が出来るからである。さて文脈は次の「天つ神の御子ながらも」へ係る。

【あれ坐さむ】「生れ坐さむ」である。お生れ遊ばす意。ある(生)は自動下二段活用。

【彌繼ぎ繼ぎに】又繼ぎ又繼ぎ繼ぎと。
【次てと】次第系統であるとして……次の「依さし奉りし隨に」に係る。

【天つ神の御子ながらも】

天つ神の御子とは天照大神の御子の意で、御世の天皇迄も申す詞。ながらもは原文「隨母」とある如く、(御子に)坐しますまゝにの意。「も」は添へ詞。

【天に坐す神】上の「高天原に事始めて」に應ずる詞。即ち天照大神を中心として天上に坐す神をおさし申す。

【依さし奉りし隨に】記に「天照大神之命以、豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者、我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國、言因賜而天降也々々」とあるによる。即ち天照大神の詔命によつて、此の國は其の御子孫が皇統を繼いで、お治めなるべき國と御委任なされた大御言のまに。

【聞し看し來る】宣長が十四詔、廿三詔を參考として補つたものである。故に本文に括弧を以て其の旨を示したのである。即ちこれより上の部分は副詞であつて、次の天

津日嗣と言ふ名詞に對して接続し得ないからである。さて「中今に至るまでに……天神の詔命のまゝにお治め遊ばされて来た」の意。

【天津日嗣高御座の業と】 天津日嗣とは天つ日の神の大御言によつて大御國に天皇とます大御業を稱へ奉る語、即ち皇業の意。「高御座」とは天照大神の御座を受傳へまします義で天津日嗣の御座、即ち天位の意。後には元且、即位の大儀に大極殿(後世紫宸殿)の中央に設けらるゝ莊嚴なる天皇の御座。さて全體としては此の如き皇業皇位、天業天位であると「授け賜ふ」に係る。

【現つ御神と】 現つ御神としての意。

【倭根子天皇命】 「根」は尊稱、「子」は名につく添語。大倭を知らしめされる方の意が「倭根子」である。故に御歴代の天皇詔命に用ひ給ひ、又天皇の御名にも御諡號にも稱し奉る。こゝは全體で持統天皇。

【授け賜ひ負せ賜ふ】 持統天皇が文武天皇に授け賜ひ負せ賜ふ意。次の「大命」に係る「負せ」は負ひ持たしめ給ふ意。仰せと言ふも言語を或は言語によつて負せ持たしむ意。

【貴き高き廣き厚き】 かく形容詞を重ねる表現は宣命の一種の特殊修辭法。次の「淨き直き誠の心」など参照。

【受け賜はり】 主語は文武天皇。承るの原義を見るべし。

【恐み坐して】 「恐む」は文字通り畏れ多く思ふ意なれど、

持統天皇がわれ(文武天皇)にお授け下さる、貴い大命を畏み承つて、此の天が下を平安に御統治めなされ、天下の萬民を御愛撫し給ふと、神にて坐すまゝにお考へ下さると仰せになられる、(文武)天皇の大命を、(宣命使である私が)集侍はれる諸は謹んで聞き給へと宣べるのである。

【任せ賜へる】 まく(他動下二)は、「罷らす」の約言と言ふ。(一)鄙の官に任じて行かしむ。(二)まかす、ゆだねの意。此處は前者。

【宰等】 天皇の大御言を受け賜はり負ひ持ちて國々をつかさどる地方官達。

【至るまでに】 上に「より」がないが、百官の人等と云つて、就中地方官をあげてゐられるから、(上は大匠より)の意を補ふべきである。

【敷き賜ひ行ひ賜へる】 朝廷から國內に宣布し施行する(國法)と係る。

【明き淨き直き誠の心】 現在國民道德の中心である、「誠」は其の本體で、それを説明したのが「明き淨き直き」である。さて明淨直は我が國固有の國民精神の精華を表現した語である事は人のよく知る所である。即ち邪き異き黒き穢き悪き心に對して善しき赤き清明な心である。記紀の神話にも見えるが宣命には特に此の精神が強調され

俗に承諾の意を「かしこまりました」と言ふ如く、こゝは既に轉義の方。

【食國】 天皇の知ろしめす國。

【恵び賜ひ】 十三詔に「天下遠撫惠賜」とあるにより「惠備」とよむ。「み」「び」は例の何れも唇音故相通。(本書八四頁参照)

【なも】 後世音便にて「なむ」と言ふ。(nanno→nam)

【神ながら】 原文「隨神」

天皇は神にてましますが故に、神にて坐すまゝに「思ほしめさく」と續く。

さて此の段の前半は稍々文脈が紛らはしい。今次に口語釋を示さう。一體「聞し看し來る」以前は、すべて「天津日嗣高御座の業」の由来を天神より説き起して述べたものである。

〔口語譯〕

天に座す神が高天原に事始めてよりこのかた、代々の天皇を経て、現在に至る迄に、天皇の御子としてお生れ遊ばします皇子様から皇子様へと、繼ぎ〜に受け傳へて此の大八嶋國は統治すべき次第であるとして、天つ神の御子孫で坐すまゝに、何れも天皇の御詔命の通りに、お受け繼ぎ來られた、此の皇位であると、現在現つ御神として大八嶋國を御統治なさつてお出でになる天皇、即ち

てゐる。例へば、

以三明淨心二而 (第二詔)

清支明支正支直支心以 (第五)

淨伎明心乎持而 (第七)

以三明直心二 (第廿)

貞久淨岐心乎以天 (第廿九)

明仁貞伎心乎以天 (第卅一)

貞仁能久淨岐心乎以天 (第卅三)

已何心乎明爾淨久貞爾謹天 (第四十四)

清直心乎毛知 (第五十九)

以上の如くである。

【いやすすみすすみて】 原文「御稱稱而」宣長は「決く誤字なり、いと心得がたし、されど試にいにはば、彌獎々而にやあらむ云々」としてゐる。但し獎は人をすゝむるにて、みづからすゝむ意にはあらざれども向と迎の例の如く古の自他相通と見られるとて、大殿祭祝詞を参考に引いてゐるが、しかしそれは正しく他動の用例である故なほよく考ふべしと云つてゐる。眞淵は「みはかり〜て」と訓んだが、宣長はそれについてそのよしなき事を説いてゐる。山田孝雄氏は「みはかりはかりて」と讀み「稱」は「ハカル」と言ふ語にあたるので、天皇の御爲に、熟慮して政治を行ふことをいふのであらう。」としてゐる。

其の是非を決し兼ねる。「すゝみすゝみて」にしても勿論
獎の字の原義ではなく、自ら積極的に身を挺して進んで
の意である。

【結りて】 引きしまる意、「しまつて行け」などと應援の言
葉に用ふ。

【故】 原文「故猶」、宣長は故は「加禮」とよみ、「かるが
故に」とよむ事古くはなしとして爾を削つた。今はそれ
による。

【款しく】 款は志を純一にし忠誠を以て仕へる意を示す文
字なり。「いそし」は形容詞。宣長は「伊蘇は、伊佐乎の
切れるにて、いそしはいさをしと同じ」としてゐる。よ
く勤めたり、出精なりの意。此處は副詞。

2 文の構成

教科書には二段落になつてゐる。前半は先づ皇族百官萬民等天皇の大命を聞けと仰せらるるに始つて、天皇が悠久尊嚴
なる皇位に即かれた事、それに就きては天皇御自身、此の如く皇國及び百姓等を御統治なさる御決心であると、主として
天皇御自身の御事を宣言せられたもの。後半は故に下百官達はかくせよと論じ遊ばされたもの。かく見る事によつて明
白に二分される。今は更に別様の立場から次の如くまとめてゐる。

第一節 (始より三九頁三行迄) 序にあたる。

第二節 (三九頁三行より終迄) 本文である。

1 先帝の禪を受けて皇位につかれ、天下を御統治なさる事と天皇御統治の御精神の御宣言。(三九頁三行より三九

頁終迄)

2、百官有司皆至誠を捧げて職務に忠勤せよとの大御言。(四〇頁の始めより同頁五行迄)

3、上述の如く忠勤勉勵すれば賞與もし位階も上げ給ふであらうとの御示。(殘全部)

3 文意

朕此の度其の基く所悠遠にして、尊嚴極りなき皇位に即かせられたに就ては、國家の安泰と天下公民の愛撫とを期念す
る故、百官有司よろしく其の聖旨を奉じて至誠奉公、夫々忠勤を勵めよ、然らば褒賞を施し、官位を昇せるであらうぞと
の仰である。更に約言すれば

御即位の御宣布と御聖旨の御明示、及び百官有司への御諭
と言ふ事が出来よう。

4 鑑賞批評

朗々音讀し奉れば、直ちに感知される如く、誠に神嚴であり、莊重な音調を有する詔である。其の因由は如何なる所に
潜んでゐるであらうか。それは勿論其の内容が然らしめるのであるが、今其の形式上に於ける、主要なるものについて考
察を進めて見よう。

措辭上に於ける特色は先づ同語の反復である。

皇子等・王たち・臣たち・百官の人等

遠天皇祖御世 御世。

彌繼ぎ 繼ぎに

いやすすみ すすみて

【仕へ奉れらむ】 「奉れらむ」は奉れらむである。らはり
の未然形。むは連體形。

【品々】 詔詞解に「品々とは、その讚賜ひ上賜ふ差等ある
をいふ」とある。

【上げ賜ひ、治め賜はむ】 上げは位階を昇せ給ふ意。治め
賜ふは、廣き言にて、吉凶き何事にまれ、處分り行ひ給
ふをいふなり……かくてこゝは、讚賜上賜が即治賜なる
を語の文にてかく重ねていへるなり(詔詞解)の説の通
りである。尙ほ原文に「品々讚賜上賜治將賜物會止」と
あるが、宣長の言の如く其の意はむしろ將は讚の上にあ
る心である。

品品

それにも増して多いのは類語の重出である。

授け賜ひ 負せ賜ふ

貴き 高き 廣き 厚き 大命

天の下を調へ賜ひ 平らげ賜ひ

公民を恵び賜ひ 撫で賜はむ

敷き賜ひ 行へ賜へる

明き 淨き 直き 誠の心

讃め賜ひ 上げ賜ひ 治め賜はむ

且つ各段の終りには「詔りたまふ（天皇が）大命を諸聞し食さへと詔る」と四度繰返されてゐる。かくて段落毎に聽者をして低頭せしめる力を表してゐると考へられる。

次に天津日嗣高御座の業をのべるに當つては、其の皇位の本體より説き起し、遠く高天原の神々の事にまで遡つてゐる所に、天位の宏遠なる尊嚴なる事をよく表現してゐると思ふ。

三 備 考

1 指導研究

宣命は祝詞に比して實質的であるから、其の内容は比較的理解し易いであらうと思ふ。本課に於ては先づ「高天原に事始めて……聞し看し來る」が文脈の紛れ易い所である。是は天津日嗣に係る説明的修飾部である事位を指示して、生徒自

身に其の脈絡を考察させるがよいと思ふ。宣命は詔詞解に於て次の如く示してゐる。今参考のために引用しておく。

「高天原爾事始而、天皇御子之阿禮坐幸彌繼々爾、大八島國將知次止、天坐神之依之奉之隨、遠天皇祖御世、中今至麻

且爾天都神乃御子隨母聞看來」

内容の把握に於ける作業の第一歩は、先づ大綱的に、文の横成を明確にする事である。故に上述の通り四段に分ち、其の意段落の主意をさぐらせると共に、一方部分的には、語句の註解と相待つて、自由に全文を口語譯出來る迄に導かなければならない。

尙上古の國文たる宣命が、如何なる修辭上の特色を有するか、生徒自身の問題として、上掲の修辭的特色を發見された。更に進んでは皇位の尊嚴を通じて見たる國體の本義を了得せしめ、或は天皇の國家萬民に垂れ給ふ大御心の畏さに感激し、且つは下有司に對する懇切周到なる御諭の程を、十分に拜讀させる様指導したいものである。それには先づ教授者自身の感激に満ちた熱意がなければならぬ。

2 参考

註釋書としては本居宣長の

「續紀歷朝詔詞解」六卷 が先づ第一にして、新時代の研究の表れてゐないのは遺憾である。その他参考書としては次の如きものがある。

橘 守 部 「文章撰格」の中

榊原芳野 「文藝類纂」の中

武田祐吉 「祝詞宣命の研究」

山田孝雄 「祝詞宣命」(日本思想叢書第四編)

四 祝詞・宣命

五 萬葉集抄

一 解 題

1 萬葉集に就て

撰者・年代 撰者に就ては古くは橘諸兄の勅命による選進説が行はれ、次いで家持私撰説、或は夫等兩人説をなすものあり、其の他種々の説が行はれてゐるが、畢竟未定である。但し現在に於ては少くも次の二點だけは疑のない所であらうと思ふ。

- 1 或る個人が一時に撰定したものではないらしい事。(卷々の比較上)
 - 2 家持は何等かの形に於て、撰定に重大なる役割を果してゐる事。
- 撰者が此の如くであるから、年代も亦明確でない。但し集中に於ける、年代判明の最新の歌は、孝謙天皇天平寶字三年正月のものであるから、奈良時代の末に於て一應形をなし、その後多少の改訂が加へられて、平安初期には現在の如く定つたものであらうと推定される。

題號

萬葉集と言ふ題號の意味に關し三種の説が行はれてゐる。

- 一、萬の言の葉、即ち多くの歌を集めた書の意に解するもの(仙覺・眞淵)
- 一、葉は世に通ずるので、萬世までも傳はる様にとの意であるとするもの(契沖・雅澄)
- 一、葉は木の葉で、多くの歌を集めたのを多くの木の葉に譬へたものとするもの(岡田正之博士)

第二の説が普通に認められてゐる。それは支那の古書や、我が古語拾遺、續紀などに萬葉を萬世の意に解すべき用例があるところからである。

歌體 長歌・短歌・旋頭歌が主要なものであつて、特に長歌・旋頭歌が後世其の比を見ない程多く集められてゐる點に特色がある。

内容 卷數二十。長歌二六二首、短歌四一七三首、旋頭歌六一、合計四四九六首(古義に據る)歌人としては上は天皇より下は乞食者に至るまで、あらゆる階級に亘つてゐる。代表的歌人とも稱すべきは柿本人麿・山部赤人・山上憶良・大伴旅人・大伴家持等であり、其の他高市黑人・高橋蟲麿等も注意すべく、女流歌人としては坂上郎女・額田王等である。尙至尊皇族中に於ては舒明・天智・天武の三天皇、有馬皇子、志貴皇子及び額田王であらせられる。

各卷の組織は、内容上に於て雜歌・相聞・挽歌・及び譬喩歌・四季・四季相聞等の部立があるが、必ずしも整然たるものではなく、却つて卷々には夫々の特色が見られるのである。例へば第一・二卷は最も正集の形を整へ、第五卷には憶良の歌多く、第六卷は年代別にして配列し、第七卷は作者不明の歌のみを集め、第九卷には傳説歌多く、第十一・二卷は古代民謡集の概があり、第十三卷には長歌多く、第十四卷は東歌、第十六卷は有由縁並雜歌であり、第十七卷以下は家持の歌日記の如き趣を有してゐるが如きである。その他歌數の年代的分布に就ては第二課語釋の部參看。

歌風と修辭 以上の如く其の内容多種多様であるが、勿論其の大部分を占めるのは、上代人の心情さながらなる抒情歌最も多く、秀麗優雅なる自然を諦視せる敘景歌之に次ぎ、或は古傳説を主題とせる民衆詩に亦見るべきものがある。當時すでに儒佛老莊の思想的影響を認め得るが、大體に於ては萬葉人特有の簡素純朴なる眞情が、所謂「ますらをぶり」なる七五調の格調もて端的に表現せられてゐる所に特質がある。修辭上に於ては記紀の歌謡以來使用し來つた枕詞、序詞、譬喩、擬人法、對句、疊句等益々巧に驅使せられる様になつた。

用字法 (第二課語釋の項参照)

研究及び註釋書

- 1 古點 萬葉集研究の嚆矢と見らるべきもの。村上天皇の天曆年中梨壺の五人男に命じて訓點を加へしめられたもの。
 - 2、次點 平安末に於ける大江匡房・藤原基俊等によつてなされたもの。
 - 3 新點 近古の初期に律師仙覺が、今まで訓法を缺いてゐた百五十二首に點を附したのもの。さて萬葉集の註釋書及び研究書は、實に汗牛充棟の觀があるが、次には其の主要なるものを擧げよう。
- 萬葉集抄(仙覺抄) 律師 仙覺 (優れた最初のものと謂ふべし)
- 萬葉拾穗抄 北村季吟 (古註集成)
- 萬葉代匠記 僧 契 冲 (劃期的新研究)
- 萬葉集略解 橋 千蔭 (入門書として流布廣し)
- 萬葉集古義 鹿持雅澄 (浩瀚第一、諸註大集成)
- 萬葉集美夫君志 木村正辭 (卷一、二の註)
- 萬葉集講義 山田孝雄
- 萬葉集新考 井上通泰 (卷一——十七迄の註)
- 萬葉集選擇 佐々木信綱
- 萬葉集の鑑賞及び批評 島木赤彦

- 萬葉集書目提要 木村正辭
- 研究書目解題 佐々木信綱 (選擇附録)
- 萬葉集年表 萬葉三水會

校本 萬葉集 佐々木信綱等

萬葉集總索引 正宗敦夫

- 萬葉集の新研究 久松潜一
- 萬葉集年表 土屋文明
- 作者類別 澤 湯 久 孝
- 年代順 萬葉集 森 本 治 吉

2 主眼及び採擇の趣旨

萬葉集は上代文學の精髓である事は勿論、日本文學史上の一大雄篇であり、且つ世界に誇るに足る珠寶に滿ちた大歌集である。本課に於ては、集中の代表的歌人の長短歌を併せ採り、抒情に絳景に名家の示せる豊かなる詩情を十分に味讀せしめ、以て我が上代國民精神の眞髓を了得せしめんとするのである。

二 解釋

1 語釋

【柿本人麿】 歴史に所載なく、誕生の時代、生地、歿年等に關しては諸説がある。其の生涯は萬葉集に據る外明らかでない。持統三年日並皇子尊殯宮之時の歌を残し、或は持統天皇に供奉して吉野に行き、或は輕皇子に從つて安騎野にやどり、更に近江の荒都を訪ひ、筑紫に使として下り、晩年石見國に任を帯びて赴き、彼の地に歿した。集中の代表的歌人なるは勿論、本邦和歌史上の大歌人である。歌數も多く、殊に長歌に富み、長歌に秀でてゐる。其の氣魄格調の雄渾壯大なる、正に古今獨歩の概がある。作品は主として卷一、二、三、四にある。

【過近江荒都時作歌】

卷一、二九——國歌大觀の番號を示す。以下同斷所載。近江都は天智天皇六年三月に移され、次で十年十二月崩御ましまし、弘文天皇(在位八ヶ月)に及んだ都である。場所は頭註の通りである。

【玉だすき】 畝火の枕詞。玉は美稱なれど「たすき」より下方への接続に就て諸説あるが結局未定。

【畝火の山】 頭註に在り。大和三山とは勿論香久山・耳無山と併せ稱する名。

【樞原】 神武天皇の皇都をさす。畝火山の近くである。今に樞原神宮の存する事は言ふ迄もない。

【さゝなみの】 頭註参照。そこから附近の地名志賀・比良等に冠す。さゝなみと濁らざるを可とす。

【すめろぎの】 天皇、此處は天智天皇。

【神の尊】 「みこと」は尊稱。「神」の意は天皇即ち現人神なるを以て附す。したがつて全體で天皇に附加された鄭重な尊稱となる。

【大宮は こゝと聞けども】 對句

【大殿は こゝといへども】 對句
春草の しげく生ひたる 對句で、下の「大宮處」の修飾霞立つ 春日の霧れる

【霧れる】 四段活用の動詞「霧る」と完了の助動詞「り」との合成。霧るとは霧のかゝつて霞む事。霧はその名詞形。

【もしきの】 大宮の枕詞。數多の石をたゞみ重ねて築いた高大な(大宮)の意。

もしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝにつどへる(萬葉集、卷十)

歌意は平明である。技巧上に於ては、枕詞の重用と、長き前半の修飾とに注意すべきである。近江荒都に立つての物悲しさを述べるに當つて、先づ遠く樞原の宮時代から詠み出した所に、悠遠莊重の感動を湧きたゞせるので

【ひじりの御代ゆ】 聖の御代ゆ。「ゆ」は「より」の意。即ち以上で、大和の畝火山の近く、樞原の地に帝都をお定めになつて、天下をお治め遊ばされた、神武聖帝以來の意である。

【あれましし】 お生れ遊ばされた、御出現なされたの意。

【神のことごと】 ことごとく、すべての神々(代々の天皇をお指し申す)

【樛の木】 「つぎ」の枕詞。樛は梅ともかく。音的聯關からこゝでは「次ぎ次ぎに」つゞくのである。

【天にみつ】 大和の枕詞、そらみつとも。これもその讀き方に諸説がある。

【青丹よし】 奈良の枕詞。奈良からは古昔よい青土を出したからと言ひ、或は青土よしの合成で、眉にも繪にも挺し熟して用ひるによりて奈良へ續くともいふ。(古義)

【いかさまに念ほしめせか】 どの様にお考へ遊ばされたのであらうかの意。「念ほしめせか」の略。下の「大津の宮に天の下知ろしめしけむ」にかゝる。

【天さかる】 ひな(鄙)の枕詞。「さかる」は離る。

【ひなにはあれど】 近江國大津は片田舎の所謂鄙であつたのだけれども。

【石走の】 近江の枕詞。

ある。後半實景の敘述に入つては、對句の利用によつて「大宮はこゝと聞けども」「大殿はこゝといへども」と重ねて、次の現況に入る様、平易なる表現の中に、音にききし、人の言ふ都とは、餘りにも姿の變つた事に心を傷ましめる様が、實によく詠まれてゐると思ふ。「こゝと聞けども」「こゝといへども」の中に、そのかみそりたつてゐた「大宮」も「大殿」も今は唯想像の中に描く外せんすべなき悲しさの情が切々と人をうつものがあつた。次に荒廢の様を述べるに當つて、春草霧霞が自然運行のまゝに、無心に無情に其の姿を現じてゐる事を、おほろかに詠んだ所に、たよりなきはかなさ、物悲しさを湛へてゐる様に思ふのである。

【反歌】 ハンカ。反復敘述する意。長歌の末に其の大意を總括し、又は言ひ残したるを短くつゞめてよみ添ふる短歌を言ふ。

【辛崎】 今は唐崎とかく。近江八景の一、唐崎の松。

【さきくあれど】 原文「雖有幸」により語意は明白。

【大宮人の船】 「大宮人の」と言ふ所に、みやびやかな、目もあやなる船遊の景を心に描いて、追慕憧憬の情をよせてゐる事を感じすべきである。

【待ちかねつ】 「待ちかね」は待ち得ない、待ちおほせない意。今に「行きかねる」「出来かねる」等と使用する事參

照。「つ」に感情の切迫せるを見る。尙ほ「唐崎さきくあれど」の「サキさき」の音調に注意。佐々木信綱博士は「一首獨立した短歌として見て勝れた作であるのみならず、前の長歌に言ひ残した部分を反歌に譲り、長歌のこゝろを補つたものとしてもよい。恰もつき残された鐘の餘韻を山彦にきく思がある」(萬葉集選釋、二二)と言はれてゐる。

【大わだ】「わた」とは曲になりたる所、曲れる所、曲りて水の淀む所を言ふ。「大わだ」は此處では琵琶湖の岸の中、水の青々と湛へられた、曲り目の淀んでゐる所を言ふ。(別に大海と解す説もある。しからば湖水を大海に比したものと成る。)

【よどむとも】素直に此の語のみを解せば、「よどむ様な事があらうとも」となるが、全體の上から見て、淀めども即ち淀んでゐるがと解すべきであらう。

【昔の人】こゝは大津宮時代の人、即ち大宮人。

【逢はめやも】「や」は反語。「も」は感動の助詞。一首の意は、さゝなみの志賀の入江は、大きな曲所をなして、人待ち顔に青々と淀んでゐるが、果して昔此の邊で舟遊をした大宮人達にまたと逢へるであらうか、否もうそれは既に昔の語草となつてしまつて、何時まで待つたとて、二度と逢ふ事は出来ず、誠に限りなく悲しい

るべきであらう。

【い行き憚り】「い」は上代に多く用ひられた接頭語。白雲さへも神々しき富士の靈峰に氣壓されて、山の面に行き憚る意。

【時じくぞ】「ぞ」は係の助詞。「時じく」は「時じ」(形容詞)の連用形。「非時香葉をトキジクノカグノコノミと讀む事によつて其の意明白。即ち其の時節ならぬこと、又は時の定めなく、時にかゝはらぬこと。

【語りつき言ひつき行かむ】後代永劫に亘つて、其の靈姿は、賛歎し稱美されて行くであらう。

【田兒の浦ゆ】「ゆ」については古來説が分れてゐる。「よりの意とするもの、軽く爾の手爾波に似たり」(久老一槻葉落)と言ふ意に従ふものとの二説である。こゝは「よりの意に解したいと思ふ。即ち田兒浦より富士山を望み得る地點に出る意である。

さて以上の長歌短歌共に古來有名なものであり、別に口語譯を要せぬ程平明なものもある。先づ長歌は三段より成つてゐる事に注意せられる。「天地の……ふりさけ見れば」渡る日の……雪はふりける」及び以下である。第一段は總序とも言ふべきもの、「天地の分れし時ゆ」と云ひ、「天の原ふりさけ見れば」と言ふに、時空的の悠久廣大なる情を湛へ、次の二段八句は本長歌の眼目、靈峰

事であるわい。

【山部赤人】人麿と同じく歴史に所傳がない。萬葉集に見えるのみである。短歌に秀で、殊に自然詩人と稱される如く、敘景に於て卓抜の伎倆を有し、眞に自然の生命と融合したる清澄清新なる名歌を残してゐる。

【望不盡山歌】(卷三、三二七)【分れし時ゆ】天地が分れた時以來、天地開闢以來、悠久の昔から「ゆ」は例の「より」。

【神さびて】「神さぶ」(上二)神の様なり、物ふりて尊くあり、神々しくありの意。「さぶ」は他語の下につきて熟語をなし、其の氣色ありの意を示す語、何々めくと言ふと同じ、「翁さぶ」「少女さぶ」等。さて此處は「神々しい、莊嚴な姿をして」の意。

【天の原ふりさけ見れば】ふりさけみる(上一)は振り仰ぎて遠く望む意。故に高大なる天空を振り仰ぎて遠望すれば。

【渡る日の】太陽は天空を經渡ると考へた語。【影もかくろひ】影は日光そのものをさす。「かくろふ」はうつろふ(うつる)かたろふ(かたる)、まつろふ(まつる)等と同類の語であつて「隠る」に意同じけれど稍々作用の繼續を示す點異なると言はれる。但し詩歌等にては音調の上より使用されたるものが多い。此處もさう見

そのものを凝視讚歎したるもの、日影も月光もとて日月との對比をもつて其の高大なる姿を平明の語の中に表し白雲も其の莊嚴なる威容に行き憚るとの表現は、地上の萬物より獨り卓然と超越するは勿論、空行く無心の雲さへも憚る程の神々しさである事に驚歎した心のあらはれである。誠に雲表にそゞり立つ毅然たる靈姿を述べ得て餘りある様に思ふ。「時じくぞ雪はふりける」の表現も亦遒勁である。時をも分たず山巔に白雪を載く姿を遠望しては、全く神祕の感に打たれざるを得ないのである。第三段の結びは、全體的に見て、稍々平凡の嫌がないでもない。しかし此の長歌の生命は平明卒直なる點にあるを見れば、却つて一篇のまとまりを助けてゐるとも考へられる。繰返し、暗誦する迄に音讀せしめたならば、平明の中にも赤人特有の情調高き歌風を味得せしめる事が出来るであらう。

此の赤人の歌に續いて、萬葉集には次の無名者の長歌が載せてある。赤人の敘景を中心としたる平明單純なるに比し、其の措辭の技巧も巧妙であり、且つ全篇に漲る切迫せる驚嘆の情は、實に雄勁強大である點は此の赤人作を鑑賞する上にも参考とならう。

なまよみの 甲斐の國 打ち寄する駿河の國と ちちごちの 國のみ中ゆ 出で立てる 不盡の高嶺は 天

雲も 行き憚り 飛ぶ鳥も 翔びも上らず 燎ゆる
火を 雪もて消ち 降る雪を 火もて消ちつゝ 言ひ
もかね 名づけも知らに 靈しくも 坐す神かも 石
花海と 名づけてあるも その山の 包める海ぞ 不
盡河と 人の渡るも その山の 水のたぎちぞ 日
本の やまとの國の 鎮とも 坐す神かも 寶とも
なれる山かも 駿河なる 不盡の高峰は 見れど飽か
ぬかも (卷三、三一九)

反歌

不盡の嶺に零り置ける雪は六月の

十五日に消ぬればその夜降りけり (同、三二〇)

不盡の嶺を高みかしくみ天雲も

い行きいかり棚引くものを (同、三二一)

「田兒の浦ゆ」の反歌は、百人一首によつて生徒は熟知してゐる事であらう。但し新古今集の方は變形されてゐる事勿論である。比較照合、以て兩集の格調の差を了得せしめ、そこより萬葉集歌風の特徴を伺はしめるのも亦一法である。

たこの浦にうち出て見れば白たへの

ふじのたかねに雪はふりつゝ

【山上憶良】 大寶元年正月遣唐少録となり、翌年渡唐、その後伯耆守、東宮侍候、筑前守など歴任す。當時の歌人

中には、漢學に深く儒教儒道に通じてゐた所に彼の特色がある様である。人生派の歌人であるとは人のよく謂ふ所で、子を思ひ、妻を愛し、貧窮を悲しみ、或は世の異俗先生の感情を反さんと歌つたりしてゐる。

【思子等一歌】 (卷五、八〇二) 序詞に次の如くある。

釋迦如來金口正説。等思衆生一如羅羅羅。又説
愛無過子。至極大聖尙有愛子之心。況乎世間蒼
生誰不愛子乎。

【子ども思ほゆ】 「ゆはえ、え、ゆ、ゆる、ゆれと活用する上代特有の助動詞、中古に於ける自發の助動詞「る」に當る。子どもの事が自然と思はれる。

【ましてしぬばゆ】 一層痛切に慕はれる。

【いづくより來りしものぞ】 何處から、即ちどんな因縁で

此の世に親となり子となつて生れ出るのであらうか。こんなにまで夢寐の間も忘れ得ない親子となつて生れ出る以上、餘程深い宿世の因縁と思はれるが、果してどうなのであらうか不思議でならない。

【眼交に】 眼の交の意。目前にチラついて常に在るが如く思ふ事。

【もとなかりて】 「もとな」は「もとなく」即ち理由なく、わけもなく、徒に、みだりに、よしなくの意。かゝるは「氣にかゝる」などの語参考。故に「わけもなく漫

りに目前に子の姿がチラついて

【安寝しなさぬ】 「寝」は名詞、故に安眠、「し」は強辭、安眠が出来ない。夜もろく／＼安らかに眠れないの意。

【しろがね】 白銀、銀。

【くがね】 黄金、こがね。古くは「くがね」と言ふ。卷十八、家持の賀陸奥國出金詔書歌に「久我禰」とある。

【なにせむに】 何のために、何の故に(寶として白銀・黄金・玉を惜しむ理があらう)

【まされる寶子にしかめやも】 寶として子寶のまされるに(白銀・黄金・さては玉も)及び得ようか、とても問題にはならない。

此の短歌は、古來親の子に對する愛を歌つた作として最も有名な最も代表的なものである。しかし前の長歌に籠る愛情の具體的な表現の方が更に人を打つものが強い様に思はれる。多分遠く任地筑前の國に在つて、遙に郷に残して來た愛子を想うての詠であらう。さらでだに忘れ得ぬ愛兒の面影、瓜をたべるにつけても、もし此の瓜をあの子にたべさせたならば、どんなに喜ぶであらうかと思はれ、栗をたべれば栗を食べるで、まして子等の身の上がひし／＼と思はれてならない。(「まして」は修辭的用語の如くも見えるが、實際其の兒等が殊に栗を好物としてゐたのであらうと思はれる)これ程迄の親子と

なつて生れ出たには、餘程の深い宿世の因縁があつての事と思はれるが、果して如何なる因果によつて親となり子となつて此の世に生れ出るのであらうか。誠に不思議でならない。かうして遠くはなれて住むと、朝夕その愛兒等の姿が眼前にチラついて、夜さへもオチ／＼安眠出來ないのである。

【高橋蟲麿】 頭註の通り傳未詳。彼の得意とする所は旅の歌、特に傳説を巧によんだ所謂敘事詩人である。

【四年壬申】 卷六は解題の所に述べた通り、年代順の配列に其の特色を有してゐる。故に此處は天平四年(聖武天皇)である事は萬葉集を一見すれば直ちに了得される。

【藤原宇合卿】 フチハラウマカヒキヤウ 宇合は式部省の長官(卿)であつたから宇合卿と稱するのである。彼は不比等の第三子、遣唐副使常陸守を歴任し天平四年八月十七日西海の節度使となり、天平九年八月五日、年四十四にして參議式部卿兼太宰帥を以て薨じた。

【西海道】 サイカイダウ 我が國八道の中の一、九州・壹岐・對馬の稱。ニシノウミノミチ、ニシノミチ。

【節度使】 セツドシ 古昔諸道に遣はされて軍務を檢定せしめられた職。唐官に倣したるもの。因に此の際、同時に節度使を命ぜられたものは次の如くである。續紀十一、天平四年八月の項に「正三位藤原朝臣房前、爲東海東

山二道節度使、從三位多治比真人縣守、爲三山陰道節度使、從三位藤原宇合、爲三西海道節度使、道別、判官四人、主典四人、醫師一人、陰陽師一人。

【白雲の】 枕詞。立つといふ意味から龍田へつづく。

【龍田の山】 頭註参照。

【露霜】 たゞつゆのこととするのと、ミツシモ、即ち秋の末に、露の凝りて霜となるものとするのと二説ある。こゝは單に露と見ておくがよいと思ふ。

【うち越えて】 (龍田山を) 打ち越えて。

【五百重山】 澤山重なり重なつてゐる打ち續く山々を言ふ。

【S行きさくみ】 「S」は接頭語、前出「い行き憚り」参照。「さくみ」は「さくむ」の連用形なれど、「さくむ」の語原については兩説あり、即ち「裂く」に「む」のつきたるもの、或は「さくくむ」(さ屈む)の中略とするものがそれである。意味は凸凹高低の道を上りつ下りつゆくと、難所を經渡る意である。

【賊まもる】 外寇に對して我が國を守備守護する意。卷二一十、四三三二に「不知火 筑紫の國は 賊守る 鎮の城ぞと」とある。

【山のそき】 「そき」は「そく」(退く)の名詞形。故に「山のそき 野のそき見よ」とは山の果、野の隅々まで(防

と、此の木の葉が對生してゐるので、むかへとつづく。君が行日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ
こゝに山多豆といへるは、これ今の造木といふ者なり (卷二、九〇)

〔口語譯〕

(白雲の) 龍田の山が露に色づいて美しく紅葉する時に、その龍田山をうち越えて旅に出で立つたあなたは、打ち續く多くの山々を、踏み破つて、外寇を守る筑紫の國へ到着なされ、山の果野の隅々まで、よく防備が整つてゐるか否かを見届けよと、部下の者共を分け遣はされ、山彦が答へる深山の奥までも、或は藁の這ひまはる深い谷の果までも、何處から何處まで國內の形勢をすつかり御覽遊ばして(冬ごもり)やがて冬もすぎ春になりましたならば、恰も空飛ぶ鳥の様に早く歸つてお出でなさいませ。龍田道の岡邊の道に、赤つゝじがつややかに咲き匂ふ時の、あの櫻子が咲き満つ時に、あなたがお歸になられます節は、お迎に参出ませう。

此の長歌は三段に想が分れてゐる。一は出發の状況であり、二は筑紫での活躍、三は歸任の時の想像である。しかして夫々の段の表現が實によく其の想に好適してゐる事を注意したい。白雲の 龍田の山の 露霜に 色づ

備が完全であるか否かを) 見よの意。

【伴の部】 節度使の部下の者をさす。トモもべも共にトモガラ、ナカマ、轉じては從者をさす。

【谷ぐくの さ渡る極み】 直前の「山彦の應へむ極み」と對をなす。「タニグク」は蟻蜂のこと、「さ渡」の「さ」は接頭語、よつて「藁が這ひあるく(地上)の果てまで」の意。

【國がたを】 國形を、國內の様子を。

【見したまひて】 語の構成は見したまひてである。(みし)の音轉「見し」だけで既に敬相なのであるから極めて鄭重な表現となる。即ち(何處から何處までも) 國內の状況を御覽になつて」の意。

【冬ごもり】 春の枕詞。

【飛ぶ鳥の】 空飛ぶ鳥の様に(早く)

【來まされ】 お出でなさいまし、「まさ」は崇敬の助動詞「ます」の未然形、「ね」は願望の助詞。

【龍田道の】 龍田山の麓の道の稱。

【丹つゝじ】 赤い花のさく躑躅。

【にほはむ時の】 此所の「にほふ」は色についての語なる事に注意。つややかなり、映えてうるはしき意。朝日ににほふ山櫻花」の「にほふ」と同じ。

【山たづの】 枕詞。「山たづ」は造木即ち今の接骨木のこ

く時に うち越えて旅行く君は 五百重山 い行きさくみ云々」の中には、重任を帯びて、堅き決心の下、山河幾百里を踏破して行く、一行の姿が髣髴とするのを覺える。しかも紅葉の季、即ち秋氣の節に配せられてゐる所に一入身のひきしまる感を高めるのである。(歸任を百花撩亂の春とせしを參看) 賊まもる 筑紫にいたり 山のそき 野のそき見よと 伴の部を分ち遣はし 山彦の應へむ極み 谷ぐくの さ渡る極み 國がたを 見したまひて」の中には、任地に於て、多數の部下を指圖し、以て國內の果てへ隅々に至るまで、立派に大使命を遂行する雄々しい姿が伺はれ、更に第三段に於ては想は一轉し見事重任を果して揚々歸京する様を、陽春再び廻り來りて、なつかしの龍田道の岡の邊には、赤つゝじと櫻花と其の美を競ひつゝ、恰もそのよき日を祝するが如く、咲き匂ふ背景の中に、萬人よろこび迎へる様が、實によく表現されてゐると思ふ。

反歌

【千よろづの軍】 千萬の軍兵。
【言あげせず】 言葉に出してことごとしく言ふことをせず
【取りて】 打ち取りて、打ち平けて(尙、第二課参照)
【來ぬべき】 キぬべき。「ぬ」は完了の助動詞で動詞の連用

形に續く。生徒は不用意にコぬべきと訓み易い。来るべき、来るには違ない、来る事の出来る。

【男】大丈夫、ますらを、ますらたけをの意。たとへ千萬の大軍の敵でも、何とも言はずに（仰々しく騒ぎ立てる事などせずに）易々と討ち平げて来るに違ない丈夫であると、私はあなたを實にたのもしく思ひます。さあ雄々しく恙なく行つていらつしやい。

長歌の方は、任の重さと其の權勢の偉大さを述べ、其の無事歸任の際はお迎へ申さうと言ふので、何處迄も尊敬景仰の情を表現してゐる。然るに此の反歌は心機一轉字合を激動する態度に出てゐる。重任を帯びて遠く使する將軍を送るに、實にふさはしい格調と言ふべきである。宇合が此の時「往歲東山役、今年西海行、行人一生裏幾度倦邊兵。」とよんだ事が懷風藻に見えてゐる。

【大伴家持】旅人の子。父が太宰帥であつた時には同府に在つた。其の後越中守として任地に赴き、更に因幡、薩摩、相模、伊勢の守などを経、東宮大夫となり、延暦二年中納言となり四年歿。故に奈良朝末の人で、其の歌風も既に萬葉調末期の徴を示してゐて、素朴雄健より繊細優麗に化してゐる。卷十七以下は彼の歌を主なる内容としてゐる。

【慕振三勇士之名歌】勇士が其の勇名を世に轟かした事

を慕はしく思ふ歌の意。（卷十九、四一六四）

【ちちの實の】ちちのミの、枕詞。同音なるにより父にかかると言ふ。不詳。

【父のみこと】みことは敬稱。父上と言ふが如きもの。

【ははそはの】枕詞。柞葉は小楢の葉を言ふ。

【おほろかに】おほよそに、おろそかに、おろかに。即ち普通に、尋常一様にの意。

【心つくして 思ふらむ】あれやこれやと心を働かせて思ふであらう。

【その子なれやも】「なれ」は指定のなりの變化。やは反語もは感動の助詞。上の三句を一にすれば、尋常一様に親心をつくして可愛いと思ふ子であらうか、否々子と言ふものは兩親が種々に心を碎いて並大抵なことではなく、非常に心配される。その愛育によつて子と言ふものは育つのだ。（だから）云々と續く。

【丈夫や】「や」は感動の助詞。丈夫ともあるものはの意。即ち大丈夫としていやしくも此の世に生を享けたるものは。

【むなしくあるべき】無爲に安閑として朝夕を送つて可ならんやの意。

【梓弓】アツサユミ 枕詞としては張る（春）射る、本、末

などにかゝるが、此處は梓でつくつた弓、廣く弓の意。

【末ふりおこし】「末」は弓末をさす。即ち梓弓の弓末を振り起して弓を射んとする時の様を言ふ。

【投矢もち】ナグヤ 射る矢の事。

葦邊ゆく雁の翅を見ることが公が佩ばしし投箭し思ほゆ（卷十三、三三四五）

【千尋射わたし】遠方までも射渡し。

【劍刀太】刀に同じ。「つるぎ」は「釣り佩き」の約と言ふ。然らばもとは太刀の修飾語であつたのであらう。

【足びきの】枕詞。山にかゝるを原義的用法とすれど、同義なるより、足引の、峰上の櫻（四一五一）足引の八峰の雉（四一四九）などと用ふ。こゝも「八峰」にかゝる。

【八峰】「八」はむしろ彌とあるべき所、澤山の峰々の重なるを言ふ。重疊たる山。

【さしまくる】「さし」は接頭語、「まくる」は「任く」の連體形。「大君の任のまにまに」任命せられた（心）と續く。

【心さやらず】心にそむかず、心に反せず。

【名を立つべし】立派な名を立つべきであるぞよ。「も」は感動の助詞。

【口語譯】

子と言ふものは、父上が又母上が、並大抵の心つくし様

で可愛と思ふだけであらうか、否々、父母の一方ならぬ愛育によつて子は育つのである。それであるから、此の世にいやしくも丈夫として生をうけたものは、徒に無爲に過してよからうや、決して安閑たる一生を送るべきではないぞ、よろしく梓弓の弓末振り起し、矢をもつて遠方までも射渡し、劍太刀を腰にとりつけ、重疊たる山々をも越えて、任命されたる心に違はない様にして立派に任務を果し、以後後代の人々が語り傳へる様な立派な名を立つべきであるぞよ。

此の長歌の初は枕詞などのために、やゝ緩なる調子であるが、その子なれやも、丈夫や、むなしくあるべきには強き情の切迫せるを見、更に結局、名を立つべし、も亦雄渾である。久米氏と並んでの名家大伴の家持が、武人としての信念をのべたものとして、誠に佳作と謂ふべきである。

反歌

【ますらを】益荒男の轉と言ふ説もあるが、まさりをの轉とすべきであらう。健やかなる、建き、人に勝りたる男の義。手弱女の語参照。後には男の通稱と變ず。

【名をし】「し」は勿論強意の助詞。

【がね】接尾辭、何々のためにの意。古義に之根、云々する其れが根本と言ふ意より轉じて、それがためにとなる

事をのべてゐる。とにかく動詞・助動詞の連體形につゞいて副詞となる語である。何々が料に、何々がためにと。

梅の花吾れは散らさじあをによし

平城なる人の來つゝ見むがね (卷十)

大丈夫たるものは、立派な名をこそ此の世にたつべきであるぞよ。後々のきゝつぐ人々が後代まで語りつぐ事の出来る様にの意。

さて此等の長短歌の次に「右二首追」和山上憶良臣作歌こと左注がある。しかし其の憶良の歌とは「山上臣憶良病に沈める時の歌一首」として士やも空しかるべき萬代に語り續ぐべき名は立てずして傳へられてゐるものである。(卷六、九七八)

三 備 考

1 指導研究

萬葉集は言ふ迄もなく萬葉假名を以て記載されてゐるのであるが、本課は全部假名交りの形に改められてゐる。故に所謂訓讀には何等の困難もない筈である。但し或は上代特有の用語又は語脈などの關係で教授者の適切なる指導を必要とするものがないでもない。しかしそれは何處までも平明簡潔になされることを要すること枕詞の如きはその一例である。

一體此の如き有名なる古典になれば、論議の點も多く、註釋書研究書も多數に上る事として、ともすればなくもがなの説明に墮し易いものである。然し訓詁註釋は決して本課の所期する目的でない事を牢記しなければならない。萬葉集は歌集である。しかも本課に採用されたものは其の代表的名作であつて、之によつて萬葉歌の本質を味はしめんとするのであるから、ひたすらなる鑑賞味讀こそ何よりも緊要である事は言ふ迄もない。原文を顧み題詞を示し、或は本歌採用の和歌の前後を参照して見る事は固より必要である。然しそれは決して必要以上に走るべきものではない。徒らなる補説敷演に時を空費し、肝心なる歌そのものとしての面白み、その調べ、その想、その境地の美を味はふ事なくして終るが如きは、本

末顛倒も亦甚しいと謂はなければならぬ事を呉々も忘れたくないものである。

次に本課の教授に當つて一層大なる効果を收める爲には教授者自身が、和歌そのものに對し、とくには萬葉歌に對して熱愛を持つてゐる事が必要である。是は必ずしも本課のみについて言はるべき事ではないが、然し和歌は何處迄も味はふべきものであり感すべきものである以上、先づ教授者其の人に感動する所がなければならぬ。生徒の至り得ない所は、其の教師の感動のひびきを傳へて、より深き高き強き程度に迄導かなければならぬからである。教師の感動より醸し出される雰圍氣の中に於てこそ、生徒はより一層高次的なる味讀が可能であると思はれるからである。

更に和歌の生命を把握し得る一つの手がかりは其の調子、所謂節奏にあると考へられる。即ち景と情と調べとが如何に關聯してゐるかを味はふべきであらうと思ふ。しかし其の歌そのものに宿る調べは、何よりも朗々と誦して見る事が第一である。故に本課の取扱に於ても、幾度となく或は誦し、或は誦せしめる事が緊要である。かくて歌自身に脈うつリズムを感得し、或は靜かに味はせ更に進んでは、その然る所謂の考察をなさしめ、以て萬葉歌特有の表現的手法などをも理解せしめたいと思ふ。それによつて延いては和歌についての鑑賞眼・批評眼をも涵養し得る事となるであらう。

六 平安時代の文學

一 解 題

1 作者

編者自作の文。

2 主眼及び採擇の趣旨

前課を以て大和時代の文學を終つたので、更に降つて平安時代の文學を學習する順序となつた。そこで先づその時代の文學に就ての概説を試み、其の基礎の上に立つて次々の具體的作品の讀解をして一層有效ならしめんとするに在る。

二 解 釋

1 語 釋

【平安奠都以來……約四百年】 桓武天皇が平安京に奠都遊ばされたのは天皇の十三年（一四五四）であり、鎌食幕府の創建は建久三年（一八五二）である。
【遣唐使の廢止】 宇多天皇は寛平六年（一五五四）菅原道真等の建議により遣唐使を廢止された。
【織細】 センサイ こまやかなこと。織は略字、正しくは

織である。意味は細と同じ。
【洗煉】 センレン 思想を整理し詩歌文章などを推敲すること。洗練ともかく。refine。
【生活情趣化】 生活を目して單なる事務的なるものと考へ、生活以外に情趣を求めようとするのではなく、生活そのものをして情趣豊かなものとなさうとすること。

行往坐臥・衣服調度・言語應對すべてに情趣を求めようとする態度。

【草假名の發達】 サウガナとは平假名の古名である。假名はカリナの音便、名は字の義。眞名（漢字）に對する語。「草」は漢字の草體から出た故に言ふ。萬葉假名の時代を経て、假名の萌芽とも見るべき漢字の異體は、奈良朝頃から現れてゐる。そして平安初期には片假名・平假名に分化して、片假名は大體男子が漢籍や經文の傍訓に用ひ、平假名は特に女手と稱される様に、女子に愛用された。片假名・女手の名は字津保物語に見える。

【女流文學者の輩出】 紫式部・清少納言・藤原道綱の母（蜻蛉日記）藤原孝標の女（更級日記）、小野小町・和泉式部・赤染衛門・伊勢大輔等は其の主要なる人々である。

【公事】 クジ おほやげごと。すべて、朝廷にて行はせらるる政務諸儀式の稱。公事根源（一條兼良撰）には正月の四方拜より十二月の追儺迄、年中の儀式諸祭事の記載がある。

【好尚】 カウシヤウ このみ。流行。尚は「たつとぶ」意。
【後宮】 カウキユウ 宮中奥向の殿舎。天子の居なる前殿の後にあるによる。ウチノミヤとも稱し、后・妃・女官等の住居せらるゝ所。掖庭。椒房。白居易の長恨歌に「後宮華麗三千人」とあり、又大平記十二、大内裏造營事の

條に「三十六の後宮には、三千の淑女、妝」とある。さて此處は特に后、中宮をお指しする事は下文によつて明らかである。

【才媛】 サイエン 學問ある婦人を言ふ。才とは學問・文學・才識等の謂である。例へば秀逸なる學力を秀才、漢學を漢才と言ふが如きである。

【機縁】 キエン 因縁、ちなみ、機會。

【もののははれ】 「もの」は物であり、「あはれ」は「あゝ」と呼ぶ聲の中に含まれる心、感じを言ふ。故に語義は「物ごとのおもむきに感ずるところ」の謂である。然し春はたゞ花の一重にさくばかりもの、あはれは秋ぞまされる

戀せずは人は心もなからまし物のあはれはこれよりぞ知る

等の例を始め、「もののははれ」或は單に「あはれ」の語は平安文學の中に數多く見出され、それは平安人の理念であり、又平安文學の理想でもあつた。特に宣長が源氏物語の評論に於て（紫文要領―源氏物語玉の小櫛）源氏物語は勿論、すべての物語の基調をなすものは「もののははれ」の精神であると論じてより、特に多くの人の注意する所となつたのである。以來種々な説明が試みられてゐるが、こゝには参照するに足る二書の名を擧げるに

止めておく。

國文學を流れる三の精神

〔上代日本文學の研究〕久松潜一氏

〔文學序説〕土居光知氏

日本文學の展開

【理念】 理性によつて得たる最高概念。之を理想の語に比較すれば稍々趣の異なる所がある。理想とは實現さるべしと想像される完全特態、又は到達せんとする終局を言ふ語であるからである。換言すれば理念は直ちに理想と仰がれる事が可能であるが、理想は必ずしも理念ではないと言ふべきであらう。

【漢詩文の隆盛期】 平安初期には上に平城・嵯峨・淳和の三天皇何れも好文の天子で在らせられ、特に嵯峨天皇は勅才明敏詞藻豐麗、以て卓拔優秀なる聖作をものされた爲に皇女有智子内親王を始め奉り、或は白樂天に比せられた小野篁、或は唐人をさへ驚嘆せしめたといはれるかの空海等多くの名家が輩出するに至つた。天皇御一代の間に凌雲新集、文華秀麗集、經國集の撰集があり、誠に本邦漢詩文史上稀に見る隆昌を致したのである。

【御堂關白】 藤原道長。

【院政時代】 白河天皇の應德三年(一七四六)十一月廿六日第三皇子善仁親王(堀河)「八」は皇太子として即日讓位し、上皇(白河)「三四」尙ほ政を院中に聽かせらる。是

れ院政の始であり、以後白河法皇頼朝の幕府開基迄に至るのである。

【凡そ一百年づつを一期として】 今本文に即して次に表示して見よう。

漢詩隆盛期(弘仁前後)……桓武—宇多……二五年)……前期

和歌興隆期(延喜天曆)……醍醐—花山……九年)……中期

物語全盛期(御堂關白)……一條……後一條……八五年……中期

文藝分裂期(院政時代)……白河—安徳……二〇年……後期

【歌謡】 中古の物語は總括して野曲ノノカキとよばれるものであるが、それには幾多の種類がある。今其の項目を記せば次の如くである。

神樂(八〇首) 催馬樂(六一首) 東遊(六首)

風俗歌(二六首) 朗詠(公任—和漢朗詠集。基俊—

新撰朗詠集)

聲明(佛會) 今様等。

而して此等のものが行はれたについては夫々の因由が考へられる。即ち其の一は和歌が歌謡としての性質を失つて既に筆の文學、目の文學と化したため、別に諷詠すべき口の文學、耳の文學が欲求されるに至つたこと。第二は漢詩文の隆盛の影響によるもの(朗詠)、第三は佛教の興隆に伴ふもの(聲明)等である。さて梁塵秘抄(後白河御撰)は其等の雜藝を記載されたもので卷一・二が

發見せられた。

【物語や日記や隨筆は、何れも和歌の趣味を基とし……】

物語・日記・隨筆などと和歌との關係について考へるに参考となることは、例へば和歌の詞書、或は歌物語と呼ばれる一群の存在すること。伊勢物語・大和物語等は其の代表的のものであるが、伊勢物語は昔ありける男を中心とする歌物語であつて、大和物語も贈答歌中心の歌物語が各篇獨立して居り、特に前半のみに限られる點に此彼差異を存するのみで、やはり同系統のものである。

しかも伊勢物語の別名を「在五中將の日記」と稱する事は、和泉式部日記が別に和泉式部物語とも呼ばれるのと併せ考ふべき點である。尙和泉式部日記より歌を取り去つたならば果して如何であらうか。尙多武峯少將物語(高光日記)は日記と物語とを兼ねた作品である。以て和歌と日記物語等との關係の一斑を伺ひ知る事が出來よう。

【古今集が勅撰せられた】 醍醐天皇の延喜五年(一五六五)に紀貫之・凡河内躬恒・紀友則・壬生忠岑等が勅を奉じて撰進した歌集である。勅撰歌集の翹楚で永く後世に範を垂れる事となつた。萬葉集に入らぬ古き歌、自らのをも奉らしめ給ひてなむ(同集序)とある通り、萬葉以後當代迄の秀歌を精撰し約一千一百首を十三の部立をなし

二十卷としたもの。

【優美繊細な歌風】 古今集は讀人不知、六歌仙、撰者時代の三期に分ちうるが、今其の中心をなす撰者時代と萬葉集との歌風を比較して見るに、

格調 二句切、四句切、無切 ↓ 三句切
萬葉集 七五調(雄渾莊重) 古今集 七五調(流麗)

修辭 枕詞序詞、繰返 ↓ 掛詞縁語其の他譬喩・擬人對照法等技巧の妙を極む。

表現 純眞熱烈なる感情を雄勁に表現す ↓ 優麗典雅な感情を洗煉された技巧により表現す。

終止形を多く用ふ ↓ 愛情を反省し經驗を想起し疑問推量の形をとる。

客觀的直覺的 ↓ 主觀的、理智的、觀念的、思惟的。

【新風を唱へる作家】

古今集勅撰の後、後撰・拾遺兩集があらはれたが、何れも古今集の後塵を拜するにすぎない。その後物語全盛期を経て白河天皇以後即ち院政時代になり、後拾遺和歌集が現はれるに及び、佛教思想を取入れ、幽寂雄勁なる所に新味を見せるに至つた。該集には曾根好忠と共に改新派の頭目たる和泉式部の作が第一の數を占めてゐる。そ

の後金葉集に於ては題號・部立・卷數・内容皆一新された。次の詞花集も亦今迄に見ざる最小の歌數である點に傳統を顧みざる事が伺はれ、好忠、和泉式部の作歌を最も多く取入れてゐる。當時基俊は保守派（俊賴金葉集の撰者）は革新派の頭目であつた。次に千載集があらはれ即ち俊成によつて保守・革新の二派は統一されるに到つた。體裁上は二十卷にして序文も具へ、その他種々後拾遺の昔に倣ふ事となる。歌風は金葉詞花の奇に走らず中正穩健なものとなる。

【更に深い立場で統一せられ】

俊成は壯年（二五）の頃まで革新派の俊賴に私淑し、其の死後は保守派の基俊から歌學を受けた。かくて新舊を統一するに至るのであるが、彼は幽玄體と云ふものを以て二條家の歌風とし、以て平安末期の歌壇を統一し後世永く模範とせられるに到つた。幽玄の語は種々論議もあるが、今説明を加へるならば、

ものあはれ（道長時代）無常觀（平安末期）
優美典雅な情趣 + 靜寂（の思潮）

幽玄↓新古今、連歌、謡曲、芭蕉。

【神樂】カグラ 神樂歌のこと。朝廷の儀式又は諸神社の祭禮の舞樂に用ひられたもの。多くは古今集の大歌所歌

時代に新作した俗謡である。歌曲の世俗化をはかり娛樂的に諷詠する事を目的としたもの。多くは七五、四句より成立する。弘法大師作と云ふ、いろは歌を今様の嚆矢としてゐる。おそらく和讃の影響によるものであらう。

今様
法華

生死の大海ほとりなし
妙法蓮華は船筏

佛性眞如岸遠し
來世の衆生渡すべし

【朗詠】漢詩文中の佳句、又は和歌に曲節を附し琴や琵琶に合せて高吟するもの、之を郢曲（詠曲とも）と言ふ。（後に平安期に流行した謡物の總稱となる）。尙先述「歌謡」の語釋の項参照。

【梁塵秘抄】先述の通り後白河法皇の御撰。日本文學講座の中に「梁塵秘抄研究——志田義秀氏」がある。

【伊勢物語】作者年代を詳にしない。古今集前後の作と云はる。全篇百二十餘章より成る歌物語。内容在原業平に關するもの多く、よつて作者に擬せられてゐるが確證はない。古異本冒頭は齋宮の事である爲書名が出たと云はれてゐる。文章は簡素平淡の中にも優雅を存し、そこに一大特色が存する。

【大和物語】作者年代に關し諸説あるも未詳。天曆頃前半が、花山院の頃後半が書かれたものとも言ふ。第一部

拾遺集の神樂歌の部に出でたるものを、平安朝に入り、貞觀延喜及び一條天皇時代に撰譜撰章が行はれ、今に傳はると言はれる。三十七曲ある（庭燎・採物・大前張・小前張等）庭燎を除く外「本歌」「末歌」の二部より成る。【催馬樂】サイバラ 遊宴歌謡の一。もと路頭巷里の歌謡であつたが、平安初期（醍醐天皇の御代撰定、後増補すと言ふ）宮廷貴族の間に翫ばれるに至つたもの。次に神樂と并に一例を示さう。

神樂

本

しろがねの 目貫の太刀を 下げ佩きて ならの都を
ねるは誰が子ぞ ねるは誰が子ぞ

末

いそのかみ ふるやをとこの太刀もがな 組の緒垂で
て宮路通はむ 宮路通はむ

催馬樂

飛鳥井

飛鳥井に 飛鳥井に やどりはすべし おけ かげも
よし かげもよし みもひも寒し みまくさもよし

【今様】イマヤウ 詳しくは今様歌と言ふ。語義は當世風の歌の意。即ち神樂・催馬樂等の如き舊調を變じて平安

は贈答歌中心、第二部は説話中心（説話文學の祖としてやがて今昔物語の誕生すべきを示してゐる）伊勢物語と共に歌物語と呼稱されるが、彼の同一人を主人公とするに反し、此は各篇獨立せる所にその差が見られる事は既述の通りである。伊勢物語に比較すればやゝ冗漫の嫌があつて典雅の趣に乏しい。但し此の兩書は源氏物語と共に後世の歌人から見るべきものとして重んぜられた。

【竹取物語】最古の物語とされてゐる。作者年代共に不明。源順を擬するものもあるが疑はしい。但し作中の人物・官職・文章・用語等から、延喜以前の作となす點は諸説が一致してゐる。竹取翁物語、かぐや姫物語とも呼ばれるが、何れも作中の人物からである。萬葉（十六・竹取の長歌）記（垂仁伽具夜比賣）及び支那の神仙譚より材を仰いでゐる。天界の神女と當時の貴族社會との調和對照の好を得、童話的物語としてすぐれてゐる。文章は平明簡素。

【傳奇的物語】夢のやうな戀愛・冒險・任侠・怪奇事件等、人間の日常生活にはあまり起り得ぬやうな異常事件を、或は誇張し、或は敷衍して書いた物語。寫實的物語に對す「竹取物語」や「南總里見八犬傳」はその代表的なものである。

【この二系統】言ふ迄もなく歌物語と傳奇物語をさす。

【寫實的】ありのまゝをうつしとらうとする傾向。傳奇的、浪漫的に對す。思想を構成するよりは實際の狀態を寫出しようとする態度。

【落窪物語】作者年代不明。源順が擬せられてゐる。宇津保物語との前後についても議論がある。普通は後と考へられ、且つ男子の筆と認められてゐる様である。主人公の姫君が落窪の君と呼ばれたところに書名が生じてゐる。繼子いぢめの物語が主題。家庭的事件として筋は單純であり、場面は局限されてゐ、作品としてよく統一され、性格描寫などもよほどまでに進歩してゐる。源氏物語に影響を與へてゐる。

【宇津保物語】作者年代不明。源順或は紫式部の父なる藤原爲時などが擬せられ、冷泉から圓融の頃と考へられてゐる。作中の人物が「大木のうつぼ」に住んだと云ふ所から書名が生じてゐる。竹取を踏襲し、複雑化したと見る事が出来る(二十卷)。但し質に於ては竹取に劣ると謂ふべく、源氏物語への橋渡しとして歴史價値に注意されるだけである。

【源氏物語】作者は紫式部。その傳記は明らかでないが、幼にして穎悟、父爲時に嘆稱せられた事は自らその日記に語るところである。夫宣孝との間に一女大貳三位を設けた後、長保三年には夫と死別し暫く寡居するところあ

【狭衣物語】サゴロモ物語。作者年代諸説あり。作者は紫式部の女大貳三位局かとも云はれる。狭衣大將が作中の主人公で源氏模倣の痕跡は著しいが、筋はよくまとまつてゐる。

【濱松中納言物語】更級日記の作者の手になつたものかと言はれる。御津の濱松物語、又は單に濱松物語とも云はれる。作中の和歌よりの名。作中の世界を唐土まで擴大したところに特異な點が見られる。首卷が缺けてゐる。

【榮華物語】世繼物語又は單に世繼ともよばれた。作者年代共に未詳。宇多天皇に筆を起し堀河天皇の寛治六年(一七五二)に筆を止めてゐる。四十帖。但し殆ど大半を道長の爲に費してゐる。そこに著作の目的が知られる。編年體であり、且つ道長を敘するに當つて極力讚美し、時には誇張にまで走つてゐる點に大鏡との大いなる差異がある。文章は優麗と謂ふべきも、冗長にして氣力を缺き大鏡には及ばない。但し公事・節會・修法・出産・詩歌・管絃の遊などの叙述極めて精細である。

【大鏡】世繼物語とも云ふ。序文がある。ある寺で講師侍つ間に二老人が昔語をし、若侍が傍で批判をすると言ふ體裁である。文徳天皇より後一條天皇の萬壽二年(一六八五)までを紀傳體の組織により、しかも等しく道長を中心としつゝも、批判的記述の態度である點が榮華と異な

つたが、やがて一條天皇の中宮彰子に仕へた。此の寡居の間に源氏物語は起稿せられたものであらうと云はれてゐる。直接には彼女の日記によつてその人となりを知られるが、安藤爲章の紫家七論の如き研究書もある。

源氏物語五四帖は二分して考へられる。第一部四一帖と第二部十三帖である。第二部橋姫以下十帖を世に宇治十帖と言ふ)しかして前者は光源氏を中心としての物語であり、後者は源氏君の子薫大將の物語である。

【錯綜】サクソウ 入りまじること。

【抒情詩】ジョジャウシ 自家の感情を抒べたる詩。敘事詩や劇詩に對す。こゝでは源氏物語の文章が、自然人事の物にふれ事につけて懐く感情ののべ方が恰も抒情詩をよむ如き感じのある意。

【繪畫的な情趣】繪に對するが如き趣。即ち源氏物語の敘述が自然と人事との渾融が適切である爲、其の情景は恰も一幅の畫に對するが如く生々として讀者の腦裡に描かれ、印象極めて鮮明なる事。

【纏綿】テンメン からみつく、まとひつく、入りこむこと。

【心ゆくばかりに】「心ゆく」とは氣がはれる、氣が済む、心に満足する意。故に全體として實に小氣味のよい程までにの意。述べ得て餘す所なきを言ふ。

るのである。謂はゞ史論であり、所謂四鏡即ち鏡類中の第一に位する作品で、長く此の體裁形式は踏襲される事となつた。作者には定説がなく、年代にも諸説があり、後冷泉・崇徳の間かと言はれてゐる。文章は簡潔雄勁。

【歴史物語】歴史的事實による物語である。さてかく、如き作品が生じた因由については當時の社會的風潮が強く影響してゐると考へられる。即ち平安末期は藤原氏は衰運を辿り、貴族文化は崩潰する時期であつて、やがて武士の世に變りゆく過渡期である。即ちかつての藤原氏を中心とする花やかな平安文化も只凋落の一路を辿るの時勢であつた。従つてこの社會的風潮を受け、人々は現在を卑下し過去に理想を見出す様になつた。かくて過去の時代に素材を求め、それを回想し憧憬する氣分を以て、其のはなやかさを紙上に再現しようとして試みたのが歴史物語である。

【説話文學】ある目的の下に説話を蒐集し分類し獨立の作品としたもの。遠くは弘仁の頃日本(國現報善惡)靈異記を始め、その後若干あるが殆ど漢文でかゝれ、佛教説話を中心である。國文としては大和物語の第二部にその端緒を發し、此の平安朝末期に至つて、今昔物語の外、打聞集・江談抄・唐物語等があらはれた。是も亦時代の作品であつて、即ち當時氣風沈滞文學上にも創作的の生々

發展の氣力を缺き、唯逸話・傳説・説話を蒐集筆録する事が行はれたのである。

【今昔物語】 コンジャク物語 「今は昔」と言ふ語り出して凡そ千有餘の説話を三十一卷にまとめたもの。即ち

- 卷一 → 五……(天竺)
- 六 → 一〇……(震旦)
- 一一 → 三一……(本朝)

中、八、十八、廿一は缺。宇治大納言隆國の作と考へられた爲に宇治大納言物語とも呼ばれたが實は疑はしい。價值については教科書に述べられた外、或は思想上、風俗史上、國語史上等も注意すべく、文章史上に於ては新文體を創始し(やがて鎌倉の普通文の源泉となる)文學史上後世の作品に幾多の資料を供給してゐる點に注目される。

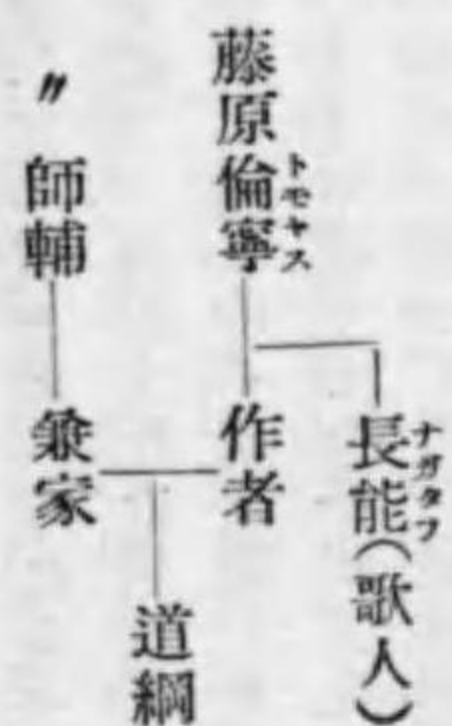
【輯録】 シフロク あつめかきしるすこと。

【紀貫之】 キノツラユキ 延喜五年古今集撰進の勅を奉じた事は既にのべた。當時彼は國文を以てかの有名なる序文をかいた。尙同七年大井川の行幸に陪して歌を詠じ、序を作つた。その後延長八年土佐守に累進し、承平五年歸京した。その際に婦人の如く装つてものしたのが土佐日記である。かくて彼は古今集時代の代表的歌人であると共に、兩序文に其の國文上の手腕をも示し、更に日記

文學の鼻祖としても偉大なる功績を残してゐるのである。

【土佐日記】 日記文學の祖。もと日記とは漢文の記録一般をさす名であつたが、後に和文を以て過去の經驗を反省憧憬批判したものに限られる様になつた。その嚆矢は實に此の日記なのである。朱雀天皇の承平四年十二月二十一日より五年二月十五日京都に入る迄の記述。作中滑稽諧謔に満ちてはゐるが、海上の不安と亡兒への哀悼の心を以て主題としたもの。文章蒼老枯淡。

【藤原道綱の母】 蛤蜻日記の作者。今系譜を略記すれば次の通りである。

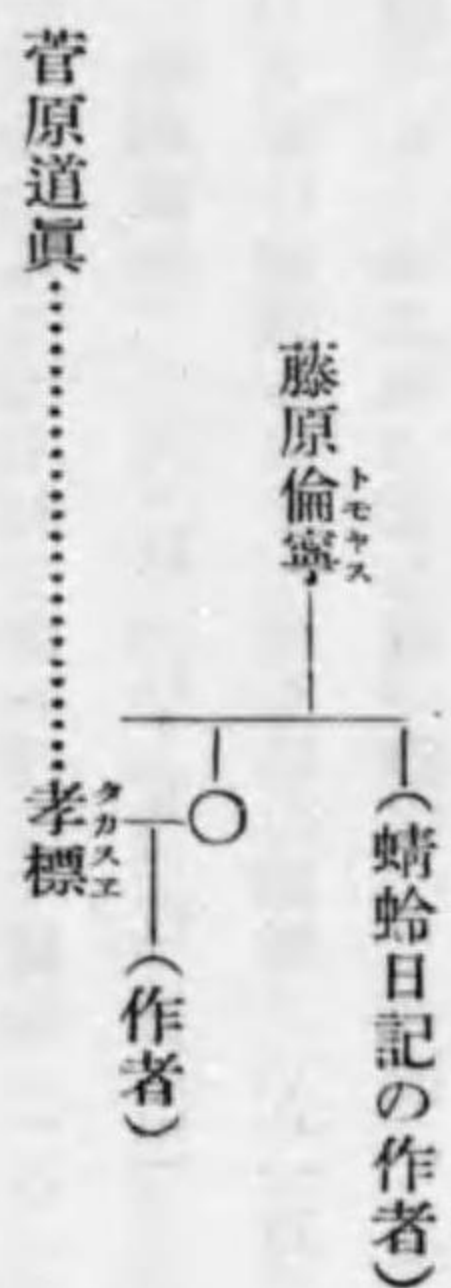


【蜻蛉日記】 かげろふ日記。文中の語による名。土佐日記の後約三十年位で世に出たらしい。前者が歌物語と關聯をもつ旅日記であるに反し、此は自己の感情生活の日記であるのが特異な點である。貞淑なる母性愛を中心とし、感情繊細・自然觀照は透徹してゐる。但し錯簡があり、難解な文とされてゐる。

【和泉式部日記】 長保五年敦道親王が式部の家を訪はれてより寛弘元年一月親王の家に伴なはれるまでの自叙傳物語。歌を中心とす。戀愛生活を中心とする歌日記のため頽廢的な色彩を存し世の非難をうけるを免れない。

【紫式部日記】 寛弘五年十月後一條天皇が道長の土御門殿で降誕し給うたのに筆を起し、同七年正月三宮の御五日の儀に筆を擱いてゐる。文章は和泉式部日記などよりもすぐれ、特に精到な觀察描寫は當時の風俗儀式等を知る好資料であり、隨所に見られる自己の述懐、女房の批評等は作者の性格研究の有力な材料である。

【更級日記】 サラシナ日記 作者は次の通り。



作者は父に伴なはれて上總の國に幼い日を送つてゐたが、十三歳(寛仁四年)の時都に歸る事となる。その思ひ出から筆を起してゐる。祐子内親王に仕へたが、既にして橘俊通の妻となり、一子仲俊を生み、其の後夫に死別した(天喜六年)。その間の母性愛時代の叙述を経て、更にその後淋しさの中に彌陀の慈光を仰ぐ思出の記事で

終つてゐる。作中數多き夢の記述が特に目立ち、そこに作者の性格が十分に伺はれる。順良・圓滿・純情の女性たる事を知ると共に、當時の女性の境遇の一斑をも伺ひ知る事が出来る。

【諦念】 テイネン 諦はつまびらか、あきらか、まこと。

【平安時代の女性の心の歩み】 夢多き少女時代に於ては、文學に心を奪はれて現實を忘れ、物語にある様な世界をひたすらにそこがれてゐるが、やがて人の妻として世の母として生きる事がさめての現實と知り、しばらくは夫婦愛・母性愛を中心としての生活を送るが、またしても幻想の世界を求めてやまず、かくて寂光みなぎる阿彌陀如來の淨土を欣求しつゝ、はかない生涯を閉づるのが當時の女性一般の姿であり、延いては今も昔も變らぬ女性の心の歩みであらう。

【双璧】 サウヘキ 一對の玉。優劣なくすぐれてゐる二つのもの。

【枕草子】 清少納言記とも或は清少納言とも呼ばれた。清少納言は梨壺五人の一人元輔の女。中宮定子(後皇后)に仕へた。枕草子は異本極めて多く、雜纂本と分類風のものとの二種ある外、字句の異同も亦尠くない。

【奇警】 キケイ 奇抜なこと。

2 文の構成

第一節 始—五〇頁一行迄 總論(一)

- 1 時代の範圍と先代文學との比較上の特色。(始—四七頁七行迄)
- 2 平安文學の特質、發生の因由。(四七頁八行—四九頁七行迄)
- 3 平安文學の理念。(四九頁八行—五〇頁一行迄)

第二節 五〇頁二行—五二頁一行 總論(二)

- 1 時期區分。(五〇頁二行—五一頁一行迄)
- 2 文學の種類と其等の相互間の關聯。(五一頁二行—五二頁一行迄)

第三節 五二頁二行—五三頁一行迄 各論(一) 和歌・歌謠

第四節 五三頁二行—五五頁終迄 各論(二) 物語

- 1 物語。(五三頁二行—五四頁一行迄) 貴族文學
- 2 歴史物語。(五四頁二行—五五頁五行迄)
- 3 説話文學。(五五頁六行—同頁終迄) 庶民文學

第五節 五六頁始—本課の終迄 各論(三) 日記・隨筆

- 1 日記。(五六頁始—五七頁一行迄)
- 2 隨筆。(五七頁二行—終迄)

3 文意

段落明快、從つて節意亦明白、更に文意の再説を必要としないと思ふ。生徒の理解をして一層明確ならしめる爲には、

各節各段の要旨を表解する作業を命ずるが最もよいと思ふ。

三 備 考

1 指導研究

平安時代四百年は國文學史上稀に見る隆昌期であつて、量に於て實に百花繚亂、目もあやなる有様であつた。故に其の各部に亘る精細なる了得は、僅かの時間や努力を以つてしたのでは容易に得らるべくもない。ことに生徒は殆んど實際の具體的作品を讀んでゐない事を注意しなければならぬ。かくて自然抽象的に流れるのは止むを得ない所であるが、本課のもつ使命を十分に考へて、直接には次々の教材學習のために、延いては彼等の國文學愛好心の涵養のため、大綱だけでも明確にさせたいものと思ふ。それには次の二點に特に注意しつゝ進めては如何かと思ふ。

即ちその一は單なる既定の事實として物を授ける態度を努めて避け、生徒をして考へつゝ學習させる事である。すべて事は興るべくして興り、亡ぶべくして亡ぶのであるからである。絢爛目もあやなる平安文學は果して如何なる因由によつて生じたのであらうか。更に小にしては物語の發生は如何なる動因によるものであらうか、更に進んでは物語の類型中に於て、歴史物語或は説話文學が平安末期に生じた事は如何に説明しうるであらうか等は其の一例である。かくて單に教師の説明によつて物を記憶すると云ふ姿より、生徒自身が自らの頭腦を働かせて眞に學習すると言ふ形に進み得る事と思ふ。こゝにともしれば抽象的にして無味乾燥なるものに墮し易い弊を免れうる手段がある様に思ふ。

次に試みたい事は此の科の作業化である。即ち單なる口耳の學に終る事なく、之を作業に迄發展せしめたいと思ふ。かくて記憶もより正確になり學習に生氣も生じ且つは彼等後日への大いなる参考ともなしうるであらう。各段各節、其の要綱を表解するを手始として、或は各文學類型(例へば和歌或は物語等)の變遷を夫々個別的に考へて、之を年代史的に配

列し、夫等を綜合する事によつて平安文學四百年の歴史を一目瞭然たるものにし、或はそこより本文に説く所の百年を單位とする各時期の概観を具象的なものにする等種々の方法が考へられると思ふ。かくて本課の項目による説明を一變して、年代史的の姿に於て眺める事が出来るであらう。それには天皇、皇紀年數、或は社會的の事件等を簡單に附記し、もつて簡明なる所謂文學史年表の所に迄進めたいと思ふ。この作業を上は大和時代より下は明治大正まで續行する事によつて、自然の裡に我が國文學史全體に亘る年表が製作される事になり、極めて有意義な事と思ふのである。

2 参考

こゝには平安文學史に關する主要なる參考書を次に掲げておく事にしよう。

先づ平安朝直接のものとしては

國文學全史(平安朝篇)

藤岡作太郎

文學に我が國氏思想の研究 貴族文學の時代

津田左右吉

國文學全史(平安朝篇上下)

五十嵐力

なほ語釋に於ける作品の解題には便宜上次の書を参照した事を終に附記しておく。

國文學史新講(上卷)

次田潤

七かぐや姫

(竹取物語)

一 解 題

1 竹取物語

「赫突姫物語」「竹取翁物語」とも言ふ。タケトリ、タカトリ(六百番歌合)に就て説もあるがタケトリが普通。我が國物語の始祖として古くから考へられてゐる。

「まづ物語の出で來はじめの竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合せて争ふ」(源氏物語—繪合卷)

古來多く讀まれ異本も多い。一卷本が普通で別に二卷・三卷の兩種本もある。(その他前課同物語の語釋参照)

2 出典

竹取物語の終末近くの部分を採用した。(途中省略の部分については何れも語釋の項に於て補つておいた)竹取物語については前課語釋の項参照。今本課採用の部分に至るまでの大要を次に掲げよう。

「讃岐造鷹と言ふ翁があつた。山に分け入つて竹をとる事を業としてゐたが、或日光る竹の中から三寸ほどの女兒を發見した。そこで之を養育してゐる中に三ヶ月ばかりで年頃の娘となり、その美しさは家の内も光りかゞやく程であつたので名を赫突姫と呼んだ。この姫の美しさをきいて懸想する者が相次いであらはれた中で、五人の者が特に熱心であつた。然し姫は種々の難題を課して、それを成就せしめなければ従はないと云ふ。即ち佛の御石の鉢(石作の皇子)、蓬萊山の玉の枝(車持の皇子)、唐土の火鼠の裘(右大臣安部御主人)、龍の首の五色の玉(大納言大伴御行)、燕の子安貝(中納言石

上臈^{カミツキ}等を取つて来よといふ難題である。然しもとより不可能の要求であるから、或は寶を求めようとして失敗し、或は姫を得たい餘りに贗物を造つて行くが、直ちに見破られると言ふ状態で結局其の志を遂げる事が出来なかつた。その中に姫の美麗である事が時の帝に聞え、これを入内せしめようとされたが、やはり従ひ申さなかつた。その後三年ばかりすぎ、春の初よりかぐや姫云々」といふ本課の部分へつゞく。

3 主眼及び採擇の趣旨

竹取物語は天界・地上の對立による非現實的な物語であつて、神性を具へた月宮殿の女子と人間界の人々との戀愛を描いた傳奇的物語である。既に上代文學に見える求婚傳説・神仙説話・神婚説話等の系統を受け継ぎ、更に當時の平安貴族の生活を織りなして構成された架空の物語である。其處には此の地上の人間が清らなる天界に對して抱く憧れの心が示されてゐる。その内容は特異な素材からなり、且つ一篇の物語として首尾よく整つてゐる上に、文體亦簡素と評すべく、物語の祖としてはその創作的伎倆のすぐれた點に注目すべきである。本課採用の部分はかぐや姫の昇天の條であつて、物語の最高潮に達した箇所である。地上と天界とを巧に對照しつゝ、説話を漸層的に發展せしめて行く所、寔に見るべきものがある。古雅掬すべき表現を通して、文學趣味を養ひ高雅な心情を陶冶するには好適の教材と思はれる。素材こそは架空的非現實的なものであるが、その表現は却つて印象鮮明、仲々現實的である。こゝに意を留めて十二分に味讀させる事を本課の主眼でなければならぬ。

二 解 釋

1 語 釋

【かぐや姫】 原文によると、三室戸^{ミムロ}の齋部^{イハヒ}の秋田^{アキタ}を呼んで命名を頼んだ所、彼は「なよ竹のかぐや姫」とつけたので

ある。「なよ竹」とは瑞々しいなよ／＼とした若竹の姿を以て姫の容姿を象徴し、旁々竹取の翁、竹の中から生れた事とのゆかりも持たしめたものなるべく、「かぐや姫」とは光り輝く程の美しさをもつ姫の意で、「かぐ」は「かがやく」「日影」「日光」「かゞよふ」「かげらふ」などの語を参照すれば、其の語義が想像される様に思ふ。「姫」と言ふ文字は「イ」が音符であつて、臣ではない。従つて姫は音「イ」で「キ」は慣用音である。

【月のおもしろう出でたるを見て】「おもしろう」は「面白く」の音便である事は勿論であるが、意味は月が趣ある様に出でゐるのを見てと云ふ事。

【月の顔見るは忌むこと】月の面を見ることは忌み嫌ふべく避けるべき事であるとの意。當時の風習であるが、恐らくは大陸地方から傳へられた土俗的信仰であつたかと思はれる。かやうな例は、源氏物語、宿木の卷に「老人どもなど今はいらせ給ひぬ月見るは忌み侍るもの」とあり、又後撰集戀に「獨寝のわびしきまゝに起居つゝ月をあはれと忌みぞかねつる」とあり、白氏文集にも「莫^ナ對三月明^{ミヨ}思^シ往事^{コト}損^ツ君顔色^{キミカシ}減^ツ君年^{キミトシ}」と見えてゐる。

【人ま】 ヒトマ 人の見ぬ時。人の居らぬ間。

【ふづき】 陰曆七月の稱。文月^{フキツキ}(七月に「たなばた」の行事あれば)の略と言ふ。

【望の月に出でゐて】モチの月、即ち十五夜の月が照つてゐる晩に、家の端近く出でゐて。

【近く使はるる人々】 姫のそば近く使はれる人々。

【あはれがる】 元來は「愛で賞玩する」の意。月見ることを甚しく好むことをいつてゐる。但し、次の「思し歎く」とあるべし」と對照して考へると、月を眺めては詠歎してゐる」の意に解すべきである。

【たゞ事にも侍らざめり】 普通ではないやうだ。「ざめり」は「ざるめり」の約されたもの。

【よくよく見奉らせ給へ】「奉らせ」はかぐや姫に對する敬意。「給へ」は翁に對する敬語。即ち「よくよく(何故かを)見申し上げなさいませ」の意。

【なでふ】 如何なる、何と言ふ、どんな。こゝでは「なでふ」はこれにつゞく「心地」にかゝる形容詞的修飾語である。

【うましき世に】 この好ましい、楽しい世であるのに。

【世の中心細くあはれに侍り。云々】 世の中がたゞなんとなくはかなく、心細いものに思はれるだけで、別に歎き悲しむ様な事はあらう筈がありません。

【なでふものをか歎き侍るべき】 何物をか歎き申すべき。歎き侍るべき何故もなし。

【かぐや姫のある處にいたりて見れば】「ある」は「居る」

の意。心配のあまり翁は姫の居る所に行つて見ると、「なほ」は猶(やはり)の意、即ち「なでふものをか歎き侍るべき」と言つてゐながら、それでもなほの意。

【あが佛】「あは我が古言、がは」の意。よつて「我が佛よ」と姫によびかけたのであつて、どんなに寵愛してゐたかゞ伺はれる。一體あが佛とは我が一身を守護し下さる守り佛であつて、身近く安置し寸時も忘れる事のないものである。こゝは勿論轉義である。「我が最愛の者よ」といふのに、敬の意を添へた表現である。

【思す】オボす お考へになる、お思になる、思つていらつしやるの意。思ふの敬意を含んだ語である事に注意。

【物なむ心細く覺ゆる】「物」は「物寂し」、「物悲し」、「物あはれ」などの多數の用例によつて察せられる様に、別に特定のをさすのではない。「物心細くなむ覺ゆる」と同意。故にこゝは「萬事につけてなんとなく心細く思はれるのです」の意。「なむ」は「覺ゆる」と係結の關係。

【夕闇には】ユフヤミには。夕闇は、日没して、月の未だ出ない間の闇の間をいふ。

【月の程になりぬれば】月が出て来る時刻になると。

【つかふものども】翁が使ふ者達。

【人目も今は包み給はず】「ともすれば人まには」「いといたく」と前文にあるのに對應して、描寫の進め方に注意

させるべきである。

【必ず心惑はし給はむものぞと思ひて】きつと(親達が)心を惑はしなさるであらうと思つての意。「心惑はし」は心配のあまり狼狽するをいふ。

【さのみやはとて打ちいで侍りぬるぞ】(しかし、何時かは申し上げなくてはならぬ事であるから)さうひた隠しにばかりしてゐることはとても出来ないことだと思つて、今は申し出すので御座いますよ。さのみやは隠し果つべきと思ひて」と添加して解釋を加へるがよい。「打ち」は接頭語、「いで」は語りの意。

【昔の契ありけるによりてなむ】前世の因縁があつたものですから云々、即ち此の世に降る様になつた事を、前世からの約束と見てゐるのであつて、そこに佛教的思想が伺はれる。

【まうで來たりける】参り出で來たのでありました。参つたのでありました。「ける」は上の「なむ」の結。

【この月】八月をさす。

【來むす】來むとす。「す」は「とす」の約つたものと言はれる。「する」、「すれ」と變化する。故に「す」のままならば助動詞に入れるべく、或は還元して二つの品詞に取扱ふも亦一法。「人々がやつて來ようとしてゐる。」「人々がやつて來る筈です」の意。

【さらす罷りぬべければ……】「さらす」は否でも應でも、即ち避けることが出來ず、やむを得ずの意。やむを得ず

お暇しなければならぬので、さうすればきつと親達がお歎きなさるに違ない)そのお歎きになる事が私にはつらく悲しいので、この春から歎いて居るので御座います。

【こはなでふことを宣ふぞ】「これは何と言ふ事をおつしやられるか。即ち翁はどこ迄も「わが子」と考へてゐるのであるから、姫の今の詞をきいて實にその意外さにあきれたのである。

【見つけ聞えたりしかど】見つけ申したのであつたけれども、「聞え」は敬意の助動詞的用法。

【茶種の大ささ】こゝは誇張して、ごく小さかつたことを示したのである。原文物語の初の方に「それを見れば三寸ばかりなる人いとうつくしくてゐたり」とある。

【我が丈たち竝ぶまで】自分と同じほどの身長になるまで。

【まさに許さむや】どうして迎の人のつれてゆく事などを許さうや、決して人手などには渡さない。「まさに」の用法現代と小異がある。即ち「いかで許さむや、正に許さず」といふのを一言に詰めたものであつて、急迫の感が生きて感じられる點に注意。

【泣きのしる】大聲をたゞて泣き騒ぐこと。「のしる」

は騒々しく大聲たて、叫ぶことをいふが、こゝは、ひた泣きに大聲で泣くことをいつてゐる。

【來しかども】コしかども キしにても文法上は誤でないがコしの方が普通。

【かの國の父母云々】あの月の都に居られる自分の父母の事も一向考へずに、こゝにはこんなに迄永く遊び申して(あなたがたに)お慣れ申しました。(それですから月の都へ歸ることは)別にうれしい心地もせず、却つて皆様にお別れするのが)悲しいだけです。しかし氣が進まぬながらも歸らなくてはならぬ様にならうとしてゐるので

す。

【使はるる人々】姫のそば近く使はれてゐる人々。

【年頃ならひて】年久しく姫君に慣れたしんで。

【立別れなむことを云々】お別れする事を(考へるにつけても日頃)姫の氣だてが上品で、(また)容姿が美しかつたことを見なれてゐるものであるから、(別れたならば)どんなにか姫を戀しく思ふであらうと(前以て考へるだに)堪へがたく、湯も水も咽喉へ通らず、(翁夫婦や姫と)同じ心に悲しがつてゐた。

【帝】ミカド。

【御使遣はさせ給ふ】この次に左の文が省略されてゐる。故にこの御使は八月十五日以前のものである事に注意。

即ち、帝は竹取が家の事を聞き召されて、取敢へず使をして様子を伺はしめ、更に愈々その當日である八月十五日少將以下二千人遣はされた事になる。

「御使に竹取出で會ひて泣くこと限なし。この事を歎くに、髪も白く、腰も屈り、目も爛れにけり。翁今年は五十許なりけれども、物思には片時になん、老になりけると見ゆ。御使仰言とて『いと心苦しく物思ふなるは、實にか』と仰せ給ふ。竹取なく／＼申す、『この十五日になん、月の都よりかぐや姫の迎にまうで來なる。たふとく問はせ給ふ。この十五日には、人々給はりて月の都の人參うで來ば捕へせん』と申す。御使かへり參りて、翁のありさま申して、奏しつることどもを申すを、聞き召して宣ふ『一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、且暮見馴れたるかぐや姫を遣りては、いかゞ思ふべき』とて、」

【かの望の日】 月の都から迎が來ると云ふその八月十五日の晩。

【司々に仰せて】 ツカサ／＼。夫々の役所に命じ給うて。

「司々」は次の「六衛のつかさ」をさす。

【高野大國】 タカノのオホクニ。

【六衛】 ロクエ。六衛府のこと。頭註参照。其の府の官人は皆弓箭兵仗を帯びて、宮城の守護、又は行幸の供奉に

昔は、塗籠を土藏代りに使用して貴重品などを収めたのである。

【抱かへてをり】 「抱かふ」は下二段活用、だきかゝへる、抱くに同じ。今「だかへる」とも言ふ。

【戸をさして】 戸を鎖して、しめての意。「さす」は棧を刺して閉づる意、(四活)とさす(鎖)と言ふ語も、戸さすの合成。

【かばかり守る處に云々】 これ程まで(嚴重にして)守つてゐる處に、(たとへ)天人が迎にきて(も)天の人にも(天人は如何なる不思議な力を持つてゐるか知れないが)負けようや、決して負けはしないぞ。

【つゆも】 すこしでも。

【ふと】 直ちに、早速。

【蝙蝠】 カハホリ 川守の轉訛といふ。(井守、屋守等の語参照) 河岸の石間、橋下などに多く棲むによる名。今は音便で「かうもり」と言ふ。

【さらす】 見せしめのために外にさらすのである。

【頼もしがりをり】 「がる」は「氣ある」の約で語の終につき、その風す、めかす、ぶる意をあらはす。「嬉しがる」、「欲しがる」の如し。

【したぐみ】 準備。下組。(心組などの語参照)

【あの國の人をばえ戦はぬなり】 あの月の都の人とは戦ふ

當る武人である。故に翁の家のまもり遣はされたのである。

【築地】 ツイヂ ツキヒヂ(築泥)の音便、ツイヒヂの略言。古くは泥土を築き固めた今の土手の如きもの。柱をたて、板をそへ、泥土にて其の間を填め築き、上を瓦にて葺きたる垣をも言ふ。こゝは翁の家の周囲の土塀と見るがよい。ツキジ(築地)は沼や海を埋立てたる地にて別語。

【あける隙もなく】 あいてゐる隙間もなく。

【この守る人々も】 「も」の意味は「前の六衛府の兵士が弓矢を帯びてゐるのは勿論、翁の家の人々も」の意と見てよいであらう。

【居り】 良行變格であるから、「居り」が終止形なること注意。

【母屋】 モヤ 正しくは身屋(ムヤ)とかくべきもの、モヤとなまり、母屋とかくに至つたものであらう。家の四方の庇の間(ヒサシノマ)に圍まれた中央の室をいふ。

【姫】 オウナ 語義は老女の意であるがこゝは頭註の通り。

事が出来ないのです。人をばの語は古格なるべく珍しい用例である。

【射られじ】 「られ」は可能。

【猛き心つかふ】 猛々しい心をはたらかす、役に立てる。即ち勇猛な心を持ってそれを役にたてる。

【さが】 そいつの、そやつの。「そが」に同じ。

【かなぐり落す】 亂暴に引つかいて落すこと、かなぐりすてるの語参照。

【こゝらの】 多くの、の意。こゝだく、こゝだに同じ。

世の中はいかにくるしと思ふらむこゝらの人の恨みらるれば (古今)

【恥見せむ】 恥をかゝせてやらう。「尻をまる出しにして恥かゝせてやらう」といふのは誠に面白い表現である。

【聲高】 コワダカ。

【まさなし】 正無し、よくない、醜い。こゝは「きゝぐるしい」の意に取つてよい。

【いますかりつる志】 「いますかり」は坐すに同じ。おはす、あらせらる意。故に今迄手厚くして下さつた志のこと。

【罷りなむすること】 なむは未來完了。「する」は上述「す」の項参照。罷りなむとすること。

【長き契】 翁夫婦と姫とが末長く暮すことの出来る前世からの因縁。

【親たちのかへりみ】 翁の老後の世話。孝養。
 【罷らむ道も安くもあるまじきに】 歸りゆく道々も（御恩報じをしない事であるから、それが氣がかりになつて）心安きこともあるまいと思ふによつて。
 【月ごろも出でゐて】 今まで、月の出る頃には度々出て居て。

【今年ばかり】 せめて今年だけでも猶豫をされたいと。
 【いと清らにて云々】 清らは美しいと言ふよりは清らかに澄みきつた綺麗さのあることをいふ。氣品のある美しさである。そこに月の都の人の様子をあらはしてゐる。古寫本に「けそう」とある。宣長は「けうら」の誤とした。「けうら」は「きよら」の音變化。

【老いもせずなむ】 なむの結詞として、「侍る」をそへて見る。「老いもせず、思ふこともなくなむ侍るなり」と文を改めて見ればよくわかる。

【さるところへ云々】 そんな結構な處（月の都）へゆくのですけれども、（しかし私としては）一向にうれしくも思ひません。（かへつて）御老衰の御世話をしてないことが、あかず残念に思はれませう。

【胸痛き云々】 胸のつまる様なかなしい言（言ひ）しなされるな。いかに端正な姿をした天人の使であつても（こんなに固めてゐる以上）お前の身に障る、さへはる、さ

しつかへる）事はあるまい、（安心せよ）。

【子の時】 ネのトキ 夜中の十二時。

【明さ】 アカさ。

【望月の明さを十あはせたるばかり】 素朴的な表現に注意。

【ある人】 その邊にゐる人。

【たちつらねたり】 連なり立ちたり、立ち並びたりの意。

【接え】 ナえ、ぐにやぐとなること。

【弓矢をとりたてむとすれど】 「とりたてる」は「取る」と同意。「言ひたてる」は「掃きたてる」等の例。

【心さかしき者】 氣性のしつかりとした者。

【念じて】 じつとこらへて。

【あれも戦はで】 荒れ戦ふ事もしないで。「も」は感動。

【しれにしれてまもりあへり】 「しれる」は痴となる、正氣を失ふ、茫然となること。「に」を「は」さんでの此の類の表現は、益々其の方向にどん／＼事が進行するに用ふ。

【故にこゝは、ただもう心が益々ぼんやりするばかりで、たゞお互に見合つてゐるばかりであつた。】の意。「まもる」は「目守で、一所を見つめる意である。」

【飛ぶ車】 天空を飛行する車。想像的にいつたものである。

【羅蓋】 うすぎぬ（羅）を張つた天蓋。天蓋は、「きぬがさ」ともいつて、貴人の外出の際に、従者がさしかけたもの

である。六六頁の挿繪は、輿の形に描いてあつて、本文には合はなし。

【家に「造磨まうで來」】 家の方に向つて云はれるには、「造磨上參ぬいでよ。」の意。これを「家に造磨まうで來」として、「家なる造磨まうで來」と解する解き方をしたものであるが、従ひ難い。

【汝をさなき人】 「をさなき」は幼昧などの意である。よつて「おいおろかなるお前よ」の意。

【功德】 クドク 元來は佛教語。「善行を積む」ことを、「功德をつくる」といふ。

【片時の程として下ししを】 暫時の間といふので、姫を下界に下したのであるが。

【そこら】 何れも多く、の意。金を賜ひし事は次の項参照。【身をかへたるが如くなりたり】 非常に富貴の身となつたの意。本物語の初の方に次の様な記述がある。

「竹取の翁、この子を見つけて後に竹を取るに、ふしを隔て、よごとと黄金ある竹を見つくることかさりぬ。かくて翁やうやう豊になり行く。……翁竹を取ること久しくなりぬ。いきほひ猛のものになりけり。……」

【罪を作る】 罪を犯すの意。

【罪の限りはてぬれば】 罪償のための下界生活もすでに期

限がきれたから。「限り」は期限の意。

【能はぬことなり】 泣き歎いても、如何とも仕方のない事だ。

【二十年】 ハタトセ

【片時と宣ふに云々】 今「王とおぼしき人」の詞に「片時のほどとて降ししを」と仰せられました。私の所のかぐや姫は二十年餘も養育したのであるから一寸合點がゆきません。翁が一寸、一理窟こねて見たのである。そして、「それは人達で、あなたの仰せられる姫といふのは、別人であります。私の姫は病氣だから、出られません。」と、呆けて見せたのである。

【即ちたゞあきにあきぬ】 即時に自然とひとりであいた。次の格子の記述、更にかぐや姫の動作、皆自然の間にすらすらとすゝんでゆく姿、さしもの固めも如何ともし難い様子が誠に目に見ゆるが如くである。

【心惑ひて】 氣を取り亂して。

【こゝにも】 私とても。

【心にもあらで】 自分の本來の願望とは違つて。仕方なく他より迫られて。

【率て】 「ゐる」は上一段活用。「ひき連れて」の意。

【御心惑ひぬ】 此の次に左の文が省略されてゐる。

「文を書きて罷らむ。戀しからむをり／＼取出でて見給

へ。』とて、打泣きて書くことばは、『この國に生まれぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまで、侍らで過ぎ別れぬること、かへす／＼本意なくこそおぼえ侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも墜ちぬべき心地す』と書置く。

【又あるは】 別に又。

【穢き處のもの】 下界のものをたべたがため心がけられたと言ふのであるが、古事記上卷に「吾は黄泉戸喫しつ」と云はれて伊邪那美命が歸り難きを仰せられた考へ方に似てゐる。

【御心地悪しからむものぞ】 きつと氣分がわるいでせう。

【衣着つる人】 「天の羽衣を着てしまつた人は、心が天人の心になつて、この世の事を忘れてしまふのである。それだから今着ない中に……」

【心もとながり給ふ】 「心もとなしは不安である、おぼつかないと言ふ意であるが、こゝはちれつたく待遠しく思ふこと。こゝでは、「早く／＼」とせき立てるのである。故に次の「物知らぬ事なのたまひそ」といふ語が出るのである。

【物知らぬこと】 この物も例のひろくさすことば。よつて

無情なことにあたる。

【おほやけ】 公、朝廷、みかど。

【心得ず思し召しつらめども】 「合點のゆかぬ、不思議な奴とお考へなられたでありませうが」の意で、全體は所謂挿入句。よつて、「身にて侍れば」から「心強く」へ文脈はつゞくのである。

【心強く云々】 すげなくお断り申上げる様になつてしまつた次第で御座います。いよ／＼罷るにつけては、さぞ私を無禮（なめげ）な女であつたとお考へ遊ばされることと、その事だけが心にかゝつて居ります。

【いまはとての歌】 今はもう此の世に御別れをしなければならぬといふので、愈々天の羽衣をきるに際しては、唯々君の御厚情を謝し旁々御心に従ひ申さなかつた深き罪をひたすら詫びる心で一杯であります。

【頭中將】 トウの中將 藏人頭で近衛中將を兼ねたる者。

【昇りぬ】 此の次に左の文が省略されてゐる。

「その後翁姫、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書き置きし文を讀みて聞かせけれど、何せんにか命も惜しからん。誰が爲には何事もえうもなしとて、薬もくはず、やがて起もあがらで病み臥せり。」

【まゐらす】 この次に左の文を省略す。即ち「ひろげて御覽じていといたくあはれがらせ給ひて、

物もきこしめさず、御遊などもなかりけり。」

【大臣・上達部】 オトド・カンダチベ 大臣は太政大臣、左・右大臣・内大臣を言ふ。上達部は公卿キヤウに同じ。而して公とは攝關及び大臣。卿とは大・中納言及び參議、位階の方では三位以上を言ふ。さうすれば上達部の中に既に大臣は含まれてゐて、重複する事となるから、かくの如き用例では上達部は大臣以下をさしたものと看す。

【この都も近く】 題材の關係からすれば、平城京と解すべきであらう。

【これを聞かせ給ひて】 この次に左の歌が省略されてゐる。

2 文の構成

第一節 (五九頁九行迄)……何事とも知らず迄。

かくや姫が月を見て物思に沈むこと。(春の頃から七月の終頃迄) 何故とも知らず翁の心配。

第二節 (六一頁七行迄)……同じ心に悲しがりけり迄。

八月の望近くなると姫は今人目もつゝますいたく泣く様になる。かくて問はれるまゝに素性を語れば、翁は驚愕悲痛、召使も亦悲歎にくれる。

第三節 (六一頁十行迄)……竹取が家に遣はす迄。

八月十五日に帝から勅使以下二千人を竹取の家に御遣はしにられた事。

第四節 (六一頁七行迄)……頼もしがりをり迄。

あける際もなき厳しき警備の有様。翁のよろこび。

第五節 (六三頁二行迄)……腹立ちをり迄。

かぐや姫は警衛の無益なるを言ひ、翁は必ず守り果さんと言ふ。

第六節 (六四頁三行迄)……とねたみをり迄。

心ならずしてまかる姫の苦衷をのべて、離別の悲情を語る。

第七節 (六四頁終迄)……まもりあへり迄。

迎の降下。まもる人々のすべなき様。

第八節 (六六頁九行迄)……泣きをり迄。

迎の人の中王とおぼしき人と翁及び姫との問答。やがて戸も格子もひとりであきて姫は外に出づ。

第九節 (六七頁二行迄)……御心惑ひぬ迄。

姫の翁への最後のことは、翁の悲歎。

第十節 (六九頁一行迄)……天人具して昇りぬ迄。

天人の心もとながる中に帝へ奉る文を残し愈々昇天。

第十一節 (六九頁九行迄)……よし仰せ給ふ迄。

帝への復奏及び形見の品の献上。その品の處分についての勅命。

第十二節 (終迄)……とぞいひ傳へたる。

富士山の命名及び噴煙と關聯せしめての終末。

3 文意

かぐや姫が月を見て歎くことより翁等の心惑となり、遂に姫が其の本性を語る事となる。こゝに翁一家は勿論、帝迄が二千の人々を遣はされてその昇天を止めようと努める。然しもとゞ世界を異にする天上界の人に對しては、夫等の努力も空しく遂に姫は昇天する。これは本課に採用された説話の筋であるが、その間に作者の描かうとした主題は、一に人間世界と天上界との對照であつて、すべてが清らかなる天上界に對し、人間の抱くあくなき憧の心を示さうとしたに在ると思はれる。

4 鑑賞批評

先づ第一節第二節に於て表現の漸層的なるを見るべきである。

「春の初よりかぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、物思ひたるさまなり。」

「人まには、月を見ていみじく泣き給ふ。」

「ふづきの望の月に出でゐて、切に物思へるけしきなり。」

「八月望ばかりの月に出でゐて、かぐや姫といたく泣き給ふ。」

「人目も今は包み給はず泣き給ふ。」

以上は春の初から八月に至るまでのかぐや姫の様子である。これに對する家人の動きを見ると、

「或人の『月の顔見るは忌むこと』と制しけれども」

「近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく『……この頃になりては、たゞ事にも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よくよく見奉らせ給へ。』」

「これを、つかふものども、『なほ物おぼすことあるべし。』とさゝやけど、親を始めて、何事とも知らず。」

更に當の翁の當惑は一層痛切であつて、その心惑の様子は彼の言葉によくあらはれてゐる。

「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世に。」

「あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。」

「月な見給ひそ。これを見給へば物おぼすけしきはあるぞ。」

「これを見て、親どもも『何事ぞ』と問ひ騒ぐ。」

以上によつても、翁は初はなぐさめつゝもその理由を知らうとしてゐるが、漸次言葉は激して来て、禁止となり、命令となり、叱責となる。ことにかぐや姫の本性をきかされてはその驚愕は一層甚しく、

「翁、『こはなでふことを宣ふぞ。……まさに許さむや』といひて、『われこそ死なめ』とて泣きののしること、いと堪へ難げなり。」

と言ふのを見れば既に狂亂に近い姿を想ふのである。

此等に對してかぐや姫のことばは物靜かなものながら、やはり漸次情の昂つてゐる事が知られる。

「かぐや姫、『月を見れば世の中心細くあはれに侍り。なでふものをか敷き侍るべき。』といふ。」

「思ふこともなし、物なむ心細く覺ゆる。」

「いかでか月を見ずてはあらむ。」

かくて遂に我が身の素性を語り出すのである。

第三節・第四節には守備の様頼もしさが簡潔なる表現の中に實に巧みに描かれてゐると思ふ。勅使少將以下二千人と言ふも仰々しいが、家人と合せてあける隙間もない状景が眼前に髣髴と浮び出る様である。

築地の上に千人、屋の上に千人……あける隙もなく守らす。

この守る人々も弓矢を帯してをり。

母屋の内には、女どもを番にすゑて守らす。

姫、塗籠の内にかぐや姫を抱かへてをり。

翁も塗籠の戸をさして戸口にをり。

何れも短形の文であり、且つ現在法である所に表現の現實性が表れてゐる様に思ふ。更にこの描寫は外部から内部へと筆を進めてをさ／＼怠りなき防備の姿を述べてゐる事に注意したい。さてそれに續いての翁と守る人々との對話もよくきいて居り、これを受けて、

翁これを聞いて頼もしがりをり。

の落ちつきもまことに自然である。

しかし天界の事情を知るかぐや姫の豫言した通り、さ程の努力も全くの徒勞であつて、物に壓はれた如く、あれも戦はで心地ただしれにしれ、まもりあふに過ぎなかつた所に、人間界の無力とあの國の人の不思議さが示されてゐる。

立てこめたるところの戸、即ちたゞあきにあきぬ。

格子どもも、人はなくしてあきぬ。

姫抱きてゐたるかぐや姫外に出でぬ。

以上の表現も亦辭簡にして、よく自然の間に次から次へと事の運ばれて行く姿を描き得て妙である。ぬの語に注意。

かくや姫の清らかさは言ふ迄もないが、心ばへの美しさが隨所に語られてゐる事も亦注意したい。先づ彼の女の言葉を
見るに、

さらず罷りぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。

こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。

と言ひ、殊に第六節（六三頁）にのべられた心情はまことに厚き濃やかな心根である。更に天人遅しと心もとながる中に
物知らぬことなのたまひそ

と誠めて、帝に奉つた文を心して讀み返すがよい。さればこそ使はるゝ人々も「年頃ならひて、立別れなむことを、心ば
へなどあてやかに、美しかりつるを見ならひて、戀しからむことの堪へがたく、湯水も飲まれず悲しむ程慕つた所
以が明らかである。

天上界の不思議さは即ち人間の憧憬を示したものであるが、「あの國の人をばえ戦はぬなり」はともかくとして

かの都の人は、いと清らにて、老いもせずなむ、思ふこともなく侍るなり。

大空より人雲に乗りて降り來て、地より五尺ばかりあがりたる程にたちつらねたり。

裝束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。

天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。

衣着つる人は心ことになるなり。

この衣着つる人は、物思もなくなりにければ……

等を見れば、天人の住む世界は不老不死であつて憂き世の物思もなく、まことに清らなるの一語に盡きる世界である事が

わかる。一體この清らと言ふ語は決して單なる美しさではない。やゝ人間放れをした、或る不思議さを持つ澄みきつたう
るはしさである。これに對する地界は、

「穢き處にいかでか久しくおはせむ」

「穢き處のものきこしめしたれば御心地悪しからむものぞ」

とある如く、穢き處即ち穢土として述べられてゐる。この兩語によつても天上地界の對照が判然と示されてゐると思ふ。

ふじの山の名の由來と噴煙の説明とを以て終る結末は、稍々子供じみた感じもするが、不死と富士とに關聯があり、且
つ最も天に近い山であるところにも亦此の物語との連絡があつて、比較的自然而しかも趣ある結びとして受けとることが
出来る。

三 備 考

1 指導研究

一、先づ本課に入るに先立つて竹取物語そのものの文學史的説明を簡明になす事が肝要であると思ふ。前課との連絡をは
かつて今學習しようとする物語が、國文學史上に於て如何なる特質を有するものであるかの下に、實際の讀解に入りた
る。

二、次は本課採用の部分に至るまでの物語の概要を是非補説して戴きたい。かくてこそ始めて姫の生ひ立ちなり、翁との
關係なりが明らかとなつて、本課の理解が極めて圓滑に運ばれると思ふからである。

三、本課に於ける用語はさ程に難解なものはないと思ふ。したがつて大いに力を用ふべきは文體の特異さであると思ふ。

既習の古事記なり、或は生徒自身が日常接する現代文、特に何々の頻出する所謂科學的文と稱するものなどと比較して、どこに竹取物語の文章の特質があるか、どこに趣が存するのであるかを十分に味讀させたいと思ふ。單なる筋の知解を辿ることに止るならば、此の作品學習の大半の目的を失ふ事を深く注意せしめたいと思ふ。

四、既に語釋の項を讀まれて氣づかれてゐると思ふが、本文の所謂通釋には餘程の語を補はなければならない。先に括弧を以て示して置いたのは皆その補の言葉である。よつてその方面の練習には誠に好適の文章と思はれるから、特に二三の箇所を選んでその點の學習をも行はしめたいと思ふ。一體解釋に於ては消極・積極の注意すべき二方面があると思はれる。即ち苟くも文中の語はたとへ助詞一つであつても之を看過しない態度は前者であり、必要な語は本文中になくとも適當に補つて其の文意を一層明白ならしめると云ふのが後者の態度である。この二方面の努力があつて始めて十二分に文意が明らかにされるのである。而して本課の如き文章は實に其の後者の練習に恰好なる一と思はれるのである。且つ此のセンテンスとセンテンスとの間に間隙があること、穴があると言ふ事は實に本文の特色であつて、其處に言ふべからざる妙趣があるのであるから、本課の文體の特質を把握させる上からも是非行つて貰ひたいと思ふ。尙此の文章の穴と言ふ事について谷崎潤一郎氏の言に傾聽すべきものがある。同氏著文章讀本（中央公論社、一圓五十錢）の四六頁、及び二五三―二六〇頁参照。

2 参考

一、表現の特異さに對する適切なる評言として、藤岡博士の文を左に引用して置く。

書中の記事は確かに竹取の時代を定むる根據たるに足らずといへども、文體を見れば、その古樸なる風容、必らず宇津保、源氏に先だち、貫之の散文にも先だてるを知るべし。平安中世以後の散文は、殊に女性的となりて、悠長にして纖弱、絲を以て貫けるが如く、盡きんとして盡きざるに、竹取はこれに反して簡潔にして遒勁なり。而してまた奈良朝の如く接續詞を濫用することも失せ、「こゝに

「こゝを以て」故「また」などの詞を見ること稀なれば、ふと見れば、その文章は奈良朝よりも却りて個々分立したる趣あり。試みに竹取の一例を擧げん。

龍の首の玉取り得ずば、歸り來たと宣へば、いづくも足の向きたらん方へ往なんとす。かゝるすきごとをしたまふこと誹りあへり。賜はせたる物はおの分けつゝとり、或は己が家に籠り居、或は己がゆかまほしきところへ往ぬ。親、君と申すとも、かくつきなきことを仰せたまふこと、ことゆかぬものゆゑ、大納言を誹りあひたり。

されど且爾波、助動詞等の使用や自由、しかもその意義の差別の精密になりゆきたるは、争ふべからず。また言語の古くして、平安中世以來に見難きも少からず。たとへば「くど」窓「けご」家子「づく」あななひ「麻（柱）」といふが如き、「いろふ」彩色す、「よふ」うめく」といふが如き、「舟のうらをなんせめて見る」、「あの國の人をばえ戦はぬなり」といふが如し。要するに竹取物語はその文章より見ても、到底、延喜以來のものにあらざるべく、さりとて弘仁の詩文全盛の世、假名の弘通もいまだしき時に、かゝるものを見るべくもあらず。貞觀より延喜まで三四十年の間に出来たりと見るを穩當なりとすべし。（國文學史平安朝篇）

二、註釋書

- 竹取物語抄(二) 小山 儀
- 竹取物語解(六) 田中大 秀(國文學註釋叢書)
- 竹取物語補註(三) 入江昌 喜
- 竹取物語俚言解(一) 佐々木弘 綱
- 竹取物語講義(一) 井上頼 文
- 竹取物語講義(一) 今泉定 介

その他數種ある。

八都鳥

(伊勢物語)

一 解題

1 伊勢物語

卷數二卷。我が國最初の歌物語。作者題號については諸説がある。即ち在原業平の作といひ、或は伊勢の御の作と云ひ、又は業平の自記に後人が加筆したとも言ふ。書名については「伊勢の御」の作なる故とも、書中「伊勢齋宮」のことを記せるによるとも、又「伊勢の人はひがごとす」と言ふ當時の俗諺によるとも言はれてゐる。(前課語釋同項参照)。内容は主として業平の行跡を述べ、その初冠から東國遊歴、臨終の事に及んでゐる。然し文は概ね歌の詞書の如き觀があり、各獨立する各篇を點綴したもので、中に小話も集録されてゐる。昔男ありけり」と概ね筆を起し、流布體は全卷一二五段(人により數に異同あり)に分れてゐる。

2 出典

一二五段の分ち方によるものの中、左の數段を採用したものである。

九段。八二、八三段(兩段途中省略あり、語釋の項参照)。八四段。一二五段。

3 主眼及び採擇の趣旨

伊勢物語は行文閑雅古淡、しかも普通歌物語と稱せられる様に、和歌を中心としながらも、文と歌と緊密不離、兩々相映發して全篇豊かなる抒情詩をなしてゐる。多情多感なる性格から吐露される率直なる眞情、その感懷は誠にすばらしい

ものである。毎篇獨立するが如く思はれながら、しかも前後を一貫する渾然たる詩情を感ずるのである。此の情味に十二分に浸らさせる所に本課の主眼が存するのである。

二 解釋

1 語釋

【昔、男ありけり】此の物語の各小話の發端に多く用ひられた慣用語である。よつて昔の語は何時より何時をさしたと言ふべきものではなく、「今は昔」と言ふ語が「竹取」「宇津保」「落窪」「今昔」等の發端に何れも見えてゐる類のものである。但し「男」とは業平を指す事は疑がなからう。さて此の段は第九段である。

【益なきものに思ひなして】その男が我が身を世に役にたたないつまらぬものであると自ら考へ込んで。

【京にはあらじ】都である京都には住まい、居るまいの意。

【東の方】アヅマのカタ 本邦東方諸國をさす。時代により廣狹の差がある。

【もとより】勢語臆斷によれば、前段に「友とする人一人二人して行きけり」とあるので、「もとより」と言つたのであらうと言ふ。その前段とは

「むかし男ありけり。京やすみうかりけん。東の方にゆきて住所もとむとて、友とする人一人二人して行きけり。云々。」

をさすのである。然し此の段が獨立したものと考へれば「國求めに出かけたと言つても、全然一人でいつたのではなく、もともと一兩人の友と共にであつたが、しかし誰一人道の程を知つてゐるものもなく」と後の方へ關聯を持たすべきであらう。藤井高尙の新釋には「もとよりははじめよりといふ意にて俗言に都よりのつれ一兩人にて同行すると言が如し。さるは旅の友は途中よりつれてゆく事もあれば也」とある。参考のために記しておく。

【惑ひ行きけり】道に迷ひながら進んだと言ふので心細い旅路であることを示してゐる。

【八橋】愛知縣碧海郡知立町八橋。

【蜘蛛手】 タモデ 蜘蛛の足の如く八方に物の交叉した様子
を言ふ。尙「古意の八橋」圖參照。

【澤の邊】 澤のホトリ。

【おりゐて】 馬から下りてそこで休んでゐて。

【餉】 カレイヒ 語義は乾飯で、蒸してよく乾し旅に持ち
歩きしもの。カレイヒと略言にも言ふ。後には事實干飯で
なくとも、旅の食物を呼ぶにも用ひられてゐるので、こ
こも普通の飯であると言ふ説もあるが、藤井氏の新釋等
には詳しく論じてある。しかし先の方に「ほとびにけり」
とある所から案じて、「ほしいひ」と見るべきであらう。

【杜若】 カキツバタ 燕子花ともかく、「はなしやうぶ」に
似た草花。

【から衣、の歌】 久しくなれしたんだ妻を京においてある
事故、はるばると遠く來た旅に實に物憂く悲しく思ふの
意。「から衣」は「唐衣」ともかく様に、もと唐からの
渡來物をほめたゝへる心でつけられた名であるが、衣と
言ふのに同じ。こゝは「から衣きつゝ」で「なれ」の序
にしたのである。萬葉六に
「から衣き奈良の里の鳥待つに玉をしつけむ好き人もが
も」の歌がある。き(着)なる(着襲らす)つま(棲)は
るばる(衣をはる)は(り板)皆衣の縁語である。つまし
旅をしのは共に強めの助詞。此の如き歌を折句と言ふ。

く、托する。

【駿河なる、の歌】 今私は駿河の宇津の山邊を旅してゐる
がそのうつつに通ふ現には勿論、夢に於てさへも、戀しいあ
なたに逢へず、まことに心淋しくあなたの真心なきを恨
めしく思ひますの意。「山邊の」までは歌をよんだ場所を
示して、歌に現實性をもたせると共に、音調の上で現の
序詞となつてゐる。「うつつにもゆめにも」は、うつつに
逢へぬは止むをえないとしても、夢路にさへ逢へぬは實
に心わびしく思ふ意であるが、一體人を夢に見るのは先
方の人の心が夢に通つて來るからだとか考へる考へ方で、
こゝに夢にさへ通はぬはあなたが自分を思ふ真心が足り
ぬからだとか恨む心である。古今集戀の歌に「夢にだにあふ
事かたくなりゆくは我やいをねぬ人やわするゝ」旅情の
わびしさと戀しき人を恨む心とが渾融してゐるのを見る
べきである。「人には」塗籍本系統のには「人の」とある。
その方が歌としては一層「その人を」思ふ心が切である
様に思ふ。新古今集羈旅の部には「人に」となつてゐる。
【五月のつごもり】 サツキのつごもり。「つごもり」は月隠
の略言。陰曆の月末又は晦日の稱。
【時しらぬ、の歌】 時節を辨へない山はといへばこの富士
(不時)山であるよ。今此の仲夏のつごもりを一體何時
だと思つて鹿の斑の様に雪が降つてゐるのであらうか。

尙此の歌は古今集羈旅の歌の中に出てゐる。

【ほとびにけり】 「ほとぶ」はふやけること。餉が涙の水
を含んで濡ひふやけたのである。

【宇津の山】 古來宇津谷峠として知られ、岡部丸子の間に
於ける東海道的一名所。吾妻鏡の中に「……於駿河國宇
都山爲群盜等、所持財寶等、悉被盜取之由……」とあ
るのを見ても、寂寥たる險所である事がわかる。

【葛楓】 ツタ、カヘデ 葛や楓は葉がしげりの意。

【すずろなる目】 思ひもかけぬひと目、つらい目の意。
「すずろ」は (一)何のわけもなく心のすゝむさま(そ
ぞろ)。(二)はしたなく。不覺に。(三)わけもなくなどの
意があるが、こゝは(二)にあたる。思ふに」には思つ
てゐると。

【修業者】 スギヤウザ 佛道を修業する者、山伏の類。文
は修業者に行き逢ひたりの心。

【かゝる道にはいかでかおはする】 「こんな旅路にどうし
てお出になられたのですか」と修業者が業平を怪しく思
つてたづねたのである。

【見し人なりけり】 舊知の人であつた。

【その人】 切に思つてゐる人をおぼめかしく言つたのであ
る。即ち都に残して來たつまをさす。

【ふみ書きてつく】 消息をかいて托した。「つく」はことづ

「いつとてか」は「降るらむ」にかゝる。「鹿の子まだら」
は鹿の子の斑文で茶褐色に白い斑点があるのを言ふ。日
頃京都の低い山に圍れて生活してゐる者には、時ならぬ
富士の雪はまことに物珍しかるべく、この歌はそのめづ
らしさに對する情が主となつてゐる。尙此の歌は新古今
「雜歌」に出てゐる。

【こゝに】 都の地をさす。

【二十ばかり】 かぐや姫の所に「望月の明さを十あはせた
るばかりにて」とあると同じく、其の素朴的な表現に注
意したい。

【なり】 形状、物の形の意。

【鹽尻】 シホジリ 鹽田で砂を高く積み上げて塚の如くし
たもの、それは富士の山の形にて、裾廣く上の狭くな
つたものである。その塚に潮を汲みかけ日にほして鹽分
を固着せしめるのである。

【なほ行き往きて】 前頁の「行き往きて」に應ずるなほで
あるが、この語におちつく所がない様に思はれる。つま
り「武藏の國と下總の國との境にある大きな川(につ
いた)の意をかねてゐるのである。

【武藏の國と下總の國との中に】 頭註の通り古くは現在と
ことなつてゐたのである。兩國橋の名はこの文を解する
のに役立つであらう。

【群れゐて思ひやれば】 一行の人々が群れてゐて、はるか
の都を思ひやると。

【わびあへるに】 お互にわびしく思ひあつてゐると。

【渡守】 ワタシモリ 渡を守る人が原義（山守、野守）。轉
じて船こぎ渡す人、船頭を言ふ。こゝは勿論後者。

【乗りて渡らむとするに】 新釋に「……のりてと句をきり
てわたらんとするにとよむべし。のらむとする意にはあ
らず。舟にはのりてむかひの岸へわたらんとするに、川
中にてしか／＼の事ありて、しか／＼の歌よめりと言ふ
意也。川中の事ゆゑに、船こぞりてなきにけりとはいふ
也」とあるが従ふべきであると思ふ。

【京に思ふ人なきにしもあらず】 ないわけでもないとはお
ぼめかした婉曲な表現であるが、實は京にそれ／＼残し
て来た戀しい人がある事故の意である。

【さる折しも】 その折も折、丁度その時。

【嘴】 ハシ ぐちばしのこと。

【鳴】 シギ

【魚】 イヲ ウヲに同じ。和名抄十九に「魚字平。俗とあ
る。」

【都鳥】 ミヤコドリ 水禽類の一種、體の長さ一尺二三寸。
嘴と趾は長くて赤い。頭部及び背面は黒く、腹部は白、
海近い水邊にすむ。うはちどりとも言ふ。都鳥の名義に

ついでに不詳。

【名にしおはば、の歌】 都鳥と言ふ名を負つてゐるならば、
（その名の通り都の事をよく知つてゐるであらうから）、
都鳥よ、お前にも申さう。私のいとしく思つてゐる人
は健在であるかどうかと。名にし」のしは強辭。名にお
ふは名に負ひ持つ意。こととふ」はもと物言ふ意であつ
たが後に尋ねる意となつた。萬葉に

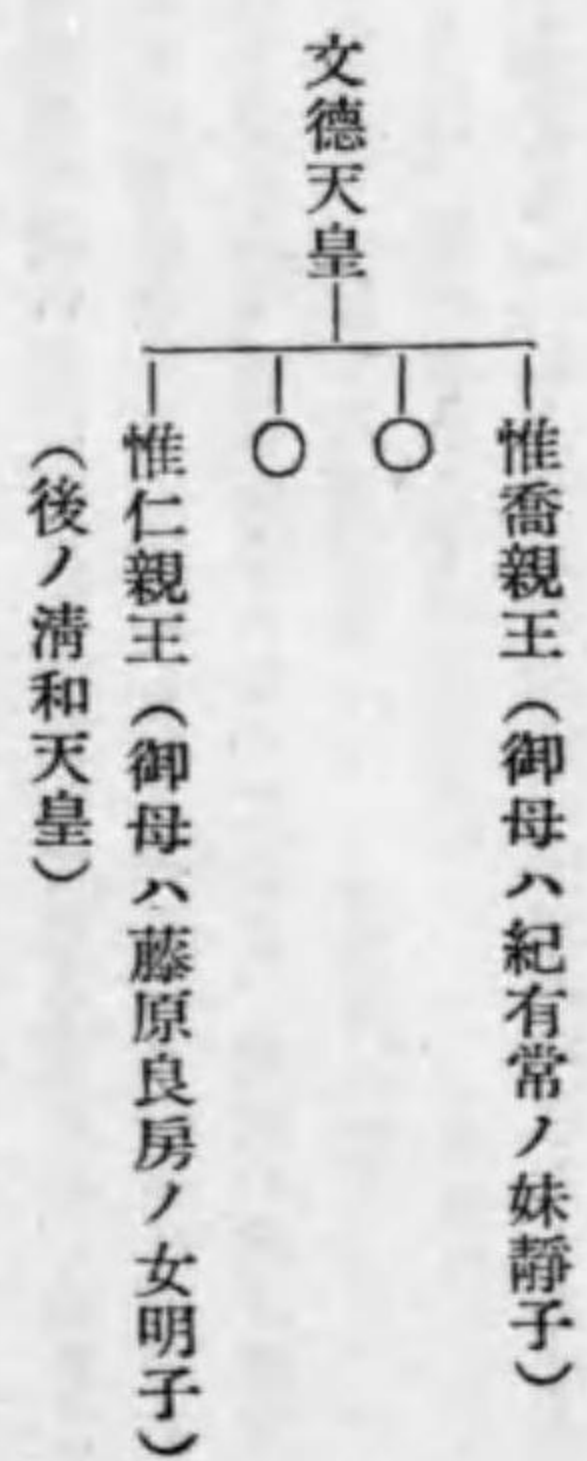
斯く戀ひむものと知りせば吾妹子に言とはましを今し
悔しも

と言ふ歌があり、大祓の詞に「言問志磐根樹立」とある。
尙この歌は古今羈旅の部に入つてゐる。

【船こぞりて】 船中の人が悉く。

【昔、惟喬親王とまをす……】 第八二段の抄出である。

【惟喬親王】 コレタカノミコ



とり出してその彼方にと凡そにのべ、更に水無瀬を提示
した書きぶりである。

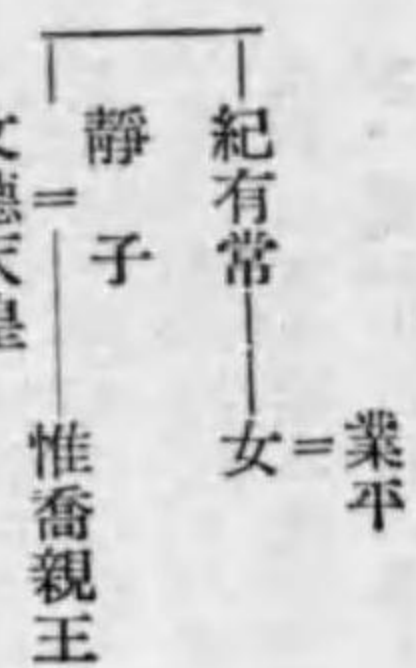
【水無瀬】 ミナセ 山城の大山崎村（山崎）とは相接して
ゐる地。水無瀬川は此の地で淀川に合する。東は淀川を
隔てて男山に對し、西北に山嶺を負ひ、風光佳なる所。

【その時……】 此の下に「常に」の語を置いて見るべき所。
即ち水無瀬の御殿にお出になられる時は何時でもの意。

【右のうまのかみ】 右馬頭。右馬寮の長官。こゝは在原業
平をさす。彼が貞觀年中右馬頭に任ぜられたのによる。

業平は阿保親王の第五子であつたが、兄行平（九、須磨
の秋の項参照）等と共に在原の姓を賜はり、臣籍に下つ
た。後右近衛中將となる。よつて在五中將、右中將とも
稱す。さて良房は先に惟喬親王を退け奉つた後、更にそ
の清和天皇に對し奉り自己の養子基經の妹高子を納れん
と企てた。之を知つた業平は良房一派の専横を妨げん爲
に遂に密に高子に通じ、その五條宮にあるを誘つて宮外
に奔つた。よつて東國に逐はれ、所謂東下りをする事と
なるのである。高子は清和天皇の女御とはならなかつた
が、皇子陽成天皇を生み申す事になり、業平の目的は結
局達せられなかつた。

【時世へて……】 あらにはしるすをさけ、時の流れに託して
おぼめかしたる筆觸、その婉曲なる趣を見るべきである。



文徳天皇は第一皇子惟喬親王を皇太子に立てむと思召さ
れたが良房の權威を憚られ未だ決定されなかつた。天安
二年天皇の崩御後良房は遂に惟喬親王を退け我が女の腹
なる惟仁親王を立て奉つた。是れ即ち清和天皇であらせ
られる。是に於て惟喬親王は大宰帥或は常陸上野太守等
を経て、貞觀十四年秋剃髮し給うた。親王官を辭された
後、洛北の小野里に居られた故に小野宮と申し、又水無
瀬宮、木原親王とも申す。親王は和歌の道に秀で給ひ、
又詩をも作り、楽しまざる御心を之によつて慰めてゐら
れたのである。

業平は系圖の通り有常の女を妻としてゐた外、もと皇族
の出であり、藤原氏の専横に常に反感を抱いてゐたから、
親王へ親近し奉り深い交情を有してゐたのである。

【山崎】 ヤマザキ 淀川に沿ひ、往年は京都の南塞として
難波と並稱された要津。ために古來屢々、戦地と化した。
秀吉・光秀の合戦は有名である。

【あなたに】 彼方にの意、即ち先づ名もかくれなき山崎を

【狩】 カリ 鷹狩。唯かりといへば鷹狩の事である。
【懇ろにもせで】 主たる狩は別に熱心にも行はれないで、却つて……。

【大和歌】 ヤマトウタ カラウタ（漢詩）に對する語。和歌。やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける（古今序）

【かゝれりけり】 「かゝる」はかゝはる、たづさはる意。

【交野】 牧野村・川越村・枚方町等一帶の原の名。淀川近くのあたりが古の遊獵地。

【渚の院】 ナギサのキン 牧野村大字渚の地にあつた別業。

「……かくて船ひきのぼるに、渚の院といふ所を見つゝ行く。その院、むかしを思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡には、松の木どもあり。中の庭には、梅の花さけり。こゝに人々のいはく、これむかし名高く聞えたる所なり。惟喬親王の御供に、在原業平の中將の、世の中に絶えて櫻のさかざらば春の心はのどけからまし」といふ歌よめる所なり。」（土左日記二月九日の條）

【その櫻】 渚の院近くの櫻。
落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦きて歸る、嵐の山の秋の暮……（太平記）

復や見む交野のみ野の櫻狩花のゆきちる春の曙（新古今集—俊成）

【木の下】 キのモト。

【おりて居て】 馬より下りてゐて。

【挿頭】 髪挿の略言。自然に親しんだ我が國民は古來草木を髪に飾る風があつた。

（三、倭建命「鬘華に挿せ」の項參看。）音便にカンザンとも言ふ。

【上・中・下】 カミ・ナカ・シモ 貴き方も中程の者も下人も意。

「ありとある上下、童まで酔ひしれて……」（土佐日記）
仲麻呂のぬし、我國にはかゝる歌なん、神代より神もよみたび、今は上・中・下の人もかやうに別れ惜しみよろこびもあり、悲しみもある時には、詠むとて……（土佐日記）

【世の中の歌】 世の中にもしも全く櫻の花が咲かないものであるとすれば（事實櫻ある爲に雨につけ風につけ様に心を痛めるのであるが）どんなにか春の人の心はのんびりとしたものであらう。櫻に對する愛慕の情を裏から述べたもの。この櫻とは惟喬の親王を寓したものかと言ふ。尙ほ此の歌は古今集春の上の部に出てゐる。

【また人】 うまのかみ以外の人の歌の意。おそらくは紀有

常かと言ふ。

【散ればこそこの歌】 （雨風に心を勞しつゝ待つ櫻花も、折角咲いたと思ふ間もなく直ちに散り果ててしまふので、誠に惜しい事ではあるが）深く散るからこそ、實に櫻花が立派な結構な花として人に賞美されるのである。一體此の世に何が恒常を保ち得ようぞ。（みな遅かれ早かれ朽ちはててしまふのが此の世の習なのだ）

【うき世】 憂き世である。

【日暮になりぬ】 此の次に左の文が省略されてゐる。

「御供なる人、酒をもたせて野よりいできたり。この酒をのみてんとて、よき所をもとめゆくに、天の川といふ所にいたりぬ。親王に馬の頭おほみきまゐる。親王のたまひける交野をかりて、天の川のほとりに到るを題にて、歌よみて盃させとのたまひければ、かの馬の頭よみて奉りける、

かりくらししたなばたつめに宿からん天の川原にわれは來にけり

親王歌をかへすく誦し給うて、かへしえしたまはず。紀有常御供につかう奉れり。それがかへし、一年にひとたび來ます君までばやどかす人もあらじとぞ思ふ。

【宮に入らせ給ひぬ】 水無瀬の宮をさすのであらう。

【入り給ひなむとす】 御寢所にの語を補ふべき所。

【あかなくにの歌】 何時迄眺めてももう十分であるとは思はれないのに、もう早くも月は隠れようとするよ。どうか（月影をかくす）山の端が逃げて、月を入れない様にして貰ひたいものだ。

親王を月影に比してそのまだきに御寢所に御入りなされるのを惜しんだのである。

「あかなくに」は「あかぬに」「あかさるに」の意。飽くは心に足らざる所なく十分に満足する意。まだき」は未しきに、未だその期に到らざるにの意。「も」は感動。「か」も亦同様。「あらなむ」此の「なむ」は未然形に接続したものの故所謂希求の意をもつ助詞の「なむ」で、さうしてほしいと山の端に求める心。文法上から「ありなむ」との別をはつきりさせたい。

此の歌は古今集雜一に出てゐる。

【かくしつゝ】 八三段の抄出。此の前文に左の如くある。
昔、水無瀬に通ひたまひし惟喬親王、例の狩しにおはします。御供に馬の頭なる翁つかう奉れり。日比經て宮にかへり給ひけり。御おくりして疾くいなんとと思ふに、大御酒たまひ祿たまはんとて遣さざりけり。此の馬の頭心もとながりて、
枕とて草ひきむすぶこともせじあきの夜とだにたの

まれなくと詠みける。時は三月の晦日なりけり。親王大殿籠ら
であかし給ひてけり。

【かくしつゝ】 かやうに狩のお供などして。

【おもひの外に】 意外にもの意。親王は文徳天皇第一の皇
子にて、未だに年もお若い事故世に出られる時もあると
期してゐたのに、急に思ひがけなくもの心。

【御髪おろさせ給ひて】 剃髪なされて、僧になられて。三

代實録に「貞觀十四年七年十一日己卯四品彈正尹惟喬親
王寢疾頓出家、爲沙門」とある。時に御年二十九。

【小野】 ヲノ 頭註参照。その宮跡は不詳。この地に住ま
れたので小野宮とも申す。

【拜み奉る】 ヲガみ奉る。御機嫌伺する意。

【まうで】 「まゐいづ」の音便「まうづ」故參上致す意。

【雪いと高し】 頃は正月なるに注意。

【しひて】 雪深く歩み難きをしひて歩を進め。

【御室】 御庵室をさす。

【つれづれと】 つれづれとしたる様にての意。つれづれは
つくづくと物思に打沈んでゐる様。

「つれづれとは、む月には世にある人はおほやけわたく
し何くれといはひごとどもにいそがはしきに、なした
まふわざなくさびしくおはします意なり。さるからに、

ものかなしき也。いにしへの事とは、みなせ交野の狩
の事などなるべし。この文いとくあはれになさけ
ふかさまにかけり」(藤井高尙「新釋」)

【聞えける】 申し上げたの意。

【さても侍ひてしがなと】 もうそのまゝ御前に伺候したま
までゐたいものだなと。

【おほやけ事】 宮廷の儀式節會のことどもをさす。時は正
月なるに注意。

【忘れてはの歌】 (皇子の御出家なされたのは誠に「おもひ
の外」の事故)ふとそれを忘れては、(現在山里深くにあ
まりにもわびしく御住ひなされてゐられるのを)夢では
ないかと思ふ。雪深い道をふみわけてこんな山奥に皇子
を尋ねようなどは、全く豫想だにしなかつた事である
よ。

一二句辭簡にしてしかも人に迫る真情の切々たるを見
る。王位にも上るべき身上の皇子の、いまは身を變へての
この陀住居を拜しては、まことにゆめの中にある心地と
言ふべく、さしも心を寄せ奉りたりし業平の、ことに生
來多情多感なる彼の心中、其の悲傷果して如何ばかりな
りしぞ。「雪ふみわけて」の句、雪深き山奥の住居のさま
よくあらはれたると共に、ふみわけ訪ねたる人のこゝろ
の深さをも思はするは妙なり。

【思ひきや……とは】 修辭上呼應法とよばれるもの。尙此
の段は次の語が直ちに此の歌に續いてゐる。即ち

「となん泣くく來にける」
と言ふのがそれである。心にもあらずしてこの歸路の心
の程も見えて愈々歌の心のはれさを添へる様に思ふ。

「惟喬の親王の許にまかり通ひけるを、頭おろして小野
といふ所に侍りけるに、正月にとぶらはんとてまかり
たりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪いと深かり
けり。強ひてかの宮にまかりいたりて拜みけるに、つ
れづれとして、いと物悲しくて、歸りまうで來て詠み
て贈りける。在原業平朝臣」(古今集雜下)

此の物語ではその場でよんだ事になつてゐて一層あはれ
さを覚えるのであるが、古今集は歸りて後贈つた様に記
してゐる。

又新古今(雜下)には

「世を背きて小野といふ所に住み侍りける頃、業平朝臣
雪のいと高うふり積みたるをかきわけてまうで來て、
夢かと思ふ思ひきや、とよみ侍りけるに惟喬の親王
『夢かとも何か思はむ憂世をば背かざりけむ程ぞくや
しき』
とあつて親王の返歌がのつてゐる。しかし是は疑ふべき
ものと言はれてゐる。

【身はいやしなから】 以下第八四段。

官位は低いがの意。いやしは下賤の意ではない。

【母なむ……】 業平の母は桓武天皇の第八皇女伊登内親王で
あつた。

【長岡】 頭註参照。桓武天皇が平安に遷都せられる前數年
間都された處である。

【一人子】 ヒトリゴ 業平は伊登内親王の一人子なる意で
ある。業平は兄弟があつたが異腹の間柄であつた。

業平者故四品阿保親王第五之子正三位中納言行一之弟
也阿保親王娶桓武天皇女伊登内親王生業平(三代
實錄)

【かなしうし給ひけり】 「かなしくす」は身にしみて深く愛
する。非常にかはゆがるの意。

【師走】 シハス 陰曆十二月。諸事し果つ意かと言ふ。

【とみの事】 疾みの意。急を要する火急な事の意。

【こと言】 異言の意。こゝは歌以外の別の文句をさす。

【老いぬればの歌】 老いはててしまふと如何にしても避け
えない別離がある(即ち死別のこと)と言ふので(日頃
にもまして)いよ／＼お前に會ひたく思ふよ。

【さらぬ】 は「え避らぬ」の意。「避け得られない」といふ
意。
老衰しての病床にあつて、死期の近きを知り、とみに使

をたてて生みの子へ示した母の情である。一人子なるに朝夕膝下に置いて共々に生活する事も出来ず、日頃とも、戀しき心切なれども、愈々今生にこの最後の別離近きかと思ひては老母の心情さこそ思はれる。こと言のなきも病辱にやつれたる身の心にまかせぬが爲かと思へば一層あはれである。

【馬にも乗りあへず】馬の用意待つ間も待ちえず、馬に乗らず徒歩で行くのである。

【道すがら思ひける】行く途中で次の様な歌を思ひうかべた。

【思ひける】は誠に其の事實を示してゐる事に注意。

【世の中の歌】此の世に避けえない死別と言ふものがな

2 文の構成

四箇の段落を有する事は一目瞭然である。

第一節（初―七三頁八行迄）

東下りをする昔男の「三河の國八橋」「宇津の山」「富士の山」「隅田川」に於ける旅情。

第二節（七三頁九行―七六頁五行）

惟喬親王とうまのかみなる人との交情。（七五首の八行迄とそれ以下の二部に分れ、前者は水無瀬、交野の櫻狩の節の事を、後者は比叡の山の麓に雪ふみわけて親王を訪れた節の事を描いたもの）

第三節（七六頁六行―七七頁六行迄）

母なる人が宮であり、その子は宮仕する親子の情愛。

第四節（最後の三行）

病のため死ぬべき心地しける男の心細き心情。

3 文意

京遠くなるにつれてつりゆく都戀しさのやるせなくはかなき旅情。櫻狩に雪の日の訪れに一入濃やかなる主従の間の交情。一人子を宮仕させつゝ思絶えせぬ母子の切なき恩愛の情。病み煩ひて死近きを知る男のはかなき心情。是等は時を異にし、所を變じ、相手を別にし、事を換へたる夫々の感懐である。然し全篇を通じて浮び出づるは多感多涙なる一人の主人公の姿である。

4 鑑賞批評

何れの篇を読んでも惻々と人に迫る心情が漂つてゐる。全篇に漲る情感はまことにものはかなきあはれさである。これは勿論主人公自身の涙多き心そのものによるであらう。然しそれを表現するのに簡素な語を以てし、ぼつり／＼と短文を連ねて述べてゆく筆の運び方も亦大きい役割を果してゐる様に思はれる。繰返しの文も多く語も亦多い。（例へばけりの如き）誠に一見幼童の語るが如き趣を想はせ、古樸の味ひを十分に存してゐる。しかも一語一語は何等の虚飾なくまことにその意圖と稱すべき妙を漂へてゐる。古來假名文の模範と仰がれ、歌人の必ず讀むべき書と重んぜられたのもまことに所ありと肯づかれる。然し翻つて思ふに、その取るべきは、やはりその想にあり情にある事を思はざるを得ない。ことに歌文互に相映發しての妙味は眞に歌物語の祖であり、しかもその白眉たるに恥ぢないものである。更に個々獨立するが如き各篇の物語全體を通ずる情感の渾然たるに至つては妙趣言ふべからざるものがある。

くてありたいものだ。親に對して千代も健やかにいませと祈る世の子のために。
「人の」は軽く添へた語。勿論業平自身をさすものである。
【昔男わづらひて】以下一二五段。此の物語の終末の箇所。
【心ち死ぬべくおぼえければ】何かなし死にさうな心地がしたので。
【つひにゆく歌】最後には誰でもゆく死出の旅路とは前から聞きしつてはゐたが、よもや昨日今日の真近きにそれが迫つてゐるとは思はなかつたのに、（愈々自分も死なねばならぬのであるか）

三 備 考

1 指導研究

一、文章の古朴言ふべからざる趣、文章と和歌との相ひゞき合ふ妙味、更に各篇を通じて全篇に漂ふ詩情の特異さ、是等は本課指導の中心的事項である。

二、竹取物語との比較を行はせる事は本課の特質を把握せる一方法である。竹取物語は既習の通り傳奇的物語であるが、此は歌物語である。彼が内容は架空的構想であるに反し、此は事實に基づく具體的の経験である。彼はむしろ描くところ寫す所に生命があるに反し、此はむしろ述べるのであり語るのである。彼は文章を主とし和歌は單に趣を添へるに過ぎないが、此は和歌が中心であつてむしろ文章はその詞書の如き位置を占めてゐるのである。彼は全篇一貫して姫と翁とを中心とする物語であるが、此は各篇各々獨立しても亦妙趣あり、しかも全篇を通讀してその間に漂ふ情感の相通するものを感じるのである。彼は展開してゆく物語の描寫に趣を感じるに反し、此は時に當り處に臨んで抱く主人公の情感があらはれなのである。

三、詞簡にしてしかも意幽なる本物語は、單におほまかに讀過するだけでは、ともすれば其の妙趣を味ひ得ぬ危険がある。よく一語一語の意に徹して十二分に味はせたい。殊に物あはれなはかなき心情は、心の沈靜を得て始めて味讀し得られるものであるから、よく落ちついた心を以て讀み浸る様指導する事が肝要であると思ふ。

2 参考

伊勢物語の得失に關する藤岡博士の言を引用して置く。

「伊勢物語は、記事の神異なること、竹取物語に等しきものあるにあらず。結構の整美なること、源氏物語の類にもあらず、和歌を主眼として、その前後の始末をしるしたるものにて、或はこれを以て、一つの歌集に擬するものあれども、それは程かならず。その文は歌の小序たるに止まらずして、別に趣味饒多なる談柄を添へ、歌文相待つて、その妙いふべからず。毎篇個々獨立して、組織の聯絡なしといへどなほ多情多涙なる主人公の性格は前後を一貫して、片々の珠を繋ぐ絲となる。直ちに人性の奥に突入して、虚飾なく、真情流露して、人の肺腑に入るもの、これをこの物語の長所とす。(中略)その文の詞簡にして意幽に、感懐の痛切なること、業平の歌とその軌を同じくするを見れば、この一篇をまた在五の作と推すも、蓋し大過なかるべし。嗚呼業平の長所はすなはち短所なり、感情の横溢するに任せて、想を練らず、詞を琢みず、眞卒に過ぎて、時には兒童の言の如くなるものあり。惜しいかな、天才は刻苦經營の功積みがたく、わずかに眞理の一面を發揮して止むもの多し。業平もこの弊に陥りて、遂に後進貫之をして別に大名を掲げしむ。さはいへ五中將の名の永く後世に喧傳して朽ちざることと思へば、業平もまた偉大なりといふべし。而してその名の後世に喧傳するは、その歌のすぐれたるによるべしといへども、主として伊勢物語の一篇の存するによらずんばあらず。この一篇は傳はりて後の國文の模範となりぬ。源氏物語の如き大著もまたこれに得るところありしが如し。業平が九十九歳の姫を愛することを記して、「世の中の例として、思ひおもはぬ人もあるを、この人はけぢめ見せぬ心なくありける」といへるは、やがて轉じて光源氏の品性と化生したるものにあらずや。かくの如く後世に影響せしことを思ふに、平安朝の半ばになり末に移るに従ひて、風雅益々輕靡に流れ、和歌も戀の歌のみ尙び用ひらるゝに至りしが如き、業平もまたその責に任せざるべからざるか。」(國文學全史—平安朝篇)

註 釋 書

非常に數が多い。例の歌よみの必讀すべき書と考へられてゐたためであらう。今はその注意すべきものをあげる。

- | | | | |
|------------|------------|-------------|-------|
| 伊勢物語髓腦(一) | 在原 滋春 (最古) | 伊勢物語愚見抄(五) | 一條 兼良 |
| 伊勢物語闕疑抄(五) | 細川 幽齋 | 伊勢物語拾穗抄(五) | 北村 季吟 |
| ○勢語臆斷(五) | 僧 契 冲 | 伊勢物語童子問(一三) | 荷田 春滿 |
| ○伊勢物語古意(六) | 賀茂 眞淵 | ○伊勢物語新釋(六) | 藤井 高尙 |

九 須磨の秋

紫式部

一 解題

1 作者

紫式部。種々異説もあるがまづ紫式部と考へてよろしいと思ふ。式部の父爲時(或は道長)との合作であるとか、或は全篇を二分して前半四十餘帖は式部の筆であるが、所謂宇治十帖は娘の大貳三位のものとしたものであるとも云はれてゐる。よし後人の加筆が些少はあるにしても、今傳はる物語の全體が紫式部の手になつたものと考へるのが穩當であらう。

紫式部 ムラサキ シキブ 藤原兼輔の孫に當り、爲時の女であつて、幼時より非常に聰明であり學を好んだ。父が兄に史記を教へる時、傍で聞いてゐる式部の方が却つてよく暗誦するので、父は彼女の頭を撫し、口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸福なかりけれ。と常に嘆じたといふことが紫式部日記の中に書かれてゐる。後、藤原宣孝に嫁して一女後の大貳三位をあげたが、長保四年二十四歳の時その夫を亡つた。やがて寛弘四年、三十歳にして一條天皇の中宮彰子(上東門院)に仕へる事になつたが、その數年間の寡居生活の間に、此の物語は着手せられ、宮仕の後迄筆を續けられた様に思はれる。式部は長和五年、三十九歳で逝去した。著書には源氏物語の外に紫式部日記・紫式部家集等があり、且つ勅撰集に入つた歌も尠くない。

尙ほ彼女は藤原氏であつた爲に初めは藤式部と稱せられた。それが紫式部となつたについては諸説があるが、源氏物語の中に紫の上を理想の女性としてすぐれて描き出したによると言ふ河海抄の説が一般に行はれてゐる。又その「式部」と

いふ名については、當時女房名に父兄の姓名及び官名をとるのを慣例としたによると言はれてゐる。即ち彼の父爲時は式部承であり(小右記)兄惟規も亦式部承(尊卑分脈・紫式部日記)であつたから、其の何れかによつたものであらう。

2 出典

源氏物語。須磨の巻の後半からの抄出である。

次に本課を含む須磨の巻の梗概を示しておかう。一體當時源氏は、右大臣の末女朧月夜内侍と親しくなつた事と、新帝の御代をいそぐ等と言ふ噂により、除名されて其の上左遷されさうであつた。そこで都を去つて須磨の浦に謫居しようと思ひ立つたのである。時は三月二十日あまりの頃で、源氏は二十六歳、その翌年三月迄の記事が即ち本巻の範圍である。さて源氏は愈々都を後にするに當り、先づ致仕大臣(舅)を訪ねて一家の者ども及び未だ幼き一子夕霧との別れを惜しみ、それから花ちる里・朧月夜内侍のかみ・藤つば・春宮等に別れを告げ、更に北山なる先帝の御はかに詣でて暇を申し、愈々七八人ばかりを供として旅立つた。皆々悲しい別れではあつたが、特に紫の上との別れは世にも切ないものであつた。

をしからぬ命にかへてめのまへのわかれを
しばしとめてしな

とはその節の紫の上の衷情であり、源氏は「道すがら面かけにつとそひて、胸もふたがりながら」舟にのり、その日の四時頃須磨の浦についた。新居につかれてからは都の愛人達との間に文の贈答がある。紫の上・藤つば・朧月夜等を始め、又伊勢の御息所にも御使を奉つた。その中朧月夜内侍は勘氣をゆるされて、七月に参内する事になる。御遊の折、源氏の居らぬをさびしがられ種々同情される。その都で同情されてゐる源氏の居られる「すまには……」と本課採用の部分となるのである。……そして本課の後につゞく主要な記事は次の様なものである。一つは大貳一家の筑前よりの舟路による上京である。その娘「五節の君」は(かつて源氏に逢へる人)逢はで過ぐるを残り惜しく思つて歌を贈る事。次は須磨近く

の明石入道良清の娘に文をやられたが返事はなかつた。然し入道と北方とは娘を奉るべきか否かに就て議論を戦はしてゐた。その中に年も暮れて二月廿日過に都の花を偲んでゐる頃、頭中將(葵上兄)が俄に訪れる。次は三月上巳の禊をしようとし海岸に出る。偶々大暴風雨に遭つて大いに困惑される條があつて、此の須磨の巻は終つてゐるのである。

3 主眼及び採擇の趣旨

故あつて異郷の空に謫居生活を送る源氏が、ふけゆく秋のさびしさの中に、望郷の念やる方なく、事ごとに心を傷ましむるわびしさを描いたのが本文であるが、之を通して、平安朝は勿論日本文學中の最大傑作と目される逸品の片鱗をうかがはしめ、以て文中に漂ふ情趣の高雅さを味はしめむとするに在る。

二 解 釋

1 語 釋

【須磨】スマ 攝津國武庫郡須磨村、今神戸市(須磨區)の一部。その海濱は所謂青松白砂、風光明媚、月の名所として古來其の名を知られ、歌枕として名高い。

【須磨には】「須磨に於ては」須磨ではの意。上文は、朧月夜・朱雀帝等都の事を書いてあるためである。

【よとよ】「よとよ」の約である。彌々甚しく、いよ／＼まさつての意で、勿論副詞。たゞし「心づくしの」は用言でない事に注意。

【心づくしの】秋風の修飾語で、語義は心盡しの意である。

即ち句意は人をして様々なあはれな物思をさせる(秋風)のためにの意。頭註の歌は、今古集秋上、讀人不知の歌。一首の意は、未だ落葉はしないが、夏木立のしげみに比べて、何となくまばらになつた木々の梢から洩れて来る月の光を見ると、月の色も何となく冴え渡つて、人をして様々のあはれな物思をさせる秋は、はやすでにやつて來てゐるよとの意。

【海は少し遠けれど】本課採用の上文に須磨の住居を敘して左の如くある。

「おはすべき所はゆきひらの中納言の、も鹽たれつゝわびける家居ちかきわたりなり。海づらはや、いりて哀にこゝろすごげなる山中なり。」

【行平の中納言】平城天皇の皇子阿保親王の第二子。御母は桓武天皇の皇女伊登内親王。弟業平と共に在原の姓を賜はつた。仁明天皇以下光孝天皇迄の諸朝に仕へ、正三位中納言兼民部卿となる。寛平五年(一五五三)薨、年七六。奨學院を創設し子弟の講學の道を圖つた。須磨謫居のことは古今集卷十八に「田村の御時(文徳天皇の御時)事にあたりて事情があつて、帝の勅勘をかうむり)須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮の中(宮中)に侍りける人につかはしける」といふ詞書があつて、

わくらははに問ふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ。若し、たまさかにでも、行平はどうしてゐるかと問うてくれる人がをつたならば、彼は須磨の浦で海士の如き仕事をし涙にぬれつゝわびしいくらしをしてゐると答へてくれよ)

といふ歌があるので、有名である。

【關吹き越ゆる】續古今集釋旅に「津の國須磨といふ所に侍りける時よみ侍りける」と云ふ題下に出てゐる和歌をさす。行平は事によつてこの浦に謫居させられた事がある。かの古今集の雜下「わくらははに問ふ人あらば須磨の

浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ」と言ふのはその時の詠である。尙此の地に關所があつた事は「淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜ね覺めぬ須磨の關守(平兼盛)の詠によつて有名である。さて「關吹き越ゆる」と言ふ語、即ち行平の歌の想のあや、は、關所は行き交ふ人をすべて止めるのが本體である。然るに空行く風は止め得ないので、須磨の關を自由自在に浦風が吹き越えると考へた所にある事は言ふ迄もない。尙ほ歌は浦風であり、こゝに言はうとするのは浦波であるから、こゝの文意は即ち次の様なものとなるであらう。

「關吹き越ゆる」云々と歌つた秋風に催される浦波の響が……

【夜々はげにいと近く聞えて】前文の「海は少し遠けれど」に相應する文である事は言ふ迄もない。「夜々は」と特に斷つてゐるのは、夜分に潮の満つる事にもよるであらうが、むしろ主として四邊の静寂さから夜々はとくに近くきゝなされるのだと解すべきである。「げに」は上文に「關吹き越ゆる」とある語を受けて、行平の歌つた通りまことに浦波(行平の歌は浦風であるが關を越へて即ち自由自在に身近く追つて來る點は同一である)が夜々はいと近く聞えてくると言ふ意である。尙「夜々」は浦波に縁をもたせて「寄る／＼」をかけてゐるのである。

【またなくあはれるもの】 此の上もなく、非常にあはれであるものの意であるが、此のあはれは、さびしさに堪へられない心地を指す意のあはれである。

【御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに】 「御前に」は源氏の君の御前にて、即ち御前には極めてわづかの人が侍し、しかもそれ等の人々がみな一様に寝静つてまつてゐるの意である。「わたる」は語の下について其の動作状態のすうつとひるがり續いてゐるに言ふ。「すみ渡りたる大空」或は「照り渡る月」などの語参照。

【一人】 勿論源氏をさす。下に「聞き給ふ」と敬語がある事に注意。

【枕をそばだてて】 枕につけてゐた頭を上げて敬てる意。即ち耳を傾けて、ききみをたてる事。

【四方の嵐】 ヨモのアラシ 嵐は烈しい秋風の意。

【波ただこもると立ちくる心地】 波が全くもう枕許に寄せて来る様な気がして。こもるとは「此許」にて「此の處」の意。従つてここでは枕許をさす。

【枕浮くばかり】 ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり(古今六帖) 涙川水まさればやしきたへの枕のうきてとまらざるら

と我が戀ひわぶる人の住む方角、即ち都の方から風が吹いて来るためなのであらう。—— 都でも自分と同じ様に戀しさに堪へ切れずなき暮して居るに違ない。その聲をそちらから乗せてくる風のための浦波だからこそ恰も泣く音にきまがはれるのであらう。

「佗ぶ」は種々の意があるが、此處は慰む方なく心細く思ふとか、堪へきれない程さびしいとかの意。「戀ひ佗ぶ」であるから戀しさの心からさうなのである。

【うたひ給へるに……】 「戀ひ佗びて……」の歌を吟詠なされた所が……

【おどろきて】 「おどろく」は(一)びつくりする。(二)目が覚める。(三)迷からさめる。等の意があるが、こゝは(二)の意。即ち源氏の君の寂しい詠歌の聲に目をさましたのである。前に「うち休みわたれるに」とあるに應ずる。

【めでたう】 めでたくの音便。「めでたし」はここでは結構である、立派である、うるはしい等の意であるが、更に同情すべき情の交つてゐるめでたさである事に注意。歌を中心としてかく思つたのは勿論であるが、更に源氏の君の御聲のうるはしさを含めての感である。

【忍ばれで】 源氏の君の心を察して同情の念に堪へきれず

に。

【あいなう】 あいなくの音便。「あいなし」は味氣なく、力

九須磨の秋

む(拾遺集)

【琴を少し……】 キンをスコシ……四方の嵐に耳を敬て、悵然として感慨無量。そこでその切なきわびしき心もなぐさむやと思つて、琴を手にしてかき鳴らしたのである。(然るに自分ながら驚くばかりに凄く聞えたので、その手をやめられるのである。)琴はキノコトともいひ、箏サウノコトに對して、七絃の琴をいふ。箏は十三絃のものである。尙この須磨の琴については上文都を後にする條に次の様な記述がある。

「かの山里の御すみか(須磨の謫居)のぐ(道具)は、えさらずとりつかひ給ふべき物(是非入用な物)どもことさらによそひもなくことそぎて、またさるべき文ども文集などいれたるはこ、さては琴ひとつぞもたせ給ふ。」

【我ながら】 自分がかき鳴らした琴の音ではあるが。

【弾きさし給ひて】 弾きかけた手を途中でやめられて。「さす」は中途半ばにしておくこと。「讀みさす」かきさす等とも言ふ。

【戀ひ佗びて、の歌】 都戀しさの念に堪へられずして泣く自分の聲に似通つて浦波の音が聞えてくる。—— 波の音までが泣く聲の如くきこえてくる—— さて怪しいなと思つたが、これはきつ

なく、しよんぼりと等の意。

【起きみつゝ】 身を起して居すまひを直しながら。

【忍びやかに】 目立たぬ様に、遠慮勝ちな様に。こゝの文は人々の動作が目前に髣髴として来るのを覚える書きぶりである。

【鼻を……かみわたす】 「わたす」は、前の「うち休みわたれるに……」と同じ用法で、その動作が遍く及ぶことを意味する。こゝでは目覺めた人々が誰も彼も鼻をかむといふ意。「鼻をかむ」とは忍び泣きをする状態をいふ。涙をひそやかに拭ふ姿である。

【げにいかにも思ふらむ】 侍者達が源氏の歌に感じ鼻をしのびやかにかみわたすのを見て、源氏は「まことにどんなに此の人々は悲しく思ふことであらう」と氣づかれた。

【我が身ひとつより】 源氏の君が一身のために、源氏がここに謫居するばかりに。

【程につつゝ思ふらむ家を別れて、かく感ひあへると思ふに】 (彼等の親兄弟等が片時も離れ難く)その身の程々に應じて思ひ戀ふであらう、その家を離れて、こんな風に(我が身の供をするばかりに)海邊の片田舎に佗しく惱ましい生活を送つてゐるのだとお考へになると。

【いみじくて】 「いみじく」は善惡邪正に通じ、すべて事の

甚だしきに言ふ。こゝでは、甚だしく氣の毒に思はれてといふ意。

【いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと思せば】
自分がこの様に思ひ沈んでゐる様子を見ては、彼等もさぞ心細いと思ふだらうとお考へになられると（誠に氣の毒で可哀相に思はれたので、氣をとりなほし、晝は…）

【戲言】 タハブレゴト 冗談や洒落など、とりとめのない詞。

【うち宣ひ紛らはし】 戲言をうち宣ふことによつて、いとかく思ひ沈むさまを「紛らはす」といふ意。

【つれづれなるまゝに】 上に「又」などの語を入れて、退屈な淋しい折ふしなどには「の意」。

【唐の綾】 カラのアヤ 唐土舶來の綾絹。前文の手習は紙であり、この絹には墨で繪をかゝれたのである。

【晝がきすさび給へる屏風の面どもなど】 なくさみに晝がいてそれを屏風に貼つて見ると、其の屏風のオモテオモテガの意。「すさぶ」とは心入れずにもものすること、なくさめにす、あそぶ。

【いとめでたく見所あり】 大變立派で見所がある。「見所」は善しと認むべき所、或は見逃すべからざる所の意。

【人々の…集め給へり】（かつて都にお出になる時）、從者達が遠くの海山の立派な景色をお話するのを聞かれて

とあるから、そこを指導して誤なく文意をさとらせる様にした。

【懐かしうめでたき御有様に】 「懐かしうめでたき」といふのは源氏の御有様に對する侍者の氣持。「御有様に」の「に」は「により」「の爲に」などの意で、次の「物思ひ忘れて」の理由を示してゐる。

【世の物思ひ】 京都を離れ、親子に別れて須磨の海邊にゐるといふ寂しい悲しい氣持をさす。

【嬉しきことにて】 嬉しきこととして、嬉しい事であると思つて。

【四五人ばかりぞつと侍ひける】 「つと」は（一）動かす移らす姿、じつと、づつと、そのまゝ。（二）急に身うごかす状。勿論こゝは前者。

【前栽】 センザイ 殿舎の前に草花を植ゑた所をいふ。後世の庭園のやうに木石を配し池を堀るやうなものではない。

【海見やらるる】 海の見渡すことの出来る、海見のきく（廊）。「るる」は可能の助動詞の連體形。

【廊】 ラウ 殿舎と殿舎とを連続するための建物。渡殿、細殿。

【ゆゆしう清らなるに】 驚くばかりに清らかである上に。「ゆゆしう」は「ゆゆしく」の音便、「ゆゆし」は（一）

（若紫の段）唯御想像になつてゐられるだけであつたが（今かやうにして須磨の絶景を目のあたり近く御覽になられると、成程（筆も詞も）及ばぬ磯邊の様子であるが（それを）くらべるものもない程立派に晝き集めなされた。

【上手にすめる】 「める」は推量の助動詞「めり」の連體形。上手として評判してゐる。

【千枝・常則】 チエダ・ツネノリ 二人共當時の繪師として書かれてゐるが、實際は道長時代より一時代前、村上天皇の御時代の晝工である由が、河海抄に見える。

【作繪】 ツクリエ 墨書に彩色すること、又その繪を言ふ。こゝは前者。つくり繪とはすみかきのうへを彩するを言也、源氏のかゝれたる繪を彼等に色どらせばやと也。…（河海抄）

【心もとながりあへり】 皆のものがそれを待遠しく思つた意。即ち此の頃の上手にすめる繪師に彩色させたなら、どんなに源氏の墨繪が一層立派なものになるであらう、早くさせたものだと待遠しく思つたのである。（事實すぐにはその望を果し得さうにもないので）さて此の段の、特に前半は生徒には仲々解しにくい行文であると思ふが、考へさせる手がかりは一に敬語にある。即ち源氏のことについては「思す」「思せば」「宣ひ」「手習をし給ふ」

忌み憚るべくある。（二）甚しい、並大抵でない（善惡共に）などあるが、こゝは後者。

【所がらはましてこの世のものとも見え給はず】（その清らかさは）場所が異特なために、一層その清らかさをまして（天上界からでも天降つたのではないかと疑はれる位で）とても此の俗界の人とも思はれぬほどである。

【白き綾のなよやかなる】 綾織の白絹のなよ／＼とした柔かな。「なよやか」は「なよやか」に同じ。「やか」とはその状を言ふ。「にこやか」「花やか」「にぎやか」「きらびやか」「細やか」さて此の白き綾は御衣について言つたものであらう。

【紫苑色】 シヲノイロ 「花鳥餘情」に「河海に白き綾の御衣に、紫苑色の指貫と言、さもありぬべし。又紫苑色も同く御衣の色と言はんも、相違あるべからず…」とある。御衣の色であれば、紫苑は所謂重ねの色目の名で、表薄紫、裏萌黄なのを言ふ。下の色が透き通るために全體としては紫苑色に混成して見えるのである。又指貫とすれば、指貫には重ねの色目は用ひないから、地色が紫苑色の指貫と見るべきである。「奉りて」は御召しになられて、身につけられての意。

【こまやかなる御直衣】 「こまやか」は色の濃きこと。この時は何色であるかは明かでないが、平安時代の多くの用

例は、「こまやか」といふ場合は、紫か紅かの場合に限られてゐる。従つてこゝは紫色かと思はれる。

直衣は平安初期から用ひられ始めた貴人の常服、即ち略服である。禮服は所謂衣冠(束帯)。

【帯しどけなくうち亂れ給へる御様】「しどけなく」はとり亂れた、とりつくるはぬ様を言ふのであるが、こゝはあつさりとくつろいだ様に帯をしてゐるのを言つたのである。「打ち亂れる」はうるはし(端正)に對して、くつろいだ様子。

【釋迦牟尼佛弟子】シヤカムニブツデシ「釋迦牟尼佛弟子何某歸命頂禮……」等と經文を唱へ始める時の慣用語。

下に「名のりて」とあるのを照合すべきである。

【ゆるるか】「ゆるやかに」同じ。ゆつくりとよまれた趣ある様。

【また世に知らず聞ゆ】上を受けて、この様な人が又と二人此の世にあらうかと思はれる位めでたくいふなされたのである。當時は經文を讀誦することが音楽的に行はれて、その聲の美しさを人々は愛した。「讀經争ひ」などといふのも、その音楽的な美聲の競争をいふのである。

【沖より舟どものうたひのしりて】沖の方からは舟どもが船歌をうたひ騒ぎながら漕ぎ過ぎるのも聞えて来る。

【ほのかに……】遠くの舟がかすかにたゞ小さい鳥が浮ん

でゐる様に見なされるのも心細く旅情をそゝる上に、空では雁の……。

【雁の連ねて鳴く聲、楫の音にまがへるを……】列をなして空行く雁のなく聲が、楫の音とからんできまがはされるのをきながら、其の景色に目を止めて、眺め渡されてゐるのである。

【黒木の御數珠に映え給へるは】黒木は黒檀。數珠はズズ又はジュズ。百八(百八煩惱)によると言ふ。あるを普通とする。もと呪文、稱名、稱題の際に數を記憶するに用ひたものであるが、今は單なる形式的のものとなつてゐる。さてこゝは源氏の涙を拂はれる御手の肌の白さに、黒木の數珠の黒さが映えて見えるのである。

【故郷戀しき人々】原作「故郷の女戀しき」とある。勿論教科書であるがための省略。

【十五夜なりけり】「十五夜であつたなあ」とはなやかな月の光に驚いて急に思ひつかれた氣持。「けり」は詠嘆の助動詞。

【殿上の御遊戀しく】テンジャウのオンアソビ「御遊」は管絃の遊。此の次に左の數句が省略されてゐる。「所々ながめ給ふらんか」と、おもひやり給ふにつけても。

【まもられ給ふ】「まもる」は「目(メ)守る」で、じつとみつめること。「れ」は自發の助動詞「る」の連用形。

【二千里外、古人、心】ニセンリノホカノコジンノココロ頭註参照。月明にはよく引かれる詩句。白樂天が仲秋十五夜に、親友元稹が左遷の身を思ひやつて歌つたもの。今夜は恰も十五夜ではあり、且つ海山遠く都の故人から巨つて、月明に對して感慨に耽つてゐるのが、此の詩句(白氏は都でうたつた)の心境に似てゐるから思ひ出されたのである。

【誦じ】ズンジ 節をつけて歌ふこと。「誦す」の音變化。

2 文の構成

第一節(初より七九頁三行迄) 秋の夜更けに浦波の音をきく源氏の哀愁。

第二節(七九頁四行―八〇頁五行迄) 晝間のつれづれなる閑散なるすさび。

第三節(八〇頁六行―八一頁五行迄) 或る夕暮廊に出で給へる源氏のうるはしさ。

第四節(八一頁六行―終迄) 十五夜の月明に對して都を戀ふる源氏。

3 文意

京に住みにくくなつて海近き須磨に世を遁れた源氏の君が、異郷の秋を背景として、或は夜更けに、或はつれづれなる晝に、或は又夕暮に月明に、そゞろ望郷の念やる方なく、わびしくも亦やるせなき哀愁の朝夕を送るのであるが、その侘しさ、やるせなさを描かうとしたのが本文である。

4 鑑賞批評

「須磨明石」といへば古來其の名を喧傳され、五十四帖の源氏物語も或はこゝから筆を始めたのではないかと言はれる。

【例の……】御供の人々は例の(如く)止めどもなく涙を流して貫泣したのである。「られ」は可能の意。此の次に左の如き文を省略す。

「入道の宮の『きりやへだつる』とのたまはせし程、いはんかたなく戀しく、をりをりのこと思ひ出で給ふに、よよとなかれ給ふ」

【聞ゆ】「きこゆ」は「言ふ」の敬體。申し上げる意。尙ほ外に敬意の助動詞的用法もある。

全課を読み去り読み來つて先づ感ぜられるのは、其の構想の非凡な點であらう。等しく須磨の秋の源氏を描きながらも、時と所と事とを巧みに變じ、前後彼此照應の妙、まことに靈筆と言はざるを得ない。今少しく其の趣を明らかにしよう。異郷にての秋夜、時経ては人々何時しかうち休みたる夜ふけ、一人目をさまして四方の嵐とたゞこゝもとに立ちくる浦波とをきゝては、枕浮くばかりの涙とどめ難く、なぐさむやと思ひてかき撫でし琴は、我ながら驚くばかりの凄じき響に、ふと驚きて弾きさし、哀音切々たる詠を口ずさめば、人々も目覺めて、感に堪へず忍びやかに鼻かみわたす。その景誠に凄艶とも稱すべく、其の情の強く切迫せるを感ず。

これに續く第二節に進まんか、源氏の深き慮より、ことさらの戲言を宣ひ、或は手習のすさびに、或は繪筆とるのどかさ、つれづれなる晝間紛らす閑散さ、彼此對照の妙を見るべし。

第三節は夜ふけにもあらず、晝間にもあらずして、時は夕暮なり。前裁に秋の千花咲き亂れ、遙かに海見渡さるゝ廊に出で給へる源氏、装の色目より帯のすがた迄、まことに世に似るものもなきあてやかさ、沖ゆく舟の謠きこゆるかと思ふに、遠く小鳥の姿にまがふ舟の浮ぶもありて、仰げば空に列ねゆく雁の聲きこえ、何れ楫の音かとあやまたる。此の妙なる眺の中に立てる源氏は恰も繪中の人の如く、景と情ととけゆきて、或はゆるるかなる名のりの聲、或は白魚あざむく肌に數珠の黒さ映えたるすがた、人々の心もみな故郷戀しさ忘れて慰むばかりなり。第一段は夜ふけの源氏の緊迫せる心を述べて凄艶、こゝは物珍らかなる秋の夕暮の景の中に源氏を點じ、主として其の姿を描きて艶麗、これ即ち第一節とも異なる所以なり。

更に筆は進んで月明に及ぶ。かくて彼此照應情感緩急の妙趣を具へ得たる、げに入神の技と稱すべきか。

三 備 考

1 指導研究

(一) 本文に入るに先立ち、源氏物語についての既習事項を想起させる事が肝要である。とくに「六、平安時代の文學」の五三、四頁には其の特質が簡明に述べられてゐるのであるから、是非讀みかへさせたいものである。そして本課學習の整理的課業に於て、更にもう一度そこに戻り、その所論と本課との照合をさせ、以て理解の徹底を期させたいと思ふ。

(二) 本文の卓拔優秀なる點は既に「鑑賞批評」の項に明らかにした如く、一つは其の構想の非凡さにあるのであるから、先づ一應の讀解の後には、各節の大綱を明白にさせて置くがよいと思ふ。

(三) 本課に於て學習に困難なのは一つは語義である。特に「あはれ」「めでたし」「あいなし」「いみじ」「おもしろし」「ゆゆし」「なよよか」「しどけなし」「ゆるるか」「はなやか」等の形容詞・副詞はその意義内容と共に如何なる氣持を含んでゐるのであるか、單に通り一遍の所謂言ひ換へでは眞に其の語義に徹する事が出来ない。次に煩らしいのは主語の探索である。例へば第二節の前半はその代表的のものである。然し既に語釋の處に述べておいた様に、その指導の鍵は特に敬語にあると思ふ。(他の部分も同断ではあるが)

(四) 本課整理作業の參考として、五三四頁に述べられた源氏物語についての所論を、夫々本課に照合して簡単に述べておかう。(但し五十四帖の一篇の、しかも抄出を具體例としての説明である事を注意して戴きたい)

歌物語
傳奇的物語
寫實的長篇物語

既に伊勢と竹取とを學習してゐる生徒は、本課と比較考察して源氏物語が寫實的物語である特質は容易に把握出来るであらう。歌を中心生命とする伊勢、架空的構想による竹取の兩者に比し、本課は物語が主であり、しかも平安貴族の現實を描いた點にその差異が認められる。

(ロ) 構想の巧妙さ

五三頁の所論は五十四帖についてである。然し單獨に本課だけを問題にしてもその言の至言なることは上述の通りである。

(ハ) 性格や心理描寫の精細さ

こゝでは主人公なる源氏の性格描寫を見るがよい。即ち第二節「げにいかに思ふらむ……思せば……」の文を読めば源氏の思ひやり、その人なつこさをしみじみと解するであらう。

(ニ) 自然人事の描寫錯綜し、抒情詩的繪畫的の趣あること。

何れにも見える趣であるが、特に第一節、第三節に其の適例を發見することはこゝに改めて贅言を弄する迄もなからう。

(ホ) 洗煉された流麗の行文中に宿されてる纏綿たる情緒。

これを悟らせるには心しづかにして本文に十二分に讀みひたらせ、或は他の文章に眼を轉じさせたりして、彼此参照味讀、自會自得さる外はない。

(ヘ) 「あるがまゝ」の中に「ありたし」を宿し、全篇に漲るものは「ものあはれ」への憧憬である。

この物語は、當時の貴族社會が如實に描かれてゐる點に於て寫實小説である事は既述の通りであるが、然らば「ありたし」と願ふ理想小説でもあるとは如何なる意であらうか。例へば主人公源氏の君は當時の貴族生活を示すと共に、その容姿心ばへ聲音等を始め、或は琴に手習に繪によつて消閑をなし、或は月明に對しては詩句の一端を誦じなどすることは、一つの教養の理想を一面に示してゐる事を思ふべきである。更に全篇に漲る「ものあはれ」に至つては、試みにこの本文の何處に強大なる力があり、強固なる意志があり、遒勁なる筆致があるかを見るがよい。すべては物と我と融合して唯「あはれ」と感ずる情趣が漂つてゐるのみではないか。

2 参考

省略の部分に就て

些少の省略については、語釋の項に於て補つた通りであるが、八一頁五行の次に左の文が省略されてゐる。

初かりはこひしき人のつらなれや旅のそらと

ぶこゑのかなしき

と、のたまへば、よしきよ

かきつらね昔のことぞおもほゆるかりはその

夜の友ならねども

民部大輔

心からとこよをすててなくかりを雲のよそ

にもおもひけるかな

さきの右近のせう

とこよ出でてたびの空なるかりがねもつらに

おくれぬ程ぞなぐさむ

友まどはしてはいかに侍らましといふ。おやのひたちになりてくだりしにもさそはれで、まみれるなりけり。したには思ひくたくべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。

源氏五十四帖の梗概を「國文學書目集覽」より引用する。

「桐壺の更衣は桐壺帝の寵愛ことのほかにて皇子、光源氏を生む。されど家格卑しくてよき後見者もなければ、同僚の嫉妬を身に負ひかねて夙に逝く。光源氏は容姿端麗舉措閑雅ことのほかなれば、母の更衣を惡みし人々も之を愛せざるはなし。さる程に藤壺の女

御とて桐壺に似通へるが帝に召されぬ。源氏は之を我が亡き母の再生かとはかり懐き、藤壺も我が子の如くいつくしむ。長ずるに及びて遂に藤壺と道ならぬ契を結びて一男をあぐ。天帝はさる事と知る由もかく我が子と思ひて之を朱雀院の東宮に立て、源氏をばその後見者とす。源氏の本妻は十二才の時に結婚せし奏の上にて四才の姉嫁なり。睦まじといふにはあらねどやがて一男をあげぬ。後程もなく六條御息所の嫉妬によりその生霊にとりつかれて逝く。その後本妻なくして好色に日を送れる源氏は、幼き紫の上を北山に得て愛育せり。紫の上は才色兼備の婦人にて源氏の理想にかなふ。然るに源氏は、朱雀院の時、臘月夜といふ尙侍に通ぜし事あらはれて遂に須磨に流さる。(即ち本課採用の部分を含む巻である) 猶も懲りざる源氏は調居の間にも明石の上に女子を生ませたり。さる程に春宮受禪(冷泉院)の事により、京に召し歸されて、内大臣・太政大臣を経て太上天皇に准ぜらる。その間に於て或は齋院・齋程などに思をかけ、又朱雀の女三宮に契りて薫大將を生ませたり。されど薫は實は柏木大納言の胤なり。其の後最愛の紫の上逝きたれば源氏も怏々として世を楽しまず、間もなく五十四才を以て逝く。「雲隱」の巻は名のみありて本文なく源氏の逝去を暗示す。次の「匂宮」・「紅梅」・「竹河」三帖は夕霧・薫大將の事を記せども畢竟宇治十帖に至る連鎖なり。「橋姫」より終りまでは、桐帝の第八の姫宮、今は世をはかなみて宇治の片山里に住して姫君を持つ。光源氏の子薫大將及び匂兵部卿宮は屢々その邸を問ふ。程なく八宮は逝去し、薫大將はその姉嫁に懸想する事一方ならねど、姉嫁は應ぜざるのみならず幾何ならずして病歿しぬ。薫も今は其の妹の中姫をと思へどこは既に匂宮に従ひたり。然るを思ひかねて屢々挑めば、中姫はせんかたなく縁者の浮舟を媒介す。浮舟は故姉嫁に似通へるを以て薫の心になふ。然る所、好色の聞え高き匂宮は又浮舟に思をかけ、通ふほどに浮舟も匂宮の姿に恍惚として、契るともなき一夜の契を重ね、二夫に見えたる罪の怖ろしく遂に身を宇治川に投ぜしが、死に至らずして尼となりぬ。薫之を聞きつけて、浮舟の實弟をして消息すれど浮舟答へずと。

次に源氏物語の鑑賞については島津久基氏著「對譯源氏物語講話」の所説を参照される様にお奨めする。

参考書・註釋書

(一) 註釋書

- | | |
|-------------|-------|
| 河海抄(二〇) | 四辻善成 |
| 花鳥餘情(一一) | 一條兼良 |
| 岷江入楚(五五) | 中院通勝 |
| 源氏物語湖月抄(六〇) | 北村季吟 |
| 源氏物語玉の小櫛(九) | 本居宣長 |
| 源氏物語評釋(一〇) | 萩原廣道 |
| 對譯源氏物語講話(一) | 島津久基 |
| 頭註對釋源氏物語(五) | 宮田和一郎 |

(其他多數あり)

(二) 批評的研究書

- | | |
|--------------|-------|
| 紫女七論(一) | 安藤爲章 |
| 源氏物語玉の小櫛(九) | (前出) |
| 國文學全史平安朝篇(一) | 藤岡作太郎 |

一〇 香爐峯の雪

清 少 納 言

一 解 題

1 作 者 「清少納言」

古今集の歌人清原深養父を曾祖父とし、後撰集撰者の一人たる元輔を父にもつた清少納言は、文學の血を享けて生まれ
た人である。一條天皇の皇后定子に仕へたが、其の俊敏なる才識は殿中驚異の的であつた。榮華物語には三條天皇の女御
淑景舎に事へた由が見えてゐるが、女御は定子の妹故、長徳二年定子の薨後、之に侍したものと云はれてゐる。その女
御も定子の薨去から數年を経て世を去られた。その後の傳記は餘り明白でない。老齡に及んで落魄したらしい趣は「古事
談」にも見え、或は田舎に下り住みたりとも傳へ（無名草子）現に四國の金刀比羅神社の境内にその墓と傳ふるものもあ
る。然し其の眞偽は勿論明らかでない。尙ほ伊勢貞丈の安齋雜考の中、枕草子抄の一篇があつて、諸書を引いて論じてゐ
るが、宮仕を果した後の消息は不詳と言ふのが穩當である。

清少納言の文才達識を始め、其の性格等を知るべき資料は枕草子一篇に記載せられて餘す所がない。教科書六一頁の所
論参照）

2 出 典 「枕草子」

枕草子は本朝書籍目錄に二卷とあるが三卷・五卷・七卷等異本が多い。書名を枕草子と呼ぶのは、内大臣伊周が定子に
料紙を献じたとき、后は少納言に何を書かうとお尋ねになつたので「枕にこそはし侍らめ」とお答へした結果、その料紙

を賜はつてそれに書いた爲であると言はれてゐる。しかし古くは題號なく單に「清少納言」とよばれ、或は「清少納言が
記」と稱せられてゐた。史的事實は寛和二年花山天皇の御落飾の事を始め、長保年間に及んでゐるが、その中長徳年中の
記事が最も多くを占めてゐる。内容は此の外自然の美を描き、殿中の姿を寫し、折に臨み物にふれての感興を次々と述べ
るに當り、くにききもの「すさまじきもの」「あてなるもの」「心ときめかすもの」「山は」「川は」「木は」「草は」「蟲は」と言ふ様
な書き出しを以て簡潔遒勁なる行文により縦横自在に表現してゐる。尙ほ枕草子は所謂隨筆文學の祖であつて、而も源氏
物語と共に平安文學の双璧である。後の徒然草を始め、花月草紙・風俗文選・鶉衣・百花譜・百蟲譜等の類皆こゝに範を
求めてゐる事は明らかである。

さて本課に採用したものは

二五六段、二四段、四〇段、一六二段、一六三段、二三五段

の六段からの抄出である。

3 主眼及び採擇の趣旨

枕草子は「紫文」と相並んで平安文學の双璧であると共に、我が國隨筆文學の祖であり、而もその最高峯を示すもので
ある。本課はその一端に觸れしめて、其の斬新鋭敏なる觀察と奇警特異なる文體との趣を味はしあ、以て高雅なる心情の
陶冶に資せんとするのが主眼である。

二 解 釋

1 語 釋

【香爐峯の雪】 カウロホウのユキ 之を以て見出しとした一

理由は本課の最初に此の事が記されてゐるからである事

一〇 香爐峯の雪

は勿論だが、更に本課の冒頭に此の「二五六段」を置いた所以は清少納言の名を知るもので之を知らぬものはないか、それ程に有名な既知事項より入つて、學習の興味を喚起しようとするのである。さて此の句を含む詩は白氏文集十六に

香爐峯下新山居
日高睡足猶慵起 小閣重衾不怕寒
遺愛寺鐘欹枕聽 香爐峯雪撥簾看
匡廬便是逃名地 司馬仍爲送老官
心泰身寧是歸處 故鄉可獨在長安

と出てゐるものである。

【清少納言】 セイセウナゴン 「清」は清原姓によるものであり、納言は女房としてのよび名である。

【例ならず】 何時にもなく、何時もの様でもなくの意。普通雪の日にはその眺めのめづらしさに格子・簾を高く上げてうち興するのであるが

【御格子まゐらせて】 御格子を下して。御格子まゐるといへば格子を下すことをさす。「格子」は細い角の木を縦横に組みたるものにて、室の外側をおほふもの。柱と柱との間にありて上下二枚に分れてゐる。開ける時には上を外側に鈎にて釣り上げ、(挿畫参照)下は必要によりとり外す。もと竹にて造りたるものと言ふ。中古よりは黒く

塗るを普通とした。今も神社などに其の姿を見る事が出来る。

【炭櫃】 スビツ 語は「すみびつ」の略。圍爐裏を言ふ。「禁秘抄」に禁中殿上の下侍に炭櫃ありて四面には疊をしく由が見えてゐる。一寸火鉢と誤られ易い。今の火鉢は之を「火桶」と稱したのである。

【物語などして集り侍ふに】 サブラふに。少納言始め女房達が集り話をしつゝ伺候してゐる時に。

【仰せられければ】 中宮即ち定子がなり。

【御格子あげさせて】 少納言が人にあげさせたのである。(挿繪参照)

【御簾】 ミス 「簾」は竹を細く編みたるもの。「すだれ」と言ふ語はその垂らすもの故の名。(挿繪参照)

【捲きあげたれば】 少納言自身がなり。

【笑はせ給ふ】 中宮定子がなり。

【皆さる事は知り】 誰にても「香爐峯の雪はいかならんと仰せられては、その句に續くは「撥簾看」である事は知つてゐるとの意。さて當時宮仕をする程の女で白氏文集の此の句を知らぬ者がないことは、例へば枕草子百十七段「文は」の條に

文は文集・文選・博士の申文

と言つて文集を第一にかゝげ、且つ單に「文集」と言つ

ただで白氏長慶集を意味しうる程流行してゐた事がわかる。「公任」の「和漢朗詠集」もその過半は白氏の句で占められてゐる。白氏の濃厚和平な風調は平安人士の風尚によく投じたのである。且つその白氏の詩中に於ても此の律詩は例の菅公の

都府樓纒看瓦色 觀音寺只聽鐘聲

の詩句の出づる所であり、勿論和漢朗詠集中にも收められてゐる。故にさる事は知り、(歌などにさへうたへど)と言つたのである。

【思ひこそよらざりつれ】 「こそ」の係結ある文「思ひよらなかつたよ」の意。こゝは詩句を思ひ出し得なかつたと述懐するのではなく、詩句は知りながら、皇后様の御心持が那邊にあるのか、又、此の場合どうしてよいかと思ひつき得なかつた意であらう。今少納言の當意即妙的なしぶりになる程と感じ、詩は知りながらもそこ迄は思ひつかなかつたよとの述懐である。

【なほこの宮の人にはさるべきなめり】 なんと言つてもやはり、この中宮様(才學にすぐれていらつしやる)のお仕人としては、少納言が然るべき適當な人であるよの意。「なほ」は(女房等の中にはすぐれてゐる者もあるが、)それでもなほ、なんと言つてもやはりの意。「この宮の人には」の語中には、その言外に、才學すぐれたこの中宮

様の意を暗に示してゐる。「さるべき」は「しかるべき」の意、まことに適切な適當な意。「なめり」は「なるめり」で推量の形ではあるが、單に婉曲に表現しておぼめかしさの中に趣を求めようとした中古文の常套的用語、故に意は斷定であつて、心からまこと然るべき人であると感歎したのである。

さてこの一段の物語は清少納言の俊敏なる機智を語るものとして名高い。枕草子の中には所謂自讃めいた章段がかなりの數に上つてゐる。東國博士は十一ヶ所の綱目を示されてゐる(國文學全史一四二〇→四二三)しかし其等の大部分は皆己の博學宏才を衒ふものである。然るに此の物語のみ特に有名であるのは何故であらうか。金子氏は枕草子評釋に於て「……これは單なる聯想だけで終るのではなく、更に體驗して見せたものである。しかも咄嗟の仕事だけに、いよゝその敏慧さに驚かされる。清少が再三名聲を博したのは、文辭上口舌上の才鋒であつたが、これは更に一步を進めた仕打である。清少の手柄話は數ある中に、こればかり後世まで、特に傳稱された所以も、そこにある。」

と言つてゐられるのも、一つの見方であらう。

更にこの面白さは、皇后宮の柔かい抑喩にある。その鍵は「例ならず御格子まゐらせて」にある。雪を見よう

ともしないで、爐にかちりついておしやべりをしてゐる清少納言に對しての揶揄である。「雪を見てはどうか」といはないで、「香爐峯の雪はいかならん」と遠まはしに仰せられる。それを直ぐに覺つて、かくふるまつたのである。他の女房はこの意味を解しかねたのである。だからこそ「思ひこそよらざりつれ」が生きているのであり、捲き上げたれば笑はせ給ふ」が生きているのである。これを皇后宮が、雪を御覽になり度く思し召したのだと解しては、死んだ解になる。

【にくきもの】 例の書き出しであつて、日常生活の中に遭遇する事件物象の中、憎くらしさを感じるものを述べた一段である。(枕草子第二四段)

【いそぐ事ある折に】 何か清少納言の方に心急いで氣のせか／＼してゐる折に。

【長言するまらうど】 「ナガゴト」はゆつくり腰をおちつけて長話すること。「まらうど」は「まれびと」(稀人)の音轉、客人をさす。

【あなづらはしき人】 無遠慮にしてもよさうな人。即ちあまり氣のおけぬ人。「あなづる」は「あなどる」と同じで輕蔑する意。此の語の上に「それも」とか「それが」などの語を補うて見るべきである。

【後に】 後刻ゆるりと改めて承りませう。(今日は一寸急ぎ

の用があるものですから……)の意。

【追ひやりつべけれども】 追ひ歸してしまふ事も出来るでせうが、「つ」は完了なれど轉じて可能の意を示してゐる。「べけれ」は上の「ならば」に應ずるもの。

【さすがに】 よく使引される詞で「さうは言ふものの」とはいへ」などと單に言ひ換へるのでなく、よくその氣持をかみくだいて味はせる要がある。こゝは「人によつては後になどと言つて追ひやる事が出来る、とは云へそれでもどうもさうも云へず……」

【心はづかしき人】 なんとなく遠慮のいる人。「心はづかし」とは自分より勝ち勝つた人に對しては己はづかしく思ふと言ふ當時の通用語。かう言ふ人には「後にとも云へず、さう言ふ人が長話をするのは、いとくしと續くのである。」

【硯に髪の子】 當時の婦人は髪をかたく結んでゐたのではなく後に垂れてゐたのであるから、とくにこんな事も多かつたに違ないが婦人らしさの筆致であるに注意。

【墨の中に云々】 墨の中に堅い石がこもつてゐて、磨る時にきし／＼して音を立て、滑らかにすれないの言つたもの。上の語と合せて筆硯の人らしい經驗である。

【俄かにわづらふ人のあるに】 急病になやむ人がある場合に。當時は病源を目して「物の氣のたゞり」と解してゐる。

たから、かゝる時には醫藥をたよるよりも先づその物の氣を退散させる事を考へた。そこで修驗者を求めて加持祈禱をするのである。

【験者】 修驗者(スゲンザ)のこと。(都鳥、七五頁参照)

【例ある所にはあらで外にある】 何時でも居る所には居らないで、何處か他所(多分加持祈禱などに出てゐるのであらう)にゐる(のを)。

【尋ねありくほどに】 (使者が)尋ね歩いてゐる中に。

【待ちつけて】 験者の來るのを待ちおほせて、待ちとけて【加持】 カチ 眞言宗で修する佛力護念を修する呪法。即

身成佛義に「加持者表三如来大悲與三衆生信心。佛日之影現三衆生之心水」曰加、行者心水能感三佛日名持」とある。

【ものけに困じにけるにや】 物の氣(退散をそちらこちらに頼まれたため)に疲れたのであらうか。

「ものけ」とは「物の氣」の意で、生靈・死靈のたゞりを言ふ。人の病に附だみて悪しき靈の取つきなやますこと。「困ず」はコンの字音の音轉。

【ゐるまゝにすなはちねぶり聲になり】 坐るより早く呪文を唱へる聲が眠聲となること。到底物の氣の退散しさうにも思はれず、打角待ちあぐんだ上にこの様子であるから「いとくし」なのである。この次に省略あり、参考の

部参照。

【物聞かむと思ふほど】 何かを聞かうと思ふ時。「物」は「聞く」の對照であるが、「物す」ものがなし」などの「もの」と同じく、對象を極く漠然と規定し、多分に融通性をもたせてゐる。この場合の「物」は音楽・物語・用向等何れと考へてもよい。

【ちこ】 乳兒。幼兒。

【鳥の集りて……】 鳥の啼聲は今でも凶兆と言はれてゐる様に、まが／＼しさが感じられていくのである、ことに鳥が「集りて飛びちがひたる」聲々には、その不吉な感じが一層強烈である。この次にも省略あり(後述参照)【名のりて】 こゝは鳴く意。原義は名告るで名を自ら稱することであるが、鳥などがなければ、恰もこゝに我在りとなつたと同様、その在處がわかるから、鳴く意にも用ひるのである。時鳥のなくことによく使はれる。

あかとき名能里鳴くなる時鳥いやめづらしく思ほゆるかも(萬、十八)

卯の花のさくしなれば時鳥いやめづらしも名能里なくなべ(萬、十八)

【羽風さへ】 鳴聲ばかりでなく蚊の羽風まで。「さへ」は「添へ」の意にて、鳴聲のある上に、更に羽風感觸が添加せられることを意味する。

【身のほどにあるこそ...】 その身相應にあるのが...。蚊の身体は小さいが、小さいにふさはしく僅かではあるが羽風さへあるのが...

【さし出でて】 俗に言ふ「出しやばつて。」

【さいまくる】 才捲くる義で、利口ぶつて喋々すること。

【まくる】 は上にある語を強める接尾語。「言ひまくる」「叩きまくる」等。

【すべてさしいでは云々】 總じて「さしいで」は童にまれ大人にまれいとにくいと言ふのであるが、清少果して此の語をなす資格ありや否や、頗る怪しいものである。紫式部日記の中にも

「清少納言こそしたり顔に、いみじう侍りける人、さばかりさかしたち、眞名書きちらして侍る程も、よく見ればまだいと堪へぬこと多かり」と眉をひそめられてゐる。尙この次に左の省略がある。

「昔物語などするに、わが知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし」

【あからさまに】 假初に、ちよつとの意。はつきり、明白にの別意もあるが、勿論こゝは前者。

【兒ども童】 語を重ねたのみで語意に差異はない。勿論語それ自身の意義はことなる。即ち「兒ども」は親に對して子達と複數にのべるのが原義であり、童は單に幼兒の

【蟲は】 例の書き出しで、趣ある蟲についての記述。尙ほこれは原本第四〇段に當る。

【鈴蟲】 今の「まつむし」。其の聲「ちんちろりん」と聞ゆるもの。こほろぎの屬。褐色にて髭長く、腹は黄。野草などにて秋夜羽を振ひてなく。

なほ此の「鈴蟲」より「螢」までが一括されて「をかし」

【松蟲】 今の「すすむし」。其の聲「りんりん」と聞ゆるもの。こほろぎの屬。色黒く、首小、尻大。腹は黄白。

「鈴蟲」「松蟲」古今全く相反する事に注意。

【促織】 ハタオリ。正しくは「ハタオリムシ」、略して「ハタオリ」と言ふ。其の聲が機織の音に似てゐるためであらう。今の「きりぎりす(翁斯)」のことである。古名は「こほろぎ」とも云つた。「いなご」に似て夏の半よりなく、其の聲「ぎツすちよ」と聞え、故に「ぎツちよ」「ハタオリムシ」とも言ふ。京都では「ぎす」と言ふ由。綠色のものは竹林に居て聲低く、褐色のものは岡に居て聲が高い。「倭名抄」に「促織、波多於利米」とあり、拾遺集(三、秋)に

秋來れば はたおる蟲の あるなべに 唐錦にも見ゆる野邊かな

と見えてゐる

意である。【らうたがりて】 可愛がつての意。「らうたし」は愛らしげなるを言ふ。

【をかしき物】 面白い子供のよろこびさうな物。

【取らするに】 與へること。「する」は使役の助動詞の連體形。

【ならひて】 子供達がそれになれて。

【調度や】 テウド 器具道具のこと、日常生活の種々な用品。「や」は物を並列する助詞、あれやこれやの「や」故、調度やその他の物やをの意である。

【今まゐり】 新参者。

【さし越えて】 古参者をさし越えて。

【教へやうなる事】 教訓めいた、指圖がましい事。

【うしろみたる】 後見たる義。世話をやくこと。

【衣のしたにをどりありきて...】 「をどりありく」と言ひ「もたぐるやう」となりと評した表現の斬新さを見るべきである。

【もろ聲】 諸聲。多數の犬の一緒に聲を描へてなくこと。

【なきあげたる】 吠立てること。

【まがくし】 禍々し。不吉であり、忌々しいこと。犬の遠吠は鳥とはことなり物凄さを帯びたまがくしさである。

【蟋蟀】 キリギリス。今の「こほろぎ」。其の聲「りうりう」と聞ゆるもの。「倭名抄」に「蟋蟀、一名、蜚、木里木里須」と見えてゐる。長さ六、七分。幅三、四分。雄は背に黒きうすき翅あれども後の長脚にてはねるのみ。雌は翅短く鳴かず。以上古今其の名稱が相反し、煩しいので次に一括して表示する。

鳴聲	古名	現在の名
チンチロリン	鈴虫	松虫
リンリン	松虫	鈴虫
ギツスチョ	はたおり(むし) こほろぎ	きりぎりす(翁斯)
リウリウ	きりぎりす(蟋蟀)	こほろぎ

【われから】 判然としない。「大言海」には

〔破殻ノ義〕海ニ住ム虫ノ古貝ノ破レタル殻ナドノ、藻ニ附ケルモノトモ、小虫、小蝦ナドトモ言ヘド、小貝ナリトノ説、可ナランカ。(古今集、十五、戀、五「蟹ノ刈ル、藻ニ住ム虫ノ、われからトネヲコソ泣カメ、世ヲバ恨ミジ(我故ト言ヒ掛ク、顯昭ノ注「和布、海苔ナドニ附キタル小貝ヲバ、われからト言フ」)

とある。上部の「鈴蟲」「松蟲」「促織」「蟋蟀」は其のなき音をめで、蝶はその姿、とくに飛ぶ様の優なるに心ひか

れたのであらう。而してこの「われから」は其の實物は何にてもあれ、其の名ををかしと見たのではあるまいか。「大言海」にあげた歌は勿論の事、伊勢にも戀ひわびぬ 海人の刈る藻に 宿るてふ われから身をもくだきつるかな
とあるから、清少は此の如き歌ことばよりして、「われから」の「我故」に通ずる語の趣を中心としてこゝにあげたのであらう。

【蛭蟬】 倭名抄に「蛭、比乎牟之、朝生暮死虫名也」とある。はかなきためしにひかれるもの、「かげろふ」の類である。源氏の「橋姫」曾丹集の序などに見えてゐる。さて此の「ひをむし」は「朝に生れて夕に死す」との習性をあはれと感じてこゝにあげたものであらう。

【螢】 此の下に「あはれなり」、「をかし」などの語を補ふべし。

【糞蟲】 其の名は巢の形より來たるもの。ある昆蟲の幼蟲時代を言ふ。若葉の頃、老葉を身に巻きつけ長さ一寸位にして枝から垂れてゐる。蟲は赤黒い。成蟲は小形の蟻だと言ふ。

【鬼の生みければ】 當時の傳説であらう。尙ほ金子氏は此の「鬼」と「親に似て」の「親」とは男親についてであり、したがつて語意は「鬼のうませければ」であり、且

【叩頭蟲】 「額づき蟲」の意。こめつき蟲とも言ふ。みなその蟲の動作が恰も人の「額づき(叩頭)或は米つく様」に似てゐる爲に名づけられたもの。「倭名抄」に「叩頭蟲、沼加豆木無之、蟲細微者、觸之輒叩頭」とある。

【さる心】 「さある心」の意、即ちあんな小さな蟲の心ながらに、はかない形の蟲の心ながらも。
【道心】 ダウシン (一)事の是非善惡を識別して正善につく心。道徳心。良心(私心たる人心に對す)(二)佛道に歸依する心、菩提心。(三)十三歳(又は十五歳)以上にして佛道に入りし者の稱、一寺の住職となる事を得ずと言ふ。今道心とは新に道心なる者。さてこゝは(二)の意【つきありくらん】 額つきあるくであらうよ。
【ほとめきたる】 下に「音」を補ふべし。「ほと」は音を寫したもので、「めく」はその趣あるを言ふ。ほとほとときなされる様な音。勿論、「ぬかつきむし」の叩頭の音をさす。

【蠅こそ】 「蠅」のことを述べてゐる中に、蠅のことが頭に浮んだのであらう。然もこゝはひとしく蠅であつても、趣のあるものに就いての言であるため、よつてこゝにかくべきでないため、にくきものうちに入れつべれ」と斷つたのである。

つ下文の「親のあしき衣」以下はみな女親を主としてかいたものと解してゐる。今しばらくこれにしたがつておく。

【今秋風…】 やがてちきに秋風が吹く時分になつたら歸つてくる。それまで(おとなしく)待つてゐよの意。「來んずる」は上に「ぞ」がある故の結。「來んとす」の意。【…といひて、逃げて往にけるも知らず】 と言ひ逃れをして逃げて往つてしまつたのも知らずに。

【風の音聞き知りて】 風の音の趣の變つたのに氣がついて。即ち「秋風吹かん折」と言つた、時節のやつて來たことを、風の音によつてきゝしつて。

【ちちよ、ちちよ】 「乳上乳よ」と「みのむし」のなき聲の擬聲音とを通はせたもの。もつとも「父よ父よ」と解すれば、上文の「鬼」はそのまゝ女鬼となり、「親に似て」も然り。後文のさきに女親と解した所がみな反對に男親となる。然し子が慕ふ意からすれば、「父よ」でなく「乳上乳よ」の方が一層あはれさが深いやうに思ふので上述の通り解しておく。

【はかなげに】 心細さうに、たよりなげにの意。

【茅蠅】 カナカナ蟬のこと。こゝは此の下におもしろい等の意を補ふべき所。即ち下の「あはれなり」は「叩頭蟲」だけを受けるものである。

【愛敬なくにくきものは】 あの蠅の様に愛敬なくにくいもののはの意。愛敬「アイギヤウ」と濁ることに注意。古くは清まざるを正しとする。(源氏湖月抄など)

(一)愛しみ敬ふこと。(二)顔色に可愛氣あること。(三)なさけあること等の意であつて、こゝは(二)。後世はアイギヤウとすみ、又愛敬相からの略音愛相(アイソ)とも言ふ。

【人々しう】 實は一人前らしく、人並らしく、他の趣ある蟲をのべるこゝに書き出すべきものではないが。(今蟲を言ふ序にのべれば)

【ぬれたる足してゐたるなどよ】 下に「いとにくし」とでも補ふがよい。「ぬれたる足」とは感覺の上での事なれど、其の表現奇警なるを見るべきである。尙ほこの次に「人の名につきたるはいとうとまし」を省く。

【夏蟲】 ナツムシ (一)夏の蟲。(二)燈蛾(ひとりむし)等の總稱。(三)螢火。(四)蟬。(五)蚊など種々の意あれど、次の「廊の上飛びありく」よりして(三)螢火の意である。古今集、戀に次の如くある。

なつむしを 何か云ひけむ 心から 吾もおもひに 燃えぬべらなり
後撰集にも、夏、ほたるをとらへて…汗衿の袖につゝみ

て……

つゝめども かくれぬものは なつむしの 身よりあ
まれるおもひなりけり

とある。夏の夜「ほたる」の家近く飛び來つて、廊のあ
たりに柔かく明滅の線を引くををかしと見たのである。

【蟻はにくけれど】 姿についての言。

【輕び】 カロび (身の) 輕さ(甚しき)を言ふ。尙ほ「か
ろぶ」は上二段に活用する動詞である。

【ただ歩みありく】 「たゞ」は「ひたすら」の意であるが、
ここはスラ／＼とかサツサとかの意。

校 異

「夏蟲いとをかし」の條は本によりて

夏蟲いとをかしく、(らうたげなり。火近うとりよせて
物語など見るに、草子の上などとびありく)いとをか
し

となつてゐるものもある。(古本、抄本、光本)

然るときは勿論「夏蟲」は「ひとりむし」の意となる。

【風は】 原本の一六二段及び一六三段の前半を抄出。

【嵐】 荒風の意ではげしい風を言ふ。暴風ではない。

【こがらし】 「木枯」で秋冬の交に枯葉ふき散らす風を言
ふ。尙ほ此の下に「あはれなり」の語を補ふべき所。

【三月ばかり】 舊曆三月頃。下文にも各月の異名多く出づ

るを以て、一月より十二月迄の別名を一括して明にさせ
ておくがよからう。辭書によつて、其の所謂語原をも研
究させておく事が興味もあり、記憶にも便であらうと思
ふ。

【花風】 櫻花を撫する一陣の春風である。本によつては「あ
ま風(雨風)とあり、或は「はな風」は「はる風」(春
風)の誤かとの説もある。ゆるく吹くのであり、しかも
夕暮の刻、且つ季節は陽春であるから、「いとあはれな
り」の語の意深きを覺える。

【雨のあし】 降る雨の線をかくよぶことは常のことであ
る。雨脚。

【綿衣】 綿を入れた衣服。綿入れの衣。

【夏とほしたる】 一夏中通して着た、これは恐らく夜の衾
用にした綿衣であらう。でなくては、如何に平安時代で
も夏を通して普通の綿入の衣を着よう筈がないから。

【汗の香などかわき】 汗の香のしなくなつたのを意であ
らう。三卷本には「夏とほしたる綿衣のかゝりたるを」
となつてゐる。

【生絹】 スズシ 文字通り生糸のまゝの絹織。質こはくし
て夏は涼しく着心地がよい。灰汁に通したものは練絹と
言ひ、柔軟である。語は「涼し」の義。「生」とのみもかく。

【單衣】 ヒトへ「ひとへぎぬ」の略。裏なし衣服、裨の下

に著るもの。男のと女のとある。二四二段に

「單衣はしろき。日の装束の紅のひとへ裨など、かり

そめに着たるはよし。されど、なほ色きばみたる單衣
など着たるは、いと心づきなし。練色のきぬも着たれ

ど、なほ單衣は白うてぞ、男も女もよろづの事まさり
て(こそ)」

とある。

【ひき重ねて着たるも】 綿衣を單衣の上に重ねて着るので
ある。

【この生絹だに】 この生絹でさへ。

【あつかはしう】 暑かはしく、暑苦しく。

【捨てまほしかりしかば】 (夏の盛には) 脱ぎ捨てたかつ
たのであつたから(今重着するにつけても) いつの間
に……。

【かうなりぬらむ】 「かう」は「かく」の音便。即ちこんな
に涼しくなつたのだらう。

【格子】 前出。

【妻戸】 ツマド 「つま」とは物の端の義故、「端戸」の意
で、寢殿造に於て、寢殿對屋などの四隅にある開戸。小
脇戸」とも言ふ。出入する所である。「家屋雜考」に

「その作り方は板戸を兩開にして、内外共に鐵具あり。
開く時は外の方へ開き、其戸のあふらざる爲に、掛鐵

をかけて止めおく。此をさるつなぎといふ。閉づる時

は又内に掛鐵ありて、しめおく事なり。總じて主殿の
四方を格子にし、格子の間は常に鎖して、別に妻戸と
いふものを設けて置いて出入する事は、専ら要害の爲
にして、貴人高位のおはします所は、元よりさもある

べき事なり。されば妻戸の作りは精粗さまざま、あれど、
いづれも厚板に鐵具をしつけて堅固にするなり。云々」

とある。然し是等の語は服飾などと並んで國文學習上厄
介なものであるが、説明の語を多くするよりは、掛圖な
り、所謂「國漢文參考圖繪」等なりを利用して一目瞭然
たらしめる事が最も捷徑である。

【さと吹きわたたりて】 「さと」は「さつ」と同じ。風の音
を寫したるもの。吹きわたる」はその邊をひろく吹き過ぎ
る意。

【顔にしみたる】 顔に嵐のふきつけてひやりとした感覺を
催さしめることを「しみたる」といつたのである。沁む
の意。

【九月】 長月。夜長月の意と言ふ。

【三十日】 「ツゴモリ」は「月隠」の略言。舊曆の月末には
月現れず闇夜なれば言ふ。月末の意と、月の最終日(三
十日)の意とがある。こゝは後者。

【十月一日】 「カンナツキ」は「かみなしづき」(神無月)

の音變化。「ツイタチ」は「月立ち」の音便。「月立ち」は「望」「月隠」に對する語で、月が空にかゝつて見えそめてから十日程の間、即ち月の上旬をいふ。尙曆にては月の最初の日をいふ。こゝでは勿論後者。

【ほろほるとこぼれ落つる】落葉の様を寫して妙。ほろほろは力なく物はかなげな音や様に言ふ。
ほろ／＼と山吹散るか瀧の音 (芭蕉)
山鳥のほろ／＼と鳴く聲きけば父かと思ふ母かと思ふ (玉葉集)

【椋】ムク「むくのき」「むくえのき」とも言ふ。葉は椋に似、樹は椋に似てゐる。

【櫻の葉・椋の葉などこそ落つれ】「落つれ」は上の「こそ」を受けた已然形。「櫻の葉・椋の葉など落つ」といふのを強く言つた形である。

【木立多かる所の庭】木立が多ければ落葉も亦したがつて多いので、「いとめでたし」と言つたのである。これによつて間接には木枯、即ち風の趣を稱へてゐるのである。

【野分の又の日】こゝより一六三段。「ノワキ(ノワケ)とは「野分の風」の意で野の草を押し分けて吹く風の義。「又の日」は次の日、翌日の義。(二百十日頃野分の風の吹いた翌日の意である)

【立蔀】タテジトミ 蔀の如く造り、目隠しに庭に立つる

屏。板塀の類。寢殿造の簀子の前などに立てる(衝立の如きもの)蔀格子をも言ふ。

【蔀】とは格子組の裏に板をはり、一間を上下二枚に分ち、上部は釣上げ下部は取外す様にしてあり、風雨をよけ、日光をさけるためのもの。その大きさにより「半蔀」「小半蔀」とよばれるものもある。さてこゝのは庭先の立蔀を言ふ。

【透垣】スイガイ「スキガキ」の音便。竹や板を以て見えなく様に作つた垣根。「家屋雜考」に
板と板との間を聊づつすかしたる屏なり、また板と板との間へ竹を交へて打付けたるものもあり、古圖どもを見るに、その造りさまざまあり」とある。

【ふしなみたるに】伏し並みたるに。並び倒れ伏してゐるので。

【前栽】センザイ 前出。
【心ぐるしげなり】心苦しげな様である。氣の毒さうな姿である。

【萩・女郎花】ハギ・ラミナヘシ 何れも秋の七草の一。
【よろほひ遣ひ伏せる】よろけて這ひ伏してゐるのは。倒れた木が

【いと思はずなり】まことに心外である、甚だ意外であつ

て残念である。

【格子のつぼ】格子の壺、格子の縦横の組木の間を言ふ。建物と建物との間の狭い空地も坪(坪庭)と言ふ様に、「つぼ」とはすべてつぼまつた所の名である。(入物のつぼも亦同様)

【颯と際を殊更にしたらむやうに】「颯」とは風の音を寫した「さと」(或は「さつと」)である。「際」は(一)境目、限り、端、はて。(二)ほとり、あたり、かたはら、そば、(三)折、時、まきは。(四)身のほど、身分、分際などの語義があるが、こゝは(一)の意。「殊更にしたらむやうに」とは態々風に心があつてしたのであるが、三卷様にの意。尙、これは春曙本によつたのであるが、三卷本(宮内省圖書寮)には、「格子の壺などに、木の葉を、殊更にしたらむやうに、……」とある。意味は三卷本の方がよく通ずる。

【こまこまと吹き入れたるこそ】一々のつぼに細々と風が木の葉を吹き込んでゐるのは(風に心がある様に見ての表現)

【あらかりつる風のしわざともおぼえね】立蔀や透垣さては大木を倒した程の荒風のなしたしぐさとも思はれない位優しい細い趣であるとの意。「ね」は上の「こそ」の結打消「ず」の已然形。

【うれしきもの】二三五段である。

【まだ見ぬ物語の多かる】まだ讀まない物語がたくさん身の近くにあること。暇を見出して、ゆつくりそれ等の物語により浸る心中を想ひ浮べては、期待の心にうれしさを禁じ得ないのである。當時の女性が如何に物語を熱愛し、その世界にあくなき憧憬を馳せたかは更級日記の作者によつて最もよく代表されてゐる。

【又一つを見て……二つ見つけたる】又一冊(一卷)を讀んで見て非常にその續が讀みたいと思はれた物語の二冊(二巻)目を見出したのはうれしい。この次に左の省略がある。
「心おとりするやうもありかし。人のあり棄てたる文を見るに同じつゞきあまた見つけたる。」

【いかならんと夢を見て恐しと胸つぶるるに】どうであらうかと心配な夢を見て、恐しさのために膽のつぶれる思であるのに。

【ことにもあらず合せなどしたる】夢解の人が何事でもなささうに夢合(判断)をしたのは非常にうれしい。

【昔ありける事にもあれ、今聞しめし、世にいひける事にもあれ】昔あつた古い事にもせよ、或はよき人が今お聞きになられた、したがつて世間で現在噂してゐる新しい事に

せよ。(何れであつても)

【語らせ給ふを】 よき人が主語である。

【われに御覽じ合せてのたまはせ、いひきかせ給へる】 自分にお目を合せて(自分の方を注意して御覽になりながら)仰せになりおきかせなさるの。のたまはせしといひきかせ給へる」とは結局同意であるが、上は主としてよき人が申される事をさし、下はあまた侍ふ人々に宣ひきかせられる意を有してゐる點が違ふのである。なほ此の場合のうれしさの情は直ちに想ひ見ることが出来ようが、勝氣な清少に於ては一層のことと思はせる。

【恥しき人の】 「にくきもの」の處 「心はづかしき人」参照。

【歌の本末問ひたるに】 和歌の上の句又は下の句を問ひただした時に。

【ふとおぼえたる】 すぐさま思ひつかれたのは。遠慮のいる人にたづねられて、もしも直に答へられず思ひ感ふ様であれば誠に面目ないことであるが、それがすぐさま思ひ出されて難なくお答へ出来ると、自分ながらうれし。

【常には覺ゆる事も】 ふだんははつきり覺えてゐる事でも。

【又人の問ふには】 生憎又人がたづねる時には。

【清く忘れてやみぬる折ぞ多かる】 すっかり忘れてしまふ折が澤山あるものである。

【只今見るべき文などを求め失ひて】 今すぐ見なければならぬ文などを捜なくしてしまつて。

【かへすがへす】 繰り返し。

【物あはせ】 何と限らず物を左右合せて勝負を争ふ遊。例へば根合、花合、草合、繪合、貝合、扇合、歌合等。

【何くれと挑むことに勝ちたる】 物合や又それ以外の何やかやと戦を挑む勝負事に勝つた事は。

【いかでか嬉しからざらん】 この語調の強きに注意したい。清少の負けん氣の性格をまさしく伺ふことが出来る。

【いみじう我はと思ひて】 非常に高慢に思ひ上つて、自分こそはえらく思つて。

【したり顔なる人】 得意然とした顔付をしてゐる人(を)。

【はかり得たる】 たばかり得たる意で、だます事が出来たのは。

【男はまさりてうれし】 女よりは男をだまし得たのがうれしと言ふのである。清少は當時の女房達など眼中にはなつかたらしく有鬚の男子をさへも甚しく愚弄して痛快さを感じてゐたらしい。とくにそれがひどく思ひ上つた高慢な男である場合は、それをたばかりえたそのよろこ

び、さこそと思はれる。

【これがたふ】 「たふ」は「答」の字音で、この返報、この遺恨ばらし。

【せんずらんと】 せんとするならんとの意。

【心づかひせらるるも】 當方で注意する事も(面白いのに)

2 文の構成

各節の區分並びにその節意は明白であつて、更に贅言を要しない事と思はれるので、之を省略する。

3 文意

各節は清少納言の經驗、もしくは自然人事に對し思ふが儘を述べた筆であつて、所謂文意として統一し難いが、此數段を通じて、清少の性格なり或は感受性なり、更に進んでは當時の女房達の生活なり或は社會生活の姿なりをほと想像することが出来るであらう。特に自然の景物に對するすばらしい精細奇警なる觀察は、特異なる文體と共に、最も心して見るべき處である。

4 鑑賞批評

「にくきもの」の一段は精細鋭敏なる觀察と透徹した婦人らしき感覺とが光つてゐる。硯の髪と墨の石とは筆硯の婦人としての趣を存して妙。蚊の細聲の名のりと羽風に迄きゝ入る作者の感覺は澄みに澄み神經は鋭い。蚤を評して「衣のしたにをどりありく」といひ「もたぐるやう」と敍べたるは誇張的表現の中に其の特徴を巧みに捉へて餘蘊がない。

「蟲」は衰蟲の物語はまことにあはれであるが、語簡にしてよくその意をつくした文も亦それに和して妙。叩頭蟲の微細なる動きに留めたる觀察は細緻にして、暗き所にほとめくをきゝつけた聽覺は冴えたる限り、蠅の足を評して「ぬれたり」

との表現は斬新奇警、水の上を歩く蟻を見つけたのも手柄である。

「風は」の一段はかくも風に興があるかと今更に驚かれるばかりである。彌生ののどかな夕暮、頬を撫する花風の趣を始め、初秋に涼を含む雨風の爽快さ、或はあかつきに戸を開け放つとさと吹き来る嵐を「顔にしみたる」と言ひ、落葉の散りゆくを「ほろ／＼とこぼれ落つる」と言ふのもその姿を寫し得て趣がある。野分の又の日、前栽の花を思ふ情は流石に婦人らしく、格子のつぼの吹き入れへの着眼も亦敏慧である。

「うれしきもの」前出の「にくきもの」と對蹠的情であつて合せ見ると一層趣がある。見ぬ物語多きに期待の心をたのしみ、物語の續きを新に發見したのをよろこぶ處、文筆を誇る作者の俤を見るべく、夢の恐しさに膽つぶれながらも夢合せに忽ちよろこぶ情はまことに婦人らしく、彼女も亦時代の人なるを見る。高貴の人の面前にて衆人中自らの一目おかれたのをよろこび、物あはせを始め争遊の勝利を甚だ嬉しがり、或はしたり顔なる人、ことに男をはかりえたるに狂喜するは皆筆者の勝氣の性を示して餘す處がなく、搜しものをふと見出したよろこび、心恥づかしい人から歌の本末を問はれて直ちに答へられたのを嬉しがるなど、總じて彼女は突嗟の間のよろこびにうれしさを覺えるのである。こゝにも亦彼女の性格を伺ふに足るものがある。

三 備 考

1 指導 研究

(一) 讀解に入るに先立ち、枕草子の文學的價值並びに清少納言その人に就きての總括的説明を行ひたい。(教科書第六

課「平安時代の文學」特に五七頁参照)

(二) 獨特なる文體を味はせるためには反覆熟讀せしめる事が肝要である。

(三) 着想に表現に全く古今獨歩の趣を存する諸點を、生徒自身の心眼を以て發見させ、作文科への誘導も然るべき事と思ふ。

(四) 本課の數段を通して清少自身の性格を想定し、當時の宮廷女房生活を想ひ、或はひろく社會生活の姿を腦裡に描き得る迄の熟讀をなさしめ、以て本作品の生じた文學的意義をも具體的に明瞭にさせたいと思ふ。

尙、本課の文は原文に比べて、送中を省略した部分が相當に多い。それは、教科書としての立場より、(一)差支あるもの、(二)差支はないがあまり興味のない部分等を省いたのであつて、その部分なくして、十分に清女の才筆を味はひ得るやうに注意を加へた。従つて省略の部分、補説する必要は毫も無い。

次に藤岡・五十嵐兩氏の枕草子評を参考のため引用しておかう。

「さばれ清少納言は平安朝第一流の大家たるに恥ぢず。その折にふれて書き捨てたる枕草子は、紫式部が苦心慘澹たる源氏物語と對比すべく、長短相反したるところ、また頗る見るべし。少納言は趣味に富み、よく物の雅俗美醜を辨ず。その山川草木を品し、世の有象無象を評したる、所言肯綮に中り、案を拍つて歎稱せざるを得ざるものあり。(中略)

枕草子に見るべきは、また文章にあり。行筆縦横自在にして、法格に拘泥せず、寸鐵人を殺し、迅雷耳に轟き、練々として春蠶の絲を吐くかと思れば、忽ち一刀にして切り、坦々として平安の大道を行くもの、急に嵯峨たる峻坂に當る。神出鬼没、端倪すべからず。紫文は潔々として春日のどかに、清文は雲霓の如く變化す、彼は正、此は奇、才情の筆に表はるゝところおのづから然らざるを得ず。これらは二人の作を併せ讀むものよく知るところ、多言を要せざるべし。(國文學全史 平安朝篇)

「從來國文學者が『枕の草子』に許したのは、おもに其の觀察の鋭利なること、其の文章の簡勁なることであつた。近頃になつては其の筆致の印象的だといふ事が評判になつてゐる。是等は皆道理ある批評であると思ふが、吾等の『枕の草子』を讀んで先づ感ずるのは、其の皮肉なる批評的態度である。『枕の草子』は趣味より見たる清少納言の自傳ともいふべきものであるが、之れによると、彼は事物を見るに正面よりせずして常に裏面よりし、玄關よりせずして臺所よりした。常套を惡んで奇抜を喜んだ。人の看過して注意せざる所に鋭い觀察を試みた。彼れは雋、練、奇、鋭にして人の胸にびりつと來ることではなければ、言ふに足らず書くに足らぬと思つたであらう。(中略)

吾等が『枕の草子』に對して第二に面白く思ふのは作者の放浪趣味である。無責任なる高見の見物の態度である。彼れは自ら修めむが爲めに生まれず、又人を教へむがために生まれずして、批評せむがために生まれた。従つて、その奇抜なる觀察批評に誇りを感ずるのを、此の上なき愉快とした。彼れの作品には到る所御殿女中の風があり、野次馬、居候の趣がある。彼れには定著性がない。(中略)かういふ性質の人は如何に文才があつても、源氏物語の如き脚色のある大作を營々役々として氣長く仕上げるに適しもせねば又仕上げ得る筈のものでもない。彼れが印象式のスケッチ、興來たれば筆を執り、興去れば筆を擱く隨筆物に其の才を發揮したのは實に其の處を得たもので、彼れは天命天賦に従つて國文學に於ける隨筆の第一人者となつたのである。

その他吾等が『枕の草子』及び其の作者に對して興味を感ずることを列舉すれば、彼れが他の多くの批評家のする如く、拵へた取置きの人生觀で机上の空な批評をせずして、生活其のもので時世を批評してゐるのも面白い。彼れの皮肉的批評の堂々たる態度はなけれども、わるびれず、さつぱりとして、褒められようなどといふ慾がなく、褒貶を意に介せずして悠々として皮肉をいふ所も面白い。印象的と言はれるけれども、精髓を寸鐵式に撮記する手腕と、趣味ある節々をだれぬやうに精寫する手腕とを兼ねたのも面白い。平安朝の物語が多く男子をして女子を弄ばしめて居るのに對し、『枕の草子』がひとり髭男を手玉に取つて女子の爲めに氣焰を吐いてゐる所が、遙かに竹取と相應じて面白く、又「女は物うるさがりせず、男に欺かれる爲めに生れたものぞ」と言つた源氏の婦人

觀と相對して面白い。(中略)

要するに『枕の草子』は、其の形式といひ、文章といひ、題材といひ、作者の天賦に相應した作物で、又時代に相應した作物である。かういふ作物は脚色を標準として論ずべきものではなくして、ぼつ／＼と點じたる興書きに趣味を見出だすべき物である。従つて此の點に於いて源氏と相對して平安朝文學の雙璧と言はるべきものであると思ふ。(五十嵐力、新國文學史)

註釋書、主要なるもの左の如し。

- | | |
|------|----------------|
| 岡西惟中 | 枕草紙 傍註(五) |
| 加藤盤齋 | 枕草子 盤齋抄(一五) |
| 北村季吟 | 枕草紙 春曙抄(一一) |
| 鈴木弘恭 | 訂正増補枕草子春曙抄(一一) |
| 武藤元信 | 枕草紙 通釋(二) |
| 金子元臣 | 枕草子 評釋(二) |
| 永井一孝 | 校訂枕草紙新釋(二) |

二 道長の幼時

大 鏡

一 解 題

1. 大 鏡

作者は不詳。古く藤原爲業（尊卑分脈卷七に據る）と言はれ、その他藤原能信・源道方・源經信・藤原俊明等の諸説があるが、確説はない。

書名には世繼の鏡、世繼物語、世繼の翁物語、世繼大鏡等の異稱がある。世繼とは、大鏡の内容を物語ることになつてゐる翁大宅世繼の名に因り、鏡とは篇中に

明らけき鏡にあへば過ぎにしも今行く末のことも見えけり

すめらぎのあともつき／＼かくれなくあらたに見ゆる古鏡かも

繁 樹
世 繼

の唱和があるのによる。

著作の年代については、本書の序文に萬壽二年の由を記してあるが、篇中にはその後の多くの事實を記してゐるから、更に後世のもの様である。

全篇八卷より成り、帝紀は文徳天皇より後一條天皇迄の十四代、列傳は冬嗣以下道長迄二十人を主體とし、尙古物語として歌話雑話を添附してゐる。更に篇初に序を設け、雲林院の菩提講に講師待つ間に大宅世繼（百五十歳）と夏山繁樹（百四十歳）とが昔物語をし、傍なる若侍が筆記した由を記してゐる。

榮華物語と共に平安末期に於ける注目すべき歴史物語であつて、兩者共に道長を中心としつゝも、前者は極力道長を讚美し、本書は批判的態度に出で史論的の趣を存する點が異なつてゐる。（且つ前者は編年體、後者は紀傳體である點も亦相違してゐる。）

所謂鏡類、（四鏡、三鏡）の嚆矢であつて其の體裁の範を開いたばかりでなく、文章も亦簡潔遒勁、作品としても鏡類中の白眉である。

本書の生れ出でた所以は、平安も末期に至り世は争亂の巷となり、藤原氏が榮華を極めた時代は、既に過去の花やかな思出と化したので、之をせめて紙上になりとも再現したき心を以て、追慕懷舊の筆を進めた事が其の一因である。一方文壇の大勢は先に源氏物語が出でてから其の後塵を拜する諸作品はあるが、到底之を凌ぐこと能はず、既に創作力が衰退したので、茲に別途の分野を開拓するに至つたものであらう。尙書名並びに體裁に見えるごとく、歴史を目して「鑑みる文」となす支那風の歴史觀に立ち、當時所謂正史は日本書紀以下六國史共に漢文で、一般の人には必ずしも簡易でないので、こゝに假名を以て記さうとしたのが其の第二因であらう。かくて今鏡・水鏡・増鏡を始め、徳川時代の「池の藻屑」、「月の行方」の二書を待つて、假名の日本史を一貫して具へ得しむる源を開いた功も亦忘れてはならない。

2 出 典

列傳中太政大臣道長の項より抄出。

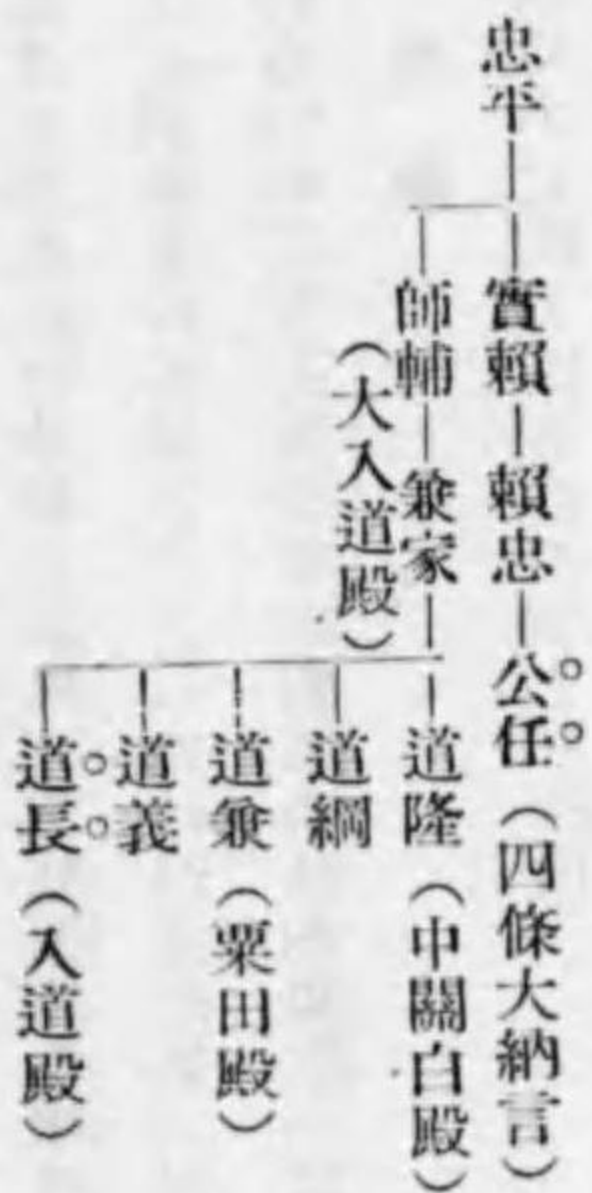
3 主眼及び採擇の趣旨

竹取・伊勢・源氏・枕等の文學的傳統を受けた平安末期に於て、文學類型上の一異色であり、且つ其の文章亦大いに見るべき所のある大鏡の一節を抄出し、以て歴史に名高い道長の人物描寫に觸れしめむとするにある。

二 解 釋

1 語 釋

【道長】 ミチナガ



兼家の第五子。母は藤原中正の娘。昇進極めて早く二十七歳の時既に大納言・中宮大夫・從二位にして、三十歳にして左近衛大將をかね、内覽の關白の宣旨承り、更に右大臣に進み翌年左大臣となる。後一條天皇の御即位により攝政となり、翌年太政大臣に進み、攝政を予頼通に譲つた。翌寛仁三年五十四歳にして之をも譲つて剃髮し、行觀と號し後に行覺と改めた。萬壽四年薨。年六十二。晩年京極第に法成寺を造營して住み、御堂關白、法成寺入道、前關白太政大臣などと稱せられた。

北政所二所、御子男女共に十二人。中三人の女は一條三條・後一條御三代の後に立ち、四女は東宮（後の後朱

雀天皇）の妃となつたため、道長は後一條・後朱雀、後冷泉天皇の外祖父として誠に望月のかゝることなき榮華を極めた。

【四條大納言】 シデウダイナゴン 藤原公任。賴忠の長子。小野宮實賴の孫。道長と同年。權大納言正二位に進み、按察を兼ねたが、萬壽元年致仕、三年出家、長久二年薨年七十六。性俊敏にして諸藝に堪能、和歌の勅撰集に入つたものも多く、一卷の家集もある。音楽に長じ、詩をよくし、故實にも通じ、北山抄・新撰髓腦・和歌九品等の著があり、和漢朗詠集を撰した。

【かく何事もすぐれ、めでたくおはしますを】 「かくは勿論前記を受ける語ではあるが、原文にはそれに相當するものが直接に先行して記述されてはゐない。公任が何事もすぐれてゐた事は所謂大井の三船の逸話によつても明らかであるが、然し本文は公任と同年なる道長の幼時を記するのであるから、それを直ちに指示すると考へる事は穩當ではないが、その事は賴忠の條に既に出てゐるので「かく」と述べたものと解すべく、したがつて其の意味は、後年かく迄に諸藝に秀でるやうになつた公任の幼

時の聰明さを指したものと考ふべきである。さてその賴忠の條に見える公任に關する記事と言ふのは左の通りである。

「やがて后（遵子）、女御（禊子）の一つ腹の男君、只今の按察大納言の公任卿と申す。小野の宮（實賴）の御孫なればにや歌の道勝れ給へり。世に恥かしう心にくき覺えおはす……」

又
 「一とせ入道殿（道長）の大井川の逍遙させ給ひしに、作文の船、管絃の船、和歌の船と分たせ給ひて、その道にたへたる人々を乗せさせ給ひしに、この大納言殿（公任）の参り給へるを、入道殿（道長）「かの大納言、いづれの船にか乗らるべき」とのたまはすれば、（公任）「和歌の船に乗り侍らむ」との給ひてよみ給へるぞかし。

をぐら山あらしの風のさむければ
 もみぢのにしき著ぬ人ぞなき
 申しうけ給へるかひありて、あそばしたりな。御みづからもの給ふなるは、（公任）「作文の船にぞ乗るべかりける。さてかばかりの詩を作りたらしましかば、名のあがらむ事も勝りなまし。口をしかりけるわざかな。さても殿（道長）の『いづれにとか思ふ』との給はせし

になむ、我ながら心おごりせられし」とのたまふなる。一事のすぐるだにあるに、ましてかくいづれの道にもぬけ出で給ひけむは、古も侍らぬことなり……」さて「めでたくおはします」は何事も立派で堪能であらせられる意。

【大入道殿】 オホニフダウドノ 藤原兼家。道長の父道長を入道殿と呼ぶに對し、その父を大入道殿とよんだもの。「入道」とは、こゝは佛道に入つた三位以上の人の意。

兼家は九條殿師輔の三男、東三條殿とも申す。兄兼通と官位を争つて一旦不遇をかこつた事もあつたが、後に從一位、太政大臣となり、攝關にも任ぜられた。娘二人を冷泉・圓融二天皇に奉り、一條・三條兩天皇の外祖父として權を振つた。正暦元年剃髮して如實と號し、同年薨、年六十三。

【いかでかからむ】 どうしてあんなに諸藝に堪能なのであらう。「かからむ」は「かくあらむ」の約。

【影だに踏むべくもあらぬ】 （並び立つ事は勿論）公任の影さへも踏むことが出来さうにない。俗に到底追隨し得ない事を「足もとにも及ばない」と言ふが如き意。

【中關白殿】 ナカノクワンバクドノ 藤原道隆。兼家の長子。道長の長兄。累進して正二位内大臣左大將となり、兼家の後をうけて攝關となる。長徳元年病に當つては、

子伊周をして公事を攝行せしめ、弟道兼の昇進を押へたが、間もなく剃髪しその四月薨じた。年四十三。

【粟田殿】アハタドノ 藤原道兼。兼家の第三子。頭註に第二子とあるは同母子中にての事である。大鏡の兼家、道兼の條皆第三子とある。公卿輔任に第四子とあるのは蓋し誤であらう。即ち道隆の弟に蜻蛉日記の作者の腹なる道綱があるので、第三子となるのである。(前掲系圖参照)

本書に「御心いとなさけなくおそろしくて、人にはいみじうおぢられ給へりし殿」とあり、「榮華」にも同様の記事があるので(様々の悦の卷)その人となりを知る事が出来る。花山天皇に近侍して禪位を勧め奉り、一條天皇擁立に力を致し、權大納言となり、太政大臣となる。兄道隆の薨後長徳元年五月二日關白となつたが同八月薨じた。年三十五。故に七日關白の稱がある。粟田は山城宇治郡粟田の山莊を領したるよりの名。二條の北なる町尻に本第があつたので二條殿、二條關白とも稱する。

【げにさもとやおぼすらむ】成程さうもお思ひなられるであらう。父上が公任を羨しく思ふと共に、自分等兄弟を意氣地なくお考へなされるのも道理だ。

【影をば踏まで、面をやは踏まぬ】影などは踏まずに、面を踏まないでおくものか、きつと踏みつぶしてやる。

「面」ツラ。「や」は反語、「は」は感動の意の助詞。兄弟の様子に比して其の決然と言ひきつた強き語調を見るべきである。

【まことにこそ云々】事實その道長の言葉通りでおありのやうだ。この次に左の省略あり。

「内大臣をだに、近くえ見奉り給はぬよ」

【さるべき人】然あるべき人。後年立派な方になられる様な人。

【疾うより】トウより 早くから、幼少の時から。

【心魂】ココロダマシヒ 魂、根性の意。面魂等の語もある。

【御守】オンマモリ 神佛の御守護。

【こはきなめり】「こはきなるめり」の略。「こはし」は強い、猛い、烈しい、固い等の意。故に「御加護も強いのだらう」の意である。

【おぼえ侍るは】考へられますよ。思はれるよ。「は」は感動の助詞。(かく述懐するは世繼である。)さてかく言ふわけは前述の道長の言によつても推察されるが、尙ほ次の如き話によつても然ることがわかるとの意にて、花山院の御時の話に進むのである。

【花山院】タワサンケン 御諱師貞。冷泉院の第一皇子。御母は懷子(伊尹の第一女)。安和元年御降誕、永觀二年

御即位、御年十七。寛和二年六月ひそかに花山寺におはしまし御出家御入道、御年十九。御在位二年。寛和五年御崩御。御年四十一。

【花山院の御時】御即位は永觀二年十月であるから、五月である此の話は寛和元年か二年の事になる。假りに元年とすれば、天皇御十八歳、道隆三十三歳、道兼二十五歳、道長二十歳である。

【下つやみ】シモツやみ 月の下旬の闇夜。二十日過の闇の晩。

【五月雨も過ぎて】五月雨の時期もすんでの意。おどろおどろしく降る雨は、梅雨ではないから。これを、「五月雨もすぎで」として、「五月雨のなほ降り止まずて」の意に解する説もある。今は前者の解に従ふ。尙又「折から五月雨であつたが、その降りさまが一通りの降り方ではなくて」の意に取る考もあるやうだが、その際は「五月雨にも過ぎて」とあるべきであるから、今その説には従ひ難い。

【おどろおどろしく】「おどろし」を重ね且つ副詞にしたもの。驚くばかり物すごく、氣味が悪いほどすさまじく。【さうさうしく】物さびしく。「さうさうし」は「さびさびし」(淋々し)の音便。あるべきものがなくて物足りない心地に言ふ語。

【殿上】テンジヤウ 「殿上の間」の略。公卿殿上人の伺候する間で内裏清涼殿の南廂に當る。こゝに主上が御出ましになられたのである。

【申しなり給へるに】御物語をしてゐる中に、段々話が昔おそろしかつた事などへ移つたことをいふ。

【むつかしげなる】こゝは恐ろしく氣味悪さうな意。

【かく人がちなるだにけしきおぼゆ】こんなに入敷が多くてさへ、なんだかむつかしげなるけしき(ものおそろしい感じ)がする。

【物離れたる所】モノバナれたる所 人氣の遠い程離れた所。

【一人往なむや】一人で往けるか。一人でゆくか(ゆかれまじ)。

【え罷らじ】何とも参りかねます。「じ」は推量して打消すのが本義であるが、こゝは婉曲に表現したものの。

【いづくなりとも罷りなむ】何處へなりとも仰の通りに参りませう。

【さる所おはします帝】さういふ點がおありになる主上。その様な事を御好みになる、御興味をもたれる天皇。

【豊樂院】所在や所用は頭註の通り。(八省院とは中堂・朝堂院(大内裡圖参照)又は大極殿院とも言ふ。大内裏の中央南方にあり、内裡の西南に當る。)正殿を豊樂殿と稱

す。後冷泉天皇の御代炎上し、後には八省院又は紫宸殿で代行せられることになつた。

【仁壽殿】 ジジュウデン又はジンジュデンとも稱す。(内裡圖参照) 内裡の中央に位しもと主上の常の御座所。中堂とも稱す。東殿と言ふは清涼殿の東に當るによる。南は紫宸殿に北は承香殿に通ず。

【塗籠】 ヌリゴメ 七課「かぐや姫」の項参照。

【大極殿】 大内裡の正寢、八省院の主殿、(大内裡圖参照) 古くは「大安殿」又「おほやすみどの」とも稱した。

【よその君達】 キンダチ こゝは道長兄弟以外の貴族の子弟達。

【便なき事】 ビンなきコト 不都合な事、困つた事の意。

【奏してけるかな】 (道長は) 便なき事を申上げたものだなの意。即ち道長が「いづくなりとも云々」と奏したばかりにかういふ事になつたからである。

【承らせ給へる殿ばら】 仰を承られた殿たち。こゝは道隆道兼をさす。「ばら」は複数を示す接尾語。「奴ばら」など。

【御氣色】 ミケシキ 顔色をいふ。顔が蒼白になつたのである。

【益なしと思したるに】 つまらない事だとお考へになつたのに、(弱つた事になつたとお思ひになつたのに)

【つゆさる御氣色もなくて】 一向にその様な(恐れる様な)御様子もなくて。

【私】 ワタクシ 「公」に對する「私」で、自分の家の臣下はつれまいといつたのである。

【この陣の吉上】 チンのキチジャウ 陣とは六衛府の武士の陣屋即ち詰所。左近陣は(日華門)、右近陣は(月華門) 左右兵衛陣は夫々宣陽門、陰明門。又左右衛門陣は各々建春門、宜秋門にある。そこでそれらの門をも亦陣と言ふ。「吉上」とは六衛府の下部であつて、そこに常詰になり、立走りなど雜役を果す者を言ふ。さて「この」とはおそらくは近衛の陣をさしたものであらう。

【まれ】 にせよ。にてもあれの約言なるべし。

【瀧口】 タキグチ 藏人の指揮下に屬し宿直して禁裡警備の任に當る武士の稱。清涼殿の東北方にて御溝水が一段低くなることを瀧口といふ。そこは是等の勤番者が伺候するのでかく稱するのである。

【昭慶門】 セウケイモン 八省院の北方正門。大極殿の正門。

【仰言たべ】 帝の仰言を賜はりたい。御命じ下さい。「たぶ」は四段活用。賜ふ意。

【證なきこと】 ソウなきこと 「それより内には一人入り侍らむ」と言つた處で、入つたかどうか證據のない事だ。

【げに】 成程帝の仰せられる通りだ。それならと早速心中に期する所あつて、小刀を御手箱よりお借り申し受けて出發するのである。「申して」は頂いての意。

【いま二所】 フタトコロ もう二人。即ち道隆・道兼兄弟。「にがむにがむ」にがい顔をしながら、いやいやながら、不承不承、しぶしぶと。

【子四つ】 ネヨつ 午前二時近くを言ふ。古くは夜中の十二時を「子」とし、一時間を一時として丑・寅・卯等と順次によぶのである。其の一時を更に四分し各々を「一つ」「二つ」等と數へ、又は「辰の一點」等の如く「一點」「二點」等とも稱した。

【奏して】 奏上して。禁中に於ては宿直武官が時を夫々奏上する掟である。(亥一刻より始めて子四刻迄が左近衛夜行官人。丑一刻より寅の四刻迄が右近衛夜行官人が奏し丑刻以後は明日分に當る) こゝはさき程「子四つ」と言ふ時の奏上をきいてから、種々仰言がある中に午前二時になつた事を言ふ。

【右衛門の陣】 宜秋門をさす。内裡の西に當る此の門の外に南北に陣屋を設け、そこに右衛門府の武士がつめてゐたからかくよぶのである。「右衛門」は「右衛門府」の略で六衛府の一。建春門の左衛門府と對をなす禁中警衛の武士の詰所。(大内裡圖参照)

【承明門】 ショウメイモン 内裡の内廊の南方の門。外廓の建禮門に對す。(内裡圖参照)

【それをさへわかたせ給へば】 (行く所が別々なばかりでなく) 出口までも各々別である様に仰せなされたので。即ち道兼は内裡の東へ行くので問題はないが、道隆と道長は等しく内裡の西南へ行くので、一緒に行けば途中までゆかれるのであるのに、兄道隆は内裡の西門より、道長は南門より出でよと仰せられて、出口をさへわけられたのである。

【しかおはしましあへるに】 二人共その仰の通り行きなされましたが。「しか」は「然」で勅諭通り。「おはす」はこゝは「行く」(居る、來るの敬意にも用ふ)「あふ」は二人以上が共にすること。話し合ふ、語り合ふ、行き合ふ、なぐり合ふ。

【陣まで念じて】 門までは我慢してこらへて、強ひて(行つた所が)

【宴の松原】 エンのマツバラ 宜秋門の西、豊樂院の北の建物なき廣場を言ふ。「ほど」はあたり、ほとりの意。

【その物ともなき聲ども】 何物の聲ともわからない物音。わけのわからぬ、あやしい物聲。

【すちなくて】 術なくて。「すち」は術(チュツ)の字音の約。せんすべなく、何とも致し方ない事であるがの意。

こゝは怖しさにどうとも仕様がなくて、堪へきれずに。

【露臺】 ロダイ 屋根のない臺で、單に臺とも言ふ。こゝは紫宸殿と仁壽殿との間に設けられた板敷の臺を言ふ。演舞などに用ひられるもの。(内裡圖参照)

【外まで】 トまで

【わななくわななく】 わななく／＼ふるひながら、恐ろしさにふるふるふるひながら。

【東面】 ヒガシオモテ 東側。

【砌】 ミギリ 軒下又は階下の石だたみ、しきがはらを言ふ。書牘又「折」節の意に用ふるは文字の原義をなれた我が國獨特の慣用。

【簀とひとしき人】 ノキ 軒端までの高さと同じ位の人。

軒に丈のとゞく位の巨人、大男の意。

【ものも覺えて】 前後不覺で、無我無中で。

【身の候はばこそ仰言も承らめ】 命があつてこそ君の仰言もお承け出来よう。(それにもしこんな事で命を失つてしまつては、主上への御奉公も出来なくなつてしまふ、よつて引返すにはしかじの意。)

【各々】 道隆・道兼をさす。

【御扇を叩きて】 主上花山天皇が。

【いかがとおぼしめすほどに】 どうしただらうと天皇がお思ひなさつていらつしやる丁度その時に。

【いとさりげなく】 一向怖しさうな様子もなく、至極平氣で。「さりげ」は「さりげ」(然有り氣)

【事にもあらずげにて】 何でもなささうな様子で。

【いかにいかに】 どうだつた／＼と天皇がおきき遊ばすのである。

【いとのだやかに】 非常に落着いて、悠然として。

【御刀に削られたるものを取具して】 先に借用し奉つた御刀に、削屑を取添へて。

【高御座】 タカミクラ 天皇の玉座を言ふ。大極殿紫宸殿に安置し、晴の御儀に着御あらせられたもの。黒漆の臺、朱塗の階段勾欄よりなり、極めて華麗なもの。

【南面】 ミナミオモテ

【つれなく】 平氣で、何ともなき様子で、平然として。

【あさましくおぼしめさる】 (天皇は)あきれはてたる事にお思ひなされた。

【こと殿たち】 異殿達、道隆・道兼をさす。

【今にもなほ】 今でもなほ、今になつてもまだ。

【感じのしられ給へど】 感歎してほめはやしてみなさるけれども(天皇や人々が)

【つとめて】 早朝、(翌朝の義もあり)

【藏人】 クラウド クラビトの音便。藏人所の職員。「藏人所」は嵯峨天皇の時始めて置かれたもの(即ち令外の官)

機密の文書や訴訟の取扱を職掌とした。その後は天皇に近侍し、傳奏・進奏を始め宮中大小の雑事を掌る様になつた。

【つがはして見よ】 つぎあはせてみよの約。削跡と削屑とを番はせてみよの意。「つがはず」を一つの動詞と見る。或説には「つかはして見よ」と「が」をすんで「遣はして見よ」の意にとるものもあるが、従ひ難い。

【見たらびけるに】 見給ひけるに。

2 文の構成

本課は別に段落を設けてないが、道長の幼時を語るに就いて二つの話柄を以てしてゐる事は明らかである。

第一節 初―八九頁七行 道長が甚だ弱年であつた時に示した負けじ魂。

第二節 八九頁七行「さるべき人は……」より以下終迄 道長の幼時に於ける驚歎すべき膽力。

3 文意

権力一世を蓋ひ榮華其の極に達した道長は、其の人となり誠に非凡、幼時より既に剛膽無比なる性格の持主であつた事を物語らうとするのが本文の主意である。文中の

「さるべき人は、疾うより御心魂の猛く、御守もこはきなめりとおぼえ侍るは。」

の一文こそ世繼の結語であり、即ち本文の主題である。

4 鑑賞批評

道長の幼時より剛膽無双であのた事を述べるのが本文の趣旨であるが、常に二人の兄と對比しつゝ筆を進めて、十二分

【けさやかにて】 はつきりとして、鮮明に。まぎれもなくあざやかにきはだつてゐる様。「け」は接頭語で殆んど意味がないが、こゝなどは「さやか」と言ふよりは強意にきこえる。さてこの次に左の一句が続いてこの話は一段落となるのである。

「末の世にも、見る人は、なほあさましき事にぞ申しかし。」

の効果を収めてゐる技巧に先づ注目される。

「げにさもとやおぼすらむと、はづかしげなる御氣色にて、物ものたまはぬ」

實にあはれな姿の兩兄に對して

「影をば踏まで面をやは踏まぬ」

と直ちに叫んだ道長の昂然たる佛は今に眼前に髣髴たるを覺える。或は

「え罷らじ」

と言ふ人々の意氣地なきに對し

「いづくなりとも罷りなむ」

の語は簡にして勁、道長の肩そびやかしたる姿まで伺はれる様に思ふ。こは一堂の者をして眞に墮若たらしむるに十分であつたらう。「よその君達」は「便なき事」と思ひ、まして「承らせ給へる殿ばら」は「御氣色かはりて益なし」と困うじてゐたのに、道長はつゆさる御氣色もなく、早速出發すべく、さる仰言を請ひ奉つた。然しその然るべからざる由を承つては、間髪を入れずして第二段の方法を講じた。

「げに」とて、御手箱におかせ給へる小刀申して立ち給ひぬ。

この敘述は機に臨んで明敏なる道長の心、姿を寫し得たのは勿論、讀者の興味を湧きたたせ、後に期待せしめる有力な働きをなしてゐる事に注意したい。さて此のときばきとした道長が、自信ありげに出發しては、二所も「にがむく」行かざるを得なかつたが、果して、陣までは念じて參つた道隆はその物ともなき聲どもにすちなくて歸り、わななく、參つた道兼も亦箒とひとしき人のあるやうに見えてものも覺えて仰山な言ひわけをして歸つて來た。「身の候はばこそ云々」とは考へるも考へた事ながら、か程の臆病では、よしや存命しても如何程の仰言に堪へ得るであらうか。帝が御扇を叩いて

笑はせ給ふのもうべなるかなと噴飯の至りである。さて道長は、久しく見えすいかかと待つ所に、いとさりげなく、事にもあらずで歸り「いかにいかに」とせき立てられても、いとどやかに、御刀と削屑とを取具して奉るおちつき拂つた姿、帝の「こは何ぞ」と解し兼ねられたるも御尤なのに、「云々」とつれなく申す道長のはかりしれない心魂。一方二人の兄達は今に御氣色なほらず、羨ましくてかはりたいかなるにか、ものもいはざるは心細くもあはれな姿であつた。

次は所々に挿入された短い批評的言辭の要領よさを注意したい。

「まことにさおはしますめれ。」

は後の

「その削り跡はいとけさやかにて侍るめり。」

と共に本文の歴史物語なる印象を十分に示し得て妙である。即ち此の話柄と世繼の時代とに既に時間的距離の存する事を明確ならしめてゐる點に注意したい。又「さるべき人は云々」の感慨も此の二つの物語を讀んだ者は直ちに自然に同感されるであらう。

更に筆者が人物描寫の巧妙さをも具へてゐた事をも併せ注意したい。道長始め、その兩兄の心事を明にし得たのは勿論

「羨ましきにや、又いかなるにか」

の言もよく穿ち得たるもの、且つ帝の御性格を申して

「さる所おはします帝にて」

と述べてゐるが、かゝる帝なればこそ御扇を叩きてはせ給うたのであるが、「いかにいかに」と御促し遊ばされる所にも深く興がらせ給ふ御心中が察せられる。然し意外の取り出し物には誠に驚かれ遊ばされた如く「こは何ぞ」と質され、道長の申様を聞き召されては流石に「いとあさましく」おぼしめされたのであつて、こゝに御心の御推移の程をもあきらか

にし奉つてゐる。

最後に注意すべきは文章そのものの妙趣である。簡明にして達意、いさゝかの弛みもなくまして冗漫の嫌などさらさら認められず、誠に寸分の隙もないひきしまつた筆の運びは賞しても猶ほ餘りある所である。先に漢文より假名が脱化して優麗繊細なる行文の物語は數多く出でたが、未だ此の如き簡潔遒勁なる假名文は目にし得なかつた所である。さればとて後の平家・太平記の如く應接に追なき程の漢語佛語を交へたのでもなく、よく此の勁拔な行文を得た作者の非凡な筆力は感歎の外なく、この一事のみを以てしても眞に本書の鏡類中白眉たる所以を知ることが出来る。

三 備 考

I 指導研究

(一) 大鏡そのものについては既に生徒は承知してゐる筈であるが、既有的知識の喚起整理と共に一應の補説をなしてから本文に入りたい。尙本巻配列の趣旨上は、これを以て歴史物語を代表せしめてゐるのであるから、歴史物語の因つて生じた事情を明らかにし、且つ大鏡の後代に對する影響をも併せ説いて、始めて文學史的序列による本巻學習の意義が一層明確になることを忘れない様にした。

(二) 本文は上述の通り全くの一分の隙もない緊縮の妙を得た文章である。したがつて之を解して眞に其の本義を味はふ程度に至るのには、よく／＼一々の助詞一つにも慎重な態度で臨まなければならぬ。既に竹取・伊勢・紫文さては枕草子を學習した生徒ではあるが、本課の讀解も決して容易ではなからうと思ふ。先づ辭書を精査せしめてその一般的意義を明らかにし、更に進んで本文に於ては如何様に用ひられてゐるかを十分に考究させる様指導したい。

(三) とかく文學作品を目して教訓的に論議したい生徒は、單に事柄の筋を讀んで、或は道長のしぐさに對し是非の判

斷を決したがるかも知れない。作者の言はんとする所は前述の通り

「さるべき人は疾うより御心魂の猛く、御守もこはきなめり。」

と言ふ所論をこの物語によつて裏づけようとするにあるのであつて、道長に對しては其の幼時より剛膽ならびなき心魂を讃歎してゐる事は明らかである。但し

「いとあさましくおぼしめさる」

と言ふ帝の御心中にも伺はれる通り、更にも増して、本課には省略した

「末の世にも見る人はなほあさましき事にぞ申ししかし。」

の語によれば、餘りの思ひきつたるしぐさである事を感じて居た事だけは否めまいと思ふ。そこで生徒がもしかゝる點を問題にすれば適切な處置が望ましいが、勿論本課學習の趣旨がかくの如き事を中心とすべきでない事はこゝに贅言を要する迄もない事と思ふ。

(四) 既に生徒は卷七に於て増鏡を學習してゐる筈であるから、此彼對照、特に文章上の比較商量を行はせる事も亦有意義であらうと思ふ。

2 参 考

道長の榮華は決して偶然ではなく、幼少より心魂のすぐれた上に、所謂御守のこはきによるもので、いはばさるべくしてさるべき人となつたと言ふのが作者の考であるが、道長が疾うより非凡であつた事は本文の他、大鏡に尙二三の物語が引續いてゐる(後文参照)。しからは「御守」と言ふは果して如何なる事をさして言ふのであらうか、勿論それは所謂冥々^{ミヤミヤ}の加護故、これをそれと明示する事は困難であるが、大鏡の道長の條の初めの方に、彼の官位昇進の極めて早きことを述べた所に、正暦五年四月以後天下に大疫病流行して、大臣公卿引續きて死んだことを併せ記し、次の如く述べてゐる。

「又あらじかし、あがりての世にも、かく大臣公卿七八人、二三月の中にかきはらひ給ふこと、希有なりしわざなり。それまたこの入道殿の御幸の、上を極め給へるにこそ侍るめれ。かの殿ばら、次第のまゝに久しくたもち給はまし、かば、いとかくしもやはおはしまさまし云々」

かくの如きは單に其の心魂の拔群なる外に、所謂運にも恵まれた人なる事を明らかにしてゐる様に思はれる。さて此の本課採用の話の外、尙大鏡には飯室の相人が道長の骨相を驚歎した話、或は三條院賀茂の行幸の折御扇の雪をうち拂ひたるめでたき姿の話、或は高名の悪馬を乗りしづめた話、或は伊周と競射を行つて物のみごとくに射あてた話、或は更に石山詣の節に伊周を面目なからしめた話など、誠に其の傍若無人の舉措や非凡な姿態が語られてゐるのは、結局先に述べた「さるべき人は云々」の語の裏づけをしようとしての物語の様である。

註釋書及び參考書。

- 大鏡短觀抄 (七) 大石千引
- 大鏡詳解 (一) 落合直文・小中村義象
- 大鏡詳解 (二) 佐藤球
- 大鏡研究(日本文學講座) 五十嵐 力
- 大鏡鑑賞(同) 小島政二郎
- 現代語譯大鏡 五十嵐 力

三 鎌倉室町時代の文學

一 解題

1 作者

編者自作の文

2 出典

特に本書のために執筆したものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

鎌倉室町時代の文學を簡明に述べんとしたのが本文であるが、前は第二・第六の兩課を受けて居り、後は當時代の代表作新古今・方丈記・平家物語・徒然草等の學習をして一層有效ならしめんとする所に本課の意義が存するのである。

二 解釋

1 語釋

【鎌倉室町時代の文學は中世文學とも稱せられる】本書に於ける時代区分や名稱に就いては一五頁・四七頁及び卷十を参照されたい。さて本書の呼稱と「中世」の如き語

を使用するものとを並記すれば左の如くなるのである。

大和時代の文學……上古文學
平安時代の文學……中古文學

鎌倉室町時代の文學……中世(又は近古)文學

江戸時代の文學……近世文學

明治大正時代の文學……最近世(又は近代)文學
さて鎌倉室町時代の範圍は後鳥羽天皇の建久三年(一八五二)頼朝が鎌倉に幕府を創建してから後陽成天皇の慶長八年(二二六三)家康が江戸に幕府を開く迄約四百年間を言ふのである。その中鎌倉時代とは後醍醐天皇の元弘三年(一九九三)北條高時の滅亡する迄である。(その間將軍九代、北條執權九代、約一五〇年)。室町時代とは足利時代とも云ひ、普通には延元元年(一九九六)より天正元年(二二三三)迄二百三十年餘を言ふ。故に鎌倉室町時代の語は政權の所在によつて代表的によんだ便宜的の語であることがわかる。今次にこれ等の關係を明確ならしめる爲に表示して見よう。

鎌倉室町時代

- 後鳥羽帝…建久三年(一八五二)…鎌倉幕府創立(鎌倉時代)
- 後醍醐帝…元弘三年(一八九三)…北條高時滅亡(約一五〇年)
- 後醍醐帝…建武元年(一九九四)……(建武中興)
- 後醍醐帝…建武二年(一九九五)……
- 後醍醐帝…延元元年(一九九六)……
- 延元三年(一九九八)……足利尊氏征夷大將軍トナル(室町時代)
- 正親町帝…天正元年(二二三三)……足利義昭御ケ(織田豊臣時代)
- 後陽成帝…慶長八年(二二六三)……家康江戸幕府(約三〇年)ヲ開ク

論、或は無常觀を以て至篇を貫かれてゐる平家、或は謡曲の數多くの篇々皆然らざるはないのである。

(二) 平安時代の艶麗さを失つて平淡老寂の境地に進んだこと

試みにひとしく隨筆文學として名高い枕草子と徒然草。方丈記とを彼此對照し、或は廣く中古の所謂物語と本時代の軍記物とを考較して見るがよい。或は和歌に於て古今集が優雅繊細の感情をあらはれと見たに對し、新古今に於ては更に進んで幽なるもの支なるものを尊んだ事も亦注意されるし、新興の謡曲、狂言、或はお伽草子等みな老寂であるか平淡の境地に在るものと言ふ事が出来る。(三) 一般大衆が共に楽しみ味はふやうな文藝の生じたこと、本書後述の通り連歌、戦記物語、(平家琵琶・太平記よみ)、謡曲・狂言等はこれである。

(四) 文藝を一つの道と見てこれを宗教的に尊重したことこれについては一七「中世の藝道精神」の處に豊富な引例と明確なる所論とによる編者自作の文があること故是非参照されたい。

【浸潤】 シンジュン 急激でなく徐々にしみうるほふこと。
【平淡老寂】 ヘイタンラウジヤク 「平淡」は平易。白、かどかどしからず、且つ濃艶ならざること。「老寂」は若やかなうひうひしき、或は生氣にみちた澀刺さ等に對して、

【其の特色としては】 こゝには四ヶの特色を明記してある。これ等の具體的な説明は逐次之を明にする筈であるが、參考のためその要領を左に摘記しておかう。

(一) 佛教的要素の浸潤
此の時代に於ける思想界を一言すれば新舊思想の對立抗争を経て遂に新思想の勝利に歸した時代と言ふことが出来る。然して舊思想とは言ふ迄もなく傳統の貴族的優美思想であり、新思想の著明なるものは武士道と新興日本佛教とに基ける兩思想である。今その佛教について言ふならば、親鸞の淨土眞宗、榮西・道元の臨濟・曹洞の二禪宗、さては日蓮の法華宗の三大宗教の當時の人心に及ぼした影響は實に偉大なものであつた。且つ當時の世は武士と僧侶との世であり、ことに文藝は僧の主として興りし所、その文學の佛教的なるは又理の自然である。こゝろみに其の作品の類型上から考へるに、當代新興の文學と稱すべきものに佛教説話文學と呼稱される一群が存在する。寶物集・撰集抄・發心集・閑居の友・私聚百因縁集・沙石集等は皆是であつて、其の内容は或は佛教の尊重すべき所以を説き、或は名僧の行狀等を説いたものである。此の外高僧等の所謂法語遺文にも亦見るべきものが存在する。更に轉じて單一なる本時代の代表的作品に就いて見ても、厭離穢土欣求淨土をのべた方丈記は勿

どことなくしつとりとおちついた、いはばいぶしをかけた様な趣。人で言ふなら辛いも甘いもかみわけた老者に感じられ様な感じを言ふ。

【一般大衆】 イツバンタイシユウ 廣く一般の人々。或る特別な階級の人などに對して言ふ語。「大衆」はもと佛語で、ダイスとも言ひ、多くの僧侶の意。大衆文學・大衆小説の如く一般人を意味する様になつて、最近復活した語。
【澀刺】 ハツラツ 魚のびち／＼躍りはねる貌を言ふ語。澀澀に同じ。杜甫「船尾跳魚澀刺鳴」。勿論こゝはそれより轉じた若者の生々とした元氣にみちた姿を言ふのである。古事記の神話或は萬葉の歌などはかく評さるべきもの。

【巧緻爛熟】 カウチランジュク 「巧緻」は巧妙にして綿密なこと。工緻も同意。「爛熟」は果物などの實の入みすぎてくづること。文學作品について言へば、意匠をつくして巧妙の限りを極めたる境地。例へば中古の源氏物語及び種々な物語、或は古今集の和歌などをさす。

【老境枯淡】 ラウキヤウコタン 「老境」は少青年・青壯年時代を経た老人の境地。「枯淡」は素朴にして澹泊なること。即ち青年時代或は壯年時代に見られる様な新鮮さ華やかさとは異なつて、何處となくおちついた淡々たる味